クニトリ物語

マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クニトリ物語

【Ｎコード】
Ｎ８７９７Ｏ

【作者名】
マサル

【あらすじ】
人間、魔女、亜人、魔獣。様々な種族が混在するこの世界。
世界に広められた魔術。異形な姿の亜人、魔物。そして魔術以外の力を使う魔女。
人は人外の者達を嫌悪し、虐げているそんな世界。
珍しい鉱石を求め各地を巡る鍛冶職人。そんな父親を持つ少年を中心に話は進む。
ある日、故郷を持たぬ少年は二人の魔女と出会う。
これは故郷を作る物語。

追記：仲間集め始めます。

第一話　鍛冶屋の息子

単純なのは、進みだす最初の一歩だけ。
刻一刻と状況は変わっていき、事情が複雑に絡まっていく。
再び単純になるときは、
その終わりが見えたとき。

第一話　鍛冶屋の息子

ガタゴトと荷台に詰まれた物達が音を鳴らす。

「ふ～ん、先生のいた所はもっと道が整ってたんだ。いいなぁ」

滑車が小石を乗り上げ、ガタンッと一つ荷台を揺らす。

「え？うらやましいかって？そりゃそうだよ。座ってるだけでも何度もお尻打って……赤くなってないかなぁ」

長い間揺られた馬車は所々痛み、ギシギシと軋んだ音を立てる。

「これから行くところ？……ん～、僕もお父さんに聞いただけだけれど、いままで行ったどの国よりも小さい所って言ってた」

がさごそと荷物を漁り、取り出した地図を広げてみせる。

「ほらここ。なんでも珍しい石が取れるんだって。……取り寄せればいいって？僕もそう思ったんだけれどね、自分の目で見てみたい

って言ってたよ」

返ってきた言葉に、あははと苦笑を浮かべた。

「だよねぇ、お父さんは自分の仕事を鍛冶屋って言ってたけれど、これじゃ冒険家……ううん、鉱石商人って言ったほうがいいのかな」

馬車はまだまだ道を走る。太陽がサンサンと降り注ぎ、少年は手のひらを掲げ眩しそうに目を細めた。

「故郷ってなに？……ふぅ～ん、帰りたいと思う所かぁ。長い間一つの国にいた事ないしわからないなぁ」

吹き抜ける風がそよそよと頬をなでる。風の心地よさに少年は目を閉じた。

「ん～、もう気づいた頃から移動し続けてるしお父さんもいるし……。あ、でも友達ができないのはちょっと寂しいかも」

ガタガタと鳴る馬車の音に耳を傾けていると、馬車の速度が少しずつ落ちていくのを感じた。

「うん！今度行く町で友達できたらいいなぁ」

「お～い、そろそろ休憩にしようか」

御者席から少年の父親が顔を向ける。道から少し外れた草むらで馬車は停止し、今から昼食を取ろうということとなった。

「そういえばさっきからなんか話をしていたか？よく聞こえなかっ

たが」

「ううん、独り言」

草むらに座り込み、二人の親子は少し遅めの昼食を取り始める。
二人の影の他には馬が近くの草を食べている姿だけだった。

○エトワール城下町

「やっと着いたな！」

「お父さん……僕もうお尻痛い……」

門を潜り、少年は目の前に開かれた町の様子を眺める。
日は沈みかけ、夕日に照らされた町並はどこか寂しげな雰囲気を漂わせている。
……夕方という時刻ではあるが、あまり町に活気があるように思えなかった。

「さっさと宿を探さないとな」

「そうだね……でもとりあえずその血をどうにかして欲しい……変なにおいするよ」

世界の治安はあまりよくない。町と町をつなぐ道中には山賊達が息を潜め、通った獲物を蹂躙する。森の中では魔獣がはびこり、自分のテリトリーに入った者の肉を食らう。
エトワール城へ続く路中、彼らは何度か野党に襲われていた。

馬車が護衛も無く移動しているのだ、野党にとってこれ程狙いやすい獲物はない。
だが、彼らも様々な国を渡り歩いている経験がある。今まで渡り歩いた所でも襲われた事があった。

「おいおい臭いとか言うなよ。これは俺達の命を守った勲章だぞ？」

「どうせ拭いたら落ちる勲章なんて無くてもいいよ……」

その対処として、彼らはある程度自衛できる力を身につけた。
護衛を雇うという事はあまり考えていない。金がかかることも確かだろう。父親が作った武器の威力、防具の耐久性を実践をもって経験したいという目的も少々ある。
自分達の手に負えない場合はただ逃げるだけだ。どうせ馬車の中にはろくなものは入っていない。二人分の食料、数本の武器、少量の鉱石、ただそれだけだ。旅に必要の無いものは極力もたないようにしている。

「もう夜になるし、空いてる宿さっさと取ろうよ」

「よし、それじゃあそこでいいか」

馬車を宿屋の隣にたてられた宿舎に泊め、部屋借りて寛ぐ親子。
夕食を食べ終えて、ゆったりと寛ぐ少年に父親から言葉がかけられた。

「そういえば女将さんに聞いたんだがな……」

ん？と寝床から顔を上げ父の言葉に耳を傾ける。

「この町の外れには魔女がいるから気をつけるように、ということらしい」
「魔女？魔女ってなに？」
「呪われし者、人にとって危険な存在、世界の異端者――呼び名を上げればきりが無いが……異常な生き物といったところか」

魔女。世間に知られる魔術とは別の力を持つ者達の総称と意味する。魔術を仕様するわけでもなく、理解しがたい摩訶不思議な力を使うもの。この世界にとって異端な存在。
いわく、その力は呪われた物。

「お前も気をつけるんだぞ」
「……うん、わかった」

父の言葉に頷いてみたものの、少年は何故そんなに恐れているのか？と疑問に思っていた。

翌日、さっそく父親は珍しい鉱石を探しに行った。
少年が目覚めた時にはすでに支度が整っていた親の姿に、少し恥ずかしさを覚えた。

（まるで遠足前の子供だなぁ……）

生暖かいどころか、冷めた視線を親にむけつつその姿を見送る。

「さて、これからどうしようかな……」

父親はいそいそと宿屋を出て行き、少年はこれからの予定を考え

る。一人取り残される事に特に不満はない。いつものことなのだ。

とりあえず町に出てみよう思い、宿屋で出た朝食を腹に収めた後、少年は宿屋から出て行った。

キョロキョロと町の様子を眺めながら歩く。

「襲ってくる人達も結構いたし、あんまり治安とかよくないのかな・・・・・」

町の空気が重い。

店が立ち並ぶ大通りは実に閑散としていた。いままで巡った国の町では朝から市場を開いている所もあり、その市場の喧騒や賑やかな空気が好きだった少年はこの町の様子を見て落胆する。

(宿屋に帰る?教会に行ってみる?路地裏とかあまり行かないほうがいいし。あ、鍛冶屋があれば見てみようかな?今ある武器とか売ってどの程度お金になるかわからないし。お父さんもそこで働くかもしれないもんね)

城下町は地理だけ把握することにし、今後どうしようかと思考を巡らす。

「先生はどう思う?」

考え事をしながら歩いていくと幼い声が少年の耳に入る。視線をそちらに向けてみると、同年代らしき少年達がボールで遊んでいた。

「……友達かぁ。どうせこの町もすぐ移動すると思うけれど……とりあえず声かけてみるよ」

遊んでいる少年達へと足を向ける。近づいてくる余所者に少年達が気づいた。

「こんにちは」

この町の少年達が少年に奇異の視線を向けてくる。

「……誰だお前？見かけない奴だな」
「昨日この町に来たばかりだからね。ねぇ、一緒に遊ぼう」
「はっ、嫌だね。余所者と一緒になんていられるか」

少年達のリーダー格と思わしき少年が、嫌悪感を露に拒否の言葉を吐き出す。周りの少年達もその言葉に賛同した。

「そうそう、田舎者はおとなしく一人で遊んでればいいさ」
「邪魔なだけだ。とっとと帰れよ」
「……もう一人で遊ぶのは飽きたよ」

少年達が顔を見合わせる。途端、少年達の顔がにやにやと意地の悪い笑顔を浮かべた。その笑顔は気味が悪い。その顔を見た途端、少年は彼等と遊ぶ事を諦めた。

「だったら魔女とでも遊べばいいさ」
「だな、あいつらなら遊んでくれるだろうさ」
「どんな風に遊ばれるかわからないけれどな」

魔女という言葉。昨日父親から聞いた言葉。父親から近づくなと言われていたが、少年は魔女という者がどんなものか興味を示し始めていた。

「その魔女ってどこにいるの？」
「あはははは、本当に魔女と遊ぶつもりかよ」
「いいさ、教えてやるよ」

少年達から魔女の居場所を詳しく聞いた後、彼らと遊ぶ事はできないと考えた少年は魔女の棲家へと足を運び出した。

「せいぜい死なないようにするんだな」

嘲笑の言葉を聞き流しながら、少年はゆっくりとした足取りで城下町から出て行った。

城下町から出た少年はその足を魔女の元へと進める。
魔女に対する恐怖はあまりなかった。それは無知からくる余裕なのかもしれない。魔女がどんなものか興味を持っただけかもしれない。
先ほどの少年達と遊ぶよりも面白い事があるかもしれない、と楽観的な事を考えていた。

城下町を出て、近くに流れる川沿いをゆったりとした動作で歩いていった。周囲の景色を眺めながら、鼻歌を歌いながら少年はその歩みを進めていく。

やがて川沿いに佇む一軒の古ぼけた小屋を見つけた。

「ここが魔女の家なのかな」

ざぁ、と木々達が風に吹かれる。葉の雨が降る中、少年は川辺に佇む二人の少女の姿が目に止まる。

相手を怖がらせないようゆっくりと進み、少年は彼女達に声をかけた。

「こんにちは」

笑顔を浮かべる少年に、彼女達の感情のない視線が向けられた。

第一話　鍛冶屋の息子（後書き）

「最初のくっさい詩みたいなのなに？」
「著者が溜め込んだとある人の名言とか名句。あとは自論とかあるな」
「自分の黒歴史さらけ出してどんな羞恥プレイだ」
「どうしてこんなの入れたの？」
「この話を作るにあたって、色々読み返したら話にあった一文を使いたくなったみたいだ。話に合うものがなければ付けないようだが」
「つまりこれからも続くってことね……よし一発殴ってくる」
「社会的に死ねばいい」
「まぁ、放置しておこう。付き合うのも疲れる……」

第二話　魔女とは

第二話　魔女

「こんにちは」

笑顔を浮かべる少年に、彼女達の感情のない視線が向けられた。

「――誰だ？」

「――誰？」

少年とそれほど年が離れていない少女達の声が耳に届く。

若い。あまりにも。

魔女と呼ばれる姿を想像したとき、年を食った老婆と勝手な想像をしていた少年は彼女らのあまりに若い容姿に驚いていた。

「初めまして。僕の名前はクーヤって言います。君達が魔女と呼ばれているのかな？」

赤。目の前に広がる紅。

魔女という単語を発した途端、目の前に火の塊が視界を埋め尽くした。

「近寄るな！」

視界を覆う炎の壁はクーヤと名乗る少年の一歩前に展開し、一瞬の後消えていく。その炎は拒絶の証。

クーヤは驚愕の表情を浮かべる。いきなり炎が出現したことではない、いきなり殺意を向けられたことでもない。別の理由でクーヤ

は驚いていた。

「……何しに来た？」

叫んだ少女とは別の、もう一人の少女がクーヤに問いかける。言葉の端に敵意や殺気を含んでいたが、クーヤは気にせず話しかけた。驚いた表情を笑顔に変え、質問に答える。

「ん？僕？ちょっと話し相手になってもらおうと思ってね」

「私達に話すことなどない、興味もない。帰れ」

「まぁまぁ、そう言わずに――」

一歩、足を踏み出そうとした。

ただそれだけの動作を行おうとした時、クーヤの足元に細長い塊が突き刺さる。

氷だ。

人の腕ほどの大きさがある三角錐。氷柱状の氷は鋭く、地面にその身を半分ほど埋めていた。だが、その一瞬後ぱきっという音と共に砕け、空間へと消えていく。

「――来るな」

「これ以上来たら容赦しないわ」

二人とも右手を掲げ、視線に殺意を含ませながら睨む。

「……わかった。これ以上近寄らないよ」

手のひらを空へと向けて、降参のポーズをとる。今はこの距離かな、と誰に聞こえることも無く囁いた。

クーヤは彼女達の様子を伺ってみる。

正確な年齢がわかるほど人生経験を積んだわけではないが、多分自分と同じくらいの年頃。古ぼけた家と同じように、所々傷んだ布を巻きつけただけのような服装。魔女というものがどんな存在かは知らないが、あまり優遇されていない事だけは確かだろう。

（取り付く島もなさそうだなぁ。これは諦めた方がいいかな。ね、先生？）

これでは先ほどの少年達と同じような扱いだ。クーヤが興味を引くものがあったが、怪我をしてまで知りたいとは思っていなかった。

「さっさと私達の視界から消えろ」

「でないと……本当に――」

殺す。

そんな言葉が聞こえた。彼女達の視線は雄弁だ。

これ以上ここに留まるのならば。今すぐこの場を去らなければ。即刻踵を返さなければ。

殺す、と。

「わかった」

彼女達の圧力に負け、この場を去る事を伝える。

仕方のない事だ。彼女達の力は今の自分にはどうしようもない。攻撃を回避しようにも、瞬間的な攻撃を回避しようもない。今この時でさえ、瞬きをした後自分が火達磨にもしくは串刺しになっているかもしれないのだ。

「……でもその前に君達の名前、教えてくれない？」

「――え？」

彼女達がたじろいだ。
少年の意外な言葉に。
これほど脅しをかければすぐさま逃げ出す思っていたのだが、当てが外れてしまった。目の前の少年は　脅しに屈することなく、先程向けた攻撃も、今なお向ける敵意もまるで気にせず、ただ名前を聞いてくる。
だが、彼女達は素直になれなかった。
「わ、私達が教える事などなにも……ない」
隣にいる少女も同意とばかりにうんうんと頷く。
頑なに会話を拒もうとする彼女達。
あまりにも頑固な姿勢を崩さない目の前の少女達に自然とため息がこぼれた。
「ふぅ……本当はこんなこと言いたくないんだけれど――」
目を閉じ、ため息を吐いた後、視線を彼女達に向ける。
力の篭った視線に、再び彼女達がたじろいだ。
「名乗った相手に自分の名前を教えないとは、礼儀に反すると思わないか？」
彼女達が驚いた。
声の高さはまったく変わらなかったが、口調が一変したクーヤに奇妙な視線を向ける。
「お前達は人語を理解しない獣なのか？礼儀を知らない魔女なのか

？それとも礼儀を重んじる――」

一つ息をつき、狼狽する彼女達へとさらに強い視線を送った。

「人間か？」

‘人間’という単語に彼女達はビクッと体を揺らす。

そんな彼女達の反応をよそに、クーヤは問いかける。

「獣か、魔女か、人間か。簡単な事だ、どれか選べばいい――って先生は言ってるよ」

口調が再び戻る。

彼女達は何も言わない。驚いているのか、迷っているのか。その内情を理解することはできなかった。

そんな彼女達に向けて気持ちを切り替えるように軽く笑い、再び声をかけ始める。

「初めまして、僕の名前はクーヤ。君達は？」

「わ、私はアリスという」

「私はラビ……です」

クーヤは満足げに頷いた。彼女達が人間を選んでくれたことに。

さすがにこれ以上ここに留まっても、彼女達を不快感にさせると感じたクーヤは帰る事を伝える。

「アリスにラビね。今日の所は帰る事にするよ。また明日来るときはよろしくね」

「も、もう来ないで……」

「それじゃ、またね」

弱々しい拒絶の言葉を無視し、クーヤは手をあげてその場を後にした。

「おお、クーヤ。ただいま」
「お帰り、お父さん。どうだった？」
「……残念な事に、今丁度出回っていて無いらしいんだ」

父親の表情は優れていない。
意気揚々と出かけた朝とは真逆の、落胆した雰囲気が父親から漂ってくる。期待していた分、手に入らなかった時のその落差がその様子から伺えた。

「ふ～ん、それで次はいつ頃届くのかな？」
「5日後あたりに届くらしいが……」

父親の言葉の歯切れが悪い。
言いづらいのか、言葉を選んでいるのか、ちらちらと様子を伺い口を紡ぐ。
そのような父親の意を汲み、滞在日時が延期する事を悟ったクーヤは言いづらそうな父親よりも先に質問を投げかけた。

「どれくらいここにいる事になりそう？」
「……大体1ヶ月ほど滞在することになった。かなり特殊な石らしくてな、色々調べてみたいんだ」
「1月かぁ。そうなると荷台にある武器とか売っても足りなさそうだね……」
「そうだな。いつも通り町で働く事になる」

「あ、鍛冶屋ならここから大通りに行って、通りに出たら城の方へ向かって6軒ほど先にあったよ」
「相変わらず気の利く息子だよ、お前は」
「子供みたいな親を持つと子供が大人になるもんだよ」
「まったく、こいつは」
「僕は適当に暇つぶすし、気にしないでね」
「……すまんな、治安もあまり良さそうじゃないし、魔女もいるようだから早く発とうと思っていたんだが」

父親のすまなそうな表情に苦笑いを返し、気にしてないよと首を軽く振った。
魔女という言葉に昼間に会った彼女達の様子を思い浮かべ、話した方がいいかと一瞬迷ったがあえて何も言わずにおいた。
いまだ晴れない父親の表情を見て、クーヤは一つお願いすることにする。

「あ、そうだ。荷台にある武器を売ってお小遣いもらっていい？」
「ん？いいぞ。でも全部もってくなよ。仕事に就くまでの生活費になるんだからな」
「わかってるよ」

魔女の所から帰ってきたあと、クーヤは再び街中を探索した。閑散としているが、商いをやっていないわけではない。見回った結果、武器屋、鍛冶屋、服屋に装飾店などの場所を知ることができた。
明日はどこに向かおうかと、予定を頭に思い浮かべ寝床へと向かう。
明日が楽しみだ。

第二話　魔女とは（後書き）

「Ｙｈａ！私が出てきた！いやぁ、若いわぁ……今も若いけれどね！」
「というか……ここで話す事はネタばれになるんじゃないか？」
「まぁなんというか……。補足説明入れるのが――メンドクサカッタラシイ」
「怠け者ね」
「愚か者だな」
「そう言うな、著者だって無い頭絞ってるんだ」

第三話　魔術とは

ここに気狂いじみた理論がある。
ただこの理論が正しいとされえるにはどれほど気狂いじみていればいいかが問題なのだ。

第三話　魔術とは

魔術。
かつては歴史の暗闇に身を潜めていたその技術は、長い年月が過ぎるのと共に人々へと浸透し表舞台へと立たされる事となった。
誰がその技術を流出したのかは定かではない。
初めは理解し難い人外の力と拒否されたことだろう、悪魔の技と罵られたかもしれない。しかしその技術はゆっくりと、そして確実にこの世界の常識として広められていった。

魔術師とは、その魔術を使う者の総称。
世界的に見て、その割合はそれほど多くはない。だが、少ないわけでもない。多くの国では魔術師達を集め、それを一つの部隊として成り立つ程度には存在している。
魔術師になるには素質は必要だ。
魔力は誰にでもある。しかし一般的な人々には極微量しか備わっていない。その量は指先に火を灯すどころか指先にそよ風を作るにも足りない量。それならば手で扇いで風を作った方が良い。
つまり魔術師の基本資格とは、ある一定量の魔力を保有していなければならないということである。

魔術を使うということは、ある程度の順序を理解しなければならない。
まずその魔術がどのようなものかを理解し、
体に巡る魔力の流れを読みとり、
その魔術の方向性を想像し、
詠唱という世界にアクセスする手順を辿り、
その魔力を放出することで世界に歪んだ現象を起こす、ということを知らなければならない。
詳しいことは割愛するが、この５つの段階を踏まないことには魔術を使うという結果は現実には反映されない。

「こんにちは。また来たよ」
「ち、近寄るな！」

目の前が赤く染まる。
昨日とまるで同じ光景を見るようにクーヤは苦笑した。昨日の今日でいきなり親しくなるとは思っていない。そもそも昨日は無理やりお互いの名前を名乗っただけだ。親しくなるはずもない。
だからクーヤは話しかけることにした。

「へぇ、やっぱりすごいね」
「……えっ？」

５つの段階の中で一番重要な行為が詠唱である。
魔力とは魔術を使うためのエネルギー。魔術とは世界を歪める技術。そして詠唱とは自分と世界とを繋ぐ鍵。
世界と接続しないことには、どんなに魔力があろうと、どんなに緻密な想像をしようと、どんなに魔力を放出しようと世界に現象を起こすことはできない。　無意味な想像をし、無意味に魔力を垂れ流すだけの結果となる。

「魔術が使われる所は見たことあるけれど、詠唱が無いのなんて初めて見るよ」

ゆえに、詠唱を行わないということは世界を歪ませることは不可能とされている。

「……それはそうだ。この忌々しい力はそもそも魔術ではない……呪いだ」

ラビとアリスの顔が歪む。認めたく無い事を口に出しているその痛々しい姿にクーヤの心もじくっと痛む。

「そうかな？僕にはその力は魔術に見えるんだけれど」

「ふざけないで！」

「そうだ、ふざけるな。この力が魔術であるのなら私達は……なぜ私達は魔女と呼ばれている！」

「それはそうなんだけれどね」

激昂した彼女達に曖昧な言葉で返事を返す。

クーヤの中に確信があるわけではない。しかし、自分の中ではその答えは肯定できた。

「まぁ、いいや。ところでお昼食べた？」

背負っていたリュックから小さなバスケットを二つ取り出した。

太陽は一番高い所を過ぎ、傾き始めている。

この世界は基本的に食事は2食。一部の地域を除いて朝と夜だ。

一部では朝に一食、昼と夜の間に一食となっている。明かりになる燃料が貴重な地域だ。ここも同じようなものだとクーヤは考えて

いる。
明かりがなければ暗闇ですることもなく、ただ睡眠を取ることしかできない。彼女達のような少女ならなお更だ。
ラビの力は火を使えるらしいが、すべて一瞬のうちに消えている。持続は難しいのだろう、とクーヤは考えていた。

「作りすぎちゃってね。よかったら一緒にどう？」

バスケットの中には様々な具材がパンに挟まれていた。所謂サンドイッチと呼ばれるものだが、彼女達はその料理を知らない。ただ、色とりどりに並べられたバスケットの中身が、まるで宝石のような眩さを感じていた。

「……っ」
「……ごくっ」

自然と喉が鳴る。
だが、彼女達は近づかない。クーヤに警戒心を向け、近寄ることを拒んでいる。

「ここに置いておくよ」

そんな彼女達の様子に苦笑し、バスケットを一つ置き彼女達から遠ざかった。ある程度距離を取り、適度な大きさの石に座った後昼食を取り始めた。
クーヤが食事を取る光景に、再び喉が鳴る。

ついに食欲に負け、一歩また一歩とバスケットの置かれたところへ向かっていく。
のそのそと警戒した足取りで近づき、足元に置かれたバスケット

の蓋を開ける。
瞬間。まるで一面に花が咲き誇るような幻覚に捕らわれた。
様々な食材の香りが辺りに充満する。果物の香り、甘い香り、野菜の香り、燻製の香り。
もう一度ごくっと喉を鳴らす。

バスケットを開けたまま、アリスはクーヤの方へ顔を向け睨む。

「別に毒なんて入ってないよ」

あまりの警戒心に、野生の動物を餌付けしているような感覚にクーヤは苦笑した。
ラビが恐る恐るバスケットの中へと手を伸ばす。
震える手でバスケットの中から一つサンドイッチを取り出し、口に近づけ、つぐみ、口を開け、つぐむ。
何度か迷った後、意を決して口の中へと半分放り込む。甘い香りが鼻の奥をくすぐった。

「――おいしい」

果物の甘みと酸味。蜂蜜の甘み。やわらかいパンの感触。それらが口いっぱいに広がった。何度も咀嚼し、その味を口の中で楽しむ。飲み込んだ後、もう半分をすぐに口の中へと入れた。

その様子を隣で伺っていたアリスもついにサンドイッチを手に取り、口に入れる。驚いたように目を見開き、咀嚼した後飲み込んだ。

「――うまい」

その後、彼女達の手は止まらなかった。

口に含み、咀嚼して飲み込み。また手にとって口に入れ噛み喉の奥へと押し込む。誰に盗られてなるものかと手の速度は上がり、しかし噛むことと飲み込む速さはそれについていけず、やがて頬が膨らんできた。

彼女達のそんな様子を、まるでリスのようだと思い微笑ましくなった。

そんな視線に気づかず、彼女達はただ無心にバスケットの中身を減らしていく。

クーヤも食事を再開する。今日の食事は一人で食べるよりもおいしく感じられた。

「ごちそうさまでした。あ、バスケットはそこに置いておいていいから」

彼女達は空になったバスケットを残念そうに眺めていた。だが、クーヤが近づくと急いで踵を返し、距離をとる。

そんな様子に再び苦笑し、地面に置かれたバスケットをリュックにしまう。

「……」

顔を上げたとき、その視線の先に彼女達の気まずそうな、何か言いたそうな表情があった。

何か話すのかとしばらく待ってみたが、結局彼女達は口を閉ざし、しゃべることはなかった。

「お粗末さま。それじゃ今日はこれで帰るよ」

「……」

「またね」
「……」
彼女達に背を向け、町への道を歩き出す。
再開を望む言葉に拒否の言葉が返されることはなかった。

次の日も、その次の日も彼女達の元へと足を伸ばした。そして今日もまた同じ時刻にこの場所へと訪れる。

「や、元気？」
「ち、近寄るな」

いつも通りの拒絶の言葉。
だが、丸っきり同じというわけではない。この頃は目の前に炎の壁が出ることも、足元に氷の槍が刺さることもなかった。
そして数日前に拒絶された場所よりもほんの数歩近寄ることができた。その事実に自然と笑顔が浮かんでくる。

「ここに置いとくね」

そう言い残し、彼女達との距離を空けた。
ここ数日と同じような食事風景が繰り返される。彼女達は無心食べ続け、クーヤはその様子を見て微笑む。
やがて双方が食事を終える。残念そうに空のバスケットを眺める彼女達にクーヤは声をかけた。

「あ、そうそう。今日はプレゼントがあるんだ。そこにある包みを開けてみて」

サンドイッチに夢中だった彼女達は近くにあった包みに気づいていなかった。びくっと体を揺らし、一歩後ずさる。

別に変なものは入ってないよ。とクーヤが話しかけるが、彼女達は恐る恐るといった様子で近づいていく。つま先で蹴ってみたりし、中身の様子を探っていた。

ラビが危険そうなものは無いと確認した後、包みを開ける。

中から出てきた物に、彼女達の驚いた様子が伺えた。

「これは……布？」

包みの中には赤と青に染められた布が収められていた。手にとって広げてみると、ワンピース状の形に整えられた服であった。コットという庶民から貴族まで親しまれる服だ。

あまり上質な布ではない。しかし、現在彼女達がその身に着けているかなり汚れ、ボロボロの布よりも質がよさそうだ。

「気が向いたら着てみてね」

腰を上げ、彼女達の方へと近づいた。近づいた距離の分だけ彼女達が逃げていく。その手には握り締められたコットがあった。

「それじゃ、今日はこれで」

片手を挙げ、背を向けて歩き出そうとする。その背に声がかけられた。

「ま、……待って！」
「……どうしたの？」
不思議そうな顔をして振り返る。視線が合ったがラビは口をぱくぱくとするだけで声は漏れなかった。最後には唇をきつく閉ざし、くやしそうに下を向く。
「……どうして私達に構う」
その後の言葉をアリスが代わりに聞く。
「どうしてって、仲良くなりたいからだよ」
「嘘だ」
「なんでそう思うの？」
「私達と……魔女と進んで関わろうなんてヤツはいない」
「それじゃ僕は進んで関わろうとする奇妙なヤツだね」
「……何か目的があるのか？」
「目的はアリスとラビの友達になること」
「だからそれは――」
「嘘だ、と思うならそう思っていてもいいよ。でも僕は――」
否定しようとした言葉をクーヤが先に言葉を発し押し止める。その真剣な視線にアリスは飲み込まれた。
「君達が僕と同じと思ったから友達になりたいんだ」
「っ！」
言いたいことは言い終え、これ以上話すことはないと踵を返す。
「ま、待って。それはどういう……」

「またね」

静止の声を振り切って、クーヤは町へと向かっていく。残された彼女達はその言葉の意味を考えてみるが、結局それらしい答えを得ることはできなかった。

「ただいまお父さん」

「クーヤ見ろ！鉱石が手に入ったぞ！」

クーヤが帰った時にはすでに父親が宿屋で息子の帰りを待っていた。意気揚々と目的の鉱石を目の前に押し付けてくる。

「よかったね。どんな鉱石なの？」

「ああこれは、魔吸石と呼ばれる鉱石らしい。名称の通り、魔力を吸収する石だ」

「魔力……それはマナ？それともオド？」

「マナは周囲から観測されたから、オドの方だと思う」

「オドを封じるって……そんなの持っててもいい大丈夫なの？」

「持っていても疲れる事もないから、放出したオドを吸収する効果があるかもしれないな。いや、とにかく調べてみないと確かな事は言えないか」

魔力には大別してオドとマナの二種類がある。

オドが小源、マナが大源。

オドは生物自身が内包する魔力。精神力と捉えてもいい。

マナは星という生命が発している魔力。自然のまたは精霊の力。

オドは個人で保有するガソリン。

魔術を行使するには、そのガソリンをエンジンと言える術式に流し込むことで現実を侵食し発現する。
マナは世界に満ちる無尽蔵といえる量を誇る。
しかしその本質は例えるなら原油だ。オドとは同一のようで、似て異なるものである。ゆえにそのままでは魔力として人が使う事は出来ない。

「ふ～ん、詳しい事がわかったらまた教えてね」
「ああもちろんだ。俺は早速この鉱石を調べる事にする。遅くなると思うからもう寝なさい」
「ねぇちょっとその鉱石貰ってもいい？」
「少しくらいかまわないが……どうするんだ？」
「試してみたいことがあってね」

もしかしたらこれは使えるかもしれない。クーヤはこれをどう使えばいいか考えながら眠りについた。

「こんにち……は……――へぇ」
「な、なによ」

今日もこの場所へ来た。
最近では見慣れてきた風景。だが、今日はその景色に二つの色が加えられていた。
その色はクーヤが町で見た色。
彼女達の服が昨日まで身に纏っていた薄汚れた布ではなく、クーヤが渡したコットを着ていた。ラビが赤、アリスが青を着ている。
「うん……うん。よく似合ってるね。可愛いよ」

「っ！」

ボッ、という音が聞こえた気がする。

彼女達の顔が真っ赤に染まった。次第にではなく、一瞬で。耳も頬も顔も、肌全体が赤く染まっていた。

「う、うるさいうるさいうるさいうるさい！」

「そんなに怒っても僕の意見は変わらないよ。実際可愛いし」

捲くし立てるラビに平静な対応をとる。年はそれほど離れていないが、傍から見れば子供を嗜める親のように見えた。

「っ！うるさい！もう喋るなぁ！」

目の前に炎が現れる。

なんだか久しぶりな感じだなぁと、感慨深くどこか外れた事を感じていた。

壁が晴れた後、いつも通りのこちらを睨む顔を苦笑で受け止めようと考えていた。

だが、炎が消えた後見たことのない奇妙な光景に目を丸くした。

「熱っ……あつ……熱い」

「ラビ落ち着け！今冷やしてやる」

視線の先に火の塊がある。先程までラビがいた所だ。

隣にいるアリスも慌てた様子で自らの力をその火の塊に注ぎ始めた。

焦げた臭いがここまで漂ってくる。何が起こっているのかわからない。

クーヤはあまりの事態に驚愕し、動けないでいた。

「……はぁはぁ。ア、アリスありがとう」

「もう大丈夫そうだな」

ラビの無事を確認し、アリスはクーヤの方へ振り返った。

「これが私達の呪いだ」

「……」

「私達の力は詠唱も無しに発動し、感情の起伏でも発動する……そして、その力で自分自身を傷つける……こんな力が魔術と本当に言えるのか？」

本来生物は自分の身を傷つける為の武器を持っていない。

毒蛇が自らの毒で死なないように、魔術も自身を傷つける術は存在しない。自分を犠牲にする魔術は存在するが、自分を傷つける事を目的とした術は存在していなかった。

「いやぁ。驚いたよ……ラビ、大丈夫？」

「え？……あ、うん」

「そうか、よかった」

「――あ……服焦がしちゃった」

「服は消耗品だよ。ラビが無事ならそれでいいよ」

「あ……う……。そ、その……ご、ごめん」

「気にしなくてい――」

「私を無視するな！」

ラビへの返事はアリスによって遮られた。ふぅ、と息を吐いてアリスへと向き直る。

「ごめんごめん、それでその力が魔術か……という事だっけ」
「そうだ」
「僕の意見は変わらないね。その力は魔術だと思ってるよ」
「っ！なぜそう思う」
「ん～、僕は魔術師じゃないから詳しい事はわからないよ……そう感じてるとしか……」
「話にならないな。適当な事を言って私達を馬鹿にしてるんじゃないのか」
「そんなことないって――――あ、先生が何か言いたいみたい」

突然目を瞑るクーヤに不思議そうな顔をして二人は顔を見合わせる。

「……先生？」

ぽつりと声をもらす。
その疑問にクーヤからの返答はなかった。

「まず、結論から言わせてもらうと……お前達の力は魔術だと考えている」
「「……！」」
「視覚からの情報のみという事も言っておこう。魔術を語るに視覚のみでは不安かもしれないが、なに視覚情報も馬鹿にならない。そもそも人類はその情報を大半が視覚から得ているんだ」

先程までの柔らかい感じを含んでいた口調が、どこか冷めた、突き放すような口調に彼女達は驚愕した。

「あんた……誰？」

そして疑問を口にする。
このような状態のクーヤはいままで――いや一度だけある。
その時はあまりの出来事に疑問すら浮かばなかった。その会話の後で言われた『先生』という単語も今思い出した。
「お前達には二つの選択肢がある。一つはその力が魔術だという推測を聞くこと、もう一つはこの会話を切り上げること。どちらを選ぶ？」
「「……」」
彼女達はお互いの顔を見合わせ、押し黙った。沈黙を前者と受け取ったクーヤは一つ頷き、続きを話した。
「その前に呪いの力である事に否定的な所から話をしようか。お前達は力が自分を傷つけるとき、どんな状況なんだ？」
「……えっと」
自分が傷ついた過去を思い出し、顔が苦痛で歪んだ。
「泣いたり、怒ったりするとき……」
「感情の爆発か。暴走にはよくある状態だな。他には？」
「……特に無いな」
「力を使った時にどこか痛む場所はあるか？例えば頭とか」
「……特に無いわ。あ、ちょっと体がだるいくらい」
「その力を初めて使ったのはいつだ？」
「気づいた時にはもう……多分生まれた時に……」
ふむ、と一言区切り再び話し出した。
「お前達はその力を呪いだとしたいらしいが、呪いというものは常

日頃からその者を蝕むものだ。日常生活を送るなんてとんでもない。命に関わる事だ。
そして超能力等の……ってわからないか。魔術以外の不思議な力というものは自分を傷つけるようなものではない。
暴発した場合周囲には甚大な被害が起こるが、自身は無傷という場合がほとんどだ。毒を持つ生物が自分の毒で死なないように」

まぁ、力に精神が耐え切れず自らの命を絶つ事もあるけれど。と彼女達には聞こえない程度の声量で言葉を漏らした。

「そもそも魔術だって本来生物自身が持つ力ではない。後に覚える技術だ。やりようによっては、自身を傷つける。
例えば自分の真上に氷を作ってみればいい、真上に発現すればあとは自由落下で自身に降り注ぐ。間接的にではあるが、自分を傷つける事は可能だ」

それはそうだろうが、それでは直接自身を傷つける力はやはり呪いだろう。それに私達は後で覚えてない、生まれ持ったものだ。という疑問が浮かぶ。言葉に出そうとした時、クーヤは次の言葉を発した。

「だがお前達のは少々勝手が違う。ラビが燃えた理由は、憶測ではあるが魔術の暴発だな。つまり失敗ということだ」
「……え？」
「魔術の失敗とはそのほとんどが何も発動しないという結果に終わる。
魔術を理解していないことには何も現象は起こせない。
想像はある程度のものでも発動するがあまりに突拍子もないとやはり発動しない。
詠唱を間違えれば世界と接続できず魔術は行使できない。

注ぐ魔力が少ないと世界を騙す力は足りない。とまぁ、魔術の失敗は何も起こらないというのがほとんどだ――だが、例外はある」

クーヤは次々と話を続ける。

「注ぐ魔力があまりに多すぎる場合だ」

色々な疑問が彼女達の頭のなかで駆け巡る。否定の言葉を出そうにも考えはまとまらず、結局口から出なかった。

「容量過多――とでも言おうか。知っての通り魔術には下級、中級、上級がある。

下級に中級で使う魔力を注いでもその過剰分は世界に分散されて自身に被害を及ぼすこともない。しかし下級に上級で使う魔力を注いでみたら……分散する速度は間に合わず、その魔力に引火する。

上級魔術を使えるヤツがあまりいないからあまり知られていないがな。それに上級を使える大抵の魔術師ならば注ぐ魔力も理解しているし、無駄な魔力を注いで暴発……なんてことはならない。

まぁ、わかりやすく言うとお前達は魔力の制御が不安定ということだな」

一息に話し終え、一口水を飲むと軽く息を吐き出した。

「呪いという事も、他の不思議な力という事もまだ否定できないが……その力は魔術である可能性が一番高い、という事だ――って先生は言ってる」

「……」

「話疲れちゃった。とりあえずお昼にして休もうよ」

「ま、待て」

「なに？」

「お前は、何なんだ？」
「……僕が昨日、君達と同じって言ったよね」
「ああ……」

結局彼女達はその意味が理解出来ていなかったが。

「その意味は二つあるんだ。一個目は僕もお父さんしか家族がいないし、親しい人も他にいない。そしてもう一個は――」

指を一つ立て、その意味を話していく。そして二つめの指が立てられた。

「――僕と同じ転生体という存在」

突拍子も無い事をいうクーヤにアリス達はきょとん、とした表情を示していた。その顔をみてクーヤはニヤリと笑った。

第三話　魔術とは（後書き）

「説明が長いわ！」
「ファンタジー物は最初に大きい戦闘シーンを入れて、こういう話は補足説明として後で入れるのが普通じゃないか？」
「この章はまだプロローグのようなものだ」
「……長いプロローグね」
「前奏が長い曲は結構良曲が多いぞ？」
「ではこの話は後で面白くなると？」
「それはどうだかわからない」

第四話　転生とは

第四話　転生とは

この世界には多くの場所で宗教が設立されている。
聖十字教会。
その宗教も数あるそのなかで一番の勢力を誇る存在だ。
その聖十字の教えの中に、このような一文が記載されている。
『この世界に生を受けし者。その命は生を育み、世界を育む。その魂は死後、神の元へと返され、輪廻へと向かい、再びこの地に舞い降りる』
聖十字教会では死後、転生されると信じられている。

物心ついた時から、頭の中に別の誰かがいることが理解できた。
自分の見たことのない情景を浮かべ、自分の聞いたことのない知識を話す。
そんなことを独り言のように喋るものを、いつしか先生と呼ぶようになった。
この世界を様々な所を旅してきたが、その情景を見ることも、その知識以上の事を聞けたことはなかった。
この先生が生きた世界は、遥か昔の時代か、ここではない異世界か、はたまた夢物語か……。
「――僕には判断がつかない」

つらつらと話をするクーヤはどこか遠くを見ているようだった。話に着いていけるかどうか心配になったが、案の定ぽかんと口を開け理解には及ばなかったようだった。

「こんな話をしてもわからないよね？」

「ちょっと……信じられない」

「ああ、信じがたい話だ」

「まぁ、すぐに信じろとは言わないよ。――そうだな、例えるならお前達の力のようなものだ」

いきなり変わった口調に彼女達は少し驚いたが、段々と慣れてきている彼女達がいた。

「その力は生まれ持ったもの、と言ったな。つまり魂に刻まれたものだ。その力がどんなに疎ましく思おうとも、魂を切り離すことはできない。

お前らには強大な魔力を持ったモノが転生した。クーヤには知識を持った俺が転生したという考えだ」

彼女達はその話に受け入れがたい表情を取った。

「……この力は本当に魔術だと思ってるの？」

「調べる方法は……まぁ、ある」

ごそごそとリュックの中を漁り、取り出したものを離れている彼女達の方へと投げて渡す。

ラビは慌てて両手でその石を受け取った。

「これ、は？」

「魔吸石という。魔力を吸収する石らしいが、とりあえず力を使っ

てみてくれるか？」

言われるがまま、ラビは力を行使する。

「……あ、あれ？火が出ない」

「！！貸してくれ」

アリスも石を受け取り、同じように力を使ってみるがなにも起こらなかった。やがて石がビキリと音を立てて砕けた。

「耐久容量はあまり高くないらしいな。石の大きさでその容量が決まるか試してみたい所だ――と、話がずれたな」

力が発動しなかった事に対して不思議そうな顔をする彼女達に結論を述べる。

「これでその力が魔術であると証明されたな」

呆然とする彼女達。

今はただ、目の前の現実を受け入れないでいた。

「だって……詠唱してない、のに」

「……詠唱以外にも世界と繋がる方法はある」

「えっ？」

あまりの内容に、彼女達はクーヤへと視線を向けた。

「その話はまた今度。それよりも強大な魔力を持っているが制御が疎かな事が重要だ」

それはまるで、容器に満たされたガソリン。その強大過ぎる魔力は人の器には納まりきらず、溢れその周囲に巡る。今の状態は気化したガソリンがその周囲に充満しているようなもの。
そこに意思という火種が投下されれば、その炎は一瞬にして周囲を爆発的に巻き込む。

いまでは火種を投げ入れる前に、容器に蓋をする術をある程度身につけたようだが。いつその爆発が容器を巻き込むとも限らない。いまはまだ、そんな危なげな方法しか知らない。

「その魔力を制御するってことは、積載量数トンのダンプカーが高速で走っている中で、急カーブを曲がるような……と、この例えじゃわからないよな」

僕もわからないよ、とクーヤが愚痴をこぼした。

「気性の荒い暴れ馬に乗るにはどうすればいいか、といった所だろう。そのままでは振り落とされてしまう。落馬すれば自分も怪我するし、暴れた馬は周囲に被害を与える。
では手綱をつけてみてはどうか？それだけじゃ落ちてしまうかもしれない。
では鞍をつけて安定して座れる場所を作れば？それでもまだ振り落とされるかもしれない。
では手綱を絶対に放さない腕力を手に入れれば？振り落とされない馬術を身につけては？」

つまりそれを制御するべき知識、経験、技術が不足していたということ。

「今はまだ馬に振り落とされないように、しがみついている状態だ。

でもいつの日かその馬に手綱をつけ、鞍をつけ、暴れた馬の上でも落とされない術を身につけるだろう。
いや……お前達ならその荒い気性を収める方法が見つけるかもな」

彼女達は俯いていた。
疑心と希望。
素直に彼の言葉を受け入れることはできない。そんな単純な事ではないと、否定する心。
だが、この呪われた力をどうにか出来るかもしれない。そんな考えが胸に生まれ始めていた。
ラビ、アリス。と彼女達の名前を呼ぶと、弾かれたように顔を上げた。

「お前達は魔女なんかじゃない、れっきとした人間だ」

その言葉に彼女達は震えた。

受け入れられなかった。その言葉が。

怒りが込み上げた。今まで魔女と罵った人々に。

許せなかった。自分達をこんな境遇に追い込んだこの世界が。

「っ……そんな……こ、と……」
「……私達は……魔女で……ま、じょだからこん、な……」

彼女達の瞳が潤む。
大粒の雫が目尻へと溜まっていく。

「この世界を許して欲しい……とまでは言わない。ただ、呪われた

存在と自分を蔑む事はしないで欲しい」

「……だって、このち、から……で、みんな……」

「っ、わた……わた、したちは……」

「――先生は難しい事言ってるけど。僕から言える事はね」

ゆっくりと、優しく。囁くように、染み入るように。クーヤは彼女達へと言葉を告げる。

「その力は怖くないよ。ただちょっと上手く使えてないだけだ」

耐え切れず彼女達はボロボロと涙を落とした。

魔女と罵られ、虐げられた日々。
誰も受け入れてくれなかった。町も大人達も。
言葉をかけてくれなかった。親でさえも。
人として認めてくれなかった。この世界が。

彼女達は泣いた。
今まで溜めたものを全て吐き出すように。
人の前で久しぶりに泣いた。

「落ち着いたかな？」

「……うん」

頬に涙の後が残っている。
クーヤは手ぬぐいを取り出し、目の前の彼女達に手渡した。

「あ、ありがとう」
「その……今まで、すまなかった」
クーヤは困惑した顔で、頭をぼりぼりと掻いた。
「そんな言葉を聞きたかった訳じゃないんだけどね」
「で、でも――」
「ね、それよりもこれから遊ばない？」
「えっ」
「さ、行こうよ」
二人の手を取り、少年は駆け出した。
戸惑い気味の彼女達がその後に続く。
この日を境に、彼らは友達となった――。

それからというもの、彼らは多くの時間を共に過ごした。
森の中を一緒に駆け回り、一緒に木の実を食べたりした。
近くの川で魚を獲ろうとし、足を滑らせずぶ濡れになったお互いを笑いあったりした。
雨の日は室内での遊びを先生に教えてもらったりもした。
あるときは狩りをして過ごし。
「ラビ、そっち行ったぞ！」
「オッケイ、任せて……おりゃああ！」
「……」
「……見事に黒焦げだね」
「何故そんな火力で力を使うんだ！」

「う、うるさいな。加減が難しいの！アリスだってこの前氷付けにして粉々になっちゃったじゃない」
「なんだと！」
「はいはい、その辺にして。次がんばろうよ」
「「……うん」」

あるときは魔術の講義などをした。

「先生、詠唱を使わないのになんで私達は魔術を使えるの？」
「詠唱とはどんなものか理解しているか？」
「詠唱とは世界を繋ぐ鍵……という程度だな」
「そう詠唱は世界と繋がる為の儀式。言葉を発し、世界の鍵とする。言葉とは力だ。詠唱とは意味の有る言葉の羅列」
「ふ～ん、で、その鍵を持ってない私達はどうやって？」
「別の鍵を使えばいい。例えば精霊、もしくは魔方陣、術式」
「魔方陣？術式？」
「言葉は力と言ったな。言葉を口から発する代わりに意味の有る文字を書いたものだ。それぞれ文字を書くという事は同じだ。
二つの違いは、魔方陣は文字の端と端を繋げて円を作る。こうやって地面に円を書いたりしてな。この魔方陣に魔力を注げば魔力は円の中を巡り、注いだ魔力が尽きるまで効果は持続する。
術式は円を書かない。文字だけを書いたものだ。主に紙に文字を書くな。ちなみにこれを札と言う。こちらは円を描かないから文字の端から魔力がどんどん漏れる、持続するには魔力を注ぎ続けなければならない。そういった意味では術式は詠唱に似ているな」
「精霊は？」
「精霊魔術は精霊を召喚して火、風、水、土それぞれの属性を操る。召喚といっても目に見えないが今もこの周囲にいるぞ。呼び掛けると表現もできる」

「ふむ、今の説明でいうと私達の力は精霊魔術というのに似ているな」
「だが、精霊を使役するには呼び掛けなければならない。精霊を召喚するにも時間かかるしな。よってお前達は術式を使っていると思う。魔方陣ならあんな一瞬で消えることないしな」
「そんな、術式なんてどこに……」
「お前達はなぜ強大な魔力を持って生まれた？」
「えっと魔力を持ったものが転生したから」
「転生……魂……まさか――」
「そう、お前達の魂に術式はすでに組み込まれている。と考えている」

あるときは森の中を探索したり。

「このキノコは食べられるのか？」
「それは笑い茸。毒性はあまり強くないけれど毒茸だよ。そっちにあるのはさらに毒性が強い茸。あ、足元にあるのはかなり強い毒を持つ草だから気をつけて」
「毒ばかりじゃないか！」
「見分けがつけば薬草になるものや食用になる茸も沢山あるよ」
「見て見て、蛇捕まえたわよ」
「……これ蛇なのか？やけに短くて胴回りが太いが？」
「珍しい蛇なのかな？先生も見るのは初めてだって」
「食べられるのか？」
「とりあえず焼いてみるね……上手に焼けました～」
「まぁ、食べてみようか」
「「「モグモグ」」」
「「「……」」」
「「「ＵＭＡすぎる！」」」

あるときは知識を得るために勉強し。

「詠唱しないで魔術を使う事はなんで考えられてないの？」

「いい質問だ。その前に無詠唱だとどこが有利か、お前達はどう思う？」

「え、そりゃ詠唱無ければ早く魔術が使えるでしょ」

「うん、私も同じ意見だ」

「ふむ、正解の一つではある」

「他にもあるのか？」

「日常生活で、というか時間があるときに魔術を使うにはあまり意味の無い答えだがな」

「時間がないとき？」

「……戦っている時、か？」

「そう、詠唱している時は言葉を発する事に集中しているから大抵立ち止まっている。稀に動きながらでも詠唱している者もいるが、大体は動いていない。戦いの最中に立ち止まるのは致命的だ。詠唱するよりも早く相手に切りかかられたらどうしようもない。これが一つ。

そして魔術師同士の、いや詠唱の意味を知っている者同士の戦闘の場合、詠唱は今から何をするという事を公言しているに過ぎない」

「……確かにそうね」

「例えるなら『こちらは今から右手で殴る』と言っているものだな。その右手がどう動くかわからないが、右手で殴って来る事がわかっているから対処がしやすい。これがもう一つ」

「まだあるのか……」

「最後に口を封じられた場合だ」

「あー……なるほど」

「魔術師を捕らえる場合、こんな事を言われている。『動きを封じ

るよりもまず口を封じろ』喉を潰すか、猿ぐつわを噛ませるか、殴って詠唱を妨害するか……方法は色々あるが、詠唱をさせない事は同じだな」
「そう考えると詠唱って結構不便なものね」
「場合によるけれどな。まぁ、そんなわけで昔から詠唱破棄は考えられている」
「だが、実現していない」
「そう、これは単純に魔術文字がまだ解明されてない事が原因だな。だが、いつか解き明かされるだろう」

あるときは戦い方を教えたりした。

「はぁはぁはぁ……な、なんで勝てないの！」
「僕も長い間旅してきたしね。多少は戦闘の心得があるよ」
「はぁはぁ、それにしても、力を使える私達、はぁ、二人が相手だぞ」
「僕の方は先生のアドバイスもあるし――これが何をしてくるかわかる、という事だ」
「う～、ずるいずるい。それじゃいつになってもクーヤに勝てないじゃん」
「今はただ、火や氷を垂れ流すしかしていない。もうちょっと工夫してみるんだな。もしかしたら別の術式が見つかるかもしれない」
「どういった風にすればいい？」
「工夫しろと言ったばかりだろ……まぁ、アドバイスとして二つ言っておこう」
「「はい」」
「まず、魔術が直線的過ぎる。それじゃ避けてくれと言っているようなものだ。　もうちょっと相手の意表を付く軌道を想像するんだな」

「むぅ、想像はこちらで工夫しなければならない所だな」
「二つ目、火と氷しかないのは致命的だな。別のなにかが欲しいところだ」
「別の……他の属性が使えればということか？」
「確かに他の属性が使えるのはいいが……それよりもまず属性に合った別のものを探してみようか」
「別のもの……とは？」
「例えばアリス。氷を使っているが、本来それは水の魔術に属するものだ。温度を調整できれば水を、果ては水蒸気を扱えるかもしれない」
「面白そうだな」
「わ、私は？」
「火はそうだな……爆発とか使えるかもしれん……」
「爆発――カッコいいかも！」
「火の属性かどうか怪しい所だがね。あとは、もし可能なら熱を操れる事が出来るかもな」
「熱……って事は温度だけ？」
「いや、ここでいう熱は炎を出さないという事だ。つまり炎を出さずに焼くという事だな。」
「へ？そんな事できるの？」
「あくまで可能性の話だ。ラビもアリスもそれぞれ火と氷しか使える術式しかないかもしれない。その場合詠唱等を覚える事だな」
「先生は教えてくれないの？」
「詠唱や術式を覚えるよりも、その力がどこまで使えるか把握することが先だ」
「ふむ、確かにそうだな。もしかしたら他の術式があるかもしれない。その前に体力をもう少しつけたいな」
「とりあえず疲れたー、お腹空いたー。ご飯食べたい」
「はいはい、それじゃお昼にしようか」

こうして彼等は日々を過ごしていった。

「ちょ、ちょっと……こっちきたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「イノシシの群れが現れた。こちらへ向かってくる。
たたかう
アイテム
にげる
↓超にげる」
「随分余裕だな！」
「単なる現実逃避だよ。あはははっ」
「くっ、ラビ火の壁を！」
「無理無理！そんなんじゃあいつら止まらないって。むしろ氷で足止めを――」
「そんなの一瞬で砕ける！」
「逃げよう！」
「プギー！！」

身体を動かし、知識を得て、日々は過ぎていく。

「はいっ、先生。魔力ってなんですか？」
「……ほぉ、魔術ではなく魔力の方を聞くか」
「うん、魔力はオドとマナの二種類があるというのは聞いたが、そもそも魔力というのは何なんだろと二人で話したんだ」
「魔力は魔術を使うためのエネルギー、という事はこの前話したからそれよ詳しい事だな？」
「そうそう、私達はこの力の事をもっと詳しくならなきゃって思うの」
「いい心がけだ。だが難しい話になるぞ、すぐ理解しなくてもいい

から言葉は覚えておくように」
「「はい」」
「魔力を語る前にまず、分子と原子について知っておかなければならない。あそこに岩山があるだろ、あの山を魔力と例える」
「随分スケールが大きいな」
「大きい方がわかりやすいからな。それで、あの山は何で出来ている？」
「何って……山は山でしょう」
「……岩、か？」
「そう、その通り。あの山は岩や石で出来ている。それが分子という、物質を構成している小さな物質。ではラビ、この石は何で出来ている？」
「え、っと。石は石……じゃない。もっと小さい石……」
「物事を理解する為にとりあえず砕いて考えてみるといい」
「砕いて……石、砕く、破片……粒。そう！砂、砂で出来てる」
「その通り。この石は砂の粒が集まって出来ている。物質を構成している一番小さいモノ、それを原子という。魔力はこの砂の粒一つ一つの集まりだ」
「分子……原子……」
「だがこの砂の粒も様々な形がある。手に取ることが出来る粒から目に見えない粒まで、だが砂であることは変わらない。これ以上簡単な成分に分解できない万物の根源をなす構成要素。これを元素という。
　物質の根源を示す概念を元素といい、元素の実体が原子ということだ。わかりにくければ元素＝原子、呼び方が違うと考えてもまぁいい。
岩山を魔力と例えるならば、砂の粒は魔力の粒、これを魔素と呼ぶ。この魔素は物質の最小単位原子と結びつきやすく、原子に干渉して物質を集め魔術という現象を……大丈夫か？」
「大丈夫、問題ない。言葉は覚えてる……はず」

「なるほど……わからん」
「この話はまた今度にしよう」

時間は刻々と過ぎていき。

「あれ？なんでこんな事になってるの？」
「ありのまま、今起こってる事を話してみて」
「私は森の中を走ろうと思ったら、いつの間にか畑を耕していた」
「何を言ってるのか、わからないな」
「私も何をしてるのかわからない」
「いやいや、体力作りだよ」
「それでなぜ畑を耕しているんだ？森のなか走り回った方がいいじゃないか」
「体力作りに農作業は効率いいよ。筋力もつくし、種を蒔けば野菜が手に入る。先生から畑の作り方も教われるし、一石四鳥だよ」
「いっせきよんちょう？」
「本来は一石二鳥。石を一個投げて、鳥を二羽落とすということわざ。それを四に変えただけ」
「ありえんな、そんなこと」
「単なる例えだしね。言いたいことは一つの作業で四つの意味を持つって事」
「鳥かぁ、お肉食べたいな」
「お肉もいいけど野菜もね」
「とりにくー！」
「生肉はすぐ腐ってしまうからな。久々に私も食べたい」
「今度保存が利くように、燻製って方法を教えてくれるって」
「に～く～～！」

そして終わりが訪れた。

第四話　転生とは（後書き）

「……なんだ、その。これは遊びじゃないな」
「何を言っている。立派な遊びだぞ」
「どこが？これってどうみても――」
「白状するとだな」
「すると？」
「鬼ごっこやら川遊びやら木登りやら……色々あったんだが」
「うん……なぜだろう、どれもこれも先生の入れ知恵で――」
「書き出すときりが無いからな。そんなわけで。純粋な遊び風景は想像してもらう事にして、設定とか人物像とかを主においてみたらしい」
「説明、というかセリフがほとんどだしな」
「でも、もうちょっと遊んでる風景とかも……」
「よし、それじゃあ川で水浴びをしたことを話そう。あの時はお互い裸で――」
「わー、わー！わー！！」

第五話　二つの柱

第五話　二つの柱

「もう行っちゃうの……」
「……うん」

最初に会った日から既に数ヶ月がたった。魔吸石の調査が思いの他時間がかかり、予定を大幅に過ぎていた。
クーヤ達は幸いにとその大半の時間を共に過ごして来た。しかし、ついに別れの日が来た。

「もう会えないの？」
「大丈夫、また会えるよ」
「……そうか」

ずっと一緒だった。
食事をする時も、遊ぶ時も、学ぶ時も。
お互いに同じ年頃の子とこれほど遊ぶことは初めてであった。
これからもこんな時間が続くと思っていた。
別れなど、考えていなかった。

「……やだ」

ぼそり、とラビが呟く。
零れた言葉は小さく、だが、それを引き金に感情はどんどん膨らんでいった。

「やだ、やだ、やだやだやだ！」
「……ラビ」
「クーヤと別れるなんて嫌だ！もっと一緒に居たい、離れるなんてやだ！」
「こら、ラビ。クーヤを困らせるな」
「アリスはクーヤと一緒に居たくないの？二度と会えないかもしれないのに！どうしてそんなに普通で居られるの？会えないかもしれないのに、どうして、どうしてそんなに平気なの！」

溢れ出たモノは留まることを知らず。
ラビは呆然とした表情を沈痛なものに変え、別れを否定した。否定、しなければならなかった。
ラビの幼い精神は別れを受け入れられなかった。次にいつ会えるかもわからない恐怖に囚われた。離れ離れになることが、ただ怖かった。
だからこそ、別れる事をしかたがないものと諦めているアリアが許せなかった。
しかしそれは、アリスも同じだった。

「平気……だと……」

ぎりっ、と歯が軋む音が聞こえる。

「ふざけるな！平気なわけないだろう！！」

アリスの怒声が周囲に響く。
普段冷静なアリスが声を荒げる姿にラビは戸惑った。

「駄々をこねたら一緒に居られるのか！私だってクーヤと一緒に居たい！離れたくない！離れるなんて嫌だ！！私だって……私だ、っ

て……」

次第に声が萎んでいく。

アリスも別れる事は嫌だった。受け入れることなど出来なかった。だが、わがままを言った所でクーヤに迷惑がかかる事がわかっていた。無理を言ってクーヤに悲痛な顔をさせ、謝ってくる表情を見ることが許せなかった。

だからアリスは感情を殺した。

別れる事への悲しみを無視した、駄々をこねようとする身体を抑制した、何も考えないことで暴れようとする心を押しとどめた。

結局、ラビによって無意味な事となったけれども。

「わ、たし、だって……」

「アリス……」

ポロポロと雫が落ちる。

何度も腕で拭ってみるが、溢れ出た涙は次々と頬を濡らしていく。

彼女達は声を荒げて泣いた。

「ごめんね、二人とも」

悲しみに暮れる二人の体をそっと包み込んだ。背中に添えた手を数度あやすようにさすり、今度は強く抱いた。抱きしめられた二人は縋るようにクーヤの服をぎゅ、と握る。

「また……会えるよね……」

「うん、必ず」

「ぜ、ったい……だな」

「うん、絶対」

腕の中で泣き続ける少女達から見えないようさらに胸へ引き寄せる。クーヤの頬に一筋の涙が零れ落ちた。

「準備は出来たか？」
「もうちょっと待って！あと少しで終わるから」

宿屋で出発の支度をしていた父親から声がかかるが、クーヤは返事だけ返して目の前の作業に没頭している。
クーヤの手には文字が刻まれた魔吸石。
その鉱石を様々な角度から眺め、文字に偽りが無いかを先生と確認している。確認し終わった鉱石を装飾店で買ったネックレスに取り付け、全体の様子を確認した後作業は終わった。

「……できた。うん、もう大丈夫だよお父さん」
「そうか……ん？それは？」
「町で買ったネックレスと、お父さんに頼んで魔術使える人に書いてもらった魔吸石」

クーヤは魔術が使えない。
知識は先生のおかげで豊富であるが、魔力が絶対的に足りなかった。
詠唱する事も魔術文字を書く事も、多少の魔力を消費する。魔術を使う事に比べて消費する魔力は本当に微々たるものであるため、あまり世間にはしられていない。
誤解が無い様に言うのならば、クーヤの魔力でも魔術文字に魔力を込める程度には持っている。しかし、魔力を操る事ができないため、言葉に意味がある魔術文字も単なる落書きにしかならない。つまり　魔術の――魔力の使い方を知らないがために、魔術文字を刻

む方法がクーヤには出来なかった。

そこで先生からの提案があった。

魔力が使えないならば、魔術を使える人間に魔術文字を刻んでもらってみては？と。

それからというもの、クーヤは先生に魔術文字を教わった。

先生が教えてくれた文字を懸命に覚え、ある程度書けるようになるまでかなりの時間を要した。

言葉で文字を教える事は果てしないほど難しい。簡単な文字ならば、言葉で字を教えることもすぐに出来るかもしれない。しかし、繊細なそして複雑な魔術文字を言葉だけで伝えるというのはさらに困難であった。

魔術文字としてある程度の形になるまでになったのはつい最近の事だ。

「ああ、あの変な文字を刻んだものか。なんて書いてあるんだ？」

「安全祈願ってところかな」

「ふ～ん、それだけか？俺にはよくわからなかったが、あいつは驚いていたぞ」

「知らない文字だったからでしょ」

「……ま、いいか。それでその首輪、友達にあげるのか？」

「うん、そうだよ。昨日お別れ言っちゃったけど、なんとか出発前に出来上がったしね」

別れをしたばかりだが、ある程度魔術文字を理解し、魔術を使える者に刻んでもらった鉱石が手に入った。別れの贈り物として彼女達に渡す事を決めていた。

「すまんなクーヤ。親しい友達が出来たんだろ？毎日遅くなるまで出かけていたもんな」

「うん……でも死んだお母さんとの約束なんでしょ。世界一の武器を作るって」
「ああ、まだまだ遠そうだがな。今の所、満足のいく材料がそろっていない」
「ねぇ、お父さん」
「ん？なんだ？」
「子供二人、一緒に行けないかな……」

無理だと思いながらクーヤは父親に聞いて見る。クーヤの願いを悲痛な顔をしながら父親は言葉を返した。

「すまん、それは出来ない。問題は色々があるが、何よりも世界を回りながら生活するには二人で精一杯だ」

あえて他国の子供を他の国へ連れ出す問題や、その子供の親への心配は口に出さなかった。
父親は息子が賢い事を理解している。
中途半端な理由ではその問題を解決してしまうだろうと考えていた。だからこそ、経済的な理由を出しクーヤを説得した。

「そっか、そうだよね……ごめんね、変な事言って。さ、出発しよう」
「好きなんだな。その子達の事が」
「うん……」

親子が宿屋を後にする。
今回の鉱石が魔力に関するとても珍しいモノであったため、調査する時間がかなりかかった。
これほど長い間一つの町に滞在する事が珍しい彼等は、過ぎ去る町並を感慨深く見つめながら町の出口へと馬車を歩かせる。

やがて門が見えてきた。
そこで馬車が歩みを止めた。
「……えっ？」
「なんだ……あれ？」
門の先に二本の柱を見た瞬間、クーヤは馬車から飛び出し、門へと駆け出した。
「あ、おいクーヤ！」
町の外には火と氷の柱が高くそびえていた。

「ラビ！アリス！」
駆けつけた門の外には轟々と燃える炎の塊と、天へと向かう氷の塊があった。
周囲には何事かと集まる町民が離れて様子を伺っていた。それぞれの塊に人影が見えると、魔女か、と侮蔑の言葉をつぶやいていた。
「ラビ！アリス！聞こえたら返事して！」
「……クーヤ」
火柱の方から声が聞こえる。氷柱の方からの返事は聞こえない。
とりあえずクーヤはラビの方へと向かった。
「ラビ待ってて、今なんとかするから」

「来ないで！」

思わぬラビの拒絶に、クーヤは足を止めた。

「……来ないで」

消え入るようなか細い声。あまりに弱々しい声の拒絶に、クーヤは胸が締め付けられた。頭の中には何故、という疑問が埋め尽くす。

「私は……クーヤを傷つけたくない……」

そこでふと、今の状況を考えてみた。先生からの質問が相次ぐ。

何故彼女達かここにいるのか。

――多分、最後の別れを言いに来たのだろう。

何故彼女達の力が暴走したのだろうか。

――彼女達の力は感情に連結している所がある。感情が爆発しなければ暴走が起きる所を見た事がない。

何故感情が爆発したのだろうか。

――彼女達がここにいて、辺りに居る人々の表情を見ればわかる。彼女達は見つかり、そして傷つけられたのだろう。

何故周囲に被害がないのだろうか。

――周囲を見渡せば、人はおろか建物に被害が出た様子はなかった。暴走しているにも関わらず、その力を多少なりともコントロールしている所に彼女達の成長がうかがえた。

ではこれからお前がすべき事は――。

結論が出たところで、焦っていた心がゆっくりと落ち着いていった。
ため息を一つついて、クーヤは一歩一歩ラビの方へと足を進めた。
「こ、来ないで」
「馬鹿だなぁ」
近寄るほどに感じられる熱量。じりじりと肌が焼ける感覚がした。
右手を前に伸ばし、躊躇することなく炎の中へと手を入れる。右手が焼かれる嫌な感触に思わず顔をしかめた。
「ぐっ」
「だ、だめ！」
熱さと痛み。
右手から伝わる激痛を押さえ込み、クーヤはラビの頭の位置を探った。
ようやく見つけた頭の上に手のひらを置いて、ゆっくりと撫でた。
「ク、クーヤ……？」
ラビの戸惑った様子が伺える。クーヤは頭を撫で続けた。
「本当に馬鹿だなぁ、二人とも。嫌な言葉をかけられたんだろ？それなのに周囲を気遣って……それで自分を傷つけるなんて」
「は、早く……そこから離れて！」
「いいから！！」
クーヤの力が篭った声にビクリと体を揺らす。

「よく……力を抑えたね」
「だ、って……クーヤとの約、束……」
「そっか、約束守ってくれたんだ」

頭に乗せた手はもう痛みしか感じない。それでも頭を撫でる事は止めなかった。

「頑張ったね」

微笑むと、撫でていた手を止め、炎の中へと身を沈めていった。ラビの驚いた顔が間近に迫る。その体を両腕できつく抱きとめた。
彼女は目の前の出来事が理解できず、呆然としたままクーヤにされるがまま抱きしめられていた。

「つらかったでしょ」

頭の中を混乱が埋め尽くした彼女は現状を忘れ、その言葉の意味だけを反芻した。そして一つ頷く。

「……うん」
「苦しかったでしょ」
「……うん」
「怖かったでしょ」
「――うん」

「もう、大丈夫だよ」

瞬間、荒々しく燃えていた炎が霧散した。

「う、うわあああああああああああああ」
炎が消え去った中心には、クーヤにしがみつく様に泣き崩れるラビの姿があった。

「ひぅ、っぐ。――う、うっ。ふぇ……うっ」
「さてと――」
大分落ち着いてきたラビを体から離し、左手でラビの頭をくしゃと撫でた。いまだ涙が伝う顔を見ると心が痛んだが、今はそうも言っていられない。

「ごめんね、アリスを助けないと」
「うっく、ふぇ、ぐ……う、ん」
隣にそびえる氷柱に体を向けた。
途端、カクン、とラビの膝が落ちる。

「……あ、れ？」
体中がガクガクと痙攣を起こした。立ち続けることが出来ず、そのまま地面にへたり込む。何度も立とうと試みるが、力が入らず、一歩も動けなくなってしまった。
一目見てこの症状の原因に気づいたクーヤは、ああ、と頷いた。いまだ懸命に立ち上がろうとするラビに言葉をかける。

「魔力切れだね。そこで待ってて」
「まっ――クーヤ！！」

ずるずると身体を引きずる。
身体が悲鳴を上げている。特に右腕の損傷が激しいが、身体の心配よりもアリスの方が気にかかっていた。
全身の痛みに耐え、クーヤはアリスの前に立つ。

「アリス！」
「……」
「アリス聞こえるか！」

分厚い氷に囲まれたアリスからの返答はない。
まさかと思い、必死に氷の壁を叩きながら声をかけ続けた。

「アリス！返事をして！」
「……クー、ヤか？」
「アリス、よかった。今助けるからね！」
「……」

一先ず胸を撫で下ろしたが、再びアリスからの返事が無くなる。
早くなんとかしないと、と逸る気持ちを抑えて考えるが何一つ解決策は浮かばなかった。
クーヤとアリスの間を氷の壁が拒む。
アリスに触れる事もできず、厚い氷は叩いてもヒビさえ入らなかった。氷から漏れる冷気は骨身に染み込むように体温を奪っていく。
クーヤの口から白い息が吐き出される。

「……もういい」
「――！アリス頑張って！なんとか、なんとかするから」
「……私はもう疲れた」

「えっ――」
「……ほっといてくれ……」
どうしようもない。
直接触れる事もできない。言葉をかけても届いていない。どうする事もできない。傷ついている友人に何もする事が出来ない自分に、唇をきつく噛んだ。
先生から一つ声がかかった。
その案にクーヤは頷いた後、氷の壁に寄りかかりその場に座り込んだ。
こんな氷、溶かしてしまえばいい。
ただ時間だけが刻々と過ぎていった。
冷気が身体を蝕む。
ガチガチを歯が勝手にぶつかり合う。先生の案は極単純。彼女の隣にただいるだけ。傍にいて、一緒に時間を過ごすだけ。
「……なにをしている」
「ん？どうしようもないしね」
アリスからの反応があった。
あせるなよ、と先生からの忠告が聞こえた。ただ平静に、ただ平凡に、明るくもなく、かといって暗くもない感情で淡々と話しかける。
「ただこうやって、ここに居るだけ」

もしかしたら体温で溶けるかもよ？とおどけて話しかけようとして止めた。ただ平静に、ただ平凡に。

「……そうか」
「うん」
「……」
「……」
「……なぁ」
「ん、なに？」
「魔女は……どこに行っても迫害されてるんだろうな」
「どうだろうね。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない」
「そうか……」

抑揚のない返事が返ってくる。
そしてまた沈黙が続いた。
辺りに漂う冷気がじくじくと骨に染み込んでくる。
上手く合わない歯同士で言葉を噛んでしまわぬよう、ゆっくりと話し続けた。

「……なぁ」
「ん？」
「死ねば楽になれるのだろうか」
「さぁ。始まるかもしれないし、終わるかもしれない。死んだ後なんてわからないよ」
「……そうか」

ほんの少し、冷気が緩やかになった。

「……終わるのは嫌、だな」

「そうだねぇ。まだまだ遊びたいよね」
「ああ……」

アリスが声を出すたびに、骨に突き刺さるような冷たさが穏やかになっていった。

「また川で遊びたいな」
「そうだね。森の中で遊んだりもしたいね」

やがて氷柱から漏れ出す冷気がなくなった。

「ああ、森の中でも遊びたいな」
「森で見つけた木の実は美味しかったね。アリスは何が好きなの？」
「私は――」

背中に感じていた硬い感触が消える。
クーヤはゆっくりと振り返り、目の前のアリスを見つめた。

「私は、クーヤの作ったサンドイッチが一番好きだ」
「そっか」

ギシギシと強張る左手を動かし、手のひらをアリスの頭に乗せながら微笑んだ。

「それじゃ今度作らないとね」
「楽しみに……し、て……る」

言葉を途中にアリスがゆっくりと前に倒れる。倒れてくる体を抱きとめ、お休みアリス、と囁いた。

気を失ったアリスをラビの元まで連れてきた。脱力したアリスの体を支え、無事を確認するとラビはクーヤへと顔を向ける。

「クーヤ……ありが――」

「クーヤ！！」

怒鳴り声がラビの言葉を遮る。怒鳴り声のした方を振り返った。

「……お父さん」

「なにを……なにをやっているんだお前は！」

息子の状態に驚愕した。

皮膚全体が焼けただれて、赤々とした真皮の肉が覗く。むくみがひどく、所々赤と茶色のまだら模様となった皮膚となっていた。

手のひらには大きな水泡が出来上がり、今にも破裂しそうに膨らんでいた。

「は、早く治療を！」

息子のあんまりの惨状に、クーヤを抱きかかえこの場を去ろうとする。

「あ……クーヤ――」

「近寄るな！魔女が！！」

ラビが手を差し出すと、父親は目の前の相手を殺すような視線で睨み、怒鳴りつけた。

「クーヤをこんなに傷つけて、なんの恨みがある！」

「待って――」
「ご、ごめんなさい」
「お前らのようなモノがいるから――」
「待って！お父さん！」

クーヤの悲痛な叫びが辺りに響く。

「お前もお前だ！何故こんなのと一緒にいた！」
「一緒に遊んでくれた友達をそんな風に言わないで」
「あれほど危険だと言っただろ！」
「どこに危険があるの？建物だって人だって傷ついてないよ」
「お前がそんなになってる……じゃないか」
「これは僕が進んで負った傷だよ。それに町の人が彼女達を傷つけなければこんな事にならなかった……」
「しかし――！」
「お願いだよ、お父さん」

ぜいぜいと荒い呼吸を繰り返し、クーヤは父親に懇願した。

「これ以上、僕の友達を傷つけない……で」

そこでクーヤの意識は途切れた。

「クーヤ！！」

ラビが叫んだ。
父親の手前近寄る事は出来ず、アリスを抱えたままクーヤに声をかけた。
そんな事しか出来ない自分を恨み、血が出るほどに唇を噛み締める。

「……息子の願いだ、先程怒鳴ったのは、謝ろう」
「……いえ」
「これからすぐに治療に向かわせてもらう、いいか？」
「クーヤを……よろしくお願いします」
深々とお辞儀をし、後の事を父親に託した。

「お願いだクルツ！クーヤを早く治してくれ！」
場所はこの町にある教会。クーヤはそこに運ばれた。
鉱石を調べる為に父親が知り合った魔術師。牧師を生業とするクルツは施せる限りの治療を試みた。
耳、鼻、頬、特に右腕の損傷が酷い。症状が重い部分から優先して治癒魔術をかけ、傷の再生を行った。傷が緩慢な動作で治っていく様子を、父親が傍で見守っている。しかし、あまりに傷を負いすぎていた。
尽きた魔力に変わり、普通の治療も行う。傷口に軟膏を塗り、包帯を巻いていく。出来ることは全てやった。
「……残念ながら――ここで出来る治療はこれで精一杯です……あとはこの子の生命力に頼るしか……」
「そんな……」
いまや全身に包帯を巻かれた状態で寝かされていた。
時折漏れるうめき声。
痛みに耐えるような苦悶の表情。ぴくっと跳ねるように痙攣する身体。ぜいぜいと浅い呼吸を繰り返すクーヤ。

今彼は、死と戦っていた。

（痛い……熱い……寒い……痛い、いたい、イタイ）
（満身創痍だな）
（せ……ん、せい）
（だが、よく頑張った）
（僕は彼女達を助けられたのかな……）
（ああ……）

ふっ、と満足気に微笑んだ。

（そっか。よかった）
（だが、お前は傷だらけだぞ）
（ねぇ……先生……）
（……なんだ？）
（僕はこれから――死んじゃうのかな）
（……）

先生が沈黙する。その無言だけで自分の状態を理解する。

（そうだよ……ね。無茶し過ぎたし、ね）
（……生きたい……か？）
（できる……の？）
（あまり進められたものではないが――）
（良いよ、教えて）
（……俺の魔力を与える。その魔力で生命力を補う）
（――へぇ。先生にも魔力あったんだ）
（ラビやアリスに比べてちっぽけなモノだがな）
（うん。生きられるなら、そうしたい）
（……だが、問題もある）

（もん、だい？）
（……俺とクーヤが合わさる。その時人格がどちらになるかわからない）
（……）
（クーヤがクーヤで無くなるかもしれない。それでも望むか？）
（……いいよ）
（後悔……しないか？）

悩むこと無く、クーヤは告げた。

（ここで死んだら、ラビやアリスを傷つけちゃう。そんなことは僕自身が許さない！）
（……お前の意思はしかと受け取った――）

ゆっくりと闇が迫る。だがそれを怖いと思わなかった。
闇が全身を囲い、徐々に侵食していくのを感じる。闇がクーヤをゆっくりと喰らって行く。目の前に広がるのは夜の空。空っぽのソラ。そこに光は無い。
クーヤの現実が壊れる。

「クーヤ！目を覚ましたか！」
「……父さん」
「よかった……本当によかった」
「奇跡だ……」

目を開けたクーヤは目の前に居る父親とクルツが居た。
安堵の表情をした父親、驚いた顔のクルツをそれぞれ見た後、周囲を見渡し現状を把握する。

（――教会。――布団の上。――巻かれた包帯）

次に自分の状態を確認すると、あることに気づいた。
身体の中に魔力の存在を感じた。ああ、と納得した後、その魔力を血管のように全身に張り巡らせる。
息を吸い、息を吐く。心臓から頚部へ、その先の頭部へ。
また息を吸い、そして息を吐く。心臓から両腕へ、肩を通り、肘を通り、そして指先へ。
吸い、吐く。魔力が臓器を満たし、その下の下肢へ。
指先にピリピリとした痛みを感じた。魔力が全身に巡るのを感じとったクーヤはむくりと体を起こす。
全身に刺すような激痛に顔をしかめた。

「クーヤ無茶をするな！」
「ク、クルツさん……お願いがあります……」
「なんですか？」

痛む身体を無理に押さえ込み、クーヤは自分の荷物を指差した。

「あの荷物の中にあるネックレスを……彼女達に渡して下さい」
「……あの魔女達にですか？」
「――はい」
「……しかと、承りました」
「あり、がとう……ございます」

微笑みを浮かべ、再びクーヤは気を失った。

「……ここでの治療はこれが限界です。治療に適した国へ向かうことが良いかと」

こうして親子達はエトワールを後にした。
クーヤが先生に侵食されたのか、それとも先生の知識だけをクーヤが取り込んだのか……真実はクーヤ自身にしかわからない。

第五話　二つの柱（後書き）

「なんだか泣いてばかりだったな」
「泣き回だな」
「これでやっと最初の所が終わったわけね」
「一つの章が終わったな」
「ってことは次から新しい章が始まるわけか」
「残念ながら……次は間幕のようなものが入る」
「私主人公！ＹＨＡ！」
「ラビ視点か……私は？」
「ないな」
「呪ってやる」

いつまでもくよくよ忘れずに思いわずらっていても、幸福への道は開けない。どうにもならないことは忘却して、先へ進むことだ。

幕間　ラビの人生

幕間　ラビの人生

この町、いや世界での魔女の扱いはひどいものだ。
魔女と発覚した場合、すぐさま死刑にかけられるか、幼い子供であった場合地下室や離れた場所で人知れず育てられるか、奴隷としてその一生を過ごすか。
虐待、迫害、差別。
近くにいれば殺される。言葉を交わせば呪われる。世間の認識として魔女とは悪である。
世界は、魔女を人と認めていなかった。

そんな世界で、私は魔女として生まれた。

私が生まれた場所はエトワールという小さな国の城下町。その一角の多少裕福な家庭で、双子の姉妹として生まれた。
私の名前はラビ。もう一人をアリスと名づけられた。

いい家庭……だったと思う。多分。
特に飢える事も無く、両親が私達に笑顔を向けてくれた時期もあ

った。傷を負ったら心配してくれて、怖い思いをしたら傍に居て一緒に寝てくれたと思う。
そんな空間で私は活発に育ち、よく無茶をする私とは対照的にアリスは少し大人びた感じに育った。

つまり幸せという時期が私達にもあったということ。
その時間が短すぎて、それ以外の時間が長すぎて。今は過去を思い出すだけでも胸の辺りがむかついてくる。

私達の力が発覚したのは、5歳を過ぎた頃。
最初に私、次にアリス。
その日私は癇癪を起こした。原因はなんだったかよく覚えてない。多分、些細な事。
怒りに任せる行動と呼応するように発現した炎。使われた力は家具の一部を焼いて消えた。
私は何がなんだかわからなかった。
そして、恐怖に彩られる両親の顔。

「そんな……私の子が……魔女――」

魔女という言葉をそこで初めて聞いた。
驚愕、悲しみ、恐れ。様々な表情がごちゃ混ぜになった母に私は心配して手を伸ばす。

「お母さん――」
「いや！近寄らないで！」

拒絶の言葉。
母の恐怖に染まった顔が悲しくて、父の化物でも見るような顔が

苦しくて、それでも私を否定して欲しくなくて、受け入れて欲しくて、私は手を伸ばした。

そして私は父親に頬を殴られた。
離れる私と母親の距離。
悲しみと痛みで私は泣いた。

間をおかず、アリスの力が発現した。アリスの力は氷だった。いきなり出現した氷は部屋の壁に穴を開け、すぐに崩れた。
その時からこの家から笑顔が消えた。

それから私達の日常は徐々に壊れていった。
父は事あるごとに私達暴力を振るうようになった。殴られた顔は膨れ上がり、蹴られたお腹は痣ができた。私が暴力を振るわれたらアリスが助けに入ってくれた。そしてアリスも同じように殴られる。アリスが殴られたら私が助けに入り、同じように殴られる。その繰り返し。
母は何も言わない。いや、存在しないものとして扱われた。
話しかけても返事は返ってこなかった。どんなに気を惹こうとしても無視された。私達の存在は彼女にとって無かった事にされていた。
町にも私達が魔女だという噂は広まっていた。
町に出れば大人達が私達の方を見てヒソヒソと話していた。その視線はまるで化物でも見るかのよう。話しかければ侮蔑の言葉と共に散っていった。
一緒に遊んだ事のある子達からは石を投げられた。つい最近まで親しかった子達のその行動に、私の心は重いトゲが刺さったように痛かった。
私達に対する最近までの反応の違いに耐え切れず、家に逃げ帰っ

た。
町に出るなと怒鳴られ、私達の部屋に監禁された。
そんな生活が半年ほど続き、ついに私達は家から追い出された。
行き先は城下町から離れた場所にあるかなり年季の入った廃屋だった。
なんでもこの町で昔、魔女として生まれた子がここで暮らしたそうな。古ぼけた小屋に私達を押し込み、父は去っていった。
周りに誰も居なくなった事で、ようやく私達は平穏を手に入れた。
後に思えば何故殺されなかったのかと思う。もしくは奴隷商人に売られなかったのかとも。家がそれなりに裕福だったからか、最後の良心か。二人で話し合っても結局わからなかった。
それから二人だけの生活が長く続いた。
人が住まなくなってからかなりの時間がたった家は、所々傷み今にも崩れそうだった。隙間風がさらされながら、私達は寄り添って過ごした。雨の日は大変だ。屋根からの雨漏りがいたるところで落ちてきた。濡れない所が殆どないので、雨が降る日は濡れながら眠りについた。
数日に一度は奴隷と思わしき人から食料が届いた。その食料も材料のクズや腐ってしまったものが多かったけれど、仕方なくそれを食べて飢えをしのいだ。森の中に入って食べ物を探そう、という私に意見に、よく知りもしない森の中へ入るのは危険だという意見が返ってきた。その言葉に私も頷き、その日もお腹を空かせて眠りについた。
幸い川が近くに流れていたので、飢えは川の水を飲んでごまかしたりもした。
そんな感じで、なんとか私達は生きながらえていた。

そんな日々が長い間続いた。
数年の時が経ち、私達は一人の男の子と出会った。

「こんにちは」

その日はいつも通りする事が無く、二人で川の流れを眺めていた時だった。
町の人がここに来るはずが無い。せいぜい来るのは食料という名の残飯を持ってくる奴隷の人。

「――誰？」

警戒しながら私は目の前の男の子に聞いた。アリスも同じように警戒している。

「初めまして。僕の名前はクーヤって言います。君達が魔女と呼ばれているのかな？」

目の前のクーヤと名乗った男の子は、挨拶をしながら近づいて来る。
私は恐怖を感じた。
またひどい事される！そう感じた。嫌だ、あんな思いはもうしたくない。

「近寄るな！」

叫びと共に炎が私と彼の間を遮る。
私は力を使って男の子を牽制した。
アリスも同じように力を使い、男の子を近寄らせまいとする。
「……わかった。これ以上近寄らないよ」
私達の圧力に屈して、男の子が諦める。
よかった、これでまた平穏な日を送られる。相手を睨みながら私は胸を撫で下ろした。
だから、その後で発せられた言葉に私は目を丸くした。
「……でもその前に君達の名前、教えてくれない？」
「――え？」
誰も進んで傷つこうとは思わない、誰も進んで死のうとは思わない。
いままで魔女の力を目の前にした人はみんな逃げていった。だから目の前の男の子もすぐに逃げ出すだろうと思っていた。
「わ、私達が教える事などなにも……ない」
アリスも吃驚しているのに返事を返したのはすごいと思う。
気が動転した私はアリスの言葉に同意し、首を縦に振るだけだった。それでも目の前の相手は私達の力に怯えること無く話し続けた。その内容がさらに私達を動揺させる。
「お前達は人語を理解しない獣か？礼儀を知らない魔女か？それとも――礼儀を重んじる人間か？」
‘人間’という単語に私達はビクッと体を揺らす。その言い方は

卑怯だと思う。このまま彼を無視すれば私達は言葉の通じない獣。それ以外の言葉で返したら魔女ということを自分達で認める事になる。

私は人間でいたいと思っていた。魔女なんて呼ばれたくなかった。でも自分から名乗るなんて勇気は持ってなかった。

そんな私達の気持ちを察したのか、男の子は再び名乗る。

「初めまして、僕の名前はクーヤ。君達は？」

「わ、私はアリスという」

「私はラビ……です」

あまりに混乱した頭はついつい敬語で返事を返していた。

私達の名前を聞けて満足したのか、男の子は背を向けて歩き出した。

私の拒絶の言葉は、軽くあしらわれて彼は去っていった。

その日からその男の子は毎日訪ねてきた。

私達がどんなに辛辣な言葉を投げかけようとも、呪われた力を使って追い払おうとも彼は笑って受け流す。

それが気に入らない。

今までの人は魔女と聞いては避けていき、力を使えば恐れられた。何故この男の子は逃げていかないのだろう。

気に入らない、気に入らない。

さっさとこの場を去って、二度と来ないで欲しい。そうすれば再び二人だけの恐怖も無い、怒りもない……何も無い平穏な日々がやってくるのに。

ある日男の子が食べ物を持ってきた。たかが食べ物で私達が気を

許すとでも思っているのだろうか。
でもあれは卑怯。うん、卑怯。
最初は私も毒が入ってるんじゃないかと疑った。
でもその日はとてもお腹が空いていて。ここ数日まともな……といっても食べ物が届けられても所詮野菜のクズとかの残飯だけれど、食事をしていなかったのだ。
生物の本能を刺激する香りに私達は近づいていった。
後でその食べ物はサンドイッチと言われるものと知った。そのサンドイッチを目の前に私達は戸惑う。手をつけていいのか、手をつけたら死が待っているのか。
その日は本当にお腹が空いていた。
だから私は頭で拒否をしつつも、体は目の前の食べ物に手を伸ばす。
口に引き寄せられた食べ物を、その寸前で何度か躊躇い、覚悟を決めて口に含む。

「――おいしい」

あまりの美味しさに私は吃驚した。
口の中に目一杯に広がる甘い味。あまりの美味しさに次々と手が伸びる。
アリスもそんな私の様子につられて手をつけ始めた。

本当に久々のまともな食事に私達は喜び、そしてすぐに無くなってしまったバスケットの中身を残念に思った。
あまりの美味しさに警戒が薄れてたと思う。男の子が近づいてきた時にその事を思い出し、近づいて来る距離以上に私達は男の子との距離をとる。
そんな私達の行動にも男の子は笑って許した。

それから数日、昼から夕方の間に男の子は食べ物を届けにやってきた。
気を許してはならない、と思いつつも食べ物の誘惑には勝てなかった。食事をするときはお互いの距離をとる。彼は離れた場所で私達と食事をするだけ。危害を加えてくるわけでもなく、ただ私達に食べ物を届けに来るだけ。一体何を企んでいるのか。

ある日私達は男の子からあるものを受け取った。
綺麗な色に染まった赤と青の服だ。
私達が身に纏っている薄汚れた雑巾のようなものとは比べようもない。私はその赤い服に目を奪われた。

何故男の子は私達なんかに構うのだろう。
頭の中にそんな疑問が浮かぶ。
去ろうとする背中に声をかけたけれど、上手く言葉が見つからず何も聞く事ができなかった。
私の代わりにアリスが尋ねた言葉に、思いもよらない返事が返ってきた。

「君達が僕と同じと思ったから友達になりたいんだ」

私達と同じ……それは同じような力があるということ？それともそれ以外のなにか？
疑問が頭の中で渦巻いている私達を尻目に、彼は帰っていった。
その後私達は話し合う。

「彼の言った事……どう思う？」
「確か……クーヤといったな。私達と同じというのは、同じような

力があるという事か」
「でも目の前で力使った事無いわよ、町でも普通に生活してるっぽいし」
「隠してるのかも……な。本当の所はどうか知らないが」

結局よくわからなかった。

「……ところでこれ、どうする？」
「どうするって……どうしよう……」

私達の手にはそれぞれ赤と青の服が握られている。一体どうしよう。

目の前には色鮮やかな赤。

私が今着ている汚い布とはまるで違う。他に着る物が無いからしかたなく身に纏ってるだけ。色褪せ、汚れ、元の色がどんなだったのか思い出せない。所々破けて、変な臭いもする。そんなボロキレ。

こんなのとっとと脱いで赤い服を着てみたい。新しい服を着る自分の姿を想像して私の心が躍った。

「き、着るしかないんじゃない？」
「しかし、どんな意図があるか……」
「服を着るのに意図なんてあるの？」

そう言うとアリスも押し黙る。アリスも着たくないわけじゃない。ただ無償で与えられた物を受け入れられないだけ。

それは私もそう。魔女と知られてから私達に手を差し伸べてくれた人はいない。一体何を考えているのか……彼に対する疑いはより一層高くなる。でもそれはそれ、これはこれ。

「ええい、ぐちゃぐちゃ考えてないでこれは着るの！絶対着る、こ

れは決定事項！いいわね」

結局強引に私が押し切った。

思えば男の子から初めてのプレゼント。そう思うとすごくくすぐったい感じがする。

次の日、私は赤い服を、アリスは青い服を着てみた。やっぱり新しい服は嬉しい。着た心地が全然違う。汚れてもいないし、変な臭いもしない。服でこんなに嬉しくなるとは思ってもなかった。

同じような時間に男の子……クーヤはやってきた。

男の子からの初めての贈り物。意識しだすと途端、恥ずかしくなる。全身がくすぐったくなり、もじもじと体を揺らす。そうでもしないとこの場から逃げ出しそうだった。全速力で。

「うん……うん。よく似合ってるね。可愛いよ」

これは酷い追い討ちだ。

それはもう、酷いとしか言いようがない。

男の子に可愛いなんて言われたことはない。魔女と知られてからは誰からも聞かれなくなった。

よくわからない感情に自分でも顔が赤くなってるのがわかる。全身の血が巡る。

「っ！うるさい！もう喋るなぁ！」

あまりの気恥ずかしさに私は炎を出して視界からクーヤを消す。

ただ、この時あまりに気が動転していて力を入れすぎた。目の前に広がる炎と同時に、私の周囲にも炎が現れ、体を燃やす。

アリスによって炎は鎮火したが、服が少し焦げてしまった。せっかく新しい服を貰えたのにすぐに傷つけてしまって悲しくなる。
目の前で贈り物を焦がしてしまったのに、クーヤは服よりも私の心配をしてくれた。その事が少し、嬉しかった。

その後だった、クーヤの様子が変わったのは。
アリスとのやり取りの中で出た先生という言葉。その後いきなりクーヤの口調が変わる。一体何が起きたのかわからない。
さっきまでの男の子の喋り方じゃない。大人の、とても落ち着いた感じの話し方。わけがわからない。
その人からの質問に受け答えて、あとはただ黙って話しを聞いた。

その人の話はどれも突拍子もなくて、難しい所もあって、受け入れる事が出来ないものだった。
話しは一旦区切られ、食事を取ろうという事になった。いつも美味しい食事が今日はいまいち味がしない。頭の中でぐちゃぐちゃと疑問が混ざってるからだ。さっきの話しも、食事の前に言われたクーヤの言葉も。

「――僕と同じ転生体という存在」

転生体って何？転生って何？私達の力が魔術？そんなことあるもんか。

食後にクーヤから説明された転生についての話しは、とても信じる事の出来ない内容だった。
クーヤも私達も転生体？私達には魔力を持ったモノが転生した？そんな事言われても信じる方がどうかしてる。でもさらにありえない出来事に、そんな疑問もどこかに消し飛んだ。

あんまりに信じられない事実がわかった。
私達の呪われた力が魔術かもしれないという事実。
渡された魔吸石という鉱石を持ったら私達の力が発動しなかった。
それを見て彼は私達に声をかける。

「お前達は魔女なんかじゃない。れっきとした人間だ」

違う、そんな事はない。
私達は人間でいたいと思ってる。でも今までの扱い、町から離れたここに居る事実。それは私達が魔女だという事。
そうだ、この石に何か細工があったに違いない。でも力が使えなかったのも本当。もしかしたらクーヤはこの力の事を知ってる？でもそれを魔力だと言う。
認めたくない、認めたくない。魔女という事も、人間という事も。認めてしまったら私はこの怒りをどこにぶつければいいんだろう。

「この世界を許して欲しい……とまでは言わない。ただ、呪われた存在と自分を蔑む事はしないで欲しい」

うるさいうるさい。
これ以上私達を惑わさないで。わかった、認める。私達は魔女。呪われた力があるからみんなに怖がる。恐ろしい力があるから嫌われる。私達が魔女だから。呪われた力があるから。

「その力は怖くないよ。ただちょっと上手く使えてないだけだ」

……どうしてそんな言葉をかけるの？

閉じた目から涙がぽろぽろと落ちる。

私達は泣いた。
魔女と罵られ続けた日々。誰も彼も、親でさえも人として扱ってはくれない日常。
そんな私達達に目の前の男の子は笑いかける。
こんな風に普通に話しかけてくる存在を私達は知らない。
それは私達が遥か昔に失くしてしまった暖かさ。笑いかけてくれた、心配してくれた、受け入れてくれた、話しかけてくれた、人として接してくれた。
だから私達は泣き続けた。
その暖かさが本当に嬉しかったから。

それからはずっと一緒だった。
遊ぶ時も、昼寝をするときも。川で水遊びをしたり、魚を追いかけたり。森の中で木登りをしたり、生っていた木の実を一緒に食べたり。野山を駆け回っていたら獣に見つかり追いかけられたりもした。

クーヤに転生してきた存在を同じように先生と呼び色々教わった。
先生は何でも知ってる。
雨漏りや隙間風の多い家の補修を教わり、不細工な出来上がりだったけれども、安心して寝むれる場所となった。
森の中で食べられるもの、薬になるものとかも教えてもらった。
他にも狩りの仕方、畑の作り方を教えてもらい生活での心配事が減った。
戦い方、特に魔術の事については特に詳しく学んだ。力をどう使っていけばいいかについて、魔術とはどのようなものかについて。
体の動かし方から魔力の使い方まで多くの事を教わった。

その中で一つ、先生と約束したことがある。

「世界を憎んでもいい、人を許さなくてもいい……ただ魔術を使ってそいつら傷つける事は止めておくんだ」
「……どうして？私達はこの力を使って報復してもいいじゃない」
「力を使って暴れても、お前達の立場をさらに悪くするだけだ」
「……」
「――約束、できるかな？」
「――うん」

本当はあいつらに復讐したい気持ちはある。でも私達が殺されないでいたのは人を傷つけてなかったからかもしれない。もし復讐を行ったら、今度こそ私達は処刑されてしまう、と先生は言っていた。しぶしぶながら私達は頷く。

思えば先生が教えてくれる事は全て、私達が大人に頼らなくても生きていける術を教えてくれていた。体の使い方、力の使い方、狩りの仕方、薬草として使える草の知識、家の補修や畑の作り方。そして人との接し方。私達にとって重要な生き方を教えてくれたんだ。

クーヤと一緒にいることで暖かさを思い出し、先生から生きる為の知恵を学ぶ。私達にとって彼は感謝してもしきれない大切な人。

一緒にいて楽しかった、色々学べて楽しかった。本当に久しぶりに心の底から笑った。

こんな時間がずっと、ずっと続けばいい。そう思った。

だから別れを知った時の絶望感は身が裂けるような思いだった。

だだをこねてクーヤを困らせてしまった。アリスと一緒に大泣きした。再開を約束して別れを告げた。抱きついたクーヤの体がとても温かかった。

「最後の見送りに行こう！」

別れたその日の晩、私はアリスに提案する。

「……止めておいた方が良いと思うぞ」

本当は行きたいくせに。そりゃ私だってあの町に戻るのは怖い。でも町から離れてるここじゃクーヤに会えないし、道端じゃ馬車の速さに追いつけない。アリスと色々話し合った結果、見つからないように町の入り口まで近づく事になった。

結局、最悪な事になった。

見つからないように細心の注意を払って近づいて、気づかれないよう木陰で身を潜めていたのに見つかってしまった。

私達の姿を見つけたわけじゃない。だって見つけたのは門番じゃなく魔術師と思われる人。

フードを被ったその人は門の内側から慌てて飛び出してきて、私達を見つけた。多分、私達の大きすぎる魔力が近くに来たので何事かと思ったんだろう。

「魔女め！何しに来た！」

「呪われた存在が、とっとと去れ」

違う、私達は危害を加えに来たんじゃない。ただお別れを言いに来ただけ。だから――。

「嫌だわ魔女よ、早く逃げましょう」

「くそ、嫌なものを見た。胸糞が悪い」

だから――。そんな目で私を見るな！！

そして私達の力は今までにない暴走をした。

憎い憎い憎い憎い。

煩い。悲鳴を上げて逃げ出す奴等も、私に刃を向ける兵達も。死んで喋らなくなってしまえばいい。黙らないなら私が静かにしてやっても――。

暴れ狂う感情の中によぎるクーヤとの約束。

だめ、約束は破りたくない。でも憎い。こんな奴等どうでもいいけれどクーヤに嫌われたくない。それでも憎い。煩い黙れ！お前達も私の憎悪も。約束は絶対に破らない！

葛藤する私の心。

町の人を傷つける事もなく、かといって炎を鎮める事もなく。ただ現状維持が続いた。

結局、最後まで私達を救ってくれたのはクーヤだった。

炎の中にいた私の頭を撫でてくれた事が嬉しかった。でもクーヤの苦しそうな声に胸が痛んだ。

約束を守った事を褒めてくれて嬉しかった。それよりもクーヤの状態の方が心配だった。

炎の中に身を沈めて私を抱きしめてくれた事が嬉しかった。自殺行為のような行動に私は何がなんだかわからなかった。

混乱している私はクーヤの言葉に短い返事を返すだけ。

「もう、大丈夫だよ」

その言葉が嬉しかった。

荒々しかった憎悪も、暴れていた炎も一切消えてなくなり、私はクーヤの胸で今まで溜め込んだものを全て吐き出した。

私を助けてくれた後、クーヤはすぐにアリスの元へと向かった。そんなボロボロで、傷つけたのは私で。どうしてそんなにっても私達の為にしてくれるの？私は何もしてあげられない、手助けする事も出来ない。役に立たない私は悔しくて歯を軋ませる。

何も出来ない私は近くで交わされる会話をただ聞いていた。

クーヤは特別な事はしていない。アリスの傍にいて、会話を交わすだけ。それがどれほど嬉しい事か、傍観している周りの連中にはわからないだろう。

怖がりもしない、逃げもしない。相手を傷つける言葉を吐いたりせず、当たり前のように傍に居るだけ。それがどれほど暖かいことか。魔女だからという理由で拒絶するこいつらには到底わからないだろう。

私にはわかる。幸せとはかけ離れた生活をしてきたから。

私にはわかる。アリスの心が少しずつ溶けていく様子が。

程なくして氷の塊がパキンと音を立てて崩れた。

気を失ったアリスを私の元まで運んでくれた。本当にクーヤには感謝のしようがない。

せめて言葉だけでもと発した声が、クーヤのお父さんと思う人に遮られた。その人は私を睨み、魔女と罵った。それも仕方がない事だと思う。ボロボロになるまでクーヤを傷つけたのは他でもない私達の力。どんなに謝ろうとも許されないかもしれない。嫌われたかもしれない。

それでもクーヤは――。

「これ以上、僕の友達を傷つけないで」

意識が無くなる最後の最後まで、私達を心配してくれて、友達と呼んでくれた。

「これからすぐに治療に向かわせてもらう、いいか？」

「クーヤを……よろしくお願いします」

おじさんの言葉に素直に頷いた。

門の中へと担ぎ込まれていくクーヤ。私は立ち去る事も、動く事もできず、アリスが意識を取り戻すまでその場に座り込んでいた。

意識を取り戻したアリスと一緒に帰ってきた私達は何もする気が起きず、呆然と時間を無駄にする。

今にでも駆けつけてクーヤの様子を見たい。でもそれは出来ない。

数日が無為に過ぎていった。

その日も呆然と川の流れを見ているだけだった。川を眺める私達にその人物は姿を現す。

「いやはや、今にも川に沈んでしまうような表情をしていますね」

「……あなたは」

「こんにちは、魔女の者達。教会に身を置くクルツと申します」

「……教会――！！クーヤの容態は！？」

「クーヤ君は治療に優れた場所へと向かいました。今この国には居ません。ですから彼の容態がどのようなものかわかりません」

と、魔女と呼ばれる私達に対しても牧師らしく、礼儀正しい対応で話してくれた。

「生きて……いるんですね」

「はい」
「よかった――」
あまりの安堵にその場にへたり込んだ。よかった。本当によかった。
「あなたは、何しにここへ？」
アリスが尋ねる。
そうだ、ただクーヤの事を言うだけの為にここに町の人が、特に牧師が来るはずがない。そんな疑問を浮かべた私達に、クルツさんは二つのネックレスを取り出した。
「この国を離れる前にクーヤ君にお願いされましてね。これを二人へ、と」
私達はネックレスを受け取った。綺麗な装飾品。細かい細工が施された中央には、不思議な文字が刻まれた魔吸石があった。これは魔術文字だ。
「生死に関わる傷を負いながら、奇跡的に目覚めた第一声が魔女であるあなた方へのプレゼントだったのですよ」
視界が滲む。
最後の最後の、最後まで私達の事を気にかけてくれた。クーヤになんてお礼を言ったらいいか……。
大切にそのネックレスを胸に抱き、私達は涙を落とした。
「不思議な知識を持つ少年でしたね……その文字がどんな意味があ

るかわかりますか？」
「いえ……わかりません」
「最初は私もただの落書きかと思っていたのですが、クーヤ君のあまりに真剣な様子でしてね。言われた通り魔力を注ぎながら書いてみると、魔吸石の耐久力が飛躍的に向上したのですよ」
「やっぱり……」
「ほぉ、興味深い事を言いますな。その文字について何か知っている事でも？」
「クーヤほどではないですが、ある程度は……」
「クーヤ君に聞いても教えてもらえませんでしたので……宜しければ教えていただけますか？」
「はい……だが――」

クーヤが話していない事を話していいかアリスは迷ってる。
先生が教えてくれた事を思い出す。教えてくれた事は数あれど、先生が本当に教えたかった事。他人に頼らなくても、二人でも生きていける術。
私達は強く生きなきゃならない。
ぐいっ、と涙で濡れた目を拭い、クルツさんへと力強く目を向けた。

「お教えいたします。その代わり、私達に魔術について教えて下さい」

アリスが驚いた顔を向ける。私の決意を感じ取ったのか、微かに笑みを浮かべると頷いた。

「ああ、私達に魔術を教えてくれるのなら、この文字の事もそれ以外の事もお教えする」
「……交換条件、という事ですかな」

「はい」
「……強かな子達だ」
呆れた顔で私達に目を向ける。私達が引かないことをわかってくれたらしく、ため息を深く吐いた。
「いいでしょう。その条件で契約成立です」
こうして私達は魔術の師を得た。そして月日は流れていく。

時間の流れというものは残酷だ。
強くなると決めた私達はまず忘れることから始めた。
全てを、ではなく。過去に受けた虐待を、扱いを。
許すのではなく、忘れる。人に対する恨みを。
時が経つにつれ色々と忘れていく。しかし色褪せない思い出もある。
クーヤと過ごした数ヶ月。絶対に忘れてはならない思い出。私達はそれを支えに生きていく。
再開の日に思いを馳せ、日々を過ごしていく。
今でも私達はここに居る。

「……信じられない事ですが。確かにあなた方の力は魔術です」
術式や魔方陣などを説明するにあたって、一番わかりやすい例えとして私達はクルツさんの前で力を使ってみせた。詠唱を行わない私達の魔術に、クルツさんはひどく驚いている。

「いやはや……魔術文字ですか……。これが世に出回ったらとんでもない事になりますよ」
「良い風にも、悪い風にも……な」
「しかし……あなた方の力が魔術とわかっても、すぐに魔女の汚名を拭う事はできません」

申し訳なさそうにクルツさんは話す。大丈夫、そんなことはわかってる。

「ここに気狂いじみた理論がある。ただこの理論が正しいとされえるには、どれほど気狂いじみていればいいかが問題なのだ」
「……それは？」
「クーヤが教えてくれました。この言葉の狂気というのは、新しい見解がそれまでにあった考え方と本質的に異なっているという意味です。効果があるものをそういうものだ、と簡単には認められないのが世間というものです」

町に住む魔術師達も私達の魔力が強大という事には気づいているだろうけど。私達が使う力を魔術と認められていない。
人は未知というものに恐怖を抱く。
その力が魔力を使用していることが理解しているかもしれないが、なぜ詠唱という過程を辿らず術を使えるかがわからなかった。
魔力という動力と、詠唱という世界を繋ぐ回線がなければ、世界に魔術を行使するという歪んだ現象を起こすことはできない。

魔術師達が無知だったとは言えない。なにせ、詠唱以外の知識は世界に出回っていない。知りようがない。
魔力と世界を繋ぐ回線は詠唱しかないと思い込んでいる。そういった世間の認識を改める事は難しい。と先生に教わった。

「驚愕するばかりです。本当にクーヤ君は何者なんですか？」
「世界を少しだけ詳しく知る者、だな。それよりもクルツさん、そろそろ魔術の講義を頼む」
「ああ、そうですね。それではまず、その巨大すぎる魔力を抑えることから始めましょうか――」

クルツさんとの関係も良好。私達の力が魔術だとわかってからは、前以上に友好的に接してくれた。最初はただの利害関係による絆だったけれど、今では少し親しくなれたと思う。

「ああ、いたいた。うわ、沢山居るわね」
「昔はあれに追い回されたな」

拓けた平地の先には猪の群れ。私達の存在に気づいた猪達が鼻息を荒くしてこちらに向かってくる。昔は半ベソを掻きながら逃げるだけだった。だけれど、今は違う。

「何匹獲る？」
「一匹で十分だろう」
「えー、燻製すれば保存が効くんだからいいじゃない」
「で？誰が運ぶんだ？」
「むぅ、仕方ない。それじゃ壁頼んだわよ」
「まかせておけ」

アリスは猪達の突進を止めるべく、辺り一面に魔術を使う。一瞬で消えていた昔とは違い、そのまま魔力を注ぎ続け氷の壁を持続させる。密度を固めた氷壁は猪達の突進にもびくともせず、壁にぶつかるいくつもの音はするけれど、一匹足りとその壁を抜けた猪はい

ない。
私は壁の向こう側にいる猪をじっくりと観察する。どうせなら大きい方がいいしね。品定めする私の目に一回り大きい猪が映った。あれにしよう。
標的決定。標的との目算距離……約１０ｍ。型は爆。狙いは頭。
私は力に条件を加えていく。ただ垂れ流す炎じゃない。目的を定め、その力に新たな意味を付け足す。

「爆ぜろ！」

瞬間、狙いを定めた猪の頭が爆ぜる。
ちょっと可哀相な気もするけれど。まぁ、生きながらじわじわ焼かれるよりもマシだと思う。
さらに私は力を使った。
事切れた猪の周囲が燃えていく。火力は高くない。これはただ他のを追っ払う為の行為。周りに居た猪達はいきなり現れた炎に驚き、こちらに向かってきた速度以上の速さで逃げていった。

「こんなものか」
「やったー、にく～」
「さっさと腸抜きして持ち帰るぞ」
「おっけ～」

町の人との関係も少しずつ、本当に少しずつだけれど改善していってる。
種を蒔いてくれたのはクーヤ。門の前で傷つきながらも父親に向けた言葉。子供の必死な訴えは、それを聞いていた町民の心に種を植え付けた。とクルツさんが言っていた。
その種に芽をだそうと、クルツさんも働きかけてくれた。クルツさんだけじゃなく、新しく知り合った人達も助けてくれたという。

「うん、いい茸だ」
「こっちも薬草採れたわよ」

今日は森の中で山菜採りをしていた。最近猪の肉や魚ばかりで他の食料に飢えていた。家の畑で育てている野菜はまだ収穫時期じゃない。数時間歩き回り、満足のいく収穫となった。

「さて、そろそろ――」

悲鳴が聞こえる。
アリスが帰ろうと提案したその時だった。森の奥から人の声が聞こえる。私はその方向に目を向けた。

「……なに？」

視線を森の奥へと向けていると、木々を掻き分け数人の人が姿を表した。珍しい事だった。ここは魔物も居て危険だから誰も近寄らない。森の中で初めて他人と出くわした。

「なんだお前ら！」
「それはこっちの台詞。ここは危険よ。早く立ち去った方がいいわ」
「お、おい……来たぞ！」
「くそ！追いつかれた」

その人達のさらに奥から獣が姿を現す。
その姿は狼。だけれども狼とは徹底的に違う。狼に頭は二つもない。魔物か。
その魔物は片方の口から火をちらつかせ、もう片方でうなり声を

あげて威嚇してくる。その後ろから2匹、3匹と姿を現す。いい度胸じゃない、私に喧嘩を売るなんて。
一匹の魔物が彼等に向けて火を吐いた。
私は彼等と魔物の間に滑り込む。そして右手を前に突き出す。右腕がボッと燃え上がった。

「あ――おい！大丈夫か！」
「……なにこの火力。全然ダメね。こんなもので私は燃やせないわよ」

腕を振り払って火を消す。火に対して耐性を持つ私にはなんて事のない火だった。
さて、これからお返しと行こうと思った矢先、ひゅっという風切り音がいくつか聞こえる。私の横を通り過ぎた氷の槍は魔物の額を打ち抜いた。

「ちょっと、私の獲物盗らないでよ」
「ああ、すまない。つい……な」
「あ、あ……あ」

恐怖に染まった表情がそこにある。でももう、そんな風に見られるのは慣れっこ。特別恨んだりはしない。
それよりもガサガサと葉の擦れる音が周りから聞こえる。
まぁ、気配でなんとなくわかってたけれど……結構多いわね。

「ああもう、うざったい！」
「おいお前ら、下手に動くと危険だぞ」

アリスが自分と彼等を囲むように半円状の氷の壁を作り出す。私はその様子を確認した後、力を解き放った。

放射状に広がる炎。
炎は周囲に群がる魔物達を焦がしていく。周囲に魔物の気配が無くなるまで魔力を注ぎ続ける。森の中から獣達の短い悲鳴が聞こえる。しばらくすると魔物達の気配が無くなる。
私は出していた炎を消した。木々に燃え移った火にも干渉し、消し散らす。火事にでもなったらこの辺りで山菜取れなくなっちゃうしね。

「……お前達……魔女か」
「そうよ」

それがどうしたの、とばかりに私は返す。

「……何故俺達を助けた」
「別に、ただ助けが必要だと思ったからだ」
「魔女に助けられる覚えなどない！」
「魔女だ、人だと……器が小さいわね、あんた」

クーヤの億分の一も器量が無いんじゃない？

「感謝しなくてもいいわよ。偶々私達がここにいて、あんた達は助かった。それでいいじゃない」

話をしても無駄だろうと思った私は、早々会話を切り上げて去ろうとする。アリスは男達の一人に何か気づき、声をかけた。

「む、そこのお前。毒に犯されてるんじゃないか？ついてこい、薬をわけてやる」

顔色の悪い男を指差し、状態を確認した後、森を抜ける道へと歩

き出した。男達は唖然としたまま動かないでいる。

「どうした？もたもたしていると、そいつが死ぬぞ」

結局、解毒薬を渡して町への道を教えてあげた。

その後、森の中で助けた人達はあらためて私達の家に訪れ、お礼を言いに来た。感謝の品として渡されたお酒が美味しかった。クーヤの千分の一くらいは器量があったかな。

その人達とも今では仲良くやっている。この前は採りすぎた獲物を一緒に運んでもらった。家の畑で取れた野菜と、獲った獲物で鍋を囲み、持ってきたお酒で一晩騒いだ。

そうして長い歳月が流れ、クーヤと別れてから１０年あまりの時が過ぎた。

「最近……クーヤからの手紙……来てないな」

「うん……」

何ヶ月かに一度、クーヤからの手紙をクルツさんが届けにきてくれた。私達はその手紙を何度も何度も暗記するほど読み返し、その内容に一喜一憂していた。

文字についてはクルツさんから教わった。授業料として畑の野菜や獲った肉を納めた。最初は困った顔で受け取らなかったけれど、私達は押し切った。

文字を読めるようにも、書けるようにもなったけれど、私達から手紙は出してない。

手紙を書いて送れるほどお金が無い。紙は高価だし、送るのもかなりかかる。でもそれより、世界を転々とするクーヤの居場所がわからなかった。

手紙には今こんな所に居る、なんて内容も書かれているけれど、この手紙もどれくらい前に書かれたものかわからない。手紙を送れたとしても、それが届く頃にはすでに居ないかもしれない。クーヤから届いた最初の手紙にも、移動し続けてるから返事は書かなくていい、と書いていた。

一方通行な連絡。返事を書きたくても書けない歯がゆい状態。そしてその一方通行な連絡が今途絶えてる。

「クーヤどうしてるかな……」

コンコンと家のドアを叩く音。誰だろう、こんな時間に。

「遅くに悪いが、ラビとアリスはいるか？」

ドア越しに男の人の声。

聞いた事のない声、でも懐かしい響き。

私の鼓動が鳴り響く。ドクンドクンと鳴り響く。震える手でそっとドアを押した。

「久しぶり、元気だったか？」

軋むドアを開けた先には一人の男性。夢にまでみた、でも夢で見たのとはちょっと違う姿。ずっと会いたいと思っていた人。

「クー、ヤ」

「ただいま」

「「――おかえり！」」

私達は飛びついた。

もう会えないかもと考えた事もある、諦めようとする気持ちが芽

生えたこともある、でもこうして再び会うことが出来た。
抱きついて泣きじゃくる私達。
クーヤの腕の中はやっぱり暖かかった。

幕間　ラビの人生（後書き）

「ど、どうしよう。お気に入りにいれてくれた人がいるわよ」
「取り乱すな、まだ慌てるような時間じゃない」
「こういった場合とある作法をするべきだ。まず相手との距離をとる」
「うん」
「そしてその場で膝をつき、姿勢を正す」
「おっけい」
「そして目の前の地面に手を付き」
「こうか？」
「額を地面に擦りつけてこう言うんだ――」
「「「ありがとうございます」」」

第六話　再会

時は巡りやがて季節は陽光に輝きだす
その時どのような世界に立ち
そして誰がこの手を握ってくれているのだろうか

第六話　再会

「そ、粗茶ですが……どうぞ」
「ああ、悪いな」

コトッと朽ちかけたテーブルの上に木製のカップが置かれる。
再開を喜び合った後、今日の寝床を決めていないと言うクーヤを家の中へ招いた。
クーヤの向かい側にはラビとアリスが腰を下ろしている。成人を過ぎた女性が大泣きするという醜態を晒した手前、二人ともとても気まずそうだ。クーヤも無言のまま置かれた茶に口をつけている。

「……」
「……」

薄暗い部屋の中。クーヤの茶を啜る音だけが響く。

「……ちょ、ちょっとタイム！」
「ん、ごゆっくり」

彼女達が背を向け、お互いの顔を近づけて話し合う。
目の前で囁かれる内緒話はクーヤの耳にも届いたが、聞こえないふりをしておいた。

「何か話しなさいよ」
「無茶言うな。い、今にも心臓が飛び出そうなんだぞ。ラビこそ何か話せばいいじゃないか」
「む、無理無理無理。顔から火が吹き出そうよ」
「おい落ち着け、本当に火が漏れてるぞ」
「あわ、わわわわ」

バタバタと揺れる彼女達の様子に、クーヤは声を押し殺して笑っていた。

「それならこうしよう。ラビが会話を切り出して、私がその援護に回るということでどうだ？」
「狩りでの分担作業みたいなものね、よしそれでいこう」

話し合いが終わり、くるりと体をクーヤの方へ向けてラビが話し始めた。

「い、いい天気ね！」
「外真っ暗だけれどな」
「ラビ、それはない」
「援護するって言ったでしょー！」
「……すまん、今のはフォローできない」

ぎゃーぎゃーと騒ぐラビに謝罪の言葉を告げるアリス。その掛け合いがあまりにも可笑しくクーヤはついに噴出した。

「ぷっ、くくくっ」
「っ！クーヤに笑われちゃったじゃない！」
「だからすまないと言っているだろう」

「くくっ、いや悪い。あんまりにも可愛らしい仕草だったもんでな」
可愛いという言葉に二人とも顔を赤くする。中身が半分ほど減ったカップをテーブルに置き、クーヤは会話を切り出した。
「久しぶり過ぎてお互い何を話したらいいかわからないな。とりあえず過去の、そして今の状態を話してみないか？」
クーヤの提案に二人とも頷いた。
「その前にせっかく会えたのに、顔もよく見えない暗がりは許せないな」
「すまない、明かりに使える程の燃料が無くて」
「気にするな」
あまり使われていない暖炉へと移動し、暖炉の中へと体を潜り込ませて文字を書く。
「よし、こんなものか。ラビ悪いけれどここに魔力を注いでくれないか？」
「……え？魔方陣？――クーヤ、魔術を使えるようになったの！？」
「お前達に比べたらちっぽけな魔力だけれどな」
言われた通りにラビは暖炉の中に書かれた魔方陣に魔力を注ぐ。煌々と燃える暖炉の火に3人の顔が映し出された。彼等はポツリポツリと話を始める。
彼女達は話す。クーヤと別れた後の事を。今までどう過ごしてきたかの事を。クルツに教わった事を。森の中で助けた男達の事を。力がどこまで使えるようになったかという事を。

クーヤは話す。エトワールを出た後の事を。所々ぼかしたが、先生と融合した事を。手紙には書ききれなかった内容を。どんな国を回ってきたかという事を。そして、父親が亡くなった事を。

父親の最期は鍛冶場で見送った。
世界を回っていた父親はその途中で病に犯された。日に日に弱っていく父親。床に伏せる日々が多くなっていく。そんな病が蝕む体を引きずり、父親は工房へと足を向ける。クーヤの制止の言葉を振り切り、最後の作品を創り上げた。

「後は、お前の好きにするといい……」

生涯最後の作品を手がけた父親は笑顔のままこの世を去る。
父親の最期の作品は今までで一番出来が悪く、今までの中で一番美しかった。
クーヤは父親の亡骸と最期の作品を母親が眠る場所の隣へと埋めた。二人の冥福を祈り、その場を後にする。
そうして旅を続ける目的が無くなり、自由の身となったクーヤはエトワールへと足を運んだのだ。

「えっと、なんて言ったら……」
「こんな時どんな言葉をかければいいか……」
「気にしなくていい。父さんの最期は満足のいくものだと思ってる。……さて、すっかり遅くなったな。そろそろ寝るとしようか」

馬車の荷台から布団を持ってきて寝る支度をする。
クーヤの持ってきたふかふかな布団に彼女達は驚き、クーヤがその布団を使えばいいという申し出を彼女達は慌てて断る。結局３人で川の字で寝ることとなり、再開の日の夜は過ぎていった。
安心しきって眠る彼女達の寝顔をいつまでも眺めていた。

「朝だぞ、そろそろ起きたらどうだ」
「クーヤ朝よ朝。ほら早く起きる」
「ん……おはようアリス、ラビ」

のそのそと布団から這い出る寝ぼすけに彼女達は微笑んだ。

「やっと起きた」
「おはようクーヤ。すぐに朝食の支度をするからな」
「腕によりをかけるから楽しみにしててね」

調理場へと向かう二人。欠伸を一つかみ締めてその様子を伺う。
女性が二人、調理をする姿はとても絵になっていた。まるで一枚の絵画を見ているような光景にクーヤは自然と笑顔を浮かべる。

「どうした？」
「いや……なんかいいな、と思ってね」
「変なの」

朝食は質素な物だったが、彼女達が出来る限りの食事を出した。
調味料があまり使われてなかったので味は薄い。それでも素材そのものの味を楽しめた。

川辺で昨晩の話の続きをする。
昨日のような硬さはもう無い。１０年溜まった内容はとても多く、一晩で話しきれるものではなかった。
気づけば時刻は昼過ぎとなっている。一息つこうという事となり、お茶の支度を始めた。

アリスが力を使って目の前に流れる川から水を近くに集めだす。まるで見えない桶に汲まれたかのように、一塊の水が宙に浮かんでいた。
その塊の下にラビが炎を出し、水を炙る。火に直接晒された水はすぐにこぽこぽと気泡を出し始めた。その様子を確認してから茶葉を水の中へと放り込む。
やがて水の色が薄い茶色に染まっていく。
空中で茶を沸かす不思議な光景をクーヤは驚いた表情で眺めていた。

「力使うの上手くなったな」
「でしょう？頑張ったんだから」
「まだまだ覚束無い所もあるけれどな」

ラビがカップを持ちながら近づくと、蛇口を捻ったかのように茶色に染まった液体が注がれる。大きめの石に3人が寄り添うように座り、カップに口をつけていく。
ほぅ、と息が漏れた。
川のせせらぎを聞き、風が吹く度に掠れる木の葉の音を聞く。自然が奏でる音に耳を傾けながら、時がゆっくりと過ぎる。誰も話しをすることはなかった。静寂が心地よい。
注がれた茶がなくなる頃、クーヤが話を再開した。

「そういえば、そのネックレス……魔吸石が無くなってるな。やっぱ、壊れたか？」
「そうそう、言い忘れてたけれど、魔吸石が変なの」
「今持ってくる。ちょっと待っててくれ」

アリスが地面にコップを置き、家の中へと進んでいく。アリスが帰ってくるまで暇だったクーヤはラビに尋ねた。

「一体どうなったんだ？」
「ん～、見てもらった方がわかると思う」
「そか。んで、それなりに使えたか？」
「それなりなんて物じゃないわよ。すっごく助かったんだから」

力の篭った返事が返ってきた。
言葉だけじゃ足りないとばかりに、身振り手振りを加えてどれだけ魔吸石の存在がありがたかったを伝える。

「強くなろうって思ったんだけれどね、そんなすぐ強くなれるものでもないじゃない。力の制御も昔は全然出来なくてさ、何度も何度も失敗して、その度に力は暴走しようとするし、これは火達磨になるかな？って、感じても燃えないじゃない。魔吸石が……このネックレスがあったおかげで今日まで一度も私の力で体が燃えた事ないのよ。ああ、またクーヤが守ってくれたんだな、って思って――」
「わかった、わかった」

力一杯に説明を続けるラビ。
あまりの絶賛に気恥ずかしくなったクーヤはまだまだ続きそうな言葉を止める。唇を尖らせて不満そうなラビの顔が可笑しくて、わずかに微笑んだ。

「持ってきたぞ」

戻ってきたアリスの両手には二色の鉱石があった。

「こんな風に変色してしまったんだ」

無色透明だった魔吸石の色が、まるでサファイアやルビーのように蒼く紅く染まっている。

アリスは壊れ物を扱うようにそっとクーヤに手渡す。鮮やかに染まった鉱石を受け取ったクーヤは驚きを隠さずその魔吸石を見つめた。

魔吸石がこの様に変化した所を見た事がない。

「これは……」

「身に着けてから3年程経った頃だったか……私の魔吸石は青く、ラビのは赤い色が付いていたんだ」

クーヤはアリスの話に耳を傾けながら、手に取った鉱石を光に翳している。

「これ以上魔力を注いだら壊れてしまいそうでな、折角クーヤから貰った贈り物を壊したくなかったから、ネックレスから外して閉まっておいたんだが……どうした？」

魔吸石を見つめたまま一向に動こうとせず固まっている。心配になって声をかけようとしたが、その真剣な様子に声をかけて邪魔になる事を躊躇った。

「オドが浸食されている……いや、違う……属性が決められたオドがそのまま保存されているんだ……一系統のみこのような変化を？

多系統は？……無理だな、反発しあうだけだ……この魔力を取り出す事は可か否か……方法はどうする？式か陣か……いや、詠唱でも……」

クーヤの口からブツブツと独り言が漏れている。

さすがに声をかけようと思った矢先、観察をし終えたクーヤが二人に顔を向けた。

「――面白い」

疑問符を浮かべる二人にニヤリと笑う。

「頼みがあるんだが……いいか？」

「え……あ、うん」

「なんでも言ってくれ」

「今度魔吸石を仕入れてくるから実験に付き合って欲しい」

「いいけど」

「そのくらい何でもないな」

「ありがとう、二人とも」

何かわかったのかと二人が聞いても、曖昧な答えを返すばかりで結局答えを知る事はなかった。今は話す気がないと諦め、彼女達は再び茶を淹れてのどかに過ごしていた。

太陽が落ち始めてからしばらく経ち、夕方になろうとした頃彼等は現れた。

「よう、嬢ちゃん達元気にしてるか？」

「あ、イースさん」

「俺達もいるっすよ、ラビっち、アリスっち」
「こんにちは。ラビさん、アリスさん」
「誰だ？」
「森の中で助けた人達だ」

３０代半ばと思わしき男達が３人クーヤ達の近くにやってくる。男達はクーヤに懸念の表情を向けた。

「ん？初めて見るやつがいるな」
「クーヤよ。ほら、前に散々話したでしょ、子供の頃に助けてくれた人」
「私達の恩人だ」
「ああ、あの……」

先頭に立っていた男が一歩前にでて、じっとクーヤの顔を観察する。返すようにクーヤも男の様子を見る。
男は鍛えているようで、全体的に筋肉質だった。無精髭を生やした頬には古い傷痕がある。腰に帯びた剣にも年季が入っており、かもし出す雰囲気はまるで獣のよう。クーヤを観察する目は獲物を物色する獣そのものだった。
一頻りクーヤの様子を見ていた男が急にニカッ、と男くさい笑みを浮かべる。

「いい面構えだ」
「どうも」
「俺はイースって名だ。冒険者を生業としてる。嬢ちゃん達には腕試しで入った森で助けられた。よろしくな！」
「クーヤといいます。ここには昨日着いたばかりです。こちらこそよろしく」

ごつごつした剣タコまみれの手を差し出して来たので、クーヤはその手を握り返した。イースが力強く握ってきたので、同じように力を込めて握り返した。そのまま数度握手を交わす。

握手を終え、後ろにいた他の二人を親指で指し示した。

「んで、後ろにいる軽そうなヤツがショル。見た目も頭も軽いが身のこなしも軽いぞ」

「ちょ、イースさんそれはあんまりじゃないっすか？」

「そんでこっちのなよっちいヤツがウィム。俺達の中で唯一魔術を使えるヤツだ。おとなしそうだが、戦闘となると敵を滅多切りにしてこえぇぞ」

「イースさん変な紹介しないで下さい！」

二人の抗議がイースを攻める。それにイースは笑って返した。そんなやり取りがとても自然で、いつもこんな感じなんだろうな。とクーヤは考えていた。

「まったく……ああ、すいません。初めましてウィムと言います」

「よろしく」

「俺もよろしくだぜ、クーヤ」

それぞれに握手を交わす。握手をした後、ショルがクーヤの顔を覗き込んできた。

「しっかしクーヤ、なんか疲れた目してねぇ？眠いのか？」

「おいおい、わかりきった事聞くなよ。嬢ちゃん達の愛しい人が帰ってきたんだぞ。色々あるだろうさ」

「……ああ！なるほど、そりゃ疲れてるわなぁ」

イースとショルがにやにやと意地の悪い笑みを浮かべる。

「な、なに？」

訳の分からない邪悪な笑顔に、ラビの背筋にゾクリと寒気が走った。

「昨晩はお楽しみでしたか？」

ウィムの放った言葉にクーヤ達はそれぞれの反応を示す。
クーヤは茶を啜り無反応。アリスは頬を染めつつも、やれやれと声を零して溜息をついた。そしてラビは、その言葉の意味を理解するやいなや茹でたタコの如く全身を赤くした。

「なっ、な、な……」

邪悪な笑みにウィムも加わり、邪な一団は相も変わらずニヤニヤと彼女達を眺め続けた。

「ち、違う違う違う！」
「またまた、そんなこと言って」
「クーヤが羨ましい！」
「いやー、若いっていいですねぇ」
「そんな事まだしてない！」
「ほぉ、まだ……ね」
「これからって事っすか」
「お邪魔でしょうから今日は帰りましょうか」
「違うって……言ってんでしょうがあああああ！！」

怒りに猛り狂ったラビは魔術をイース達へと放つ。
邪な塊は蜘蛛の子を散らすように分散して逃げ始めた。連携の取

れたいい動きをするな、とどこか的外れな感想がクーヤの口から漏れる。

「燃やす、絶対燃やす。てか殺す」
「お～、怖い怖い」
「鬼さんこっちら～」
「風よ、風よ。我の足に宿り一陣の風と化せ」
「逃げるなぁあああああああああ！」

追いかけっこを始めた彼等を遠い目でクーヤは眺める。

「まったく、イースさん達にも困ったものだ」
「面白い奴等だな」
「機会を見つけては、こうして私達をからかうけどな」

それでも昔の状況を今の光景に鑑みると、魔女と呼ばれる者に冗談を言える人との関係が築けた。その事実がクーヤにとって、とても嬉しかった。
たびたび燃え上がる風景を見ながら、これも彼等のコミュニケーションの一種なんだろうな、と思いふけっていた。

「良い人と出会えたな」
「これもクーヤのおかげだ」

地面から火柱が立ち上がる。
空に飛ばされた人は誰だろうか。クーヤは心の中で合掌し、黙祷を捧げる。
そうして日は落ちていった。

第六話　再会（後書き）

「新しい章が始まったな」
「こんな日々もいいものだ」
「そして3バカ登場！」
「新しい人物も出てきたな」
「まだまだ出したいのはいるけれどな。いつになることやら」
「いつか決着つける！」
「まぁ、その……なんだ。がんばれ」

第七話　鍛冶屋ｖｓ騎士

第七話　鍛冶屋ｖｓ騎士

カンカンと金属を叩く音が響く。
音はエトワール城下町の一角。一軒の鍛冶場から発せられている。
建物の中には数名の男達が作業に没頭している。みな、真剣な面持ちで仕事に勤しんでいた。

厚みのある一枚の金属板に線を引き、線にそって金属を切り出す者。
型に溶かした金属を流し込む者。
剣状に切り出した金属を炎が滾る釜に入れる者。
刃こぼれした包丁に研磨をかける者。
歪んだ鎧を金槌で叩き、形を元に戻す者。様々だ。

働く職人達の中にクーヤの姿もあった。ここでは武器や防具、鎌や包丁などの日用品の製造、修復を主に行っている。父親から受け継いだ鍛冶の技術を生かし、数日前からこの場所で働いていた。

建物内は熱気に溢れかえっている。
金属を溶かす為に高温の炎が炉に、熱処理して金属を硬くする為の釜にも火がくべられている。建物内はまるでサウナのようだ。
職人達は滴る汗に気も止めず、目の前の作業を真剣に取り組んでいた。

そんな場所に足を向ける二人の女性の姿があった。ラビとアリスだ。

彼女達はフードを深く被り、顔を覆い隠しながら裏路地を歩いていた。
町の人達との関係もそこそこ改善してはいるが、いまだ魔女という人種を受け入れない人も沢山いる。

特に町の大通りを闊歩する貴族や魔術師達には魔女は許されざる存在だ。
魔力は押さえ込んであるので、町の魔術師に気づかれることもない。だが、なるべく不必要な接触は避けるべきという理由で身を潜めるように裏路地を歩いていた。

彼女達が町に赴く理由は多くない。
食料はほぼ自給自足。薬も森から取った薬草の類を主に使っている。故に町に向かう事は少ない。
町の中で向かう場所は精々３ヶ所と限られている。

まず一つ目にクルツが勤めている教会。
クルツの様子を伺うものではない。まして祈りを捧げに行くものでもない。
クルツへ品物を売る目的の為だ。彼女達は森で取ってきた物の余剰分をクルツの元へ持っていき、金銭を受け取るか、または穀物と交換をしていた。

二つ目に服を新調する為の生地屋。
彼女達の成長と共に、クーヤから受け取った服は着る事が出来なくなった。彼女達がその事をクルツに相談すると、一軒の生地屋を紹介してくれた。
仕立てには時間も金もかかるので布地だけ買う。仕立てはクーヤから貰ったコットを参考に自分達で行った。裁縫道具などもここで購入している。

そして三つ目はこの鍛冶屋だ。
布を切るための鋏や、獲物を解体するための刃物などをここで購入していた。

「すいませ～ん」

店先でラビが声をかけた。
奥の工房から熊のような体格の店主がのそのそと姿を現す。

「あいよ、いらっしゃい。……ってなんだ、魔女っ子か」
「魔女っ子って言うな！」
「なんでぃ、別にいいじゃねぇか」
「子供みたいじゃない。なんか嫌なの」
「俺からしたらお前らなんて鼻の垂れたガキみたいなもんだ。んで、今日はどうした？」

二人が言葉を詰まらせる。互いの顔を見合わせては、口を開き紡ぐ。

「えっ、と」
「その……だな。……クーヤは、居るか？」
「ははぁ。なるほど」

手招きをして工房の入り口まで連れて行く。
さすがに工房の中までは入れる事が出来ないので、彼女達は入り口から顔を覗かせてクーヤの姿を探した。
その時、店主が工房に向けて大声を張り上げた。

「おーい！クーヤ。魔女っ子が仕事の様子を見に来たぞ！！」

「ば、馬鹿！」
「おい、仕事の邪魔になるだろう」
「心配すんな……って、やっぱり気づいてねぇよあいつ」

鍛冶場の片隅にクーヤは居た。
その顔はいつに無く真剣な表情。工房に響くような声にも気に留めず、目の前の作業に集中していた。

「たくっ、作業始めるといつもこうだ。近寄って声かけるまで気づきゃしねぇ」

店主が愚痴るが、隣に居る彼女達には聞こえていない。視線の先にはクーヤの横顔。

この１０年でクーヤの性格は変わっていた。先生の性格による所も大きいだろう。いや、子供から大人になったのだから変わらない方が珍しい。

今のクーヤは冷めているというか、飄々としている。
常にぼーっとしている様子で、時々深い思慮に耽った顔をする。かと思えばうたた寝していたりする。捕らえどころが無く、それが自然な感じであった。
基本的に無気力、無関心。そして無愛想。
だが今は頬を引き締め、力強い眼差しで刃にヤスリをかけている。完成図を頭に浮かべ、寸分の狂いも無いように一つ一つの作業を丁寧にこなしていく。
そんなクーヤの横顔を、彼女達は頬を上気させて眺めていた。

「なんでぃ、惚れ直したって感じだな」
「……え、あ。いや……」

「職人が作業する顔つきは、まさに漢の顔よ。惚れたってしょうがねぇや」
「まぁ……うん。そう、だな」
気の無い二人の返事にやれやれとため息をつきながら話を続けた。
「普段やる気なさそうな顔してんのによ、仕事始めた途端顔つきが変わりやがる」
クーヤの作業を眺めながら、店主はにっとはにかんだ。
「実際良い腕してるよ。さすがあの人の息子ってだけはある」
満足のいく仕事が出来たのか、クーヤは頷いた後、研磨を終えた刃を近くの壁に立てかける。そこでラビ達がいる事を初めて知った。
「お？ラビ、アリス……どうした？」
「や、やほ～」
「仕事お疲れ……」
「魔女っ子達が旦那の仕事ぶりを見学しに来たぞ」
「旦那じゃねぇよ、おやっさん……あ、ラビ火をくれ」
クーヤが懐から細身の葉巻を取り出した。ラビの指先に灯された火に近づけ、葉巻の先端に火種を作る。タバコを吸うように煙を肺に満たし、口から紫煙を吐き出した。煙と葉巻独特の香りが周囲に満ちる。
「葉巻なんて、よく買えるな」
「葉巻の葉自体は安いよ。乾燥やら巻く作業は自分でやってる。安上がりだぞ」

「それでも嗜好品に回せる金はねぇって。まるで貴族様みたいだぞ」
「貴族ならパイプとか使うだろう。こんな葉っぱを巻いただけの不細工な物使わないって」
「葉巻なんてよく吸えるわねぇ」
「まったくだ」

二人からの理解し難いという視線をもろともせず、クーヤは葉巻を短くする行為に没頭した。本来葉巻は吸い終わるのに1時間程かかるものだが、クーヤ手製の葉巻は細く、短くされており、数分程度で吸い終わる事ができる。

「しかし、魔力をちゃんと抑えられるようになったな。目の前にいても全然分からないぞ」
「クルツさんのおかげだ」
「町に来れるようになったしね。こっそりだけど」
「もう少しで仕事が終わるが、一緒に帰るか？」
「んー、折角町に来たし、クルツさんの所にも顔出してみようかな」
「そうだな、お礼を言いに教会に顔出してみるか」

こうしてクーヤの仕事が終わった後、教会へと向かう事となった。

教会は城下町の中心からは少し離れたところにあった。
建物自体もこじんまりとしており、周囲を飾るようなものは一切無い。宗派は聖十字教会に所属していると聞いているが、このエトワールではあまり優遇されていない様子が外からでもわかった。
がちゃり、と教会のドアを開け中に入る。
「おや？クーヤ君……ですか？」

「お久しぶりです、クルツさん」
「いやはや、帰ってきていたのですか。大きくなりましたね」
「ええ、数日前に。挨拶が遅れてすいません」
「いえいえ、お気になさらず……おっと貴方達も一緒でしたか」
「ああ」
「クルツさん久しぶり」
「はい、こんにちは」

フードを被ったラビ達に笑顔で挨拶を交わす。彼女達に挨拶をした後、ぐるりと笑顔のクルツがクーヤに顔を向けた。

「さてさて……クーヤ君には色々とお礼を頂かないと……ね」

くわっと普段細目なクルツの目が開眼する。その迫力にクーヤが一歩たじろいだ。ラビ達も一歩後ずさる。こんなクルツは見たことが無い。

「あー、こいつらに魔力の制御を教えてくれてありがとうございました」
「それは気になさらず。その事に関する感謝の気持ちは彼女達から既に貰っておりますので」
「他になんかありましたっけ？」
「おやおや、クーヤ君は昔の恩を忘れているようで」
「治療した事です？それなら父が料金を払ったはずですが」
「いやいや、彼女達にネックレスを渡したことですよ」

笑顔で首を横に振るクルツにクーヤは恐怖を感じた。だが、表情には表さない。

「さぁさぁ、私に魔術文字を教えていただけませんか？」

ズイズイとクルツが近寄ってきた。さらには逃がさないようにクーヤの両肩をがしっと掴んだ。子供が見たら恐怖で泣き出すような笑顔を浮かべている。ラビとアリスは互いの手を握りながらガタガタと震えていた。

「もう時効だと思いますがね」
「彼女達に無償で講義をしようとしましたが、ちゃんとそれに見合う物を返してくれましたよ。それを教えた本人が施しを受けると？」
「いや、ラビ達がちゃんと料金を払ったのは貴方を守る為でもあるでしょう」

驚いた様子で掴んでいた肩を離した。開いていた目を再び細め、クルツは微笑みを浮かべた。

「ほう、それはどういういう意味です？」
「未だ魔女と呼ばれている者に牧師が施しを与えるなんて、クルツさんの立場が悪くなるだけです。こいつらは自分と同じ境遇にさせたくはなかったんですよ」
「まったくこの子達は……」

照れたような微笑を浮かべるラビ達に、クルツは精一杯の笑顔を向けた。

「ふむ、そう考えるとクーヤ君、貴方もそういった意味があるのですか？」
「さぁ、どうでしょう」
「はっきり言えばいいじゃない。魔術文字は世間に知られてない。それをクルツさんが広めようとしたら、異端として扱われるからでしょ？」

「おい、人の心読むなよ」
「隠す気もなかったくせによく言う」
「私の心配までして下さるとは……なんと慈悲深いことだ、神に感謝を」

クルツは感激のあまり、手で顔を覆った。
涙を流しているように見えたが、指の隙間から再び開かれた目がクーヤを見る。

「ですが、私は騙されませんよ」
「ちっ」
「話を逸らせたと思ったのにねぇ」
「上手くいかないものだな」

クルツの身を案じたのも一つの理由ではあるが、別の理由をクーヤは話したくなかった。
魔術文字について知れば知る程に浮かび上がってくる疑問。
それは、魔術文字をどこで教わったかという事。つまりは転生についても話さなければならないという事。
転生についてはこの聖十字教会でも教えとして語られているが、それは単なる教えだ。転生したという話が本当にある事など誰も信じてはいない。ましてや他の世界から転生してきたかもしれない、などという内容を誰が信じるだろうか。
納得のいく説明を考えるのはクーヤには億劫だった。

「私の心配してくれたのも確かでしょうが……隠している事もあるのでしょう。さぁ、迷いはいりません、私の前で告白しなさい」
「いやまぁ、それは言いたくないんですがね」
「あちらに懺悔室があります。そこでみっちり聞く事も出来ますよ」
「なかなか強情だなクルツさん」

「基本的に善い人だけどね」
「魔術文字に関してはどうしても聞きたいらしいな」

ニコニコと笑顔で懺悔室の方を指差す。何が何でも聞こうとする姿勢にクーヤはうんざりした。
今にも懺悔室に連れ去ろうとするクルツに、どう話を逸らそうかと考えていた矢先、教会の扉が開け放たれた。

「失礼します。クルツ牧師はいらっしゃいますか？」

扉の向こう側から鎧を身に着けた長い髪を後ろで束ねた女性と、短い髪の女性が姿を現した。
甲冑に包まれたその姿から騎士とすぐに理解できた。ラビ達は慌ててフードを深く被り、クーヤの背中に隠れる。

「これはこれは、ミリィセ様にリリカ様。今日はどういったご用件で？」
「ええ、この剣にもおまじないをして頂こうかと」
「クルツ牧師に祝福して貰うと武器が強くなった気がするからな」
「そう言って頂けるとこちらも嬉しく思います。畏まりました。それでは承ります」

まじないとはクーヤが教えた魔方陣の事だろう。その事はクーヤ達にもわかったので、あえて聞く事はなかった。それよりも今はこの場から、クルツや騎士から逃げる事が優先である。
剣を受け取っているクルツを尻目に、クーヤ達はそろそろと動き出す。

「おい、お前達。教会内でなぜ顔を隠している」

髪の短い騎士が目ざとくラビ達を見つけた。ラビ達の姿を不審に思い、注意を促す。息を飲む音がラビ達から聞こえてきた。

「どうした、何故フードを取らない……」

警戒した面持ちで、腰に据えられた剣に手を伸ばした。どうしようかと顔を見合わせる彼らに、もう一人の騎士から言葉がかけられた。

「……貴方達……魔女ね」

「なっ！！それは本当か！」

髪を束ねた女性の指摘に、びくりとラビ達が体を震わせる。どうしてばれたのかと顔を上げたのがまずかった。

「やっぱり……」

髪の長い騎士に確信はなかった。ただ、カマをかけ、相手の反応を観察していただけである。

ラビ達は、はっとして顔を俯かせるが、すでに手遅れだった。

「何故魔女がここにいる！くそ、門番達は何をしているんだ！」

鞘から剣を抜き放ち、ラビ達へと切っ先を向ける。今にも切りかかりそうな険悪にラビ達は怯えていた。

「なぁ、魔女が懺悔をしに来ちゃいけないか？」

「なんだお前は……一般人は下がっていろ！」

「下がれと言われても……こいつらは俺の友人でね。黙ってられねぇな……それで、魔女と呼ばれる者は神に懺悔することも許されな

いのか？呪われた存在という自分達を悲しみ、神に許しを請いに来ただけだ。そんな殊勝な行為も神は許してくれないと？」
「魔女は存在自体が悪だ！それが懺悔？笑わせるな！」

クーヤの口から出まかせが次々と出てくる。感情に訴えかけるような言葉で相手を諭そうとしたが、一向にとりあってくれはしなかった。ただ、一方的に吼えるだけ。クーヤは落胆の表情でため息を吐いた。

「はぁ、平和的に済ませようと思ったが……猿相手じゃ話にもならねぇよ」
「貴様……騎士に対してその口の訊き方はなんだ！叩き切るぞ！」
「騎士ねぇ。騎士ってのは教会の中で刃物をちらつかせる馬鹿者の事を指すのか？」
「こ、の……無礼者が！」
「お前には言われたくない言葉だな」

ピリピリとした殺意が、二人の間で交わされる。
騎士は剣を構え、クーヤの様子を観察する。そしてすぐににやり、と笑った。クーヤのあまりに隙だらけの立ち姿に、大したことのない男だと高をくくった。
クーヤはというと――。

（さて、相手のあまりの馬鹿さ加減につい挑発したが……どうしようか）

自分の軽率な発言に後悔していた。

（さすがに騎士相手はまずいよな。怪我させたりしたら色々めんどそうだ）

まず初めに逃げるという選択肢が浮かんだが、すぐに却下した。場所が悪い。
クーヤ達と教会の出口の間に騎士達がいる。逃げ出すには身構える騎士を通り抜けなければならない。さすがに危険すぎた。
かといって、迎え討つという事も考えていなかった。クーヤの懐には短剣があったが、出来れば使いたくはない。相手が切りかかって来たとしても、騎士に怪我を負わせたとなると、クーヤもラビ達の立場も悪くなるだけだ。

（なんとか、無手で切り抜け……ああ、そうか。剣を振りかざして来たのに無傷で捕らえられる。騎士にとってこの上ない屈辱だろうな）

くつくつとクーヤが笑う。
相手の力量を読み取り、自分の技量と量りあったうえで、相手を捕らえるという結論に至った。
相手が攻めやすいよう、さらに余分な力を抜いて自然体に近い構えを取った。
騎士が構えた状態から一瞬力を入れる。

「叩っ切る！」
「リリカ待ちなさい！」

リリカと呼ばれた髪の短い女性騎士は、隣にいた騎士の怒鳴り声に体を硬直させた。飛びかかろうとした姿勢のまま顔だけを隣へ向ける。

「ミ、ミリィセ様？」
「連れがとんだ無礼を……。魔女だから、悪だからといって、許し

を請いに来た者にまで刃を向けるのなら、この世の犯罪者はすべて斬首しなければならないもの」
「その通りだ、毎日が首狩り祭になるぞ」
「し、しかし！」
「貴方は黙っていなさい！神聖な場で剣を抜くなんて……貴方には後で話があります」
「はい……」

髪の短い騎士――リリカは覇気を失い、しょぼんと体を縮こまらせ剣を鞘に収めた。彼女自身も、さすがに教会内で剣を抜く行為はやり過ぎたと反省を示す。
そんなリリカを一瞥し、もう一人の騎士がクーヤを見据える。

「それにしても貴方……」

長い髪を後ろで束ねた騎士――ミリィセと呼ばれた女性が、じっとクーヤの立ち姿を眺める。骨の隅々まで観察されるような視線に、クーヤは気分が悪くなってきた。
観察する時間が経つにつれ、ミリィセの表情が険しさを増していく。身体からじわじわと殺気が滲み出ていた。

「貴方……出来るわね」
「いやいや、俺はただの鍛冶見習い。一般人だぞ」

手を顔の前で横に振り、ミリィセの評価が間違いである事を主張する。折角この場が収まりそうな雰囲気となったのだ。無駄に争う事もないと、クーヤは考えていた。
だがミリィセの考えは別だった。不思議な雰囲気を纏う男に興味を抱いていた。どの程度の力量を持っているのか試したい衝動に駆られる。

「ちょっと表で一戦してみない？」
「めんどくさいな、断る……と言ったら？」
「貴方と魔女との関係で色々嫌疑をかける事も可能よ」
「さらにめんどくさそうだ……わかった。その代わり、こいつらを無事に帰す事、それが条件だ」
「ええ、いいわよ」

クーヤの了解を取った事に顔を綻ばせ、ミリィセは出口へと向かう。リリカがその後を追った。
クーヤもその後について行こうと足を踏み出したら、両方の袖が握られた。不思議そうに振り返ると、ラビとアリスが心配げな表情で見上げていた。

「ま、なんとかするって」

彼女達の不安を拭うように二人の頭を撫でた。

ミリィセが選んだ場所は、教会から少し離れた空き地。邪魔になりそうな木も石も無い、少し開けた所であった。
クーヤとミリィセの手には木製の剣が握られている。木剣はリリカがどこからか持ってきた物だ。ミリィセは素振りなどをし、具合を確かめている。対するクーヤは葉巻を吹かすだけだった。

「ミリィセ様、何故あんな平凡そうなヤツと？」
「平凡？……平凡ねぇ」

見る目の無い部下に落胆するが、彼女はまだ未熟だから仕方ない

と思い直し、丁寧に説明を始めた。

「一見隙だらけに見えるでしょ？でもその隙に打ち込もうと思った途端……隙が潰されていた」

「……えっ？」

クーヤの目の前に立った時に試した事。幾度となく繰り返された見えない攻防。その掛け合いでミリィセはこの男は強い、と確信したのだ。

「面白いと思わない？私の殺気に全て反応して、対応していたのよ彼」

興味が抑えきれないといった感情が言葉の端から伺える。意気揚々と木剣を振り続けた。

リリカはその言葉が信じられない。

「しかし……あんな大した事のなさそうなヤツが……」

「剣士の体格ではないわね。でも盗賊……いや暗殺者のような雰囲気を感じたわ」

素振りを終え、闘気に満ち溢れたミリィセがクーヤへと近づく。気づいたクーヤは立ち上がり、相手との距離をとって立ち止まった。互いの名乗りが交わされる。

「エトワール騎士団、第2部隊隊長・ミリィセ」

「日雇い鍛冶屋・クーヤ」

互いが構える。開始の合図はすぐに訪れた。

最初の一撃目はガツン、という鈍い音が辺りに響いた。
その後は目まぐるしい攻防。相手の攻めを片方が受け、一通りの攻撃が終わったら攻守交替。その繰り返し。
カン、カン、カン。と乾いた音が交わされる。
状況はクーヤが劣勢、段々と攻撃の間隔が減っていき、守りに回る時間が増えてきた。
ミリィセの下段からの打ち上げが、クーヤの木剣を捕らえる。木剣が空へと飛ばされた。
結局ミリィセの勝利という結果となった。

「……負けだ」
「さすがミリィセ様！」

リリカが喝采の声を上げるがミリィセは納得していなかった。

「貴方……ふざけてるの？」
「いんや、俺をどういう風に思ったか知らないが、これが俺の実力だ」

クーヤの言葉にミリィセは反論出来なかった。
相手がわざと負けた様子もない。
手合わせしている最中も、これといってクーヤが手を抜いている様子は感じられなかった。ミリィセの剣を受ける姿も必死。反撃してきた剣筋も鋭かった。だが、何かが違う。その何かが理解できない。
ひどい違和感だけがミリィセに後味の悪さを残していた。

「約束通り手合わせはした。これで帰らせてもらうぞ」

ラビとアリスを連れ添って、クーヤはその場を後にした。勝者のミリィセが敗者の背を睨む不思議な結末で、この場は幕を降ろした。

第七話　鍛冶屋ｖｓ騎士（後書き）

「多少町の人達にも受け入れられたが、まだまだだな」
「騎士とか貴族とかは難しいだろう。あいつ等プライド高そうだし」
「むしろ、牧師のクルツさんと仲良くなれた事は救いよね」
「クルツさんか……あの人聖職者だが、なんか黒くねぇか？」
「ああいう人だ」
「……そうか」
「ちょっとクーヤと似た所あるかも」
「どうだかねぇ」

第八話　刃鳴り、欠片散る

第八話　刃鳴り、欠片散る

「こうやって食材を順々に入れて……あとは煮えるのを待つだけだ」

炎が大きめの鍋を下から炙る。

鍋の中には綺麗に整頓された食材が並べられ、ぐつぐつと煮だっている。食欲をそそる香りが鍋を囲む者達の鼻腔をくすぐった。

飢えた獣が５匹、今か今かと待ち望んでいる。

「よし、そろそろいいか」

クーヤの掛け声と共に、周囲から一斉に手が伸びる。その全てをクーヤはお玉で打ち落とした。抗議の視線が、クーヤに刺さる。

「順番だ。ほれ、お椀を出せ」

順々にお椀の中へと鍋で煮込まれた具材をよそっていく。それぞれ満たされたお椀に、子供のように輝いた笑顔を浮かべていた。

「いただきます」

食事前の挨拶もよそに、クーヤ以外の者がお椀の中身に手をつけた。

がつがつと行儀の悪い音が聞こえる。ため息を吐きながら具材が煮込まれたスープを一口飲み、満足気に頷いた。

「美味しい」「美味しいな」「旨い！」「旨いっす」「旨すぎますよ」
「もうちょっと感想の幅を広げろ」
「こんな旨いもんは旨いとしか言いようがねぇって！」

イースが笑い声をあげて顔を綻ばせた。他の者も頷いて同意する。
やれやれと言葉を漏らすクーヤだったが、彼らが喜んでいる顔と率直な感想に悪い気はしていなかった。

今日は夕方からラビとアリスの家・通称魔女の家で鍋が開かれた。
クーヤは元より、イースとショル、ウィムの3人もこの席に座っている。
家といっても、6人が入るにはあまりに狭い家なので、正確には魔女の家の前だ。6人が家の前で鍋を囲み、机や椅子も無く地べたに座って食事をしていた。

「同じ食材使ってるのに、なんでこんなに美味しいの！？」
「がふがふがふ」
「やはり肝は出汁と塩加減だな――」
「ずずずずずず」
「あ、こら！肉ばかり取るな！」
「後は具材の湯で加減とかもな――」
「へっへ～、早いもの勝ちっすよ」
「あ～、茸美味しい」
「さて、もう一杯頂こうか」
「お前ら落ち着け」

順調に鍋の中身は消費されていく。
イース達が持ってきた酒が振舞われ、皆の気分が高まっていく。
高揚度が最高潮に達しようとした時、遠くから声が聞こえた。

「考え直して下さいミリィセ様！こんな吹き溜まりのような場所に来るなんて」
「だったら貴方は帰ればいいじゃない」
「魔女の住処に一人で向かわせる事なんて出来ません」
「貴方に心配されてもねぇ」

見覚えのある女性が姿を現した。二人とも鎧に身を固め、この場には似つかわしくない格好だ。

「お邪魔するわね」
「ようこそ、吹き溜まりへ」

クーヤが皮肉を込めて歓迎する。

「おいおい、ミリィセ隊長かよ。お前達一体何したんだ？」
「なに、この前剣を交えてね。木剣だけどな」
「あら、貴方達は確か……」
「ご機嫌麗しゅう、ミリィセ隊長、リリカ様」

イースから聞きなれない敬語が漏れる。流石に騎士に対して普段のような話し方では不味いのはわかるが、あまりにも似合っていなかった。

「冒険者……だったわね。噂は聞いているわ。商人達になかなか好評よ。腕の立つ奴等が居るってね」
「大変痛み入ります」

イース達は路銀を稼ぐために商人達の護衛を主に行っていた。別の町へ向かう商人達の馬車を山賊や魔物から守ったり、学者から研

究対象の鉱物や薬草の採取を頼まれたりしていた。ラビとアリスもその手伝いをしたことがある。
市民の評価とは裏腹に、騎士達からは嫌悪の対象となっていた。たとえ腕が立つものでも、所詮ならず者はならず者。大きい顔はされたくない。

「魔女に、野蛮人……ミリィセ様今からでも遅くはありません、引き返すべきです！こんな場所にいたら私達が穢れます！」

リリカが汚いモノでも見るような目で彼等を見下す。ラビとアリスはこの程度の罵倒は慣れているので気にしていない。クーヤも気にせずお椀のスープをすすっていた。だがイース達は別だった。

「ず、随分な言われようっすね」
「騎士の大半はこんなものですよ……ほんと、切り刻みたくなる」
「ウィム落ち着け」

騎士達が裏で冒険者などをどう囁いているかなど知ってはいたが、面と向かって言われたのはこれが初めてだ。今にも魔術を使おうとするウィムをイースが諭す。

「んで、騎士さん達はどうしてここへ？なんとなく予想は付いてるが」
「再戦を申し込みに……ね」
「それは普通、負けた者が行うものじゃないか？」
「納得いかないのよね。木剣で貴方の実力を測ろうというのが間違っていたわ……今度は、真剣でやりましょう」
「やれやれ、物騒なヤツだ」
「さぁ、お互いの得物でやりましょう」
「お断りします」

「なあに？怖いの？」

クーヤがため息を吐く。

この前の手合わせでミリィセの実力は十分に承知している。彼女の剣術には足元にも及ばない。そんな強者と真剣で立ち会うなんてもっての外だった。

なにより今は食事中だ。

「っていうか、食事の邪魔しないでくれない？」

「それに酒が入っている者に戦いを強要するのは如何なものか？」

ラビとアリスの棘のある言葉が騎士たちに向けられる。二人とも町中で騎士に怯えていた様子とは違っていた。

彼女達が町中で騎士達を避けているのには理由がある。

別に騎士が怖いわけではない。見つかって争いが起きる事を避けていた。魔女と騎士が争う事になったとして、勝敗がどうなろうと力を使った時点で彼女達の立場は悪くなる。騎士に刃向かうというのはそういうものだ。勝ったとしても、負けたとしても負けなのだ。

普段の彼女達ならば例えどんな難癖をつけられようと、気にもせず無難な対応をしただろう。

だが、彼女達は苛立っていた。

ここでの娯楽は少ない。その中で食事は一番の楽しみだ。

折角の楽しい食事を邪魔され、場がしらけてしまった事に腹を立てている。

「魔女が喋るな！汚らわしい！お前達のような化け者が生きていられるのも王族の慈悲と思え！」

リリカから侮蔑の言葉が吐き出される。
その言葉にイース達は頭にきた。立ち上がろうとするイース達をラビとアリスが手を突き出して諌める。
イース達の行動を止めはしたが、彼女達も頭にきている。罵詈雑言などどうでもいいが、食事の邪魔をされる事は許せない。ラビとアリスはリリカ達を睨みつけた。

「なんだその目は。騎士に刃向かう気か？魔女風情が舐めた態度を取るんじゃない！」
「あー、お前、ちょっと黙れ」

抑揚のない言葉が聞こえた。皆の視線がクーヤに集まる。持っていたお椀を置き、リリカ達に顔を向けた。

「いいだろう、戦ってやるよ。アリス、俺の武器を」
「……ああ、わかった」

いいのか？と聞き返そうと思ったが、クーヤの表情から決意を感じ取りアリスは素直に従った。家の中へと取りにいく。

「あら？やりたくなかったんじゃないの？」
「いつまでも暴言聞きながらじゃ飯が不味くなる」
「やっとやる気になったわね」
「そこの短髪を使って挑発したくせによく言う。……あんた性格悪いな」
「どうしても戦いたかったもの。今のは褒め言葉として取っとくわ」

アリスが家から出てきて、クーヤに得物を渡す。
クーヤに渡された物は鞘に収まった細身の剣と同じく鞘に収まったナイフ、そしてL字型の金属の塊が二つ。

「んー、こっちはいらなかったんだが。まぁいいか」

クーヤの服装は簡素な黒色のコットにベルトを巻いている。左の腰には細身の剣を、右の腰にはナイフを、L字型の金属は後ろの腰へ。ベルトと服の隙間にそれぞれ差し込んでいく。

そして準備が整った後、右腰からナイフを取り出した。

「さて、いつでもいいぞ」

「それじゃ、やりましょう」

準備の整ったクーヤはミリィセと対峙する。ミリィセも剣の柄に手を伸ばした。あの柄には見覚えがある。

クーヤが戦う事を承認した理由の一つ。あの剣の刀身を見たいという興味心。ミリィセがその剣を携えてやって来た時からずっと気になっていた。あれは確か子供の頃に見た記憶のあるものだ。

戦わないが剣だけ見せてくれ、とは流石に言えない。

ミリィセが剣を抜き放とうとすると、二人の間にリリカが割り込んできた。

「待て！お前の相手は私がする！」

「リリカ……邪魔しないで頂戴」

「ミリィセ様の剣をこんなクズを切って穢したくありません」

ミリィセは苛立った声を出すが、リリカの剣幕に興が逸れたような表情を示す。目の前の男がどの程度の技量があるか確認するのもいいだろう、と打算的な考えがよぎった。

柄から手を離した事を了承と受け取り、リリカは腰から剣を抜き放った。

「喜べ、私直々に相手してやる」
「そりゃどうも。ああ、今からやるのは騎士と一般人の争いじゃない、個人同士のお遊びだ。傷を負ったからって貴族に泣きつくなよ」
「ほざけ！どこまでも無礼なヤツだ」

例え挑発されたからといって一般人が騎士を傷つける事は、どのような結果となろうとも相手をした方が悪くなる。それが遊びという手合わせだとしても。
クーヤの言った言葉にあまり意味はない。
ただ貴族に話が出回らなければいいのだ。幸いこの場所にはクーヤ達６人と騎士２人だけだ。辺りには誰も居ない。この中で誰も告げ口しなければ、騎士と戦ったという事実は広まらない。
騎士が傷を負って無様に泣きつかないよう、釘を刺しただけだ。

「一つ言っておく。俺はお前のような先入観だけで吼える輩が、大っ嫌いだ」
「魔女に加担するお前は悪だ。私が叩き切る！」

リリカが剣と盾を構える。
剣はブロードソード。片手でも扱える刃渡り６０センチ程の剣だ。盾は銀色に輝く、丸型の盾。中心に王冠が描かれ、細部まで文様が刻まれている。
構えは半身、左足を前に出しつま先を相手に向ける。右足は体と同じ方へ向いている。左手に持った盾で体を覆うようにし、鞘から抜いた剣は中段に構えた。
大陸に伝わるオーソドックスな構えだった。

「どうした！構えないのか」
「悪いがこれが俺の構えなんでね」

対峙するクーヤは最初に出会った時と同じように自然体。
体の正面をリリカに向け、右手はだらりと下ろしている。左手に握ったナイフをユラユラと揺らしていた。
手に持ったナイフは肉厚で、多少の衝撃では折れる事は無い作りとなっている。刃渡りは４０センチと短剣の中では長めの物だ。

「どこまでも人を馬鹿にしたヤツ……だ！」

リリカが掛け声と共に飛び込んできた。
一足飛びでクーヤとリリカの間に存在した空間が潰される。盾を前方に突き出し、突進してくる。
盾の横から剣の切っ先が姿を現す。引き絞った弓矢のようにそれが放たれた。

なかなかに速い。
眼前に迫る白刃を前にして、クーヤはそう感想を漏らした。首をかしげ、その刃を避ける。風切り音が耳に残った。
自分の一撃が避けられた事にリリカは驚いた表情をするが、すぐに顔を引き締める。

クーヤの首の横で縦に振るわれた刃が横に倒された。次がどのような攻撃を仕掛けてくるかを理解し、腰を落とした。頭上を刃が通り過ぎる。
振りぬいたリリカの体に大きな隙が出来た。盾と振りぬいた剣の間にある身体。腰を落とした状態から下半身に力を込め、左手に持ったナイフを突き出す。

ガツン、という金属を叩く音が響く。
クーヤの攻撃をリリカが盾で防いだ。互いの左腕に衝撃が走る。

リリカが一旦体勢を立て直すために退いた。
クーヤは再び自然体の型を取り、そして話しかけた。
「盾というものは便利なものだな。敵の刃を防ぐのはもとより、攻撃の初動を隠す事もできる。
だが、行動も制限される。重い金属の塊を持つから動きも鈍い、盾を構えた状態じゃ初動が見えないとしても攻撃の幅は限りがある」
「なんだ、何が言いたい」
「わからないか？初動を隠した一撃目以外、俺に当てる事が出来ないってことさ」
「舐めるな！！」

叫び声と共にもう一度切りかかってくる、クーヤはその相手の攻撃を避け続けた。
上段から振り下ろされた刃を、身体を横に向ける事でかわす。
下段から斜めに振り上げられた刃を、一歩後ろに下がる事でかわす。
横に薙ぎ払った刃を、腰を後ろに引く事でかわす
連続の突きを、上体だけを反らしてかわす。
避ける、避ける、避ける。
空気だけを切る剣筋が幾重にも描かれた。

やがてリリカが肩で息をし始める。

「はぁはぁはぁ、くそ！」
「どうした？もうお終いか？」
「っ！うるさい！」

荒くなった息を深い呼吸で押さえ込む。空気を一度大きく吸い込み、歯を食いしばる。体に力を入れ、今日何度目かになる突撃を繰

り出した。

「あああああああ！」

今までで一番の踏み込み。気合の乗った一撃。上段からの気迫が篭った攻撃。

振り下ろされる刃、クーヤはその刀身にナイフを滑らせる。

シャリン、と甲高い音が聞こえ、リリカの剣があらぬ方向へと逸らされた。

「もう、いいだろう」

「はぁはぁはぁ、騎士が……はぁ、負けるわけにはいかない！」

「はぁ。じゃ、その騎士の魂を砕いてやろう」

クーヤは左手に持ったナイフを逆手に持ち替え、左腰に添えられた鞘を親指と人差し指だけで握る。右手はその柄に添え、身を屈めた。背中がリリカに向けてあらわになる。

「はぁはぁ、どうした！そんなに身を縮めて、怖気づいたか」

リリカの声を聞き流し、鍔を親指で押し、刃を少しだけ出す。慎重に相手との間合いを測る。鞘に収められた刃の長さを考える。つま先に力を込める。クーヤが動き出す。

そして、リリカはクーヤを見失った。

「は？」

構えられた盾による死角に滑り込む。すり足での体移動。地面を滑りながらの踏み込み。リリカが気づいたのは、盾では隠し切れな

い程クーヤが近づいて来た時だった。
クーヤの右足が一歩、前へ踏み込む。

「一つ」

クーヤの鞘から刃が滑り出した……気がした。
その剣筋はリリカには見えていない。剣速が彼女の動体視力を上回る。

クーヤの腕を振る。何の衝撃も感じない。間合いを誤ったか……と考える彼女の左手に違和感があった。

（盾が――軽い？）

そう認識後、彼女は信じられないものを見た。

盾の上半分がずり落ちた。

「――え？」

彼女はそれを認識出来ない。ガランと地面に転がる音を聞いても、その事実を受け入れられない。
盾が――切られるなど。

「二つ」

振った右腕のベクトルをそのままに、さらに上体を右に捻る。今度は鞘を掴んでいた指を離し、ナイフを逆手に持った左手が放たれた。

その速度はまさに閃光。
弧を描く軌跡はリリカの持つ剣の根元へと伸びる。
彼女には見えていない。クーヤの言葉に反応し、持っていた剣の柄を握り締めるだけだった。
すぐ後に衝撃、そして今度は剣が軽くなる。

「――あ」

クーヤの短剣が、彼女の剣を根元から砕く。無数の欠けた破片がひらひらと、折れた刀身がゆっくりと地面へ落ちてゆく。
さらにクーヤは左足を一歩前に踏み出した。

彼女は理解出来ない。
攻撃を守る為の盾が切り落とされ、攻撃を行う為の剣が短剣なんかに破壊される。

（わからない、わからない）

リリカの目の前で男が背を向けた。無防備な背中。巡ってきたチャンス、だがどうする。剣は砕かれた。使えない。わからない。
さらに体が回転する。彼女はすでにその様子を見ているだけ。振り返ったクーヤの眼光が彼女を射抜く。
まだ何か来る。そう理解していても彼女の体は固まり、防御に回る事も叶わなかった。

最初に感じたのは右頬を後方に吹き抜ける風。
そして、顔の隣に何かがあるという存在感。

「終いだ」

クーヤが告げる。
彼女は目線だけで隣にあるものを確認してみた。
右足だ。
体を回転させながら蹴りをしてきた。という事実を愚鈍な頭が理解する。
クーヤは蹴りを放ったままの体勢から両足を地面につけた。
右回りに繰り出された斬撃、斬撃、そして蹴り。
鞘から放たれた剣筋も、追撃で来た攻撃も、最後に前方から放たれた蹴りも彼女の目には追えていない。唯一見えたのは2撃目の直後から体を反転させた秒にも満たぬ時間。
曲芸のような身体操作。息もつかせぬ連撃。それをクーヤはやってのけた。
「お前の負けだ」
勝負が決着した。
完膚なきまでの敗北。
リリカの剣術はクーヤを一切捕らえること無く、身を守る為の盾は切り落とされ、騎士の誇りともいえる剣も砕かれた。
砕けた剣の破片と、半分に切り落とされた盾を見つめ、彼女は悟る。
自分は負けたのだ、と。
「う、うわあああああああああ！」

彼女の慟哭が、夕日に沈む森の中に木霊した。

第八話　刃鳴り、欠片散る（後書き）

「さて、やっとまともな戦闘シーンを書けたわけだが……」
「最初……右回りの部分を左回りで書いていたそうよ」
「随分奇抜な動きをするな、と知人に言われて初めて気づいたようだ」
「右も左も分からないのか……」

第九話　刀ｖｓ剣

第九話　刀ｖｓ剣

「……何故最後のを外した」

「別に手加減とか騎士道精神じゃないぞ。そんなもの俺にはない」

刃を鞘に収めていると、リリカが掠れた声で呟いた。誤解を招かないよう、言い聞かせる。

「俺の蹴りくらい喰らったって、たかだか鼻がつぶれるか、首に障害が残る程度だ。死にはしない」

リリカは心の中で嘘だ！と叫んだ。

体重の乗せられた脚、身体を回転させる事で生まれた遠心力、目に捉えきれない程の速度。それらが合わさった力。

人の首を折るには、十分な威力だった。

「だが、あそこに居る怖い人がな、当てたら切るっていう殺気を投げて来たんで止めといた。感謝しとけよ」

顎で示したその先には、ミリィセが両腕を組んで立っていた。右手で口元を隠し、くすくすと笑い出す。

「ふふ、貴方嘘つきね」

ミリィセは先程のクーヤの動きを思い浮かべ、砕かれた剣と切断

された盾の両方を見た。

「一撃目も、二撃目も、やろうと思えば腕を切る事だって出来た。最初から当てる気なんて無かったのでしょう？」

クーヤの連撃。その一つ目と二つ目。

最初の斬撃は盾を持つ取っ手部分を避けるように一線されている。取っ手と切断面との距離わずか１センチ未満。やろうと思えば盾ごと指を切り落とす事も出来た。わざと外した。

二撃目の剣は根元から砕かれている。柄から伸びる刀身は短く、最早短剣としても機能しないだろう。完全に壊されていた。ここまで壊すにはよほど根元を狙わないと出来はしない。腕を狙った方が余程簡単だろう。だがしなかった。わざと外した。

「不思議な事言うな。止めた本人が」

「今そう思っただけよ。あの時は本気で当てると思ったわ」

そして最後の回転蹴り。

わざわざ高い位置にあり、範囲の狭い頭部を狙った。クーヤの履いている皮製の靴では堅い鎧に守られた部分を狙わなかったのは分かる。だが、彼女達は完全装備で来たわけではない。胸の周囲を守る胸当てや脛を防護する脚甲はあるが、下腹部は鎧に包まれていない。低い位置にあり、範囲の広い下腹部を狙わなかった。わざと外した。

そう考えると、最初の反撃もリリカが防御する事が分かっていながら行ったものかもしれない。

クーヤの攻撃はリリカに当てる気など最初からなかった。手加減されていた、とミリィセは言う。

リリカはミリィセの言葉に愕然とした。なんとなく最後はわざと外したと理解していた。だが違う。最初から最後まであの男は手を抜いていた。最初に告げた言葉通りだった。自分がいかに真剣に戦っても、相手は単なる遊びだったのだ。

「私とやる時はどんな風に遊んでくれるのかしら」

じわり、とミリィセから闘気が漏れる。それは静かで、恐ろしいまでの威圧感。クーヤもミリィセから溢れるプレッシャーは感じていたが、相変わらずの無愛想な声で返した。

「あんたとは出来ればやりたくないんだがなぁ」

「連れない事言わないでよ」

遊ぶ事を断られた子供のように、彼女は拗ねた。クーヤは本心で言ったのだが、嘘つき呼ばわりする彼女はその言葉をまともに受け入れなかった。

話を別のものに変え、先程から気になっていたクーヤの左腰に差している物を見る。

「それ変わっているわね。細身で片刃、それでいて恐ろしいほど良く切れる。一体どんな武器なの？」

興味津々といった様子で、クーヤの得物を眺めた。

興味を抱くのも仕方が無い。剣が斧によって砕かれた所を見たことがある。盾が鈍器によって破壊されたという事も聞いた事がある。しかし盾を――金属を壊すのではなく、切断する。分厚い金属を切る武器など、聞いた事も見た事もない。

一体どれほどの切れ味があればそんな事が可能なのかと、ミリィセはクーヤの持つ武器に興味を抱かれずには居られない。

「これは日本刀……刀という。鋳型による大量生産や、一枚の金属から切り出す方法とはまた別の造り方だ」

日本刀。刀。

初めて聞く武器の名前に、ミリィセは心が躍った。一刻も早く自分の剣と打ち合いたい。焦る心を理性で無理やり押さえ込み、表面上は落ち着き払ったミリィセはクーヤに再び質問した。

「……貴方が、作ったの？」

「そうだ。俺の中で今のところ一番の品だ」

「そう……私の剣も良い物よ」

スラリとミリィセの鞘からその刀身が覗く。

鞘から抜けきったその全長は約９０センチ。鍔の部分が軽い曲線を描く、特徴的なロングソードだった。

その剣は日が落ち始め、薄暗くなりだしたこの場所でも神々しく光って見えた。程よく研磨され、金属そのものの美しさが輝いている。

「この国で最高峰の一つ。昔、この国に立ち寄った有名な鍛冶職人が打った物よ」

「ああ、よく知ってる」

クーヤは剣をじっと眺める。やはり、綺麗だ。と感想を呟いた。

「俺の父親の作品だからな」

皆の息を飲む音が聞こえた。

「貴方の……お父上……」
「ああ」

クーヤが昔の記憶を思い起こす。
子供の頃ここで生活した記憶。父親との生活。その中で、父親が作り上げた数本の剣。そのどれもが力強く、美しく。そのどれもが輝いていて見えた。
父親はこんなものまだ世界一なんて呼べる代物じゃないと言っていたが、子供心にクーヤは目の前の数ある剣に魅了された。
結局、満足のいかない父親はそれら剣を売った。結構な値段で売れたらしいが、その金もまた別の鉱石に変わり果ててしまう事となる。
ミリィセが持つ剣はその数本の内の一振り。再び父親の作品に出会えた事がクーヤには嬉しかった。

「そう……だとしたら今からの手合わせは親子同士の戦いでもあるわけね」
「どういう意味だ？」

クーヤは本当に何を言っているのかわからないように訊ねる。

「貴方の武器と、お父上の武器……どちらが強いかという事よ」

その意見にクーヤは何も分かっていないな、とため息をついた。

「それは無理だな」
「あら、どうして？貴方はお父上を超えたかどうか知りたくないの？」

本当に分からないのか？と訊ねようとして、やめた。彼女は騎士であり、鍛冶屋ではない。武器の詳しい詳細など知りはしないだろう。

「日本刀と西洋剣か……どちらが優位かなんて比べるのも馬鹿らしい。刀と剣じゃ作る工程も、武器としての意味も違う」

「……どういう事？」

「剣は叩き切る事を目的としていて、刀は断ち切る事を目的としてるってことさ」

剣と刀。戦で使われてきたこの二つ武器は似ているようで異なるものだ。

剣は血が付いて切れなくなったり、刃が欠けて使い物にならなくなっては武器としての実用性に欠ける為、切れ味よりも丈夫さが重視されている。戦闘で打ち合う事を想定し、真正面から打ち合っても壊れないよう頑丈な作りとなっている。その分切れ味は二の次だ。

刀は目標物を断ち切るための道具として造られている。折れず、曲がらず、よく切れるというという要素を非常に高い次元で再現したものだ。

正面からの力比べなどもっての他だ。打ち合う際は鎬と呼ばれる部分を用いるが、刃が消耗するので進んでやる者などいない。いかに相手の攻撃を避け、自分の攻撃を届かせるかという事を主に置いている。

農民が起こした反乱では鍬や鎌が主要武器として使われたと聞く。剣を持つ兵士達と研いだ農具で農民は渡り合った。そう考えると、刃物の鋭利さというのは戦においてそれほど重要視されていないよ

うである。
切れ味よりも頑丈さ。複雑な工程のため、造るのに時間も手間もかかり、高い技術が必要となる刀よりも、大量生産できる物の方がこの世界では好まれた。

「剣と刀が打ち合えば確実に重量のある剣が勝つ、というか刀の細身じゃこちらが打ち負けて折れるか曲がるな」
「……でも。その刀は盾を切ったじゃない」

盾を切れるのだから、剣も切れるだろうとミリィセは考えていた。打ち合えば剣が刀を壊すか、もしくは刀が剣を切るか。それで決着が付くだろうとミリィセは言う。

「打ち合いになったら、って言っただろ。動いていない金属なら切断出来る。あんたはそんな隙を見せてくれるのか？」

つまりは武器の特性。打ち合ってどちらが優れているのか、なんて単純な決め方ならばクーヤは重量感のある斧でも持ってくることだろう。

「それじゃ……私達はどうやって決着がつくのかしら」
「決まってる――」

そろそろ始まる。
クーヤとミリィセの雰囲気を察知し、周りの者が息を飲んでその時を待ち望んでいた。

「互いの業で、だ」

そしてそれぞれが構えた。

ミリィセが構える。
左足を前に、右足は後ろに。重心はやや前へ。左足の親指に力を込める。
両手で長剣の柄を握る。右手を鍔の部分に近づけ、少し間を空けて左手も握る。中段に位置した長剣をゆっくりと持ち上げ、右肩の上へ担ぐようにして止めた。

クーヤも構える。
盾を切った時と同じように右足は前へ、左足は後ろに引く。腰を捻り相手に背を向け低く構えた。
右手は柄に添えるだけ。左手は鞘をしっかりと握り、親指で少し刃を押し出す。先程と異なるのは、短剣は鞘に収まったままだ。

「あら、脱力した状態が貴方の構えじゃないの？」
「驕ってるヤツになら……な。隙だらけの構えをしてれば何も考えず突進してきてくれる。やりやすい事この上ない」

視線はミリィセに向けたまま、視界の隅に映るリリカの姿を確認した。リリカは悔しそうに歯を軋ませ、目もくれないクーヤを睨んだ。殺意を向けられたがそれを無視し、クーヤはミリィセの挙動にだけ意識を向ける。

「あんたみたいなのとやる時に、自然体で構えるなんて馬鹿なこと俺はしない」
「本気なのね……嬉しいわ。私もそれに答えないと――ね」
「もうちょっと侮ってもいいぞ」
「無理ね」
「やれやれ、やりにくい」

軽口が交わされる。二人とも余裕があるわけではない。逆だ。
彼らの構えに付け込むべき隙は見当たらない。精練された隙の無い構え。付け入る所をお互いが探りあう。
片方が足をピクリと動かせば、一方の肩が僅かに動く。一方の足が地面を数センチ滑れば、片方の手指に微かな力が込められる。片方が首を動かせば、一方が視線を動かせば、切っ先が動けば、口元が動けば。そんな動作の繰り返し。フェイントの掛け合い。探りあい、誘導。
会話もその手段の一つだ。会話によって意識を、視線を逸らそうとする。結局無駄な行為で終わり、二人とも黙る。

辺りがしん――と静まる。
息を短く吸い、僅かに吐く。じりっと互いの間が狭まる。

「――ごくっ」

誰かの唾を飲む音が聞こえる。その音もすぐに闇に飲まれた。
鼓動が早鐘のように鳴る。緊張で心臓が張り裂けそうだ。

どちらかの足が再び前に進む。ミリィセの間合いが近い。
鞘に収められた刀の長さを測る事は出来ないが、遠目で見た刀の全長と自分の長剣の長さを比べ、ミリィセはほんの少しだけ自分の剣の方が長い事を知っている。それはクーヤにもわかっていた。
クーヤがミリィセに刃を届かせるには、まずミリィセの間合いの中へ入らなくてはならない。ミリィセはその瞬間に狙いを定めた。
クーヤの右足から砂利の擦れる音。そして右肘がミリィセの間合いに触れた。

「はっ！」

ミリィセの短い掛け声と共に上段から剣が振り下ろされた。
短い踏み込み。切っ先に体重を乗せた一撃。狙いは右肩。腕を切り落とさんとする気迫が剣に篭っていた。
ミリィセの間合いに肘を突き出し、すぐに引っ込めたクーヤの行動は早かった。すり足での僅かな移動。可能な限りの最小限な回避。紙一重で剣筋が横を通り過ぎる。隣の空気が焼ける。
焼けた空気が頬を叩くのを感じながら、クーヤは右手で柄を軽く握った。

（来る――）

刹那。ミリィセは行動を切り替える。
指を締め、左手は引き右手は押すようにする。まるで雑巾を絞るような動作。それだけで振るった剣が途中でピタリと止まる。視界の中でクーヤの肩に力が込められたのが見えた。視線の中心はクーヤの右手、ではなく右足の先。
踏み込んだ左足に力を込めた。そして筋力全開。左足を蹴った。背筋にも力を込め、前方に傾いていた上体を全力で後ろに反らす。全身による回避行動。間に合うか。

キンッ――。

その音は静まったこの場でよく響いた。
クーヤの刀は鞘に収められている。周りの者は何が起きたのか分からなかった。ただ息を飲んでその結果を見守る。後ろに跳び退ったミリィセの首元に鋭い痛みが走った。
スッと首筋に一本の線が引かれる。

「参ったな……」

赤い。赤い筋が線の端からこぼれた。

「これをかわすか」

手ごたえが無いことを知ると、クーヤはその場で地面を蹴り後ろへ下がって間を空ける。緊張を解く長いため息があちこちから聞こえた。

ミリィセは首が繋がっている事を確認すると、構えを解いたクーヤと同じく剣を降ろして緊張を極僅かに緩める。

「……貴方の剣速異常よ。首が飛んだと思ったわ」

「それを避けたあんたも異常だぞ。見えたのか？」

「見て避けたわけじゃないわ……」

「間合い、か」

ミリィセはクーヤの剣筋が見えたわけではない。ただ、なにか光ったという事は認識しているが、その程度だ。避けた理由は間合いにある。

リリカに向けた一撃。その時に踏み込んだ足と盾との距離。そして技を放った後に見たその刀身。目測ではあるが、大体の間合いを把握していた。狙ってきた場所はクーヤから放たれた殺気でわかっている。剣筋は見えない、よってクーヤの右足と自分との間を空けた。

「恐ろしいヤツだな。たった一度、しかも遠目で見ただけで間合いを把握したのか」

「殆ど運よ。それに一度見てなければ今のでやられていたわ」

「運だろうがなんだろうが、避けた事には変わりない」

「そうね……」

くすっと自傷的な笑みを浮かべる。

「それとも避けるのを分かっていたのかしら。わざと遠い間合いから放ったのかもしれないわね」

「どう思おうが勝手だが……それに頷いたら、あんたは負けを認めてくれるか？」

「いいえ。勝負を侮辱したと怒るわね」

「やれやれ」

真性の戦闘狂（バトルマニア）だとため息を落とした。

ミリィセが再び構える。今度は剣を中段に。腰を落とし、相手の出方を窺う構えだ。ミリィセの構えを見た後、クーヤは右手で柄を握る。

そして鞘からその刀身が姿を現した。

「えっ？」

「どうした？まさか居合いだけが刀の攻撃手段とでも思ったのか？」

抜いた刀を下段に構える。

陰るその場に刃が輝く。遠目で見たときは細部まで見ることが出来なかった刃。その作品が今、ミリィセの目を奪う。

片刃で、緩やかな反り。刀身に浮かぶ刃文。刃の曲線も、波立つ模様もその全てが美しい。

ミリィセはその美しい刃に魅了された。

「……綺麗」

「ほら、隙が出来てるぞ」

クーヤが地面を滑る足運びで近づく。流れるような動作で斬撃を繰り出した。
ミリィセの視界で右下から左肩への剣筋が流れる。クーヤの言葉で気を取り直したミリィセは上体を反らし、回避に移る。迫る刃を紙一重でかわす。
クーヤが半歩踏み込む。右上段へ振りぬいた刃が八の字の軌跡を描きながら振り下ろされる。
斬撃。
左下への剣筋はミリィセの体を掠める。しかし、胸当てに阻まれた。鎧は切れるが、中から血が溢れる事は無い。気に留めず、クーヤはさらに攻撃を繰り返す。
腹部への胴払い、頭部への斬り落とし、肩を狙った袈裟、逆袈裟。
斬る、斬る、斬る。
そのどれもが必殺の一撃。矢継ぎ早に迫る死線。
ミリィセは回避に専念してその死線を潜り抜ける。余裕は無い。だが、いつまでもこうしていられない、と思う。

「ふっ！」

攻撃直後の隙を見つけ、ミリィセが反撃を繰り出す。
まずは突き。当てる気はあまりない。これは自分の間合いの確認と、相手を牽制し自分の間合いで戦うための布石だ。
刃を短く引き戻し、踏み込んで籠手を打つ。また一歩踏み出し、太腿へ向けた下段への突き。そこから胸部辺りへの短い切り上げ。そしてまた籠手。クーヤはその全てを必死に避けていく。
短い連携を繰り返すミリィセ。最初のような大振りは行わない。地味な攻撃が続く。小さい動きの応酬に、堪らず後ろに飛んで間を空ける。追撃が来ると予想したが、ミリィセは追って来ない。彼女も体勢を立て直すために一旦引いた。

「長剣ってのはもっと力任せに扱うものと思ってたがな」
「どこの誰を参考にしたかわからないけれど、そういった部分が無いとは否定出来ないわ。でも剣術は本来こういうものよ」
「はぁ、こりゃ骨が折れそうだ」

左手で右腰の短剣を抜く。抜いた短剣を彼女へ向け、右手に持った刀は後ろに引き、下段に下げた。二つの刃でクーヤは構える。

「あら、いいの？」
「なにがだ」
「片手じゃ力が込められないじゃない」
「……別に骨まで断つ必要は無いだろ」

二刀流というのは確かに手数が増え、一見有利に見える。
だが片手で扱う分、両手で扱うほど力が込められない欠点も持ち合わせている。ミリィセが指摘した部分はそこだ。

「刀の切れ味は知っての通りだ。肉に当て、刃を引くだけでよく切れる。骨までは断てないが……肉を切り、血管を斬り、筋を断つ。それだけでその部分は使い物にならない。ナイフは……まぁ、主に防御用だしな」

その部分が四肢ならばそれは単なる枷となり、腹部ならば重要な臓器を、そして首筋ならば命も絶てる。クーヤはそう語る。

「そう――ならいいわ」

ミリィセが動き出す。
その後の立ち合いも苛烈を極めた。

第九話　刀ｖｓ剣（後書き）

「一話で収めようとしたらまさかの二部構成！」
「計画性がないな」
「まぁ、いつものことだ。それに本来なら木剣から次の話まで一話で作ろうと思っていたらしいぞ」
「本当に計画性がないな！」
「いつものことだ」

第十話　決着

驚きがあるから人生は楽しい。

第十話　決着

リリカは目の前で繰り広げられる乱舞に目を丸くした。

地面を這うようなクーヤの体移動。下段からの切り上げ。それを軽やかな足捌きでかわすミリィセ。

ミリィセの打撃のような面打ち。それをクーヤは短剣で受け止める。空いた右手で刀を首元に振るった。ミリィセは体ごと長剣を押し込み、クーヤの体勢を崩す。それと共に押し返してきた短剣を弾き、後ろへ短く飛び退った。ミリィセの前髪が数本宙に舞う。

ミリィセの突きがクーヤの腹部へ向かう。体を右に捻りながら短剣でその刃を反らし、回転を生かした肘鉄をミリィセの頭部へ向ける。ミリィセは頭を沈ませ肘を避け、その場で足を踏み込み長剣を切り上げた。クーヤも顔を反らすが、切っ先が頬をなぞる。左の頬から血が流れた。

互いの力は拮抗している。

リリカはミリィセとここまで戦える者を、自分達の団長以外見たことが無い。

そして、その相手の動きにも驚愕する。先の動きを予想できない。緩やかに動いたと思えばいきなり加速する。体移動も直線的なものもあれば、滑る様に弧を描くものもある。その動きに対応出来るミ

リィセに感嘆する反面、自分の力不足が思い知らされる。

本当に自分とやったときはお遊びだった、と悔しく思った。

地面を蹴る音、刃物が振るわれる音、長剣と短剣がぶつかる金属音、そして飛び散る火花。そのどれもが遠い世界の出来事だった。

一つの攻めに、一つの守りに、数々の動作にリリカは痛感する。これ程までに彼等とは差があったと。

どちらが勝つかリリカにはわからない。

だが、ミリィセには負けて欲しくないと思っている。ミリィセはリリカの憧れだ。

ミリィセとはリリカが従騎士の頃からの関係だ。先輩騎士の後をついて身の回りの世話を行い、騎士としての心得を学んだ。

凛とした立ち振る舞い。柔らかな物腰。騎士団長を父に持ち、最少年で女性初の隊長就任。女性騎士達の中で憧れている者は多い。まだ若くて自分の力を試したいのか、たまにこのように手合わせを申し出る事がある。そんな子供っぽい所もリリカには魅力的だった。

男性騎士からは団長の贔屓だと陰口を言われるが、そんなのはただの僻みだ、とリリカは怒りを感じている。

訓練の時も数人の騎士を相手にしても苦戦する事はない。他部隊の隊長とやっても負けないだろうと思っている。

だからこそミリィセには負けて欲しくない。

（ミリィセ様、頑張って下さい！）

声をかけるのも憚られる緊迫した状況の中、リリカは心の中で必死に声援を送っていた。

幾度目かの刃が交わされる。
すでに日は沈み、闇が訪れている。周りの者は押し黙ったまま立ち合いの行く末を見守っていた。

「あ～、疲れてきたんだが……俺の負けでいいからそろそろ終わらないか？」
「わざと負けるっていうの？それなら最後の刃は止めないわ」
「おっかねぇな」
「そうね……こちらが勝ったら付き合うって条件を足すならいいわよ」
「あんたは結構好みだが……遠慮しとく。後が怖そうだ」
「あら、残念」

ラビもアリスも声に出さず応援している。イース達は彼等の動きに驚き、声も出なかった。皆がその攻防を見逃さぬよう真剣に眺めていた。
そして感じる。
そろそろ終わりが近づいていると。

「楽しい、本当に楽しいわ」
「そうかい、それはよかったな」
「いつまでも続けたいわね」
「俺はとっとと終わりたいがな」
「それなら」
「勝つしかないってか」
「ええ」

ミリィセが笑う。本当に楽しそうに微笑んだ。
間隔の短いミリィセの攻撃が続く。避けられるものは避け、無理なものは短剣で防御する。金属のぶつかる音が幾重にも鳴り続けた。
ミリィセの下段からの打ち上げ。回避不可能と判断したクーヤは短剣で押し込むように防御した。
ミリィセがその場で踏み込む。クーヤの短剣を捕らえたまま、力を込めて振り上げる。短剣が空へと飛ばされた。弾かれた反動でクーヤの体勢が崩れる。
両手に力を入れ、柄を握り締めた。
残るは防御に不向きな刀。全身全霊の一撃を込め、長剣を振り下ろした。
「――っ！」
周囲から短い悲鳴が聞こえる。
そして長剣がクーヤの目の前でピタリと止まった。
静寂に包まれる。
夜風が緩やかに流れる。葉と葉の擦れる音がざわざわと漏れ出した。
キーンとした音が耳にいつまでも残る。誰も声を発しない。
ぽつんと灯る焚き火の炎がユラユラ揺れていた。先程まで焚き火の上に乗っていた鍋はいつの間にか地面に置かれている。
木の弾ける音がする。
火の粉が空へと駆け上り、すぐに消えた。

「――なっ」

焚き火の明かりに、皆の驚いた表情が浮かび上がっていた。
炎が揺れるのと共に、伸びた影も揺れる。長く伸びた二人の影。
クーヤとミリィセの間に2本の線が交差されていた。

「悪いな――」

クーヤが掌底を叩き込む。ミリィセは驚愕で反応が遅れ、急いで回避を試みるが間に合わない。左手がミリィセの顎を捉え、衝撃が頭の中を駆け巡った。
頭蓋の中にある脳が揺さぶられる。痺れた手の中からガランと長剣が地に落ちた。ガクガクと膝が笑い出し、やがて崩れ落ちる。
倒れこむミリィセの体をクーヤが受け止めた。

「ま、面白かったぜ」

揺れる視界の中、ミリィセはこの詐欺師と悪態をつきながら気を失った。

「あー、やっぱり欠けてやがる……研磨しないとな。まぁ、刃に歪みが無いのは上出来か」

地面に横たえたミリィセが目を覚ました。クーヤの周りにはラビ達五人が集って息が続く限り賞賛の言葉をかけていた。クーヤはその言葉に曖昧な返事をしながら刃の状態を気にしている。

心配そうなリリカの顔を隣に見つけ、今の状況を悟った。

「お、目が覚めたか」

状況を把握したミリィセがクーヤに苦い表情を向ける。

「打ち合ったら折れるって言ってなかった？」

「おいおい、鍛えられた金属だぞ」

一度ぶつかっただけで折れたら鍛冶屋の名折れだ、とクーヤは零す。悪びれる素振りも見せず、淡々と説明した。

「刃が固定されて置かれてるわけでもない。手に持ってれば衝撃は腕を通して分散される。戦いをよく知る者なら尚更だ。衝撃の抑え方が上手く出来ると思わないか？」

剣も同じだ。刀で金属を切るためには、タイミングと角度、切る為に必要な力が合わさらなければならない。

単純な金属同士の衝突ではない。互いに技量の高い者同士。拮抗する業と業のぶつかり合い。今回クーヤが勝利を収めたのは情報戦による所が大きい。

「貴方……吃驚するほど嘘つきね」

「いや、敵の言葉をそこまで素直に聞き入れるあんたに吃驚だ。結構純粋なんだな」

どれ程皮肉を言おうにも、それ以上の刃で返してくる。ミリィセは深いため息をついて目の前の詐欺師を睨んだ。

「人が悪いわね……動きが全然違うじゃない。なに？最初にやった

時はやっぱり手を抜いていたの？」
「いんや、あれはあれで必死だったぞ。あんたにもわかっただろ」
「じゃぁ、どうして……」
「俺の獲物はこの刀だ、これは剣を使う時とは動きが別だ」
「それじゃ、貴方は……」
「慣れない武器で――剣術という戦い方で相手したってことだな」

アリスが口を挟む。
クーヤが何故その選択をしたのか、その裏にある事情を理解した。あの場では最良の行動をとった事を知り、アリスは満足気に頷いた。

「ま、限定された条件だったが必死でやったぞ。つまりは剣術ならあんたが上ってことさ」
「ふふっ。お世辞をどうもありがとう。本当に貴方って嘘つきなのね」

ミリィセが嬉しそうに笑う。
目の前の男はまだ全てを出したわけではないと、ミリィセは感じている。今回もその限定された条件の下で戦ったのだろう。そう思うとミリィセは嬉しく思った。
自分の父親以外でこれ程渡りあえた者は居ない。そしてその相手はまだ底を見せていない。世界は広い。そう感じる事が出来てミリィセは満足だった。

「こんなの……違う」

満足したミリィセとは裏腹に、ぶるぶると震えるリリカから低い声が漏れた。

「こんなの認められない！！」

「リリカ、黙りなさい」

真剣勝負の結果に水を差す言葉に、ミリィセも怒りをあらわにした。ミリィセの拒否に信じられないと顔を歪ませ吼える。

「ミリィセ様は納得出来るんですか！あの男は卑怯にも嘘ばかり吐いていたのですよ！」

「都合の良いモノばかり見ていると自分の目を曇らせるだけ、いつも言っているはずよ。今回、身をもってその言葉の意味がよくわかったわ」

彼女が頑固な事は昔から知っている。リリカはミリィセの説得を諦め、鋭い視線をクーヤに向けて睨みを利かせた。

「おい貴様。卑怯な勝ち方しておいて、いい気になるなよ」

「止めなさい」

「ミリィセ様が魔術を使わなかった事に感謝するんだな、使えば貴様のような下衆など……」

「リリカ！」

「ラビ、アリス止めろ」

この場が一瞬で明るくなる。ミリィセ達はその光景に目を見開いた。

騎士達の周囲をぐるりと囲む炎の壁。そしてリリカの首を四方に囲む、尖った刃。どちらとも彼女達の目前で止まり、被害には及ばない。ラビとアリスは不満そうに拗ねた顔をクーヤに向けていた。

「人が折角不殺でカタつけたのにお前らがやるなよ」

「別にいいじゃないかこんなヤツ」

「とりあえず落ち着け」
「だって……」
「いいから、な？」

クーヤが僅かに微笑むと、二人ともしぶしぶと力を収める。消え去った炎と氷が消えた先に驚いた表情の騎士達がいた。

「魔女の……力」
「あんたもその空っぽの頭でもう少し状況を考えてくれ。あんたを殺すのはどうでもないが、その場合ミリィセ隊長も始末しなくちゃならん」

本当にどうでもいいような口調で告げる。リリカを始末したとなれば、ミリィセも黙ってはいないだろう。その場合口封じにミリィセにも手をかけなくてはならない。
クーヤはミリィセの事を高く評価しているので殺すには惜しい。

「そ、そんな事したら、他の騎士が黙って……」
「んで？誰がその事実を伝えるんだ？あんたらどうせ此処に来るって言ってないだろ」

リリカが言葉に詰まる
確かに彼女達はこの場所に来る事を伝えていない。今はまだ魔女の討伐命令は出ておらず、仮に出たとしても彼女達二人でやってくる事はない。軍を率いて挑む事だろう。
隊長格が手合わせをする為という理由は流石に言えず、適当な理由の述べて日が落ち始めた町を抜け出してきていた。

「これ以上暴言吐くなら――今度は止めない」

何も言えず、リリカは押し黙る。
自らの言葉で自分はまだしも、先輩騎士にあたるミリィセまで巻き込んでしまう状況をやっと理解した。しかし、リリカは納得していない。ミリィセが魔術を使っていればこんな男に負ける筈がない、と歯を軋ませる。
そんなリリカを見てアリスが口を出した。

「それに魔術を使ったとしたらさらに勝つのは難しくなるだろうな」
「えっ？」
「クーヤも魔術を使えるからな。手数が増えて、追い込まれるのはそちらの方だと思うぞ」

リリカは唖然と口を開き、ミリィセも驚いた表情でクーヤの様子を窺った。イース達も初めて知る事実に驚きを隠せない。ウィムが代表してクーヤに尋ねてみた。

「本当に？」
「魔力量は少ないけれどな」

クーヤの肯定に、イース達がいきなり騒ぎ立て始めた。突然の歓声にクーヤは耳を塞いで騒音を遮断する。あまり効果はなかったが。

「旨い飯が作れて、騎士団隊長に勝てる体術を持って、魔術も使える……」

ぶつぶつとイースが呟く。突然肩を掴んで叫んだ。

「クーヤ！俺達のチームに入ってくれ！」
「断る」
「なら俺の師匠になって欲しいっす！」

「なんとなく断る」
「僕と結婚して下さい」
「断じて断る」
「なっなら、私とけっ、こ、けっこ、けここ……」
「鶏の物まねか？」

ギャーギャーとした喧騒が煩わしいとばかりにクーヤの反応は薄かった。赤面するラビの頭を撫でるのと共に、ミリィセ達の様子を窺えば、肩を震わせているミリィセがいた。

「ぷっ……くくく。あはははははっ」

突然笑い声をあげるミリィセに周囲が何事かと振り返った。隣にいるリリカもミリィセの笑う姿にどう声をかけていいのか悩んでいる。

「ミ、ミリィセ様？」
「はー、まったく。食えない人よね、貴方って」

一頻り笑って満足したミリィセは目尻に溜まった涙を拭い、クーヤに笑顔を向ける。

「まだなにか隠していると思ったけど、魔術まで使えるとはね」
「それはあんたも同じだろう」

魔力の保有量でミリィセが魔術を使えるかもしれないと予想したクーヤは、最初の一撃目で喉を潰しにかかっていた。避けられてしまったが、その後もミリィセが魔術を使う素振りを見せなかったのでクーヤも使用を控えていた。

「隠しているのはその腰の後ろにあるものだと思っていたわ。……ねぇ、その得物ってどんなものなの？」

アリスから渡されたクーヤの武器。左右の腰に差した刃物と後ろの腰に差した金属の塊。一見ブーメランのような形状にも見えるが、あまりにも分厚すぎてまともに放物線を描くとは思えない。

「それを使う所、見せていただけないかしら？」

ラビとアリスもその武器の使用方法は聞いていたが、金がかかるという一言で切り捨てられ実際に見た事は無い。ミリィセの提案にラビ達はクーヤに希望の眼差しを向ける。

「無理だ、金がかかる」

同じようにばっさりと切り捨てた。落胆の息がそこかしこから漏れるが、クーヤは意見を変える事はない。金がかかる事も確かだが、それ以外の部分でもこれは知られたくない。

「そう……それなら」

ミリィセの腰にぶら下がる袋をベルトから外し、放り投げる。

「食事を邪魔した迷惑料も含めてこれでどうかしら？」

硬貨の入った袋がクーヤに投げ渡された。硬貨同士が擦れる音がクーヤの手の中で聞こえる。袋の重さを感じながら、紐を解いて中の様子を覗いて見た。銀色に輝く硬貨も何枚か確認できる。

「悪いな……やはり教えるつもりは無い。単純な金の問題でもない

んだ」
「どうして？奥の手とでも言うの？」
「そういう部分もあるが……これは――この世界には早すぎる」
一体その言葉にどれ程の意味が込められているのか。苦渋の表情をするクーヤからその思惑は読み取れない。いつも飄々としていて、表情の起伏に乏しいクーヤがあらわにしたその感情。誰も何も言えなかった。
でも、だからこそ――。
「ねぇ、使う所だけ見てみたい」
ラビはクーヤの苦悩を少しでも減らしたくて、そう提案した。
造って、後悔して、でも破壊しようとしない。それは作品への拘りか、遅れた世界への苛立ちか、詳しい心境まではわからない。
「詳しい機構等の説明は無しならいいんじゃないか？」
アリスもクーヤの精神的負担を減らそうと呟く。
クーヤの知識は遥か先の時代にいる。
知識はある、広めていきたいと思っている、だが時代が追いついていない。いつまでもそんなジレンマを抱え込まないで、少しはさらけ出して楽になればいい。
「そう――だな」
二人の意図を飲んで、クーヤは心の中で礼を言う。
「詳しい説明は無しだ、使う所だけ見せよう」

「ええ、それで構わないわ」
「これを貰ってもいいか？」
地面に転がったままの折れた剣と半分になった盾を拾い上げ、ミリィセに許可を願う。
「馬鹿なそれは騎士の――」
「もう修復も出来ないでしょうし、いいわよ」
「ミ、ミリィセ様！？」
リリカの反論は無視し、クーヤは離れた場所に剣と盾を地面に突き立てる。十分に固定されているのを確認後、どのくらい距離をとろうかと悩み、とりあえず２０メートル程度の距離を空けた。
皆今か今かと興味津々にその様子を見守る。
「まずはこっちから」
後ろの腰から一つＬ字型の金属を取り出し、短い柄の方を右手で掴み構えた。
「始めるぞ」
暗がりに霞む盾を見つめる。クーヤの手が握られる。瞬間、昼間のような明るさが辺りを照らす。
閃光と轟音。
空気が震えた。
「なっ――」

いきなりの騒音に何事かと立ち上がる一同。突如の発光に目が眩み目標物を見失う。クーヤだけが命中を確認する。
立てられた盾がなくなっている。甲高い音と共に地面に固定された盾が消えていた。

暗闇の向こう側から金属が跳ね回る騒がしい音が響いてくる。

「な、な――」
「それじゃもう一つ」

周りの反応は無視し、クーヤはただ作業をこなしていく。
左手で腰の後ろにあるもう一つの金属に近づけ、そのままの体勢でぼんやりと浮かぶ剣に狙いを定めた。

「抜き撃ち」

再び轟音と閃光が一つ。
先程ものよりも光量も騒音も若干少なく感じるが、初めて見聞きする周囲の者にはその光と音はたまったものではない。

光に眩む視線を瞬かせれば、地面に埋まった剣の長さが短くなっていた。
クーヤの左手が腰元に位置し、その手には金属が握られている。
その金属に右手が添えられた。

「ファニング」

光は二度瞬き、轟音は短い間隔で二つ轟いた。
剣がさらに短くなり、一部分が砕けて欠片が散らばった。

「スポットバースト」
連続した光の瞬き、音はすでに何回鳴ったのか聞き取れない。
剣はさらに二箇所の部分が砕かれ、欠けている。
「ちっ、最近サボってたからな。一発外したか」
「な――な、なっ」
「とまぁ、しまらない結果になったが……以上だ」
「なんじゃそりゃーー！！」
イース達の悲鳴のような叫び声が森の中に木霊した。

「おいクーヤそれは一体なんなんだ！」
「う～、まだ耳が痛い」
「なんすかそれ！盾が吹っ飛んだっすよ！剣が遠くで砕けたっすよ！」
「目がチカチカするな」
「弓ではない新しい飛び道具……ふふふふふ」
「詳しい説明をするつもりはない。ついでにウィムさんあんた怖いぞ」
狂喜乱舞する男達は置いておき、ミリィセ達に顔を向ける。彼女達も今だ信じられない光景を目の当たりにし、呆気に取られていた。
「……それは……なに？」
「質問は受け付けないつもりだが？」
「少しくらいいいじゃない。お金は払ったわ」

ふぅ、と息を吐き、暫しの間黙考する。どこまで説明していいものかを線引きすると、かなり低いところで線が引かれた。本当にさわりだけ。

「これは拳銃――銃というものだ。簡単に説明すると、金属の筒から小さい金属――弾丸、弾を飛ばすものだ」

そして黙る。

構造も火薬も製作方法も、詳しい事は何一つ説明しない。

威力重視の単発式拳銃（シングルショット）であるコンテンダーという名称も伝えない。

速射重視の回転式拳銃（リボルバー）であるコルトＳＡＡという名称も教えない。

クーヤの口からこれ以上説明がされない事を知ると、諦めた表情でクーヤに伝える。

「いい余興を見せてもらったわ。お礼に一つ良い事教えてあげる」

「なんだ？」

「……そろそろ嵐が来るわ。冬を越す支度をした方が良さそうよ」

「何を言っている？秋が来たばかりだぞ」

アリスの言葉にミリィセは何も答えない。ただじっと、クーヤの瞳を見つめる。

クーヤはミリィセに目を合わせ続け、その真意を探った。ミリィセの言葉をクーヤはどのように取ったのか、目を瞑りながら頭を下げた。

「ご忠告感謝する。ミリィセ隊長」

「いいえ、それじゃまたいつか」

その会話に何の意味があったのか、それは二人にしかわからなかった。

第十話　決着（後書き）

「そろそろチートというタグを付けてもいい気がする」
「俺はお前達みたいな力は無いぞ」
「クーヤの知識と技術は反則なのよ」
「技術的には比較的簡単なものを選んだつもりだが」
「金属の加工技術はまだまだ拙い世界だしな」
「……本当はオートマを造りたかった」

第十一話　嵐の前の

第十一話　嵐の前の

「抜け駆けは無しだぞ」
「分かってるわよ」

二人の間でそんな約束が交わされる。それはクーヤと再開してからすぐに確立された二人の条約であった。

鳥の鳴き声と柔らかな陽光の中、ラビが寝床からむくりと体を起こす。
まだはっきりとしない頭でぼーっと宙を眺めていた。朝だ。そう認識するとゆっくりと両手を上げ、体を伸ばし始める。硬くなった筋が解され、関節が音を鳴らす。両手を下げてほぅ、と息を吐いた。

覚醒した意識で隣を見れば、二人の姿が見える。隣にクーヤ、その向こう側にアリスだ。それぞれ別の布団の中で今だ寝息をたてている。初日とは違い、三人はそれぞれ別の布団で眠っていた。布団はクーヤが新しく買い与えたものだ。ラビはそれが不満でならない。

布団から抜け出し、クーヤの頬をぎゅと握る。クーヤの口かららんあ、と短い抗議の声が漏れた。頬を歪められ、変な声をあげるクーヤにラビは小さく笑った。指を頬から離し、手のひらを頬に添えてそっと撫で始める。

クーヤは静かな寝息を立てている。普段はつまらなそうな顔をしているが、今は子供のように無邪気な寝顔だ。普段の無防備なようで実は隙がない姿とは違い、今は本当に安心して眠りについている。警戒を解いた無防備なクーヤの寝顔に悪戯心が湧き出した。

うずうずと体を揺らし、意を決したように身体を覆い被せる。目の間にはクーヤの寝顔、心臓の鼓動が高鳴る。右手は頬に添えたまま、クーヤの呼吸と共に少し揺れていた。

ゆっくりと体を傾ける。クーヤの口から短い息が吐き出されている。視線を唇に向けたまま、顔を近づけていく。

そして目を閉じた。

「何をしている」

いきなり発せられた声に驚き、ラビは弾かれた様に身体を起こした。

視界を開けるとクーヤはまだ寝息を立てている。そうなると発信源は一つしかない。

強張る首をぜんまい仕掛けの玩具のように左へと向ける。

そこには鬼がいた。

「抜け駆けは無しと言っただろ！」

「いいじゃない別に！頬にキスをするぐらい！」

「いいや、今のは確実に唇を狙っていた。どけ、私もする」

「ちょ、私まだしてない」

「朝から元気だなお前ら」

こうして彼等の日常は幕を開ける。

昼間クーヤは居間で細身の葉巻を消費していた。周囲にラビとアリスの姿はない。彼女達にここで待つように言われたので暇を持て余していた。

居間といっても朽ちかけたテーブルが置かれている場所を便宜上そう呼んでいるだけだ。魔女の家は狭い。部屋は一つしかなく、中央にテーブルがあるだけで他に家具らしきものはない。

服等は折りたたまれ、部屋の隅に整えて積まれている。クーヤの武器も同様に部屋の壁に立てかけられているだけだ。部屋が狭くなるという理由でクーヤが持ってきた荷物は今だ馬車の荷台に積まれている。布を被せているので、雨ざらしというわけではないが、あまり良いものでは無いだろう。

窓の外から馬の鳴き声が聞こえる。クーヤは葉巻を減らす行為に没頭した。

この家には部屋が一つしかない。

調理場も部屋の一角に備え付けられている。クーヤが魔方陣を書いた暖炉で調理なども行われていた。熱のエネルギーを無駄なく使う様子に、クーヤは囲炉裏みたいだと感想を漏らした。この世界にもっとも普及した調理場の形であるが、長年旅をし続け一般的な家庭を知らないクーヤには知らない事実である。調理としての炉と、暖房としての暖炉が分離するのはまだ先の話しだ。

寝るときはクーヤが座る椅子や、灰皿代わりの窪んだ石が置かれているテーブルを隅に運び、布団が敷かれる。トイレは外に備え付けられているが、生活の大部分はここで過ごしていた。

もちろん着替えもこの部屋で行われる。

彼女達二人だけだった時は気にせずこの場で服を脱いでいたが、クーヤがこの家に住み始めてからはそういかない。

クーヤは吸いきった葉巻を石の灰皿に押し付け、もぞもぞと動く幕を眺める。

部屋の角に天井から長い布が下ろされていた。その布の向こう側を着替える場所と定められ、彼女達は今そこで着替えている。

布が捲り上げられ、彼女達が姿を現した。

彼女達の豊満な身体つきが衣服によって強調されている。秋が訪れたというのに、やけに布地の少ない様子がクーヤの目についた。

「どうこれ？服を新調したの」

ラビが前屈みになり大きく開けられた胸元を強調してくる。長い髪が前に垂れ落ち谷間が僅かに隠されるが、むしろその方が扇情的だ。目前に垂れる髪だけを指で絡めとり、耳の後ろ側へとかける。

「胸元開きすぎてないか？」

「こちらもどうだ？」

アリスがその場でくるりと回転する。長い髪が流れ、膝上の高さで整えられた衣服の端がふわりと宙を舞う。舞い上がった服の端が太腿をあらわにする。すらりと伸びた足が目を誘った。

「丈が短くないか？」

「照れちゃって、このっ、この。どう？どうだ！？」

「かなり気合を入れてみたんだが……」

ラビがクーヤの横腹を肘でつついてくる。やけにテンションが高

いが一体どうしたものかと訝る。顔が赤い様子から肌の露出が多い服を着て恥ずかしいのかもしれない。恥じらいを隠すために無意味にテンションを上げる姿に、なぜかクーヤは中学生がドレスを着てはしゃいでいる光景を思い浮かべた。いや、まったく関係ないのだが。

アリスは堂々としているものの、やはり恥ずかしげに顔を俯かせる。時折ちらちらとクーヤの表情を窺う様はとても初々しく感じた。普段大人びたアリスが恥らう様子に、新しい制服に袖を通した姿を家族の前で披露する子供の情景を思い浮かべた。例えとしてこれもどうかと思うが。

「ああ、抱きしめたくなるな」
「す、少しくらい触っても……いいんだぞ」
「んじゃ、遠慮なく」

すっと伸ばされたクーヤの両手。一度体をビクリと震わせ、迫る手に耐えられず二人は目を硬く閉じた。

二人の頭にぽん、と手のひらが乗せられる。

「二人とも似合ってるぞ。綺麗だ」

まるで子供をあやすように頭を撫でる。
嬉しいのか、安堵したのか、不満なのか。様々な感情が入り混じった複雑な表情をしたまま二人は頭を撫でられ続けた。

夜も更け、そろそろ眠ろうという事となりテーブルを脇に片付け

る。
クーヤが自分用の布団を敷いていると、二人が寝巻き用の服で隣に立っていた。自分達用の枕を抱きしめたまま、寝床の支度をしようとしない。
何事かとクーヤが顔を向けると、枕で隠された口元から言葉が漏れる。

「……今日一緒に寝たい」
「うん……」

一瞬固まったかのように見えたが、クーヤは肩を竦めていつも通り飄々とした態度で言葉を返す。

「ん、いいぞ。たまにはいいだろ」

ぱぁ、と花が咲いたような笑顔を浮かべ、二人はクーヤの寝床へ潜り込んだ。中央にクーヤ、左右にアリスラビという並びで横になる。

緩慢に時間が過ぎていく。無音独特の耳鳴りが聞こえてくる。誰一人動こうとしない。
ドキドキとラビとアリスの鼓動が煩い。クーヤが体を少し動かすと両隣の彼女達が竦んだように身体を強張らせる。

一人用の布団で3人が横になるのは無理があり、ラビとアリスの体がはみ出ている。肩幅の分近づければ、とクーヤは毛布の中から腕を出す。彼女達の身体が更に強張った。
毛布から出した腕を彼女達の首と布団の間に差し込む。彼女達の短い悲鳴が聞こえた。彼女達の首下から出た腕の先をどうしようかと迷い、彼女達の腰に手を添えて引き寄せる。震えている様子が掌

からじかに感じる事ができた。
彼女達の早鐘のように鳴る鼓動が、近づいた身体分感じる事が出来る。
腰に添えられたクーヤの手を彼女達がぎゅっと握り返す。
夜が更けていく。

そして何事も無く夜が明けた。

「「……あれ？」」

「納得がいかない！！」

ダンッと腰を下ろした石に拳を叩きつける。石にヒビが入ったような気がしたが目の前の男達は見ない振りをした。自分がああなる運命を想像したくない。

「私達はそんなにも魅力がないか」

冷酷な視線が男達に向けられる。男達は立ちすくんだまま怯え始めた。自分達はなぜこんな時にこの場所へ訪れたのか、後悔を通り過ぎて神を恨み始めていた。

「い、いや……嬢ちゃん達は十分魅力的だぜ」
「むしろ、むしゃぶりつきたいっす！」
「足で踏んで下さい女王様」

ウィムを拳で黙らせて他の二人の意見を聞く。恍惚の笑顔を浮かべるウィムの表情は記憶からすでに消し去った。

「じゃぁ、どうして！？」
「さぁ……というか本当に？一度もか？」
「うっ……本当よ」
「一度も手を出してくれない」

その言葉にイースが怪訝に思う。とっくに済ませていると考えていただけに、彼女達の告白は不思議でしかなかった。

年は離れているが、イースから見ても彼女達は良い女だ。豊かな乳房やくびれた腰つき、すらりと伸びた足。腰元まで伸びる長い髪も綺麗に梳かされている。女性を感じる部分はいくらでもあった。性格はきつい部分があるかもしれないが、クーヤの前では従順だろう。

これ程かねそろえている彼女達を抱いていない事がイースには信じられなかった。

「あ～、もしかしてクーヤって不能……」
「クーヤを馬鹿にするな！」

ショルの居た空間が炎に包まれる。地面に転げまわるショルの口から女性のような叫び声が吐き出された。やがて、隣に流れる川の中へぼちゃんと落ちる。

「同性愛者かもしれませんね……ふふ、それなら僕にも希――」
「黙れ」

地面に倒れていたウィムが余計な事を言う。肌寒くなってきたこ

の時期に氷付けはさぞ辛い事だろう……と自業自得なウィムにイースは一瞥くれるだけで視線を外す。

他の可能性として魔女であるというものが挙げられるが、クーヤはそんな事気にしないだろう。

「まぁ、他に好きな人が居るかもしれ――いや無い、それは無い、絶対に無いぞ」

別の可能性で一番ありえそうな例を挙げた途端、ラビとアリスの目が潤んでくるのが見てとれた。イースは慌てて自分の発言を否定する。

泣かれてはたまったものでは無いので、イースは一つ提案した。

「わかった。今度クーヤを誘って聞いてみる」

ラビ達は涙を拭い、お願いしますとイースに頭を下げた。

夜更けの町中で明かりが灯る場所等あまりない。

貴族達の会合か、はたまた娼館か。暗闇の中クーヤは歩みを進め、視線の先に明かりの灯った一軒の店を見つける。

目の前の扉を開けると扉に備え付けていたカウベルが景気よく鳴り、お客の来店を歓迎する。建物の中には男達の姿が大勢いる。所々から笑い声、ある場所では怒鳴り声も聞こえる。給仕をする女性が忙しそうに立ち回っていた。

「お～い、クーヤ。こっちだ」

イースが手を招いて、自分の姿を主張する。

目的の人物を見つけ、クーヤはイースの座るカウンターの席へと足を進めた。

そうして、夜の町で明かりが灯る数が最も多い酒場を訪れたのだった。

「今日は俺の奢りだ！好きなの頼めよ。まだ飯食ってないんだろ」

「ああ……今日はラビとアリスがショルさん達の手伝いをすると言ってたが、イースさんはいいのか？」

仕事へ出かける前にラビとアリスからそのように聞いていたので、てっきりイース達3人の手伝いを行うものかと思っていた。だが昼頃に鍛冶場を訪れたイースから飲みに誘われたのでクーヤは怪訝に思った。

仕事以外の作業に時間がかかるため、暗くなるまで時間が取れないといったクーヤに対し、丁度良いとイースは一軒の酒場で待っていると強引に酒盛りの話を進めてきた。

「今回の依頼はあいつ等だけで大丈夫だ。ただの薬草集めならなんて事はないんだが、今回の薬草は森の奥でな。嬢ちゃん達の知識と力があれば百人力だ」

俺の出番なんてないとばかりに酒をあおる。

確かにショルが前衛、ウィムが補助、ラビかアリスが後衛を勤め、その片方が薬草を摘む作業を行えば例え魔獣に襲われても十分対処

出来るだろうと、一応の納得を見せる。

「それに一度お前とは話し合ってみたかったしな！」

「……そうか」

カウンターから無口な店主が乱暴に料理の乗った皿を置く。ついで女性定員がお盆に乗せた小さい樽のような木製のジョッキが目の前に置かれる。中には麦色のエールがなみなみと注がれていた。

「ま、とりあえず飲め！喰え！話しはそれからだ」

「それじゃ、遠慮なく」

出された料理に舌鼓を打ち、酒を飲みながらイースの話しに耳を傾ける。周りの喧騒があまりにも煩く、料理を食べていたのであまり真剣に聞いていない。

「でな？そいつがあまりにも良い女だったもんで声をかけたんだ、そしたらどうなったと思う？いきなりこの変態！と罵声とビンタを浴びせやがった」

イースの話しは自分の冒険談からいつの間にか女性の話しへと移っていた。出された料理はすでに胃の中に納まり、時折つまみを口に放りながらちびちびとエールを喉に流し込む。イースの話しに相槌を打ちながら適当に返事をした。

「それはあんまりだな」

「だろう？もうスタイルもこう……ボンキュボンとして色香を振りまいていたのにその対応はねぇだろう。まるで少女のように身持ちが固かったぜ」

イースがジョッキに注がれた酒を一気に飲み干し、酒臭い息を振りまいた後クーヤに視線が向けられる。

「んで？クーヤはどうなんだ？」

「どう……とは？」

「馬鹿野郎！女の話しに決まってるだろうが！」

力強く置かれたジョッキとカウンターの間から大きな音が響く。無口な店主がギロリと睨みを利かせるが、こんなことは日常茶飯事なのか特に咎める様子はみられない。

「嬢ちゃん達には黙っててやる、クーヤの好みはどんな女なんだ？言っちまえよ」

「そうだな……」

酔っ払いに絡まれるほどたちの悪いものはあまりない。クーヤは辟易としながら酔っ払いに対応する。

「顔や性格は特に気にしないな。傍にいて落ち着く事が出来ればそれでいい」

「ふんふん」

「年は……これもあまり気にしないな。余程離れていない限りだが」

「ふむふむ」

「髪は……長い方がいいな。短いのを批判というわけでもないが、長い方が女性らしいと感じる。ま、長い髪を撫でるのが好きなだけだがな」

「ほほう……」

「身体は極端に太っていたり痩せていたりしなければいい。ああ、胸は大きい方がいいな。小さいのを馬鹿にしたりしないが、行為の

時色々楽しめる」
「……」
それらの条件に見合う女性をイースは知っている。それもクーヤのすぐ傍で。
「おい、それは――」
「ああ、ラビとアリスは俺の好みにど真ん中だ。再開した時の容姿に吃驚したんだぞ」
沈黙が二人の間で流れる。
クーヤの好みに合致し、彼女達と一緒に住んでいる事から傍にいて気を使う事も無いだろう。
それでも彼女達を抱かない事に、イースは一番聞きにくい言葉をクーヤに告げる。
「……他に好きな女でもいるのか？」
「いいや」
クーヤは頭を被り振る。
イースの予想は外れたが、尚更クーヤに疑問を抱いた。
「だったらどうして嬢ちゃん達に手を出さない。嬢ちゃんが待ってる事ぐらいクーヤになら分かるだろう」
クーヤは葉巻を取り出し、マッチで火をつける。紫煙を吐きながら皮製のシガーレットケースをイースに向ける。
「吸うか？」

ああ、と頷きケースから取り出した葉巻に火をつける。二人の口から煙が吐き出される。黙々と煙を吹かし、刻々と時間が過ぎる。

「１０年という月日はかなり長い時間だと思わないか？特に子供から大人にかける時間だとするならば」

語り始めたクーヤの横顔を眺めながらイースはその言葉に耳を傾ける。

「俺の性格は昔とは違う。それと同じように心変わりする者も出てくるだろう」

「だが嬢ちゃん達はお前を慕っているぞ」

二人の口から紫煙が宙に漂う。煙が宙をユラユラ揺れてやがて消えうせる。

「身体を重ねる事で男女の距離が急速に縮まる事は理解している。だが何事も急すぎるものはとても脆いものだ。それが特に絆というものならな」

「そんなことは……」

「俺達の関係はガキの時で一旦止まっている」

クーヤの真剣な表情にイースも口出し出来ないでいる。ただ紫煙を吐き、ジョッキに注がれた酒をぐいっと飲む。

「俺はあいつ等との関係を脆いものにしたくはない。今はただ、子供の頃の続きを過ごしているんだ。それも今に年齢にあった関係になるだろうな。だが今だけはあいつ等の身体に溺れる事は出来ない……」

最後の言葉はイースには理解できなかったが、クーヤが如何に彼女達が大事かという事がわかった。

「嬢ちゃん達にその言葉をかけてやれよ。クーヤの考えがわかれば嬢ちゃん達も安心するだろうさ」

「こんな恥ずかしい事、面と向かって言えるかよ」

ジョッキの中身を飲み干し、短くなった葉巻を灰皿に押し付ける。そうしてクーヤは席から立ち上がった。腰に付けられた袋を漁り、硬貨を数枚取り出してカウンターの上に置いた。

「俺はそろそろ帰るとするよ、二人分の硬貨は此処に置いておく」

「あ、おい。今日は俺が驕るって」

「ああ、それは遠慮なくそうさせてもらうよ。ご馳走さん」

イースに礼を言いながらそれでもカウンターに並べられた硬貨を袋に戻さない。そしてそのまま酒場の出入り口へと向かう。

扉の前で立つクーヤが振り向いてカウンターへ言葉をかける。

「あんまり飲みすぎるなよ」

カウベルが鳴り響きその場を後にする。イースは呆然とその後ろ姿を眺めていた。

「ありゃ完璧にばれてたな」

これで店主に無理を言って頼み込んだ計画がご破算となった。

イースはため息と共に紫煙を吐き出し、葉巻を灰皿へと押し付け

る。

カウベルが鳴り終わったのと同時に、カウンターの奥からのそのそと影が蠢く。その影はイースの両隣へと座り、店主へ手を掲げ、声を荒げた。

「マスター！一番強いお酒頂戴！」

「私も同じもので頼む」

無言で店主は店の中で一番強い酒を乱暴に彼女達の前に置く。その酒を一気にぐいっと飲み干し、同じ注文を店主へ向ける。再び酒を呷りもう一度同じ注文を繰り返す。

「どうしてばれたんだろうな」

景気よく酒を飲んでいくラビがイースの言葉を聞き、乱暴にジョッキを置いた。

「だから言ってるでしょ！クーヤはすごいんだって！」

なにがすごいのかよくわからないが、すでに酔い始めているラビの言葉に意味は無いのかもしれない。ただ、クーヤを褒めたかっただけだろう。

「ま、よかったんじゃねぇか？クーヤの意見を聞けて」

「うん！」

「そうだな。ゆっくりやる事にする」

「しかしクーヤの事だ、今の話が嘘という事も……」

「それはない」

イースの疑問をアリスがばっさり否定する。
「クーヤが私達に嘘を言うことはない」
「それにクーヤの嘘は私達なら見破る事できるしね！」
断言する彼女達にイースはため息をついた。
最早彼らの関係は以心伝心、もしくはそれに近い何か。だったら何故俺を巻き込んだ、と酒を呷って不満を解消せずにはいられなかった。
「一人寝が寂しい時期になったものだぜ……」
呟き、イースはそっと涙を流した。

家の中でクーヤはその手に剣を持ち、刃の表面をじっと眺める。
ここ最近与えられた仕事以外で作業を行い、今日出来上がったばかりの代物だ。その最終確認を今行っている。満足げに剣を鞘に収めると家の扉が開けられた。
「たっだいまぁ～」
「今帰ったぞ」
「おかえり。遅かったな」
「私達にお酒を驕ってくれる親切な人がいてな」
「そいつは奇特なヤツがいたもんだ」
「ふふ、まったくだ」

アリスがラビを支えながらヨロヨロと歩く。ラビの足取りが覚束無い。どうやら深い泥酔状態にあるようだ。千鳥足で家の中に入り、クーヤの姿を見るとぱっと笑顔を輝かせて飛びついた。クーヤは難なくラビを受け止める。

「んふ～、クーヤ好き～」

「へべれけだな、こりゃ」

ラビを寝床まで抱いて運び、布団の上にそっと横にする。離れようとした際に服の裾をラビが握ってきたので握り返し、空いた手で頭を撫でてみる。幸せそうな笑顔が返ってきた。

何度か頭を撫でていると、アリスが後ろに立つ気配がした。どうした、と声をかけようとすると、倒れ込むように背中に抱きつき首に手を絡めてくる。

「私だって……酔っているんだぞ」

拗ねたような声が耳朶をくすぐる。

あまりの色っぽい声に心臓の鼓動が一度だけ高く鳴った。ラビを撫でていた手を自分の肩に乗るアリスの頭に乗せ撫でる。

何度か撫でた後、背中に感じていた温度がすっと離れた。

「今日はこのくらいにしておいてやる」

離れた温もりを惜しみながら、クーヤは先程まで確認していた剣を指差す。

「お前達の武器が出来上がった。詳しい説明は明日だがな」

「もう出来たのか？」
「剣とかは工程が少なくていいな。刀だと工程が多すぎて時間がかかる」
「……こちらの支度もある程度整った。クーヤに頼まれた用事も済ませてある」
「そうか。杞憂であって欲しいが……どうせいつか来るだろう。出来るならば事が起こる前に出たい」

確実な情報など一つもない。ほとんどがクーヤの単なる勘。だが確実にやってくるその日、魔女の末路。
悲しげにアリスは俯く。いつか来るかもしれないと覚悟を決めてはいたが、その日が近づいてきた。出来る限りの準備を今進めている。

「本当に、来てしまうんだな」
「ああ、嵐がやってくる」

◆エトワール城内

「王よ、税の引き上げにより民の不満が募っております」
「ふん、民の不満なぞ、見世物の一つでも与えてやれば解消する」
「……どのような催し物を？」
「あのゴミも十分生きたのではないか」
「では……」
「魔女狩りを行う」

第十二話　逃亡の果てに

第十二話　逃亡の果てに

ギシギシと車輪が悲鳴をあげる。
川沿いの道を一台の馬車が限界に達する速度で駆けていく。その後ろから蹄が地を鳴らす音が幾重にも響いていた。馬には甲冑に身を固めた騎士が騎乗し馬車を追っている。

「追え！逃がすな！」

必死に駆けるが荷台を引いた馬車の速度は遅く。追いかける騎士との距離が徐々に迫ってくる。馬上から十数本の矢が馬車に向けて放たれた。弧を描き荷台めがけて降り注ぐ。

「アリス！！」

御者席でクーヤが叫ぶ。
返事は返さず、クーヤの言葉で空に氷の壁を張った。壁に矢が突き刺さり、または弾かれてその軌道を変える。
相次いで騎士側から魔術が放たれた。属性はわからない。魔力が収束するのを感じ取っただけだ。詠唱は蹄の音で遮られ聞き取れない。

「ラビ！！後方、広く、燃やせ」

属性はわからないが、目に見えないので多分風だろうと当たりを

つけた。例え、他の属性で来ようともラビの力で燃やし尽くしてくれるだろう。
地面を隆起させるような上級魔術を使える術師がいない事を祈るだけだ。

「ちっ、馬上で詠唱出来るとは、なかなか錬度が高いな」

珍しくクーヤの顔に焦りの色が出ている。決して騎士を甘く見ていたわけではないが、騎士達の連携と技量が思っていたよりも高かった。

「アリスは防御を、ラビは奴等を蹴散らせ」
「わかった」
「どうせもうお尋ね者だが……程々にしとけよ」
「おっけ～い」

アリスに防御を任せてラビは右手を翳し、集中し魔力を集める。掌に小さい火球が現れ加速的に、どんどんその体積を増やしていく。馬車をも覆い隠すような巨大な火球がラビの目前で作られる。

「いけ！」

煌々と燃える火球が周辺の草木を焼き尽くし、騎士達に向けて放たれた。

時は数時間前に遡る。

「よし、準備は終わったな。それじゃこれからの予定を伝えるぞ」

荷台に荷物を積め終わり、後は出発するのみとなった。クーヤは懐から葉巻を一本取り出し、火をつけ口から煙を吐き出す。

葉巻を吸いながら町で購入した地図を広げた。広げた地図にはとても簡素なものしか書かれていない。ここに町がある、この辺りに川がある、エトワール城がここで、国境は山を境に敷かれている。といった具合で緻密な情報など一切ない。

他国からの侵略を警戒して詳細な地図を作っていないか、ただ単純に地理を把握していないか。事実がどちらにしろ、今から逃げ出そうというクーヤ達にとって地図としての意味を殆ど果たさない。

「地図はこの通りだ。役に立たない。魔女狩りが行われれば関所も通れない」

正確な地図が無い以上山越えは不可能。遭難する事が目に見えている。なにより荷物を積んだ馬車で山を越えるのは無理だ。

「よってこのまま南下して海を目指す。海辺やその周辺も魔獣が占拠しているようだが、まぁ水源が確保できる分まだましだ」

アリスの魔術で水を集める事は可能だが、水が有る事に越したことはない。

「……」

「とりあえず川伝いに南下して行って、道が狭ければ森の中も――ん？どうした？わからない事があれば今の内に言っておけよ」

先程からアリス達が俯いたまま浮かない顔をしている。

「なぁ、クーヤ一人だったら関所を通る事ができるんじゃないか？」
「まぁ……可能だろうな」
「私達が荷台の中に隠れていれば、関所を通る事が出来るんじゃないか？」
「分の悪い賭けになるがな」

魔女狩りが発令すれば彼女達は嫌悪の対象から罪人として扱われる。その彼女達が逃げ出したとなれば関所での点検はさらに厳しくなるだろう。

「それなら……クーヤだけでも……元々これは私達の問題だ」
「そうよ、今ならまだ間に合うから！二人でも私達は生きていけるから！」

彼女達の表情からその必死さが伝わってくる。
クーヤはそんな二人を見て、煙と共に息を深く吐き出した。葉巻を咥えたまま、二人の頬をぎゅっと掴み少し力を入れて引き伸ばす。

「い、いふぁい」
「何を言ってるんだお前達は、これは俺達の問題だ」
「ひ、ひかひ」
「これ以上馬鹿なこと言うようなら頭をはたくぞ」

限界まで引っ張った後、頬から指を離す。彼女達は頬を擦りながらクーヤの背中を眺めた。
クーヤの目は真剣に怒っていた。その事がとても申し訳なくて、そして少し嬉しかった。

「ごめん」

「すまない」
「……そういう時は別の言葉がいいな」
クーヤの言葉に彼女達は顔を向かい合わせて考え込み、二人声を揃えて言った。
「ありがとう」
クーヤは満足したように頷いた。
「大変！大変！やばいっすよ！！」
今から出発しようと馬車に乗り込んでいたら遠くからショルが息を切らせてこちらに向かってくる。嫌な予感がクーヤの脳裏を過ぎった。
「どうした？」
「はぁはぁ、き、騎士達が、魔女狩りを行うって大勢こっちに向かってるっす。早く逃げた方がいいっすよ！」
「思いのほか早かったな」
魔女の家はエトワール城の西側に流れる川のほとり。このまま南へ向かえば鉢合わせという状況は避けられるが、荷物を抱えた馬車では追いつかれるのも時間の問題だろう。
今から自分達が向かう先を知られたくはない。
「予定変更だ。一旦追手を撒くぞ」
クーヤは葉巻を地面に押し付けた後、御者席へと乗り込んだ。握

った手綱を動かし南へ向けていた馬頭を西側の森へと向ける。

「知らせてくれてありがとうショルさん。元気でな」

「バイバイ、ショルさん」

「達者でな」

「クーヤ達も元気でがんばるっす」

ショルが手を振りながらクーヤ達を見送ると、歩みだした馬車が数歩進んでその足を止める。どうしたのか、とショルが不思議そうな顔をしていると、御者席からクーヤが身を乗り出して後ろを振り返っていた。

「あ～、そうそう。この前言った事、よければイースさん達と考えてみてくれ」

そう言い残し、ショルの返事も待たずに馬車は動き出した。

そして場面は冒頭へ戻る。

ラビの放った巨大な火球は隊列を組んだ騎士達に迫り、慌てて回避しようとしたその目の前で炸裂した。爆風が前を駆けていた馬もろとも騎士を吹き飛ばし、地面に転げまわった。前列が乱れ、後続の騎士達もおもわずたたらを踏んだ。

「Ｙｈａ！いい気味ね！」

騎士への鬱憤が溜まっていたのだろう。ラビは楽しそうだった。

もう何度か後方に攻撃を仕掛けている。徐々に数を減らしていってはいるが、馬車の速度では騎馬を振り切れずすぐに追いつかれていた。

「しかし……奴等もしつこいな。きりが無いぞ」

「……そうだ、な」

クーヤが突然手綱を咥え、両手を後ろの腰に手を伸ばす。革製のホルスターから拳銃を取り出し、真横へと腕を広げた。

左右から回り込んできた騎士が木々の間から飛び出してきた。

発砲。

銃声は3発。

コンテンダーから放たれた弾丸は鎧を穿ち、肺を通過しながら逆側の鎧も貫いた。

コルトSAAから放たれた2発の弾丸は、剣を振り上げていた腕と被っていた兜を弾いた。弾丸の当たった腕は弾かれ、頭に強い衝撃を受けた騎士はそのまま落馬した。

「あー、金がもったいね」

「容赦無いわねぇ」

中折れ式であるコンテンダーの銃身を折り、排莢。コルトSAAの弾倉を回し、ハッチを開いてイジェクトレバーを引いて空の薬莢を馬車の中へ放り込む。

後方から蹄の音が再び聞こえてくる。体勢の整った騎士が追跡を再開したようだ。

荷台を引きながら数時間走らせ続けた為、馬の体力の限界が近い。

西の方へ逃げた、と思わせる事が目的であったがなかなか騎士の追跡を振り切れない。
あまり殺しすぎて多くの怨恨を残してしまうと、後の追跡が厳しくなるだけだろう。目的は達した、後は振り切るのみ。
新たな弾丸を込めつつ、二人に指示を出した。
「めんどくさい。ラビ視界に見える限り広く、燃やせ。アリスはその後ろに氷柱を突き立てろ、出来るだけ多くだ」
「わかった」
「うん」
ラビは視界いっぱいに炎を撒き散らす。森が火事になるだろうが、そんな事今の状況では気にしていられなかった。
アリスは炎の壁の後に地面から氷柱を生やし、矛先を後方へと向け簡易のトラップを仕掛けた。例え炎の中を突っ切ってきても、明けた先には氷の槍が無数にそびえる。
「追手を振り切ったら一休みして南を目指すぞ」
燃える森を背に馬車は木漏れ日の降る森の中をひた走り続けた。
追手を振り切り、途中で見つけた泉で休憩を取った後、彼らは南を目指し始めた。
馬車はひたすら南を目指す。頼りない地図を元に、片手にコンパ

スを携えて走り続ける。人目を避けるため町や村には近づかず、荷台に積んだ食料を減らしながら海を目指した。

やがて、首都を旅立ってから数日が過ぎた。

「あれが……海……か」

馬車から降りて眼前に広がる光景に目を丸くする。

いまだ海までの距離は遠い。しかしそれでも遥か先には水面が輝く一面の海が見えた。

馬車での生活が続き、彼女達の顔には疲労の色が浮かんでいたが、初めて見るその風景に感動で体を震わせていた。

「この辺りに故郷を造ろうと思う」

感動で声も出ない彼女達をよそに、クーヤは前を向きながら語りだす。

視線が自分に注がれたのを感じると振り返り、ラビとアリスの視線に向き合いながら聞いた。

「力を貸してくれないか？」

疲労の浮かぶその顔で、彼女達は力強く頷いた。

第十二話　逃亡の果てに（後書き）

「さて、ついに故郷作りが始まったわね」
「故郷を作るのは考えていたが……国外へ逃げるか、この国に隠れるかで相当悩んでたらしいぞ」
「国外へ逃亡が普通だろうが、あえてこの国に留まる事にしたらしいな」
「悩みすぎて発狂して、のた打ち回ったみたいね」
「年の始まり早々何をやっているのやら」

第十三話　縄張り主張

「それで、これからどうするんだ？」

アリスが荷台に積んでいた大根にシャクリと歯を立てた。

彼等は今、馬車を背に昼食をとっている。クーヤが空のカップをアリスに突き出せば、すかさずアリスは力を使いカップの中に水が満たされる。アリスから受け取った水で喉を潤し、クーヤは短い息を吐き出した。

「ふぅ……まずは家造りから始めないとな」

隣ではラビが燻製された肉を咥えながら、先程川で取った魚を火で炙っていた。その辺に落ちていた枝を削り、魚に突き刺して焼いている。

調味料は何もかけていない。今度いつ手に入るか分からない貴重な調味料はなるべく使わない事にしていた。料理器具は未だ荷台に梱包されているため、ただ食料を腹に収めるだけの原始的な食事を行っている。

「家を造るのは賛成だけど……最初に何をしたらいいの？」

「そうだな……とりあえず――」

クーヤは目の前に並ぶ木の群生を眺めた。程よく焼かれた魚を片手に、アリスから渡された大根を口に含む。素材その物の味を楽しめるといえば聞こえがいいが、実直な感想を述べると味気ない食事に溜息を吐いた。

「目の前の処理からじゃないか？」

木々の隙間から多数の鈍く光る光源がこちらを見つめていた。

第十三話　縄張り主張

轟、と木々の隙間を抜けて炎が駆け巡る。

地を這う蛇の如く、炎の波は朽ちた操り人形の集団を舐めていく。ウッドゴブリンと呼ばれる人の形を成した人面樹は、ギチギチと木々が擦れる音を発しながら炎に包まれた。

掲げられたアリスの手に無数の氷が空中に現れ、そして振り下ろされた。雹々と降り注ぐ細かい氷の粒が地面に突き刺さる。

その進路上に居たウィスプと呼ばれる人魂達は魔力の篭った氷をその身に受け、淡く光るその風体を霧散していった。

ラビとアリスは次々と湧き出てくる魔獣の群れと応戦していた。

「まったく！きりが無いわね」

「水場が近いしな。それに食料もあるときた日には集まってくるだろうよ」

荷台とラビとアリスに視線を這わせながら、傍らの流水を見つめた。

馬車の隣に流れている川は魔女の家の隣に流れていたものだ。騎士に追われ迂回した旅路の末にその下流に辿り着いた。簡素すぎる地図ではあったが、何とか合流出来てクーヤは胸を撫で下ろしてい

た。

「というか、クーヤも手伝ってくれない――か！」

地中から生やした氷柱で魔獣の腹を突き破りながらアリスが愚痴る。額の中央に目が一つだけある狼が絶命したのを確認し、次の敵を探しながらなので視線は向けていない。

「そうよ、葉巻なんて吸ってないで――さ！」

「おいおい、そうしたら一体誰が荷物を守るんだよ」

荷台を背にしながらクーヤはのん気に葉巻を吹かしながら寛いでいる。会話をしながら続々と集う魔獣を倒していく様子にまだまだ余裕がありそうだ、と彼女達が戦う様子を観察していた。

目の前の脅威には何一つ気にかけていない。その程度の事よりも紫煙を吐きながら荷台に積んでいる葉巻のストックが切れたらどうしよう、と真剣に悩んでいた。

「言い訳にしか聞こえないが――な！」

がさりと頭上の葉が揺れる。

3人の敏感な聴覚はその音をすぐに聞き取ったが、ラビとアリスは自分達に殺意を向けられていない事を知ると目の前の処理に意識を戻した。

「ここでおさらいだ」

煙を頭上へ吹きながら、葉巻の火種で空中に線を描いた。宙に留まった火の軌跡は円を三重に形取り、その軌跡の中にはうっすらと文字が浮かんでいた。クーヤは空中に描かれた3つの魔方陣に左手

を翳す。
奇怪な雄たけびと共に、木の上からサルが3体荷台に飛び掛ってきた。トロルモンキーと呼ばれる目がぎょろりとし、鼻や耳が異様に大きいサル型の魔獣だ。
クーヤが魔方陣に魔力を込めるとバチバチと火花が弾け、短い叫び声の後トロルモンキー達が一瞬硬直し絶命して地面に落ちた。
「魔術というのは魔力を使って現象を起こす術と捉えられる傾向にあるが、本来魔術とは魔力を操る術にある」
彼女達は戦闘に集中しながら、その言葉に耳を傾ける。
一体その二つの違いはどこにあるのか、と疑問に思いながらトロルモンキーを始めとするその他の魔獣を葬っていった。接近させないよう炎や氷の魔術を次々と使い、牽制または殲滅していく。
「魔力を操るというのは、魔素を操るという事。魔素をどのように操るかを想像し、原子に干渉する。
今行ったのを例えとしてあげるなら、煙という物質に魔素を干渉させ、雷の属性を加える。ま、お前達が暴走してた時に周囲に溢れていたのもそういったものだ。ただそれだけじゃ意味は無い」
それはそうだ、と彼女達は頷いた。属性が決められた余剰分だけが周囲に満ちているだけでは暴発はしない。
属性が決められた魔素というのはつまり、火薬がそこにあるという事。火薬があるだけでは爆発はしない。火種、導火線といったきっかけが必要だ。
「そこで起爆剤として今度は葉巻の火種に魔素を干渉させ、火の光よる魔方陣を描いたわけだ」

確認する事となるが、クーヤの魔力保有量は少ない。
先生から受け取った知識はあるため、数多くの属性を操る事が出来る彼だが魔力量の関係により満足に使えるその殆どが下級魔術。広く、浅く、オールラウンダー。所謂、器用貧乏な魔術師である。

煙に干渉した魔素も多くはない。
魔力の絶対的な不足を補うためにクーヤが書いた魔方陣には次の意味が込められている。
一つ。『雷系統の魔術』
二つ。『威力強化』
三つ。『指向性』

一つ目は起爆剤としての雷の下級魔術。二つ目はその雷の威力を増幅させるための補助魔術。三つ目は煙に誘爆した雷の威力をなるべくロスすること無く、目標に当てるための道しるべ。
魔術を行使する過程で魔術の方向性の想像はあるが、電撃は性質上扱いが難しい。正確に心臓を打ち抜くために魔方陣によって条件を付け加えていた。

最初の魔方陣に魔力を込め雷の下級魔術を放ち、次の魔方陣により威力を強化、その次の魔方陣により3体のトロルモンキーの心臓付近に陰電子を付け加え、狙いを定める。
そして最後に、空中に漂う魔力の込められた煙に引火し四方八方から敵を狙う。

追記として空中に書く魔方陣であるが、地面や物質に描いた魔術文字のような長期的な持続性は無い。魔方陣として描かれているので文字の端から漏れる事はないが、円の中を巡っていた魔力が尽きたときその魔術文字に込められた魔力をも喰いつぶして虚空へ消え

る。
地面や物質に描いたように魔力が切れたら再び魔力を注げば使えるという類ではない。
「結論を述べると、魔術――魔素を操るという事はこの世の物質、原子に干渉するという事だな。つまり渡した武器に干渉することも可能だ」
彼女達の右手にはクーヤが製作したショートソードが握られていた。
その剣は肉厚で、お世辞にも切れ味が良いとは言えそうに無い。彼女達が使う災害のような魔術を抜け出て切り込んできた魔獣の牙を、まるで盾のように防御するものとして扱っていた。
「その剣は盾としての意味もあるし、杖としての意味もある。武器としての切れ味はいまいちだ」
その刀身には魔術文字が描かれている。双子である彼女達とそろうようにその剣の姿はまったく同一。だがその内情は似て非なるものだった。
本来銘を刻む部分に『耐久強化』の魔方陣が刻まれているのは同様。刀身の片側に描かれた『系統魔術』の術式、もう片側に描かれた『熱変化防止』の術式が回線のように配置されている。
字にすると同じであるが、書かれたその魔術文字と内容が異なっていた。
ラビの刀身に描かれた中級魔術に該当する火系統の術式。そしてその反対側に描かれた術式には高熱による金属の膨張、歪みを防止する効果があるものだ。

アリスの刀身に描かれた水系統の術式。反対側に書かれているのは勿論冷気による金属の凍結を防止する効果がある。金属が凍結してしまうと硬くはなるが粘りがなくなり、砕けやすくなってしまうのを防止するためだ。

「お前達の弱点は魔術を放った後にインターバル……魔術を使えない間が5秒程ある事だな」

それは彼女達も理解している。

力を一度行使した後に存在するわずか5秒という間。後衛としてならば何も気にならない短い時間だが自分達を守ってくれる前衛が居ない場合、その時間は致命的だ。命の取り合いが刹那で行われる戦闘では5秒という時間はあまりにも長すぎる。

思考と行動が同時に行われる。頭はクーヤの言葉についての意味を考え、身体は群がる魔獣たちの殲滅に動く。

ラビは考える。

つまり自分達に渡された剣はその5秒という空白を潰す為のもの。炎を前方に振り払いながら頭上から飛び掛ってきたトロルモンキーの一撃を剣で受け止めた。インターバルの後、自分とトロルモンキーの間に爆発魔術を使い、距離をとった。

アリスは考える。

剣に干渉する事が出来ると言ったが、そのままの意味ではないだろう。鉄をそのまま凍らせてしまうと、いくら熱変化を防止する術式があったとしても金属の変化を避ける事は出来ない。この術式にそこまでの強制力は無い、と事前に説明されていた。

二人は考える。
なぜこんな状況でクーヤは自分達に語るのか――決まっている、戦闘を行いながら手にした武器の使い方を自分達で身に付けろ。魔術を使いながら別のところで魔力を操る技術を身に付けろ。考えながら戦う方法を身に付けろ。そう言いたいのだ。

一度広範囲の魔術を使い、魔獣達との距離をとる。
一息つきながら、ラビとアリスは自分の体に巡る魔力の流れを感じ取り始めた。そして再び考える。先程の解説でクーヤが煙や火種といった媒介を用いていた事を。

思い出す。自分達が暴走していた時に媒介としていた物はなんだったかを。

次に放つ魔術の方向性を想像しながら、左手に魔力を溜める。それと平行し、右手に握る剣に魔力を送った。魔素の行き先は剣に内包された魔術文字、そして――大気。

「正解だ」

ラビの剣が燃え上がり、アリスの剣はその刀身を氷で包んでいった。

「剣に魔力を流し込め。魔素を操り留め続けろ。その剣はお前達の願いに答えてくれるはずだ。いい相棒になると思うぞ」

ラビとアリスに渡した剣に切れ味は悪い。温度による金属変化も抑えられている。刀身の術式は起爆剤。魔力を注げば放出し続けるだけで留めることはかなわない。そこで彼女達は魔素を操り剣の表面に塗りつける。

ラビが左手に溜めた魔術を前方に撃ちながら駆け出した。
放出した無数の火球が腐乱した犬の群れを打ち抜きながら、炎を纏った剣を振りぬく。近くに居たウッドゴブリンの硬い胴体を焼き切った。

アリスは氷の弾丸を降らせながらさらに剣に魔力を込める。刀身に纏った氷は研ぎ澄まされ、切れ味を増していく。横から飛び掛ってきたトロルモンキーの腕を切り落とし、振り向きざまに真横からその胴体を断ち切った。

まだ回りには３０体ほどの魔獣が取り囲んでいる。しかしそれも、すぐに始末されることだろう。
先程よりも危なげない彼女達の戦いぶりを見て、クーヤは再び葉巻を吹かし始めた。

「あー、つっかれた！」
「お疲れさん」

半刻ほど戦闘し続けると、周りを囲んでいた魔獣達は姿を消していた。集まっていた魔獣をラビとアリスの二人で殲滅し続け、時間が立てば立つほど逃げ出す魔獣が増えていき、周囲に魔獣の気配が無くなっている。
悪気も無い様子で労いの言葉を吐くクーヤにラビはギロリと睨んだ。
「本当に何も手伝わなかったわね」

「いっそ清々しいだろ？」
「うっさい」
「しかし……こんな所に住む事なんて本当に出来るのか？」

ラビがクーヤを小突きながら、アリスが質問をはさむ。
アリスの疑問は最もだろう。これ程多くの魔獣がひしめく所に安心できる住みかが出来るとは思えない。
またいつ集まってくるかわからない。今度襲って来る時は今のものよりももっと大規模かもしれない。先程蹴散らした程度の魔獣ではなく、さらに強力な魔獣が来るかもしれない。
安眠する事などできず、常に神経を張り詰めていなければならない生活を思うとアリスは頭が痛くなってきた。

「こんな所だからこそ、国が手出し出来ないぞ」
「それはそう、だが……」
「まぁ、そんなに気になるんだったら、縄張りを主張しようか」
「どうやって？」
「こうやって」

スタスタと歩き木の前に立ったクーヤはその幹にナイフで文字を削る。再び歩き四方に同じような文字を刻んだ。
４本目の幹に文字を刻んだ後、手を翳し魔力を送る。文字が刻まれた木からそれぞれの隣り合う木の間に薄い膜のような魔力が繋がった。

「……なに、これ？」
「結界という。魔方陣の亜種みたいなものだな。簡易的なものだが、出来る限り魔力を注いでおいたから一日くらいなら安心して過ごせるぞ」

淡々と説明するクーヤに最早呆れ顔で彼女達はため息を吐いた。
一体彼は他にもどんな術を使えるのだろう、ここで生活するにあたって逞しくも思えるがなぜか脱力が伴った。

「よし、それじゃ此処を拠点に周囲の探索、そして家造りを始めるぞ」

身体を休めた後、周囲を探索しながら材木を集め始めた。

彼等の生活がここから始まる。

第十三話　縄張り主張（後書き）

「初めて私達の戦闘らしい戦闘が出たわね」
「家造りから始めようとしたらいつの間にか戦闘で終わっていた」
「どうしてこうなった」
「魔術の設定を書き始めたら止まらなかったらしい」
「でも力を見せ付けたし、襲ってくる魔獣も減るでしょう？」
「そのまま魔獣のボスになりそうな勢いだがな」

第十四話　開拓開始

第十四話　開拓開始

結界を張った場所を一時的な拠点とし、クーヤ達は周囲を探索し始めた。その結果、川の付近に構えたその場所をすぐさま離れる事となってしまった。

川は森の中を流れているので雨季でも洪水の危険性は無さそうであったが、土の性質が悪い。畑を作ろうと思っている彼らにとってその場所はあまり適する所ではなかった。

それに加え、水場が近くにある以上、例え結界があろうとも頻繁に魔獣がやってくる。結界とて完璧な防壁ではない。攻撃を受ければ魔力は消費し、魔力が切れれば何もない空間へと成り下がる。

馬車を移動させたその十分後、森の中にほんの少し開けた場所を見つけた。

馬車から降りたクーヤは地面に屈み、ひとつまみの土を掴み取った。人差し指と親指の間でその土をこね回し、土の質を眺めている。悪くない、と結論付け四方に位置する木の幹に術式を刻み込んだ。クーヤが魔力を注ぐと一辺が２０ｍ程の結界が築かれる。

「ところでこの結界というのは、一体どういったものなんだ？」

「結界は種類が多すぎて一言じゃ説明できないな。その範囲内に進入してくるものを防ぐというのが主な役割だ」

結界。
その種類は多岐にわたる。
魔方陣を書いてその線上を結界とするもの、札などを四方に張り点と点を結んだ所を結界とするもの、魔術文字等の媒介を必要としない結界術などもある。
その内容も色々だ。物理的にではなく、精神的に人払いを行うもの。逆に人を迷い込ませて出られなくするもの等、種々様々。

「私達でも使えるの？ほら、暖炉でやったみたいに」
「無理だな。俺が使った結界は光系統の魔術だ。お前達の属性じゃ合わないだろう」

魔術を使うには魔術の理解、魔力の読み取り、方向性の想像、世界へのアクセス、そして魔力の放出。といった5つの要素を把握しなければならないが、その5つをこなせても発動しない場合がある。魔術師の間ではそれを素養や相性などと言われている。実際の所は少し異なるのだが。

残念そうな顔をするラビとアリスに、彼女達の属性に合った術式に変えれば問題ない、と付け足した。

「さて、それじゃまずそれぞれ役割分担といこうか」

クーヤの言葉で彼女達の顔つきが真剣味を帯びる。
これからの行動は今後の生活に関わる重要なものだ。雑務一つとて無駄なものは何もない。自分の作業をこなせばこなす程、生活が快適に近づくのだから。

「家造りから始めたい……がそもそも材料が無い。アリスはとりあ

えず結界内にある木を切り倒してほしい。方法はなんでもいいが、切り倒した物は木材として使うから一箇所に集めておいてくれ。
それが済んだら今度は結界の外だな。とりあえず見渡せるくらいは広げたい。アリスが良いと思うように広げておいてくれ」
「結界の出入りは出来るのか？」
「ああ、獣除けに作ってあるから人の出入りは自由だ」
「わかった」

「ラビは切り株の除去と整地だ。整地した一部は畑として使うからどこに畑を作るかよく考えてやるように。あと川で魚を取ってきてくれ」
「おっけー……って一人で？」
「もちろん。あまり時間を無駄にはしたくない」

何のために前衛が居ない状況で戦わせたと思っている。とばかりに呆れた表情をラビに向けた。

自分達に武器を与え、遠まわしに戦い方を教えたからには何か思惑があるだろうと覚悟はしていた。だが、今度は一人で戦う事になるかもしれないと思うと少し気が滅入る。

「クーヤは何をするんだ？」
「ん？俺か。木材が集まるまで暇だからな、花でも摘んで来ようか」
「わかった。無茶はするなよ」
「お土産よろしく！主に肉！！」

クーヤの役割は周囲の探索、それに伴う地図の作成。さらには食料の調達、魔獣の住みかの下調べなどだ。

これから今までよりも過酷な生活になるだろう。そう思い彼女達

の精神的負担を減らすべく、とぼけた内容で気を紛らせようとしたがラビとアリスはしっかりとその裏の内容を把握していた。

自分にはボケの才能が無い、と酷く嘆いた。

「それじゃ、とっとと作業にかかるぞ」

若干気落ちした掛け声を合図に、３人それぞれの役割をこなすべく行動を開始した。

クーヤが結界の外へと出て行くのを見送り、アリスは結界内に残る数本の木を確認した。

少し開けた場所に結界を築いたが、一辺が２０ｍ程ある四角形の内側には６本の針葉樹がまばらに生えている。

「さて、どうしたものか」

一本の木に近寄り、掌を木の幹に押し当てた。幹は硬く、その太さは直径約６０ｃｍ。幹に手を回して両指が触れるか触れないかという太さだ。

頭上を仰げば、その幹から伸びる枝の先には青々とした葉が風になびいている。枯れ木ではなく生木。女性一人で切り倒す事は容易ではなさそうだ。

アリスは考える。この木をどうやって切ろうかと。

荷台の中には斧などの道具もあるが、斧で切り倒そうなんて考えは無い。一般的な女性の力しかないアリスには重量の重い斧を何度も扱う事など出来ない。

斧を振るっては休み、また振るっては休むなどという効率の悪い行動は今の状況では却下だ。

クーヤにはどんな方法でもいい、と言われている。それはつまり自分で最適な方法を見つけろという事だろう。

「となれば、私にはこれしかないな」

魔術を使い、氷柱を幹に突き刺した。幹は硬く、突き抜ける事はできなかったが、円錐状の穴は開いた。

後は木の中心を目標に隙間無く氷柱を突き立てていく。窪んで出来た穴が段々と繋がっていき、まるでりんごの芯状に木の中心だけを残して削りとっていった。自重を支えきれなくなり、やがて一本目の木が倒れた。

「……なにか違うな」

どこか納得のいかない表情をアリスはしていた。

切り倒した木は後で集める事とし、次の場所へ向いながら考える。

男性が斧で木を切り倒すよりも数倍早く切り終えたが、氷柱を突き立てて点と点を結んでいくのは効率が悪いように感じていた。なにより切り口が雑な事にアリスには許せなかった。

次の木の前では一枚の板を思い浮かべ、木の根元に氷で出来た板を押し込む。板の先端は刃物のように研ぎ澄ましているので幹に食い込んでいくが、その途中で板が砕け散った。

「むぅ、薄くした分脆いか」

かといって厚みを増せば増しただけ切れ味は鈍くなっていく。ただ木を倒すだけならば巨大な氷の塊を作り木に当てて倒すが、今後木材となる物を歪めてしまうのはもったいない。
氷の板を突き立てる事を5回程繰り返し、2本目の木が倒れた。やはり効率が悪い。

「となれば……これか」

腰から剣を抜き、魔力を注いで氷を研ぎ澄ませる。氷の刃を3本目の木に振りぬくが、硬い抵抗を感じて刃が幹の途中で止まる。切れ味は斧よりありそうだが、それほど変わらない結果となった。
4本目、5本目では力を込めて思いっきり振りぬいたり、切り口を楔状にしてみたり、試行錯誤を繰り返していくがどれもいまいちしっくり来ない。

アリスはため息をついた。
クーヤの居合いみたいな切れ味も期待できず、氷ではラビのように焼き切る事も適わない。一体何故クーヤは自分にこの作業を割り当てたのかと疑問に思いながら、結果内に残る最後の木を目指す途中で立ち止まる。

流石に背の高い木が5本も地面に転がっているとラビの作業の邪魔になるかもしれない。そう考えたアリスは一旦一箇所にまとめておこうと思い立ち、どうやって運ぶかを考え始めた。

背の高い木を女性一人で運べるとはとても思えない。男性でも無理だろう。すぐに思いついたのが、馬を使って運ぶか力を使って押していくか。地面に氷を敷き詰めればさらに早く運ぶ事が出来るかもしれない。

「いや、それよりも水で運んだ方が……」

アリスの脳裏に一つの閃きが輝いた。

「ん、そうか水か！」

木を集めるのは後回しにし、急いで６本目の木の元へ向かう。走りながらアリスは川で遊んだ時の記憶を思い出す。

水を掛け合って遊んでいたあの時、クーヤが合わせた掌を川の中に浸け、その手の中から細い水が飛び出して来た事を。思っていたよりも勢いのあったその水流が顔に当たり驚いて水浸しになった記憶を。水鉄砲という遊びを教えてもらった事を。

６本目の木を目の前に、アリスは魔術の方向性を想像する。どんな形状にしようか、どのように水を動かすか、威力はどの程度か、魔素はどんな風に操るか。彼女達の力は詳細が細かいほど現実に強く反映されるため、細部まで詳しく決めていく。

想像するには、なにかお手本のようなものがあった方がやりやすい。アリスが思い浮かべたのは川で遊んだ時の水鉄砲、そしてこの前見せてもらった居合い抜き。

鞘には収めず、むき出しの剣を左腰の隣に構えて魔力を込める。

一線。

アリスの腕が振りぬかれた。手応えを感じる。

時が止まったかのような静寂の中、斬られた事を今気づいたように根元の幹がずれていく。そしてゆっくりとその体を地面に横たえ

た。

「よし、これだ！」

今の手応えを忘れないよう、次の得物を探し始める。アリスは地面に倒れる木はそのままに、結界の外へと駆け出した。

少し時間は遡る。

アリスが一本目の木をどうやって切り倒そうかと考えていた頃、ラビは結界内の地面をぐるりと見回していた。明けた場所とはいえその場所は森の中、地面には多くの雑草が好き勝手に生えている。

「まずは掃除からかな」

その場に屈み、近くにあった雑草の一本を引っ張る。思いのほか根が深くまで張られているのか、なかなか抜けない。両手で握り、地面を踏みしめる事でやっとこ抜けた。その拍子に尻餅をついたのはご愛嬌。

「こんの～、雑草のくせに生意気よ！」

尻餅をついたまま傍に生えていた雑草を引っ張るが、不安定な体勢ではやはり抜けなかった。

諦めたように草から手を離し、熱くなった頭を振り払った。少し冷静になって物事を考え始める。

こんな調子で手作業では、約４００平方メートルの中に群生する雑草を処理し終えるのに日が暮れる。自分の仕事はこれだけではな

いのだから、もっと手っ取り早い方法を選ぶべきだ。

その考えに至り、ラビは剣を抜いて魔力を送った。

ウッドゴブリンを焼き斬ったように剣を振るい、雑草を焼き切っていく。軽快に刈り取って行くが、やがて剣を振るうのを止めた。

これでは鎌で刈り取るのとさほど変わらない。もっと効率のいい方法を考える。

「あ、そうだ」

再び剣を構え、魔力を送った。今度は魔素を操って留めるような事はせず、そのまま垂れ流す。さながら火炎放射器のように剣から炎が噴出し続けた。

剣先を雑草の方へと向け、そのまま焼いていく。

今後畑を作ろうと思う部分は特に注意して焼いていく。

あまり地面に火を近づけすぎると、土が焼けてその中にいる微生物を殺してしまうからだ。

逆に家を建てると思われる結界の中心部は意図的に火力を強め、地面を溶かす勢いで焼いていく。

「うん、良い感じ」

雑草が覆い茂る所を集中的に焼いていくと、先程から聞こえていた木が地面に倒れる音がまた聞こえた。

「あ、そろそろ切り株を取り除かなきゃ」

雑草処理は一時中断し、倒された木のふもとへと向かった。

切り株を目の前に、一体これをどう処理しようかとラビは腕を組んで考えていた。
鍬で掘り起こすのは論外。そんな時間がかかる作業はやっていられない。時間的にも、体力的にも、ラビの精神的にも。時間のかかる作業なら仕方ないが、簡単な方法があるのならばラビはそちらを選ぶ。

「ま、やっぱりこれよね」

剣を抜き、炎を纏わせて切り株に突き立てた。
目を瞑り、剣の表面に塗りつけた魔素を少しずつ広げていく。木が根っこから水分を汲み上げる様子を想像し、その流れに逆流するように魔素を根っこの先へと動かしていく。

切り株からブスブスと煙が立ち上り、すぐに灰へと変わり果てた。

「これでよし、と」

同じ作業を五回繰り返し、ラビは雑草処理へと戻っていった。

ある程度雑草も焼き払い終わった後、そろそろ魚を獲りに向かおう考えた。

馬を使おうかどうか悩み、結局歩いていく事にした。
馬が使えない状況もあるだろうと想定し、徒歩での距離を知っておいた方がいいと考えたからだ。

「……結構遠いわね」

場所を探しながらゆっくり移動したとはいえ、馬車で十分かかった距離だ。周りを警戒しながら歩いたため、結局１５分近くかかって見慣れた場所へ辿りついた。

水を飲みに来た先客を魔術で追っ払い、ラビは川を前に立った。その手には魚を入れる為の籠は持っているが、釣竿は持っていない。いつもは魚を獲るのはアリスの役目だ。氷の弾丸で魚を絶命させ、水を操りすくい上げる。それが一番簡単な方法だった。

今回はラビ一人だがその表情は暗くない。その要因はアリスが６本目の木を切り倒すのを見たからだ。

あれは確か子供の頃に見た水鉄砲、そして魔術を放つ仕草は居合いだった。

こんな状況でもクーヤは自分達を育てようとしてくれている。そして自分達がそれに応えてくれる事を信じている。そう感じる事が出来てラビは嬉しくなった。その期待に応えなければならない。

「さて、とっとと始めましょ」

意気揚々と掌を川の水面へ向け、ラビは水中へと魔術を行使する。昔に教えてもらった魚を獲る方法を思い出し、拳銃から放たれる弾丸を思い浮かべる。形状は爆、水の底へと狙いを定め、威力は魚が吹き飛ばない程度。

方向性を示した後ラビは魔術を打ち放った。その場所に水しぶきが吹き上がる。

衝撃に吃驚した魚達はその場にぷかりと浮かび上がり――。

「よぉし！やった！」

そしてそのまま川に流されていった。

「……えっと？ちょ、ちょっと待って～～！！」

「作業は順調みたいだな」

アリスが水流で木を一箇所に集め、ラビが川から獲ってきた魚の腸を抜いていた時、クーヤが帰ってきた。

「あ、お帰り。どうだった？」

「とりあえず魔獣の住処は近くになさそうだ。普通の獣も見当たらなかったがな。あと実が生ってる樹木も見つけたが……初めて見る実だったから、食えるかわからん」

「そうか……食料が取れなかったのは残念だな」

「まぁ、まだ探索は始めたばかりだ。とりあえず休憩にしよう。食事の後、俺は土台作りを始めるからアリスとラビは木材の加工に取り掛かってくれ」

昼食を取り終え、作業が開始された。

アリスが材料となる木材を切断していき、切断した木材をラビが燃やさない程度に火を近づけ乾燥。ラビが焼き払った場所にクーヤが土台作りを始めるといった具合だ。

その日は家の基礎を作り終えたところで作業は終了となった。

その日の夜。

クーヤ達は焚き火の周りに集まって話し合っていた。

「今後の予定を話すぞ。アリスはそのまま周囲の木の伐採を続けてくれ。周囲が終わったら今度は川の方を目指して開拓して欲しい」

「……海は目指さないのか？」

「ああ、今は無理だ」

今は森の中に入ってしまったのでこの場所から海は見えない。アリスはこの前見た海の光景を忘れられないでいるのだろう。確かに海には宝のような資源がある。今の彼らにとって喉から手が出る程欲しいものだ。しかしクーヤは却下した。

「お前達も感じただろうけど……あそこはヤバイ」

遥か遠くに見えた水平線。地上から水平線まで全ての水面がきらめいていた光景は、まるで高く積み上げられた財宝の山に見えたことだろう。その感動と相反するように肌で感じ取った危機感。本能からの警鐘。

あそこに住み着く魔獣は川の付近で出会うような魔獣とは力量も数も桁が違いすぎる。

「3人で挑もうなんて自殺行為もいいところだ」

クーヤの言葉が正しいと感じたのだろう。アリスはそれ以上口を挟むこと無く沈黙した。

「ラビは畑を耕してくれ。畑の作り方はわかっているな？肥料は荷台に積んであるからそれを使うように」

「了解しました隊長！」

ビシッと敬礼を決める。
暗くなった気持ちを払拭するような軽口。ラビの気遣いにクーヤは心の中で礼を言う。
「さて、そろそろ身体を休めよう。明日も忙しくなるぞ」
荷物をどかして荷台に入り、今宵も馬車の中で寝床を敷き始めた。家の完成はまだまだ時間がかかりそうだ。
今度どうなって行くかは未だ霞みの中。将来の事を思うと不安に苛まれる彼女達はクーヤの手を握り締め、身を寄せ合って一夜を過ごしていった。

第十四話　開拓開始（後書き）

「どうだ、クーヤの期待に応えたぞ。褒めてくれ！」
「ああ、見事だな」
「……ところで私の方は？」
「魚を追いかけるだろうとは思っていたぞ」
「わざとか！」
「爆発の衝撃を真上じゃなくて角度を付ければベストだったがな」
「うう、私は期待に応えられない駄目な子ですよ……」

第十五話　家造り

第十五話　家造り

「さて、今日もがんばるか」
「「おー！」」

午前中の彼等の行動は三者三様だ。

クーヤはアリスが大まかに切断した角材を加工する作業を行っている。
角材の肌にかんなをかけたり、軸組みで建てるため角材の先端に刻みを入れたり。細目の木は丸太柱としてそのまま使用する事にして枝を掃っていく。
頭の中に設計図を浮かべながら所々に印をつけた紐を引き、木材の必要な箇所に溝を彫っては材料を整える。

ラビは畑作りと切り株の除去を担当した。
鍬で土を掘り返し、肥料を撒いて再び耕す。植えるものは葉物が中心だった。根菜もいくつか植えてはいるが、残り少なくなってきた食料事情により育ちが早く、切り取っても何度か繰り返し使えるものを選択した。
とはいうものの、食料として使えるまで早くて2月程かかるが。

アリスは相変わらず木を切る作業を行っていた。
さながらウォーターカッターを扱うように、細く引き絞った水流

でザクザクと伐採していく。剣を振るうたびにコツを掴んでいったその伐採速度は目を見張る速さで続けられた。
結界の外に立っていた木は次々切り倒され、林があった場所は見渡せる程度の平原に変わり果てている。
家造り用の木材を残し、余ったものは結界の外に積み上げて自然乾燥にまかせる手段をとった。

太陽が天辺に上り詰めた頃、３人の合同作業が始まった。

「ラビそっちもってくれ」
「おっけー」
「じゃ、立てるぞ……いち、にの、さん」

角材の先端を土台に開けた溝へと差し込むと、土台の角に一本の支柱が立ち上がった。

「おし、ラビはそのまま支えててくれ。アリス、上から押し込むから足場を頼む」
「わかった」

支柱の隣に現れた氷の塊に登り、手にした木槌で上から何度も叩いて角材の先端を奥に押し込んでいった。

「よし、それじゃ次の柱だ」

クーヤの指示で彼女達がパタパタと忙しく駆け回る。家の建設方法はクーヤにしか分からないため言われる通りに行動していく。

家の基礎が出来上がってから、家造りは着実に進行していった。
現在は家の枠組みを行っている。
土台に柱が立ち、柱と柱の間には数本の間柱が立つ。間柱を斜めに交差しながら筋交いが取り付けられ家の強度は高められた。

加工された木材を組み立てるだけなので作業は順調に進んでいく。
足場を瞬時に作れる事も作業を円滑にする要因だった。

昼から始めた組み立て作業も日が落ちる頃には大方完成した。
それでも作業は続き、暗闇の中ラビが灯した明かりを頼りに木材を合わせたところに金属板で固定し建物の強度を高めていく。
その日は寝る間際まで作業は続けられた。

次の日も作業は続く。

「アリスこの板と同じものが後２０枚欲しい、歪な部分はかんながけもよろしく」
「うん、了解した」
「ラビは俺と一緒に屋根と外壁の取り付けだ」
「わかった。さっさと始めましょ」

今日も作業は急ピッチで行われる。

「とりあえず１０枚出来たから置いておくぞ」
「おう、ありがとう。と、その前にそこ支えてくれ」
「了解だ」
「ラビ釘を取ってくれ」
「ほい」

「……これでよしっと」
「それじゃ戻るぞ」
「おう、助かった。ラビそこの板取ってくれ」
「ん、これ？はい」
「今度はここを支えてくれ」
「はいはい」
「それをくれ」「ほい」
「あれくれ」「ん」
「つー」「かー」

「何語だそれは。残りができたぞ、次はどうしたらいい？」
「おお、早いな。そしたらそこに足場頼む」
「わかった」
「ラビ次の板くれ」
「はいはい」
「アリス、あっちを支えてくれ」
「ああ」
「んで、ラビは踊ってくれ」
「ん、わかった……っておい！」

作業は順調だ。

建てられた枠組みに隙間が出来ないように板が取り付けられていった。作業が進むにつれて屋根が出来上がり、外壁が出来上がる。ガラスなどは無いため窓も扉も全て木で作り上げられていった。

そうして家造りを始めてから三日後の昼過ぎ。

開拓された森の中に立派なログハウスが姿を現した。

「で……きた」

「できた……な」

前の家は長い間風雨に晒され続け、壁は茶色く変色し、所々腐り果てていたものだ。補修も行ったりしたが、焼け石に水の状態。強風で今にも崩れ落ちてしまいそうな所に、長年住み続けた自分達を褒めてやりたいくらいだ。

ラビとアリスは出来上がったばかりの新しい家を前に、感無量な様子で作り上げたログハウスをじっと眺め続ける。

目の前のログハウスは木目もはっきりと浮かび、柱には力強さを感じる。寒さと雨を遮るだけのものとは比べ物にならない安心感がそこにはあった。

なにより自分達の手で作ったという事実に、胸の奥から湧き出る達成感は彼女達を歓喜で振るわせていた。

クーヤはログハウスの前に立ち、その扉をゆっくりと開く。

「ようこそ、俺達の新しい家へ」

彼女達の歓声は森の奥まで響きわたった。

「中はこんな風になってるんだな」

室内をしげしげとアリスが眺める。内装は今日の午前中にクーヤが一人で行ったため、彼女達が家の中を見るのはこれが初めてなの

だ。
彼女達の午前中の行動は前日と同じ内容だった。アリスが邪魔な木を伐採し、ラビが地面を整地する。その成果として、この場所から川までの間に幅広く整えられた道が作られた。
扉を開けた先には広い居間があり、その奥には扉が二つ。壁には木製の窓が左右に一つずつ、大きく設置されている。家具は一切置かれていない。今はまだ殺風景な部屋だった。
「こっちの部屋はなにかな～、あ、トイレね。室内にあるのは嬉しいわね。クーヤ、いい仕事した！」
ラビがぐっと親指をサムズアップさせて笑顔を浮かべる。
彼女達が遥か昔に過ごした家には便所があったが、魔女の家にいた頃は近くの森の中で済ませていた。
虫も寄ってくれば、冬は寒さに堪える。特に雨が降る日は最悪だ。ずぶ濡れになりながら用を足さなければならない。
「しかし後で溜まったものを汲み取る作業が必要だな……私はあまりやりたくない」
「ああ、心配するな。それはそのまま畑近くの肥溜めに送られる」
「肥溜め？」
「排泄物を溜める場所だな。ちなみに後で肥料となるぞ」
クーヤの言葉を聞き、二人がとても微妙な表情を浮かべる。どう言葉で表せばいいか迷ったが、とりあえずそのまま言葉にしてみた。
「いや……それはなんだ、汚くないか？」
「野菜に直接ぶっかけるわけでもない。土の養分として使えればどんなものでもいい。というか畑に使った肥料だって何かの動物のも

のだぞ？さらに言うなら森の中で取れる山菜とかも同じように育ってるんだ」
「いやまぁ……それはそうかも知れないけれど……」
「納得出来ないところもあるだろうが、新しく肥料を買えるような状況でもないからな。今は利用出来るものは再利用するつもりだ」

まだまだ割り切れない顔をする彼女達を尻目に、クーヤは馬車に乗せたままだった荷物を部屋の中へ運び入れていった。
部屋に戻ってきた時には彼女達の探索が再び開始されている。

「お前達部屋の鑑賞もいいが、とりあえず荷物入れようぜ。棚とかはまだ作ってないが、まとめて置くくらい出来るだろ」
「こっちの部屋は何？大きい桶みたいなものがあるけれど？」
「そこは風呂場兼洗面所。ついでに着替え場所だ」
「風呂場？」
「その大きな桶、浴槽に水を溜めて湯を沸かす。湯浴み所だ」
「湯浴みって……まるで貴族じゃない！？」

一般的な家庭でも湯浴みをする所は存在していなかった。
殆どの家庭では濡らした布で体を拭いて汚れを落としている。川や湖が近くにあれば水浴びもするが、肌寒い季節では暖めた湯を使って体を拭くくらいだ。ラビ達も今までずっとそうしてきている。
湯浴みは貴族等の身分の高い者にしか使われていなかった。

「ちょっとばかり贅沢してもいいだろう」
「クーヤこれは良いわよ！すごい！」
「湯浴みか……初めて入るな。楽しみだ」
「水汲みはアリス、湯を沸かすのはラビが担当な」
「うん、わかった」
「この浴槽、だったかな？それに溜めた水も後で再利用するのか？」

「ああ、流石に飲み水では使えないが浴槽の栓を抜けばそのまま肥溜めの隣に作った水汲み場所に送られる。水撒き用として使うつもりだ」
「今すぐ入ってみたい！！」
「後にしろ。先に片付けをやらないとな」
「うう～～」

抗議の視線がクーヤに突き刺さる。それを無視し、淡々と縛り上げた荷物を解いては部屋の片隅に置いていった。
ラビは風呂に入りたい衝動を抑えて片付けを手伝い始めた。片付けが終わればすぐにでも駆けつけるだろう。まるでスタートを切る前の競走馬のような形相だ。

「ところで……料理はどこで行うんだ？」

アリスは残り少なくなってきた食料をどこに置こうか決めかねていた。
部屋の中を見回すが、魔女の家にあったような暖炉も無く、調理場として使えそうな所も無い。

「料理はそこで行う」

クーヤが指差した先は居間の中央に空いた窪みを示した。
その窪みは四角形に切り取られ、天井から棒状の金属がぶら下げている。暖炉のように火床は平らではなく、壷状に窪んでいた。

「なんだこれは？」
「囲炉裏という。そこで火をおこして鍋や鉄板を敷いて料理をする場所だ。詳しい事は料理する時にでも説明するぞ」

囲炉裏という言葉を聞いてアリスは訝る。
暖炉のように部屋の壁際ではなく、火元が部屋の中心にあるというのは部屋を広く暖めてくれる。暖房という視点からだとかなり有効そうだ。
ただ、暖炉のように煙突が無いのが気がかりだった。

「こんな部屋の真ん中で火を焚いて大丈夫なのか？」
「燃料は薪じゃなくて煙の出にくい炭という物を使うから心配するな。一酸化炭素中毒とかも気にしなくて良い。
窯が出来れば誰でも炭を作れるが……最初はラビの担当だな。炭は色々使えてかなり便利だぞ。後で教えるからしっかり覚えるように」
「あいさー」

元気のいい返事と共にてきぱきと整頓を続けていた。それ程風呂が楽しみなのだろう。

「ん～～、気持ち良い。お風呂って最高ね！！」

荷物の整理が終わった後、早速ラビとアリスは浴槽に水を溜めて炎で湯を沸かし風呂を堪能していた。
ラビはその裸体を沸いた湯の中へ沈め、体を伸ばして凝りを解している。アリスは浴槽の外で体を洗っていた。
「まったくだな。それにこの石鹸という物もいい。とてもいい香りがする」

アリスは布にこすり付けた石鹸を泡立てて肌を擦っていく。湯気に包まれる風呂場の中、石鹸の香りが風呂場の中に充満した。

「そんな良いものがあるんなら、前の所でも使わせて貰いたかったわ」

「本当にな」

石鹸は荷台の中にずっと仕舞われていた物の一つだ。先程の荷物整理でその存在を思い出したクーヤが彼女達に手渡し、使い方を教えた。

「数も少ないし慎重に使っていかないとね。あ、無くなったらクーヤがまた作ってくれればいいけれど」

「いや、無理だ。石鹸の製法を聞いたが塩水を電気分解してそこから取れる物質と水と油が必要らしい。水は私の力で何とかなるが、塩と油の確保しなければならない」

「むぅ、油は何とか植物から取れるけど……塩かぁ。やっぱり海を目指したいわね」

「今は無理だろう」

「今はって、クーヤも言ってたけど……いつか行けるの？」

「さぁな。クーヤがどんな未来を描いているかはまだ分からない。分からないが、私達は着いて行くだけだ」

「そうね……あ、クーヤだ」

風呂場に備え付けられた窓からクーヤが刀と短剣を振るっている姿が見える。

その姿はさながら演舞のようだった。次々と技を繰り出していく様子を眺めながら、まるで踊りを踊っているようだと思った。

「やっほー。頑張ってるわねぇ」

「性が出るな」

窓から手を振ると、その声に応じてクーヤの動きが一旦止まる。

「おう、湯加減はどうだ？」

「めちゃくちゃ最高よ！」

「クーヤも一緒に入るか？」

何を言い出すのかとラビが顔を向ければ、アリスがクツクツ笑っている。その顔を見てラビもニヤリと笑顔を浮かべた。

「そうよ～、体の隅々まで洗ってあげるわよ」

「物凄く惹かれる提案だな。今度頼むわ」

二人が顔を見合わせて含み笑う。体を震わせて湯船に満たした湯がちゃぷちゃぷと音を立てる。

「おや、今度でいいのか？気が変わってしまうかもしれないぞ」

「今なら胸で洗ったげるわよ」

「からかうな、馬鹿」

区切られた窓の視界からクーヤが姿を消した。ついに我慢しきれず、彼女達は大声を上げて笑い始める。浴室に二人の笑い声が響いていた。

「あはははははっ。クーヤってばかわいい～」

「ふふふっ、そうだな。クーヤは人の心情を読むのが上手いから、そこをついてやったら大成功だ」

無論、彼女達も本気で言ったわけではない。ただからかっただけ

である。
クーヤもそれを分かっているからこそ、ただ言葉を濁すしかなかった。
父親と二人での生活が長かった事が災いし、女性からそのような話題が振られた時の対処が甘かった事も一つの理由だ。

「さて、そろそろあがるか」

アリスが湯船からその裸体を引き上げると浴室の扉がガラリと開けられた。沈黙がその空間を支配する。

「なんかむしゃくしゃしたから、来てみた」
「ギャーー！」

かぽーん、と桶が額に命中する音が風呂場に響き渡った。

「とまぁ、囲炉裏での調理はこんな風に扱う」

囲炉裏の窪んだ部分には、掃った枝などを燃やして出来た灰が敷き詰められている。ちなみにクーヤの窪んだ額には濡れた布が巻かれていた。

炭に火を灯し、その真上に自在鉤で吊るされた鍋を置いて煮炊きしている。火の周囲には串を突き刺した魚を敷いた灰の部分に立てていた。その近くには火箸や五徳と呼ばれる円形状の枠から3本の足が伸びている金属製の台が置かれている。

「なんだか不思議な感じだな」
「うん、でも暖かい。それになんかいい香りがする」
「それが炭の醍醐味さ」

ラビには先程炭の作り方を教えた。窯が無くとも、つまりは酸素を遮断して蒸し焼きにすればいい。
薪として使われると思っていた木材の周囲を炎で包み、空気が入らないように焼き続けて出来た炭をラビは驚いて目を瞬かせたものだ。

「さて、それじゃ乾杯といこうか」

彼女達に持たせた木製のカップに酒を注ぐ。アリスはきょとんとした表情をしており、ラビはとても嬉しそうだ。

「……いいのか？」
「家が出来上がった記念だ、気にせず飲め」
「やったー、お酒、お酒」

火にかけた鍋も頃合だ。
それぞれのお椀に盛ってから、クーヤが自分のカップをその場に掲げた。

「それじゃ、家が出来た事を祝して――」
「「「かんぱーい！」」」

木が打ち合う乾いた音が部屋に聞こえる。
団欒とした時を過ごし、その宴は夜遅くまで続いた。

やはり馬車の中と家の中では気持ちが違うのだろう。彼等は久方

ぶりに安心して眠れる寝床に着いて夜を過ごしていった。

第十五話　家造り（後書き）

「新しい家が出来た！！めちゃくちゃ嬉しい！」
「なんだか色々とごちゃ混ぜな感じではあるがな」
「暖炉や煙突を作るにも素材が無い。藁葺き小屋作ろうにも藁が無い。和洋折衷。良い言葉だ」
「風晒しという状況を抜け出たのは素直に嬉しい」
「これで一つ心配事が無くなったわね」
「だが、まだまだ問題は山積みさ」

第十六話　食料危機

第十六話　食料危機

「クーヤ朝だぞ。早く起きるんだ」
「あっさよ～、とっとと起きなっ――さい！」

体をゆさゆさ揺らされる感覚にクーヤの意識は覚醒した。勢いよく掛け布団が剥ぎ取られ、肌寒い空気が全身を襲い一気に目が覚める。秋も深まり、気温も段々と下がり始めている早朝の気候に季節を感じた。
頭の片隅に残る眠気を欠伸と共に吐き出し、クーヤは体を起こして腕を伸ばした。体の至る所でぽきぽきと音がする。

どうやら久しぶりに熟睡できたようだ。
長いこと野宿生活を続けてきたが、中々慣れるものではない。壁や屋根がある場所で寝るというのはやはり落ち着けるものだ。そんな安心感を改めて認識した朝だった。

昨日の残り物で朝食を済まし、囲炉裏を前に三人が輪になって食後の茶をすする。茶葉が切れたら白湯になるかな、と少し暗い未来を想像しつつ彼女達に仕事の進み具合を聞いてみた。
「アリス伐採状況はどんな感じだ？」

「ラビに手伝ってもらったおかげで、川までの道を広く作れたぞ。これからどうしたらいい？」
「そうだな……ラビ畑の様子は？」
「順調よ。さっき様子を見に行ったらもう芽が出てたわ。ただ……収穫が早いものでもまだ一月以上かかるでしょうね」
「アリス食料の残りは？」
「もって2、3週間と言ったところか」
「ふむ……」

クーヤは茶で唇を湿らせながら、思案にふける。
このまま行けば1週間以上は水と魚の生活になってしまう。川魚も何時まで獲れるかも分からず、それ以上に畑の作物もどの程度収穫が見込めるか確証が持てない。

とりあえずの目標は食料の確保が最優先だろう。

「ラビは今まで通り畑の耕作と炭作りを頼む」
「ん、やっとくわ」
「アリスは周囲の探索に加わって欲しい。此処から西側の地域だな。今まで書いた地図を渡しておくからそれを参考としてくれ」
「うん、わかった」

森の中に建てられたクーヤ達の拠点から東側の奥に川が流れている。南に行けば海があり、西側は家を造る前にクーヤが探索した場所だ。書きかけの地図を手渡し、続きの製作を頼んでおく。

「俺は川向こうの東側を探索してみる。ちょっと遠くまで足を延ばしてみるつもりだ。何かあった時の為に魔力を残したいから、結界をラビ用に変えておくぞ」
「りょうかーい」

「よし、それじゃ作業開始だ」

これからの予定が決まり、三人はそれぞれの目的を達成すべく行動を開始した。

「あ、お帰り～。どうだった……って聞くまでもなさそうね」

別々に行動した彼等が再び合流したのは昼をとっくに過ぎ、夕方に差しかかろうとしていた頃だった。

アリスが西側の森から帰ってくるが、その表情は暗く沈んでいる。

「なんなんだ此処は……見た事の無い果実や茸ばかりだったぞ！」

「あー、食べられそうになかった？」

「わからない。もしかしたら食べられるかもしれないが、毒があるかもしれない危険性があるからな。ラビの方は何か変わったこと無かったか？」

人差し指を頬に当て、空を見上げながら今日の様子を思い出す。指を折りながら今日の出来事を一つづつ話していった。

「畑は今のところ順調。土の性質がいいからかしらね、元気よく育ってるわよ。

炭作りも結構慣れてきたわ。空気が入らないように炎で囲むのに結構気を使うけど、一月分くらいは出来たんじゃないかしら。

あ、そうそう時々魔獣達もやってきたわね。近づいて来た魔獣は結界を越えようとしたら燃え上がったけど。新しい結界は越えたら

炎に包まれるみたい」
「結界というよりも罠だなそれは。まぁ特に何も無かったか」
「そうね。いつも通りよ」
「普段通りだな」

川から離れているとはいえ、此処にも魔獣はやってくる。数は散発的だが、姿を表さない日はあまりない。アリスも道すがら何度か遭遇したが、数は多くなかったので対処は難しくなかった。
クーヤの言ったとおり魔獣の住みかは近くに無さそうだったが、住みかを作らず単独で行動している魔獣はそれなりに居るようだ。

「ただいま」
「クーヤお帰り～」
「お帰り。そっちはどうだった？」
「正直……やばいかもしれん……」

クーヤは探索の結果を二人に話した。
一般的な獣の姿も発見できず、木に生った果実はクーヤでも初めて見るものばかりだった。獣が見つからないのは魔獣によって喰い荒らされた結果によるものだろう。辛うじて薬草は見つけてきたが、これも成分が変化しているかもしれない可能性がある。

ここの生態系は狂っていると、クーヤは森の様子を伝えた。

「そんなぁ。食料も少なくなってきたのに」
「いっそ魔獣でも食べるか？」
「止めておけ。普通の獣でも肉食のヤツは筋ばかりで旨くもないが、魔獣はさらに高濃度の魔素汚染がある」
「魔素汚染？」
「瘴気、妖気とも呼ばれるものだ。俺も詳しく調べたわけじゃない

が、毒性をもった魔素といったところだな」

獣と魔獣の違いはその姿もさることながら、その体に汚染されたオドを内包しているところにある。魔獣の中でも知力の高いものはその汚染したオドを使って魔術を行使する種族もいる事も相違の一つだ。

どのように汚染されているかは定かでは無い。一説には妬み恨みがマナを狂わせて変質してしまったと伝えられる。

また聖十字教会では、汚染されたマナによりただの獣が魔獣へと変わり果てたとも記されている。

噂ではあるが、魔獣を食べた者は身を裂かれるような激しい痛みが全身を襲い、精神を破壊され発狂し、目や口から血を撒き散らして事切れたという話しもあった。

此処の植物も魔獣から放たれる汚染されたオドによる影響を受けて変質してしまったのだろう。草や木は生命力が高いため影響は少ないが、果実や茸といったものは気候や環境による変化が顕著に出る。

「じゃぁ、どうするの？畑の野菜は収穫にはまだかかるし、魚も獲り過ぎたらすぐいなくなっちゃうわよ」

「……影響のなさそうな虫ならいたな」

「それだけは、い・や！」

体の前で手を交差しバツ印を描いて拒否をした。

「好き嫌いは良くないな、貴重なタンパク源になるんだぞ」

「……食べた事あるのか？」
「そりゃあ、世界を回ってきたからな。道中食料が無くなった時には世話になったぞ。虫を主食にしている地域も結構ある」
「うえ～～」
「俺も好んで食べる事はしないが……ま、いざとなったらだ」

囲炉裏を前に夕食を取っていると、明日は私も探索に加わる！とラビが声を荒げていた。
どうしても虫を食べる事は拒否したいらしい。
クーヤは森を出ない程度に北上して探索するように言葉を伝えておいた。

「さて、今日はどうだった？」

夕刻間近に3人は拠点へと戻ってきて、それぞれの成果を報告しあった。

「木の上から周囲を見てみたが――」

アリスの報告はこうだ。

巨大な氷を足場にして木の背丈よりも高い位置から周囲を見回してみたが、西側の森はずっと続いているとの事。ある程度進むと小高い丘があり、その先はまだ探索していないようだ。

ただ気になる事が、その丘の向こう側に数多くの気配を感じたと言っている。もしかしたら魔獣の住みかがあるかもしれない、とい

う情報をクーヤは大雑把な地図の方にその場所を書き込んでいった。

「ふむ。ラビは？」

「ん～、森の出口近くなら普通の獣も居るみたい。魔獣に食べられた死骸があったわ」

ラビの報告も後に続く。

彼女は此処に来るまでの道のりを少し外れて周囲の調査を行っていた。海を眺めた丘の周囲は探索せず、ひたすら平原や森の中の平地を駆け回ったようだ。

傾斜のある場所を避ける事により探索の範囲を広げる様子から、それ程までに虫を食べたくないのかとクーヤは呆れていた。

「北に行けば獣がいるらしいというのは朗報だな。しかしあまり良い状況とはいえないが……」

「最悪上等だ。後は這い上がるだけでいい」

「……クーヤってローテンションなのに前向きねぇ」

「前向きでなきゃ、やってられん」

ガサゴソとクーヤは今日の成果を彼女達の目の前に差し出す。

「そんな悪条件な状況から一歩踏み出す事にしよう」

ラビ達に見た事の無い果実に目を丸くして眺めた。数種類の果実や木の実が彼女達の前に置かれていく。

「……何それ？って聞くまでも無さそうだけど」

「不思議な木の実だ。味も食べ方も、喰えるかどうかもわからん」

「おい……それをどうする気だ？――まさか」

「これを喰ってみよう」

信じられない様子でクーヤに視線を合わせる。彼女達はクーヤの正気を疑った。

「何考えてるんだ！止めておけ！」

「そうよ！それにクーヤが言ったんじゃない。此処の果実は魔素汚染されてるって！」

「心配するな。植物の魔素汚染はそれ程強い物でもない。まぁ気になるからとりあえず浄化の魔術を使って消毒してみるがな」

魔獣のように濃い魔素汚染はこの果実からは感じられない。魔獣を浄化する事は無理だが、自分の魔力でもこの程度の浄化なら出来る。と彼女達に話すが、あまり納得がいっていないようだった。

「それでも毒があるかもしれないだろ？」

「そうだな……味見役は俺がやる。毒があった場合に備えてアリスには胃洗浄のやり方を、ラビには活性炭の作り方を教えておく」

確かな解毒剤が無い場合でも対処法は存在する。

毒物の摂取に関する治療法として胃洗浄と活性炭の経口投与を彼女達に説明した。本当に効果が有るかは分からないが、クーヤが教える事だからまったく意味が無いとは思えなかったので真剣に聞く。

「それじゃまず、この木の実からだな」

魔術を使い、魔素汚染を浄化したラズベリーのような木の実を口に放り込んでみる。

彼女達は恐る恐るといった感じでクーヤの様子を伺った。

「ど、どうだ？」

アリスの質問にうんっと頷いてその木の実の感想を伝える。クーヤの顔がくしゃと歪んだ。

「渋い、まずい、喰えたもんじゃない」

隣に置いておいた桶に口の中のものを吐き出す。

色鮮やかなその木の実は染料としては使えそうだが、食用には適さないものだった。

渋みで口の中が狭まる嫌な感覚を消すために淹れた茶で口を漱ぎながら、今度はりんごのような果実に手を伸ばす。口に含んで咀嚼しながら味を確かめ、飲み込んだ。

クーヤの様子を心配した面持ちで尋ねてみる。

「そ、それはどう？」

再びうんっ、と頷いた後顔を真っ青にしながら倒れ込んだ。

ラビとアリスの悲鳴を聞きながら、息も絶え絶えな様子でその果実の感想を二人に伝えた。

「こ、これは毒――ぐふっ」

「きゃーー！アリス早く洗浄してあげて！」

「ラビも活性炭を水と混ぜておいてくれ！」

毒物を体内に入れた場合、治療法として現代でも使われる手法は胃洗浄と活性炭の経口投与だ。

活性炭とは炭化したものを賦活という反応操作で多数の微細孔を

生成したもの。賦活とは炭化した原料を水蒸気、空気などのガスを７００～１０００℃の温度で反応させ細かい孔を開ける作業だ。
活性炭を経口投与する事でその微細孔に毒物が吸着し、体内の毒物濃度を下げる効果がある。口当たりはまるで砂を飲むような感じではあるが。

また、この活性炭には浄水、下水処理、脱臭、脱色等にも用いられる。不純な物質を吸着し除去する目的として現在でも多く使用されているものだ。

「あー、死ぬかと思った」
「心配かけるな！このクーヤのアホ！」
「うん、あれだ。果実は最後の手段だ。餓死直前までもう試したくない」
「自決手段としか思えないがな」
「それでこそ最終手段だな」
「上手くない、上手くないから。絶対突っ込んでやらないから」
「だが結局、状況は変わらずじまいか」
「なぁに、まだ別の手段がある」
「……どんな？」
「やっぱ虫だな」
「それだけは、いっ、やーーーーーー！」

心からの叫び声は森の中まで響き渡った。
残りの果実はもう試す気が無くなり、それから数日間クーヤは時折訪れる激しい腹痛に悩まされるのであった。

ガサガサと森の中を歩み、今日も探索は行われた。

「あ～、やっぱ見つからねぇな」

探索の範囲をどんどん広げて行くが、食料となるようなものは未だ発見出来ていない。よく分からない木の実等はそこらに生っているが、腹をさすり視界から消し去っている。

今は果実を見ただけでも数日前の悪夢が蘇る。クーヤは心と腹に深い傷を負っていた。

「やっぱ、虫でも喰うかね」

ラビは嫌がるだろうが、空腹になったら手を出すかもしれない。帰るついでに獲っていくのもいいだろう。

そんな事を考えながら歩いていると、ふと視界の隅に見覚えのある輪郭があった。

「お！あれは――」

草葉の間から長い耳が見える。兎だ。

この森に入ってから初めてまともに見る獲物の姿に、クーヤは興奮する心を落ち着かせ、慎重に近寄って行った。気配を消し、足音を殺し、ゆらりゆらりと距離をつめる。

視線の先には兎の耳。

そして目の前まで近づいたその耳を、目にも止まらぬ速さで掴み取った。

暴れるかと思ったが、抵抗が無い。不思議に思い、耳の付け根からその下を眺めていく。

「……これは喰えるのか？」

クーヤが捕まえた耳の先には、気を失った兎型の亜人がそこに居た。

第十六話　食料危機（後書き）

「ただいま」
「お帰り。随分大きな得物を獲ってきたな」
「やったー！！にく～～！」
「……ああ、これってやっぱり喰えるのか」
「んなわけあるか！」

第十七話　兎の願いと天邪鬼

第十七話　兎の願いと天邪鬼

「で？どうすんの」
「さて、どうしたものか……」

耳を掴んだまま一向に起きる気配が無い亜人をどうするかと散々迷い、結局背負って連れ帰る事にした。亜人は敷いた布団に横たえており、まだまだ起きそうにない。

「どうするかも決めずにつれて来たのか？犬や猫じゃないんだぞ」
「とは言うが、ガキ一人あんな所に置いてたらすぐに魔獣の餌になるぞ」
「それはそうだが……」
「面倒くさいの嫌いじゃ無いっけ？」
「なるべく避けたいがな」

アリスが布団で眠る亜人の様子を伺った。

亜人とは体の一部に獣の特徴がある人型の総称。
目の前に居る亜人は頭部が兎っぽく、体は人であった。

頭上に生えた2本の長い耳、頬に左右それぞれ3本づつ長い髭があり、顔は人のような獣のようなどちらとも言えない混合した顔立ち。亜人を初めて見るアリスにとって、この子年齢はよく分からないが幼いように感じた。

クーヤが子供だと決め付けたように、掛け布団に隠された体も小さい。おおよそ1メートル前後。その体の至る所に負った傷はクーヤによって治療されている。

人と亜人は仲が悪い。いや、人が一方的に嫌っているというのが正しいだろう。このように怪我をした亜人を介抱する事自体珍しい事だ。

「まぁ、クーヤらしいと言えば、クーヤらしいな」

「よね」

自分達がそうであったように。

出会った頃を思い返し、昔の光景に懐かしみながら微笑んだ。

「聞きたい事も思い浮かんだが……詳しい事情はこいつが起きてからだ。俺達も今日は寝るとしよう」

クーヤの布団は亜人が使っているので、二つの布団を並べて三人まとまって寝る事にした。少しだけ亜人に感謝する彼女達であった。

闇も白々と明けてきた早朝、クーヤは奇妙な物音によって目を覚ました。

ごそごそと囲炉裏の近くで何かがうごめく。横になったまま両隣を確認するが、ラビもアリスも寝入ったままだ。自分の布団を見るとそこに亜人の姿が無い。クーヤは静かに身体を起こして物音の場所へと近づいた。

「……何してんだ？」
「ひっ」
聴覚の優れた兎型の亜人にも聞き取れないよう静かに移動していた。物音を立てた瞬間、その場から逃げてしまうかもと考えたからだ。
「ご、ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」
声をかけた亜人は恐怖に囚われたのか、足が震えてその場に座り込んだまま謝罪を繰り返し始める。
「いや、別に怒ってはいないが」
「こ、殺さないで」
その一言で、この子がどのように過ごしてきたかわかったような気がした。
クーヤとしてはどうするつもりもないのだが、相手にとって人間は恐ろしいものだと感じているのだろう。その恐怖を取り除かなくては話しが進まない。
今は恐怖に震え、目の焦点が合っていない。緊張に襲われ、パニックになっている。今言葉をかけても相手が混乱するだけだろうと思い、中指と親指を合わせて亜人の目の前に突き出す。
パチンッ。
目前で指が鳴らされ亜人がビクンと体を強張らせ、真っ白になっていた視界に段々と色が付き始めた。
すかさず人差し指を亜人の目と鼻の先にびしりと突きつける。亜

人はぎょっとしながら突きつけられた指先を見続けた。

どのくらいそうしていただろう。一分か数十秒か、それくらい短い時間。たったそれだけの時間で亜人は落ち着きを取り戻した。

思考の焦点が拡散し、混乱した人に対して有効な方法。驚愕法と呼ばれる催眠誘導の一種をクーヤは行った。

混乱した人に対して身体を揺すったり、大きな声をあげるだけではその人はますます混乱してしまう。クーヤが使った方法は、まず驚かせて目の前のものに意識を集中させる。ただそれだけ、誰にでも出来るものだ。

「おはよう、俺の名はクーヤ。お前の名は？」

気持ちが落ち着いたのを見計らって、亜人に話しかける。聞きたい事は色々あるが、とりあえずは自己紹介から始めた。

「えっ、あう。わた、わたしは……」

そして口を噤んだ。

まだ少し混乱しているかと感じ、目の前に突きつけた手を亜人の頭に乗せて撫で始めた。白い毛並みが中々に心地よい。

「誰も急かしはしない。ゆっくりでいい。お前の名はなんて言う？」

「わ、たしは……ナナと、言います」

「そうか……ナナはいくつになる？」

「きゅ、九歳になりま、した」

「ナナの家族や仲間はいるのか？」

「は、い。結構居ます。何人かは……ご、ごめんなさい。わからない、です」

「そうか。まだ子供なのに受け答えがしっかりしてるな、偉いぞ」
「え、う……はい」
頭を撫でるがびくりびくりと警戒した様子が伺える。
とりあえず少しではあるが情報は手に入れた。子供の、特に亜人の性別はわかりにくかったが、ナナというからには女の子だろう。結構という曖昧な表現だが、同じ種族も居る事がわかった。それが十数人か何十人かはわからないが。
ある程度受け答えが出来るなと思い、彼女にとって一番答え難い質問を投げかけた。
「それで、ナナは何をしていたんだ？」
ビクッと身体を強張らせ、一度だけ顔を上げクーヤの顔色を伺った。そしてすぐさま頭を下げ、謝罪の限りを尽くし始める。
「ごめんなさい！ごめんなさい！あの、お腹が空いて、だから……その、ごめんなさい！」
「なんだ、腹が減ってるのか。ラビ、アリス起きてるだろ。ちょっと早いが朝食にしよう」
「はい、はーい」
先程から全力で謝るナナの声にラビとアリスも目を覚ましていた。亜人一人に三人が囲むとなるとまた不要な混乱を招く、そう考え寝たふりをしていたのだろう。布団の中から元気の良い声が聞こえ、掛け布団を捲り上げてからテキパキと朝食の支度を始める。
「えっ、あの……」
「ジャガイモを使った料理にするつもりだが、リクエストあるか？」

「ジャガイモとチーズのおやき」
「チーズ、チーズっと……ぎゃー、固くなってる！クーヤ、柔らかくする方法知らない？」
「ウィスキーあったろ？固くなってる表面に塗っとけ」
「あーい」
「さて、ナナ」
「は、はい！」
「朝食もすぐ出来上がると思うが、その前に身体を流してきたらいい。こんな事言うのもなんだが、ちょっと臭うぞ」
「あ、う……ごめんなさい」

顔を真っ赤にしたようだが、その顔は汚れていてよく分からない。ただ、俯いた事で恥ずかしいという事は伝わってきた。

「女の子にそんな事言うなんてサイテー」
「デリカシーの無い男は嫌われるぞ」
「悪かったな……」

クーヤとしては自分達が不快だからという理由が無いと、恐縮して入ろうとしないだろうとの考えだったが、ラビとアリスには大変不評だった。

「ラビ昨日の湯はまだ残ってるよな？もう一度暖めて、ついでに風呂の使い方も教えてやれ」
「はいよー。さ、ナナだっけ？とりあえずこっち来て」
「あ……は、はい」
「ほんじゃ、俺は料理手伝うかね」

腰を上げたクーヤは柔らかくなったチーズを刻む作業へと取り掛かった。

ナナが湯浴みという初めての体験をおっかなびっくり済ませた頃には、クーヤ達は囲炉裏の前でおやきを焼いていた。炭の上に五徳によって支えられた鉄板が敷かれており、その上でジャガイモとチーズの焼ける香ばしい臭いが部屋に漂った。

焼きあがったおやきが当たり前のようにナナに手渡されると、信じられないといった表情でクーヤの方へ顔を向けた。遠慮するな、とクーヤが声をかけた後、ナナは三角形に切り取られた端っこに口をつけ始める。

「美味しい……」

そしてボロボロと涙を零し始めた。

「お母さんにも、食べさせてあげたい……」

泣きじゃくるナナに声はかけず、クーヤは黙々と食事を続けた。ラビとアリスも特に声はかけないまま、初めてクーヤにサンドイッチを貰った時はこんな感じだったなと少し昔を懐かしんだ。

涙でおやきを濡らしながら、嗚咽に震える口を懸命に開けて本当に久々の食事を喜んでいた。

食事を終えた後、自分に危害を加える様子が無いと理解したのか、

森の中で倒れていた経緯を説明してくれた。

ナナの種族は森の出口付近に細々と暮らしていたが、人の手によりその日常が壊された。単なる戯れとして狩りの対象として扱われた場合や、奴隷商人の商品として連れ去られたりし、徐々に数を減らしていったらしい。

特に抵抗を試みた成人以上の男性の数が激減したようだ。残った者達は森の奥へと逃げるように移動したのだと言う。

自分達の種族はナナが倒れていた場所から森の奥へ進んだ先にある洞窟で、身を寄せ合って住んでいるという事。

人間の脅威からは脱したが、次は魔獣の餌としての日常が訪れたという事。

母親達は子供を守ろうと必死に魔獣に抗うが、一人、また一人と傷つき倒れていった事。

傷ついた仲間のために一人薬草を探して森に行き、魔獣に追われた事。

逃げ惑い、魔獣を振り切って安堵していたらいつの間にか此処に居た事。

ナナは自分の記憶にある事柄を素直に話した。ラビとアリスはナナに悲しそうな顔を向け、クーヤはただ無表情でその話を聞いていた。

全てを話し終えた後、ラビとアリスはクーヤに顔を向けるが、彼

の口からは特にこれと言った感想はない。

「クーヤなんとかならない？」

「ならねぇな。事情はよくわかったが、動く理由には満たない。俺達は他人に同情出来るほどの余裕もない」

「だが……クーヤは私達を――」

助けてくれた。

アリスはその言葉を口に出さず飲み込んだ。ナナ達の状況は痛いほど理解出来る。なにせクーヤが現れなければ、自分達がそうなっていたから。

だが、自分達の状況も理解している。特にクーヤに関しては、あの時と今では状況が違いすぎる。それでもなお、ナナ達を助けたいと思っていた。

「お願いします。薬草を分けて下さい。お、お礼は……今は出来ないですが、必ず、必ずしますから！」

「お礼って、住処に帰れば何かあるのか？」

「えっ……あ、う。……無い、です」

「そうか」

「――あ、あの！わ、私が奴隷に……奴隷になりますから。どうか、薬草を……お願いします！」

ナナの必死の懇願。仲間を助けるために自らが犠牲になる事も厭わないというその思い。悲壮と言える覚悟が伝わってくる。

「……ガキが身を売る時代……か」

そう呟いたクーヤが次に言った台詞は、了解でもなく、拒否でもなく、まったく別の話題だった。

「なぁ、ナナ。さっきの食事旨かったか？」
「え？あ、う……えっ、は、はい。とても美味しかった、です」
「俺としては塩味が足りなくて味気なかったな。普段何食べてるんだ？」
「え、あ、えっと。木の実や果物とか食べて、ます」

あまり森の中を出回れない為、獲ってこれる量は少ないけれど、と付け足した。その言葉を聞いてクーヤはふむ、と頷いた後この前保留にした木の実や果実をナナの目の前に差し出した。

「この中の物ならどれが食える？」

ナナは一体何の話をしているのかよくわからない、と混乱するがクーヤに質問された事を律儀に答えていく。

「えっと、これと……これ、後はこれを食べてます。他のは食べられません」

数種類ある木の実や果実の中から、三つの物を指し示した。前回食した二つは食べられない物として除外されている。クーヤはそうかと呟いた後、おもむろにそれらを口に含んだ。ラビとアリスが驚愕の表情をクーヤに向ける。

「ちょ、ちょっと。クーヤ！」
「ふむ……これとこれは結構いけるな。あとこのミカンみたいな物は変わった味がする。俺はあんまり好みじゃないな」
「おい……大丈夫なのか？」
「さてね。即効性は無いようだが、遅効性の毒はあるかもしれない。まぁそれも後々わかるさ」

試食を終え、クーヤはナナに顔を向き直しながらさらに会話を続けた。言葉を口にしながら、どうすれば自分達に利益が出るのかを考える。
出来ればナナのような子供ではなく、大人から情報を仕入れたい。
「確かに俺達としては人手が欲しいが、子供がやれる事は限りがある。子供の奴隷を俺達は必要としていない」
「あ、う。頑張ります、から」
「奴隷としては必要無いが、俺達も食料に困っていてな。お前の知識は頼りになるかもしれない」
「じゃ、じゃあ！」
「だが薬草も何でも治る万能の薬じゃない。精々傷の回復を助ける程度だ。身を売るのは釣り合わないと思うぞ」
「そ、それでも……助かる仲間が居る……なら」
「そして最後に、ナナが此処に戻ってくる保障は無い」

うっ、とナナは言葉を詰まらせた。

ナナの性格からして約束を反故にする様子は無さそうだが、他の仲間が反対する事は確実だろう。
そして何より、此処から魔獣が徘徊する森の中を往復しなくてはならない。ナナが生きて戻ってくる保障など、誰にも証明することなど出来はしない。
「保障が無い、だから着いていく事にする」
「えっ？」

クーヤが言葉を発した途端、ラビは目の前に掲げた拳を握り締め、アリスは腕を組みながらしきりに頷いていた。二人とも笑顔である。

「ラビ、アリス、今日の探索は中止だ。亜人の住処へ向かう。出かける準備をしろ」
「いよっし！了解！」
「戻ってくるのに2，3日かかるかもしれない。供えとして結界を二重に張っておこう。ラビは外側を、アリスは内側だ。結界の張り方は忘れてないな？」
「うん、大丈夫だ。結界の魔術文字はちゃんと覚えているぞ」

本来は一日様子を見て安全に食べられる物か判断したい所だが。ナナの方は状況が切迫している為、後払いという事で手を打つ事とした。

「えっ？あ、あの……いいんですか？」
「いいも何も、こちらの都合だ」
「で、でも……」
「……というか、ナナは此処からの帰り方わからねぇだろ」
「――あ！」

その指摘にナナは声をあげた。
此処からどの方角へ行くかも分からない。方角を聞いても森の中を何処に目指して進めばいいかも分からない。気を失っていたから無理もないが。

「というわけで、お前の住処へ向かう。道中魔物に襲われる危険性もあるから薬草以外の治療道具も持っていくとするか」

そう言い残してクーヤは準備を始めた。
治療用の道具と薬草をまとめて袋に詰め、色違いの布を細長く切り分けていく。

ラビとアリスは既に部屋を出て結界を張る作業へと向かっていた。

「あの……ありがとう、ございま、す」

嗚咽で途切れる声を必死に絞り出し、クーヤに礼を述べる。涙を堪える懸命なその姿に対してクーヤは、「礼を言う必要は無い、これは契約だ」とそっけない態度で返した。

第十七話　兎の願いと天邪鬼（後書き）

「ニヤニヤ」
「ニヤニヤ」
「……なんだ？気持ち悪い」
「素直じゃないな。助けたいならそう言えばいいのに」
「同情で行動はしねぇよ。一文の得にもならん」
「うんうん、クーヤらしいわね」
「そういう所、可愛いと思うな」
「うるせぇよ」

人間にもそれ以上接近されると不快を覚えるという一固有の縄張り意識のようなものが存在する。
この範囲は相手によって変動する。

第十八話　識別救急

道すがらクーヤはラビとアリスに語る。

「いいか。今回みたいに負傷者が多数居ると思われる場合、まず初めに行う事はトリアージだ」

馬車で移動中の事だ。
クーヤは御者席に座り馬を誘導させている。その隣にはナナが座り、洞窟への道を確認する作業に没頭していた。集中するあまり、クーヤ達の会話は耳には入っていないようだったが。

「トリアージって？」
「選別という意味を指す。無傷もしくは軽症、命に関わらない重症、命に関わる重症、そして死亡もしくは治療の意味が無い者。この４つを判断する行為だ」

それぞれ緑、黄、赤、黒といった色違いの細い紐を負傷者に巻くように伝え、先程切り分けた紐をラビとアリスに渡す。
手渡された四色の紐をじっと眺めながらアリスが口を開いた。

「そんな重要な事を私達が決めていいのか？本当に素人だぞ？」
「だが、俺達しかいないのが現状だ。まぁ、あんまり深刻に考える事はない。治療する時に俺も状態を見るから」
「あと……相手が治療を拒んだらどうするの？」
「そしたらほっとけ」

亜人が素直に人間の治療を受けてくれるかどうか。
ラビにとって一番の懸念事項は自分達からの治療を拒否された場合だったが、クーヤにあっけらかんとした態度で言葉を返された。

「生きたいヤツは生かして、死にたいヤツはそのまま死なせればいい」
「それもトリアージか？」
「いいや、これはただの自論だ」
「ご主人様、そろそろ洞窟に着きます」

御者席の隣でナナが声をあげた。どことなく声が弾んでいる。再び仲間に合える事が嬉しいのだろう。

「そうか……ところでナナ、その呼び方どうにかならないか？」
「えっ、ご、ごめんなさい。でも……わたし、奴隷ですし……」

一体どう呼べばいいのかわからず、助けを求めるようにラビとアリスの方へ振り返った。

「御主人様なんて呼ぶと倒錯した性癖が沸きあがっちゃうみたいよ」
「おい、人を勝手に変態にするなよ。ウィムさんじゃあるまいし……ガキに欲情してたまるか」
「普通に呼べばいいんじゃないか？アホクーヤとか唐変朴とか」
「おい、それは単なる悪口だろうが。しかも言語力がガキっぽいぞ」

「え、えっと……で、ではクーヤ様で」
「……まぁ、それでいいか」

様付けを止めて欲しかったが、主従の関係なら仕方ないかと妥協する。背中に虫が這うような物凄い違和感を覚えてはいたが。

「気に入ったみたいね、クーヤ様」
「おい、馬鹿止めろ」
「どうした？恥ずかしいのかクーヤ様？」
「お前達には後で話したい事がある。とても重要な事だ。主に俺の尊厳的な意味で」
「望むところだ」
「あ、あの……もう着きます」

此処に来るまでに昼前になっていたが、目の前の洞窟はかなり暗い。森の奥にあるため木々に遮られ、僅かにしか日の光が入らないというのもあるが、洞窟の奥が何も確認できない。思っていたよりも洞窟は深く、広そうだ。そこに住む亜人もかなりの人数が居るかもしれない。

馬車は洞窟の前に止めておき、クーヤ達はその洞窟の中へと足を進めた。
洞窟に入った瞬間、奥から立ちこめる臭いに思わず短く呻いた。洞窟の奥から漂う獣臭そして――濃い血の臭い。

負傷者の数は考えていたよりも多そうだ。クーヤは表情を引き締めた。

「お母さん！」
「ナナ！どこに行ってたの？！皆心配していたのよ！」

薄暗い洞窟の中から若い女性の声が聞こえる。薄暗くてよく見えないが、ナナの母親だろうか。親子の周りにも数名が集まってくる。

「あのね、あのね。クーヤ様が薬草を届けに来てくれたの！」

「……クーヤ様？」

ナナは未だにクーヤ達が自分を送り迎えする為だけに一緒に来たと思っているのだろう。ナナが洞窟の出入り口付近に顔を向けると、多数の視線が同じ方向へと向けられる。

亜人特有の視力の良さか、それとも暗闇に慣れたからか。出口付近に居るクーヤ達の姿がはっきりと見えた。その視線の先にこの空間では異物の存在を目の当たりにし、大勢の亜人が恐怖で血の気が引いている。

クーヤは洞窟内の開けた空間が一気に緊張で強張るのを感じた。

「ひっ、に、人間！」

親子の周りに集まっていた者はすぐに一歩後ずさった。

暗くて全体の数を正確に把握出来ないが、４，５０名。もしくはそれ以上。その多くが身体を横にしたままで動こうとしない。人間が住処にやって来たというのに。かなりの数の負傷者にクーヤはため息をついた。

「ラビは火を灯せ。出来るだけ明るくしろ。アリスは洞窟の外に場所を作れ。邪魔な木は切り払っておけよ。トリアージを始めるぞ！」

「了解！」

「わかった！」

アリスはすぐに洞窟の外へと駆け出した。
早速洞窟内に火が灯され、暗闇に慣れた者は目を細めて何事かと怯え始める。そんな彼等の反応を無視し、一番近くにいた負傷者から調べ始めた。
「えっ？あの……クーヤ、様？薬草だけ……え？」
一体何が行われ始めたのか分からない。ナナは目を丸くしながらクーヤに近づいていく。
「これから治療を行う。火の灯りだけじゃ心もとない。外でやるぞ」
ナナが近づく気配を感じたクーヤは、負傷者の腕に赤い紐を結びながら声を発した。簡潔に、顔は振り向かず、次の負傷者を調べ始めながら。
「あ――」
「お前の仕事は動けるヤツを連れて、腕に赤い紐を結んでいる者から優先して外に運び出せ――これは主人としての命令だ」
「は、はい！……あの、ありがとうございます！」
クーヤの命令を達成しようと、ナナが母親達の元へ向かっていった。話しが始まると、「嘘だ」や「騙されるな」といった声が聞こえたが、クーヤには関係ない。行動が遅れて困るのはクーヤではなく、兎の亜人達なのだから。
「ラビもっと湯を沸かせ！アリスは赤と黄のヤツをもう一度確認！

ナナ、手が空いてるなら緑に薬草を渡して回れ！」

クーヤの声が響く。

彼女達はクーヤの言葉に従い、大忙しで周囲を駆け回っていた。

ナナの必死の説得が伝わり、兎型亜人の大人達によって重傷者が外へと運び出された。木々に囲まれていた洞窟前がいつの間にか広い空間となり、その場所を囲う様に氷の防壁が築かれている。

亜人達はその光景に驚くが説明している暇などない。

洞窟の前に茂っていた木々は切り開かれ、空から日光が降り注いでいる。その光の下で治療が行われていた。

「次のヤツをここへ運べ！」

お湯が汲まれた桶で手を洗い、度数の高い酒で消毒した後、次の負傷者が運ばれてくる。二人がかりで運ばれた負傷者を、地面に描かれた魔方陣の上に乗せられた。

その亜人は片腕が肘の辺りで切断されており、手の部分は腹の上に一緒に置かれている。運んできた亜人に顔を向けると、怯えた表情を返してきた。

「こいつの腕が切れたのはいつ頃だ？」

「ひっ、え、あの」

「私達が来る前に負ったらしいわ。多分2，3時間前」

狼狽する亜人に代わり、ラビが情報を伝えた。

「悪いがこいつの治療はもうちょっと後だ」

呼吸は荒いが、状態は黄色と判断した。ただ傷口に巻かれた包帯から血が滲み続けている。

「あの……でも、血が……止まらなくて。それに、手が……」

クーヤは包帯を外し、清潔な布を直接傷口に押し当てた。負傷者の口から痛みによる低いうめき声が漏れる。

「止血の方法を間違えている。切断した付近をきつく縛るんじゃない。切断面を直接圧迫するんだ」

指や手足を切断した場合、切断面の上部をきつく巻き、ある程度時間が立ったら緩めるという止血帯法が広められているのが現状だ。確かに止血としては間違っていないが、止血帯から切断面による壊死や、緩めた時の再出血という弊害が起こるため今では誤った方法とされている。

現在では切断面に滅菌されたガーゼや清潔なタオルなどを強めに圧迫する圧迫止血法が正しい処置とされる。勿論、この世界では広められていない。

「腕の方は最悪、諦めてもらうが……アリス！ちょっと来てくれ！」

遠くで他の負傷者の様子を見ていたアリスが、クーヤの声ですぐに駆けつけてきた。

「どうした？」

「こいつの腕を冷やしたい。腕の周囲を氷水で冷やしておいてくれ」

「周囲を？」

「ああ、腕に直接水を当てるなよ。腕がくっつかなくなる」

「わかった」
「よし、次のヤツ運べ！」
アリスに腕の末端を渡し、運んできた亜人に切断面の圧迫を任せる。次の負傷者を呼び寄せる声が森の中に響いた。

クーヤが腹部を損傷した亜人を治療している最中にその少年は目覚めた。
意識を取り戻した瞬間、先程まで魔獣に襲われていた事を思い出し、瞬時に辺りを見回すが魔獣の姿が見えない。
また誰かに助けられたのかと考え、悔しくて歯を軋ませた。
（……あれ？ここ、どこ？）
洞窟付近の森に、光が差す場所などなかったはずだ。
そう思いもう一度辺りを見回した矢先、信じられない光景が少年の視界に入った。人間が仲間の腹を弄っている。
クーヤが血の海に沈んだ内蔵の中から出血箇所を探すため、風の魔術で血を飛ばし、破れた血管を熱湯消毒したピンセットで掴み止血している様は、少年にとって仲間を悪戯に切り刻み、悪い儀式を行っているように映った。
「なっ、何してんだ人間！！」
少年はその場から飛び出した。突然の行動に周囲は驚くが、近く

に居たナナによって取り押さえられる。ナナの腕が少年の腰を掴み二人はその場に倒れこんだ。

「シモン！クーヤ様の邪魔しちゃダメ！」

「離せナナ！人間が何で此処にいる！僕の仲間に何してんだ！」

暴れるシモンをナナが必死に抑制する。仲間が傷つけられているのに、何故ナナが自分の邪魔をするのか。シモンは目の前の人間にもナナにも激しい怒りを感じていた。

そしてその人間が信じられない事を言う。

「治療をしているんだが？」

「ち、りょう？」

「ああ、そうだ。今こいつの破れた血管を圧迫して止血している。止めろと言うなら外すが……さっきの出血量からみて、外したら十分ももたない」

「う、嘘だ！」

人間が自分達を助けるはずがない。人間は今まで自分達の種族を虐げてきた者だ。言葉にはしないが、そのような恨みという思いが伝わってくる。

「ナナが拘束を解いたら、今にも襲って来そうな目だな」

「そうだ！お前ら人間は僕が殺してやる！」

「そうか俺を殺すか……なら、お前は仲間を殺す覚悟があるって事だな」

「――は？」

一体目の前の人間は何を言い出したのか。呆気に囚われたシモンは怒りを忘れ、ただ呆然とした表情を示す。

「さっきも言ったな？今治療を止めればこいつは死ぬ。つまり、お前が殺すという事だ」
「そ、そんな……」
「ちなみにまだ治療しなきゃならんやつが居る。そいつらもお前が殺すって事だ。その責任は全てお前のせいだ」
「ぐっ、ぐぐ……」
「大丈夫だよシモン。クーヤ様はちゃんと私達を助けてくれてるんだよ。ほら、周りを見て」

ナナの穏やかな言葉に鋭い目つきで周囲を見ると、確かに包帯を巻かれた仲間が何人もいた。

シモンは沸きあがる怒りを必死に堪え、行き場を失った憎悪を込め力強く地面を一度叩いた。一度では振り切れず、何度かそのまま地面を叩く。
そしてつぶやいた。今まで溜め込んだ憎しみを一時紛らわせるかのように。

「僕の父さんはお前ら人間に殺された……」

シモンはこの場に居る亜人の思いを、代弁するかのように囁く。
ここの誰もが人間に傷つけられ、家族を殺されたのだ。

「そうか」
「なんで……僕達が虐げられなくちゃ……」
「この世は弱肉強食、それが理の一つだ」
「母さんも！僕を守って死んだ！僕は母さんを守ってあげられなかった！」
「……そうか」

「なんで――なんで、僕はこんなにも弱いんだよぉ」
「それを運命と諦めるか、微力ながらも仲間を守ろうとするかはお前の勝手だ」

それに対するクーヤはそっけないものだった。子供に対して厳しい言葉だろうが、実害を犯した者と自分達を一括りにされては堪ったものではない。

「……治療を続けていいか？」
「くそ！死んだら絶対お前を許さないからな！」
「こうなるまでほっておいたのはお前達だが……努力はする。だから邪魔するな」

そしてクーヤは治療を再開した。途切れた血管同士を繋ぎ合わせる為に両端から血管を支え治癒魔術を使っていく。
血管が徐々に繋がっていく光景に、ラビは感心した様子で眺めていた。

「クルツさんに治癒魔術かけてもらったことあるけど、傷が全体的に塞がってく感じだったわ」

治癒魔術とは薬草の上位互換のようなものだ。魔術をかけた相手の回復力を高め、その傷を段々と塞いでいく。失った腕を生やしたり、悪性腫瘍を取り除いたりは出来ないが、薬草では治療不可能な深い傷を治す事は可能だ。

「緻密な想像と魔素を操る事が出来れば、こんな風に選択的に治療する事も可能だ」

俺に魔力がもっと有れば傷を塞ぎたかったがな、と愚痴を吐いた。

クーヤの少ない魔力量では大勢の傷を塞ぐ事は無理である。
クーヤに出来るのは血管や神経を糸で結ぶように繋げる事しか出来なかった。ただ、それが出来れば命は救える。

「赤のヤツは後何人だ？」
「一人増えたわ。現状は残り二人」

治療を始める前に人数を確認したが、時間が過ぎることによって負傷者の容態も変わっていく。黄色の紐をつけた者が赤に変わったり、赤だった者が黒に変わったり。

診断を誤った場合も有るだろうが、クーヤ達を責める事は出来ない。彼等は治療が専門では無いのだから。そして、負傷者の数に対して治癒を使える者がクーヤしかいない為、どうしても対処が遅れる。

「そうか……こいつの治療はここまでだ」
「まだ傷口が塞がってないようだけど……」
「重要な血管の修復は終えた。傷口は開かないように後で縫う――いや、ラビお前がやっておいてくれ」
「……わかったわ」

クーヤの魔力残量を感じ取ったのだろう。
衣服を縫う経験しかなかったが、拒否を示す事はなくラビはすぐに取り掛かった。クーヤは次の負傷者を呼び寄せる。

彼等の治療はまだまだ終わりが見えそうにない。

「悪い、魔力が切れ……た」

先程の腕を切断した亜人を治療中にクーヤの魔力が枯渇し、その場に倒れこんだ。

亜人の腕は血管、神経、重要な筋を選択的に繋げていったので、骨と多少の肉が途切れたままだった。本来は内側の骨から繋げていくものだが、残り少ない魔力を考え優先順位を変更していた。

「クーヤ大丈夫か！」

切断した腕を支えていたアリスが声をかけるが、クーヤは倒れたまま起き上がろうとしない。ただ、か細く口を開いて消えるような声で囁く。

「必要な……繋がっ、た。あと、頼む」

「わかった」

アリスの返事に満足気な微笑を浮かべてクーヤは気を失った。

治療の様子は隣で見ていたので、この後どうしたらいいかは理解している。骨と表面の肉がくっついていないので、毛細血管からにじみ出る血を止めるのと、骨がずれて折角治した所を傷つけないようにしなければならない。

アリスはその腕に包帯を巻き、骨がずれないよう添え木を当ててその外側にもう一度包帯を巻いて固定した。

「よし、これでいい。腕は絶対に動かすなよ」

「は……い。あ、の、ありが、とう――」

「礼ならクーヤに言え」

意識を朦朧にしながらも、礼を言おうとする言葉を遮った。拒否されるだろうがな、と一言付け加え他の負傷者を見て回る事にする。

「まだ治療が済んでいない者はこの場所に集まれ！あと、手の空いているものは荷台に食料がある、それを使って食事を作るように！ラビは食事の方を手伝ってくれ」

「わかった。あんた達とっとと料理を作るわよ！」

クーヤに変わってアリスが指揮を執り始める。

指示を発した途端、亜人達は一度ビクリと怯えるが食事が出来ると聞きアリスとラビの言葉に従っていった。

負傷者も居るので食事は喉に通りやすいスープが賄われ、食事が済んだ後ラビも治療を再開し始めた。

クーヤによって赤い紐が付けられた重傷者は一命を取り留めている。よって彼女達の対象は黄色から緑の紐をつけた負傷者だ。

アリス達による簡単な治療はその日の夜遅くまで続いた。

翌日、クーヤが目を覚ますと荷台に敷かれた布団の中にいた。その隣にラビとアリスの姿がある。

アリスが運んでくれたんだろうと考え、伸びを一つしてから起き上がった。捲くれた掛け布団を彼女達に掛け直し、周囲の様子を見て回る。

自分が治療をした覚えのない者が居る様子から、ラビとアリスは自分が倒れた後もちゃんと動いてくれたんだな、と感心していた。

「あ、クーヤ様。おはようございます」
「おはようございます」

容態がまだ安定しない者に治癒魔術をかけていると、ナナと大人の亜人が一人近づいて来た。

「ナナおはよう……あんたは？」
「母親のエリーナと申します。この度は私達の仲間を助けていただき、本当にありがとうございました」
「お礼はいい。報酬はナナから受け取る予定だ」
「ナナから……それは一体どういう事ですか？」
「ナナを俺達の奴隷とする契約だ」
「なっ！」
「最初は薬草を分け与えるだけというものだったが、流石に釣り合わな過ぎるから気が引けた」

だから治療を行った、と。
利益だけを求めるのならば相手が納得したのだからそのままでもいいだろうが、クーヤは生憎商人ではない。さらに言うならば目の前の利益よりも、さらに質が高く将来的に有益な物を望んでいた。

「あ、あの。私がナナの代わりになりますので、どうか……」
「お母さん！わたしは大丈夫だよ！」
「――と思って治療してみたが、思ったよりも負傷者が多くてな。報酬の上乗せを願いたい所だ」

子供よりも大人を引き入れたい。此処に来るまでにクーヤが考え

ていた事だ。
大人の亜人達の使い道は今のところ三つ。単純な労力、正確な情報、そして囮。今後増えるかも知れないが。

「え？そ、それは――」
「もう数人……いや１０人くらいは欲しい。報酬の話をしたいが長はいるか？」
「……いまは、私がまとめ役としております」
「――そうか、なら話が早い。報酬の話しをしよう」
「あの、ですが……ただのまとめ役なので、皆の意見を聞かないことには……」
「なら朝食の時にでも話せばいい。そろそろ皆も起きるだろう」

エリーナの表情は浮かない。
この後仲間を渡す選別をしなければならないのだから。ナナが「大丈夫だよ！」と明るく言うが、不安は拭いきれなかった。

「ふざけんな！お前らが勝手に――もごもごっ」

当然真っ先に反対したのはシモンだった。
そのシモンはナナによって腕を極められ、手で口を塞がれている。手馴れた拘束の仕方に、シモンの暴走はいつもナナが止めているのだろう。とクーヤは考えていた。
少年の未来はこの年でもう決まっている。精々尻に押しつぶされないように祈るばかりだった。

「ほぉ、やっぱりお前は仲間に死んでもらいたかったらしいな。治

療をしなかったらここに居る半分は死んでたと思うぞ」
「むぐっ――」
なんとも仲間思いのヤツだ、と皮肉を言えばシモンは歯を軋ませながらクーヤを睨んだ。
クーヤがシモンを弄っていると話し合いがついたのか、エリーナが数人を引き連れてやってくる。子供は一人もいなく、亜人達の表情は誰もが沈んでいる。
「あの……」
「決まったか？」
「は、はい……ですが、１０人ともなりますと動ける者、殆どですので……」
「心配するな、ラビを此処に置いていく。護衛としては十分だろう。ラビ、頼んだぞ」
「はいよー、なるべく早く帰ってきてね」
「というわけだ。護衛として置くが、逃げ出す者が居ればラビが此処の者を始末するかもしれない。仲間を思うならば、下手な行動は控えた方がいいぞ。それじゃ出発する」
ラビがそんな事するわけないが、連れて行く者にとって逃亡を防ぐ脅しの効果があればいい。
甘い言葉などいらない。目の仇にしている人間が、安全な場所があるからそこに住めと言っても誰もが不信感を抱くだろう。だからこそ、クーヤはただ強制的に従わせる。
百の言葉による説得よりも、一の行動が時にその者に染み付いた観念を払拭してくれる。今はその行動が効果的であるだけだ。

１０人と数を絞ったのも大勢の考えを改めさせるよりも、一人一人時間をかけて説得した方が伝わり易い。そして考えを改めた者により他の仲間に伝える事でさらに効率的に嫌悪感を拭う事が期待される。

どれくらい時間がかかり、どの程度効果が有るか分からないが、人間の悪いイメージを払拭するにはまずは行動からだろう。関係が円滑になれば更なる利益も期待できる。

二日ぶりに帰ってきたログハウスの前に立ち、エリーナを筆頭に亜人達を並ばせる。自分達はこれからどうなってしまうのか、エリーナ達は不安を隠しきれない。

そんな感情には気を払わず、クーヤはエリーナ達に命令した。その命令に亜人達にどよめきが生まれる。

「まず初めに、お前達の住む場所を作ってもらう」

そうして村作りが始まった。

第十八話　識別救急（後書き）

「クーヤ……シモンに容赦ないわね」
「子供だろうが敵意を向けてくるヤツに優しく接するほど、俺は人間が出来ていない」
「とは言うが、実はシモンを弄るのを面白がってないか？」
「ああ、ああいうヤツの悔しい顔を見るのは楽しいな。リリカの時もそうだ」
「いじめっ子ねぇ」

第十九話　合わさる手のひら

第十九話　合わさる手のひら

エリーナ達兎獣人が来てから三日がたった。

ここに来た当初から家造りは始まった。切り倒し、置いておいた木を材料に家造りは進む。アリスによって角材がどんどん出来上がり、人手の数も多いので作業は順調に進んでいく。

ただ、作業をする兎獣人達は終始不思議そうな顔をしていた。

その日の作業が終わるとクーヤはエリーナ達をログハウスに招いた。

沸かした風呂にクーヤとアリスが入った後、エリーナ達に勧めるが恐縮していたため、命令として無理やり入らせる。全員が風呂から上がる頃には料理も作り終わっており、暖かい食事を前に兎獣人達は目を白黒させていた。

食後には兎獣人達から情報を得る事も行われる。

食べる事の出来る果実について。この森に住む亜人達について。獣人と呼ばれる種族について。

エリーナいわく、確かに彼女達は亜人だがその中の部類として獣人と呼称されているらしい。亜人とは人の形をしているが人間とは似て非なる者の総称、獣人は亜人の中でも身体の一部に動物の特徴を合わせ持つ者を示すようだ。

獣人にも様々な種族があり、兎型以外にも犬型、鳥型、狐型と多種類居る事が判明した。

新たに得た知識にクーヤが頷いていれば、その傍らでアリスが仰天した表情を見せていた。理由を聞いてみると、クーヤに知らない事があったという事実に驚いていたらしい。そんなアリスにクーヤはため息を吐いた。

ちなみに、クーヤが食したりんごのような果実は附子（ぶす）の実と呼ばれる猛毒を有した果実である事も判明した。その実を一口飲みこめば、確実に助からないとされるものだ。

その事実を聞いた時のクーヤの顔は、アリスでも初めて見るような青ざめた表情だった。

そうして三日目の夜。

クーヤからの質問が終わったのを見計らい、エリーナは押し留めていた疑問を尋ねてみることにした。

「あの……私達奴隷、ですよね？」

「そうだが？」

クーヤの返事は簡潔だった。

聞いていたものとまったく違う待遇に、戸惑いを浮かべた表情はさらに深くなる。

「これは奴隷の扱いではないと思うのですが……」

エリーナ達が住む家を造り、あまつさえその手伝いをする。食事はきちんとした物が与えられ、身体的な拘束もされていない。

さらにはエリーナ達が住む場所が出来るまで、このログハウスで寝る事も許可されていた。外の地面で、もしくはどこかに押し込まれて睡眠を取る事を考えていただけに、普通に接してくるクーヤ達への戸惑いは一層激しくなっていた。

「扱い方ね。例えばどんなのだ？」
「鞭を打って、強引に働かせたり……」
「身体を壊す原因になるな。少ない労力をさらに減らせってか？」
「まともな食事を与えなかったり……」
「上に同じだ」
「檻に押し込めたり……」
「そんなのに使う金属があるなら、別のもん作るな」
「首輪をはめたり……」
「それも同じく」

クーヤの返事はとても単純で、エリーナは呆気に囚われる。クーヤ達の都合ではあったが、それでも彼女達は信じられなかった。

「あの……私達を売ったりしないのですか？」
「残念な事に今は外との繋がりが無い。売る気も無いがな」
「あ、後は……その……よ、夜伽として」
「それは惹かれる内――というのは冗談だ。だからアリス笑ったままこっちを見るんじゃない。笑顔が痛い」

アリスの視線に耐え切れず、クーヤは頭を掻きながらため息を吐いた。そして僅かに口角を上げる。これは行幸だ。

クーヤ達の亜人に対する、奴隷に対する対応と、兎獣人達に刷り込まれた人間に対するイメージとの落差に彼女達は迷っている。果たして目の前の人間はどちらなのだろうかと。

一の行動は成った、後は百の言葉を伝えればいい。

「お前達が奴隷をどんな風に考えてるかは分かったが、俺は別に奴隷商人というわけでもない。奴隷の扱い方なんて詳しく知らん」

だから自分にとって奴隷の扱い方はこれが普通だ。そう伝え、兎獣人達に言い聞かせる。

「お前達に望んでいるのは労力と情報だ。もう一つあるが、それはまた今度だな」

「……憐れみですか？」

真剣な表情でクーヤに問う。その視線にクーヤも真剣な表情で応えた。

「私達を不憫に思ったからですか？」

「……だとしたらどうする？」

クーヤに視線を向けられて、身を竦める。その瞳は無感情で、威圧的でもなければ、慈悲を込めているとも言いがたい。ただ興味本位で、エリーナの返答を待っているかのよう。

質問を返されたエリーナは、侮辱するなと怒鳴るでもなく。それでもいいと縋るでもなく。ただ、一言呟いた。

「……わかりません」

エリーナは心に感じた事をそのまま伝えた。素直だな、とクーヤは呟く。

「私は夫を人間に殺されました。此処にいる皆も肉親や家族を殺されております」

エリーナに同調するように、全員が頷きで答えた。その表情は失った時の事を思い出したのか、酷く悲しげだ。

「今でも夫を殺した人間は憎い。でもそれはクーヤ様と関係の無い事だとは分かっております。クーヤ様は私達に普通に接して下さいます。例えそれが憐れみであろうとも……。それでも人間は憎い、怖い……私は、どうしたらいいかわかりません」

そう言ってエリーナは顔を覆った。

クーヤが今までの人間とは違うというのは頭の片隅で理解し始めている。しかし、染み付いた人間への憎しみや恐怖はなかなか拭えないものだ。

そしてその人間が憐れみという手を差し伸べる。彼女はその手を素直に握る事が出来なかった。

例えクーヤがどんな風に接しようと、彼が人間で有る以上その感情はいつまでも付きまとう。

「恨みというのは醜いものだ」

エリーナの話を聞き終え、唐突にクーヤは彼女達に語りかける。俯いていた顔を上げ、クーヤの言葉に耳を澄ます。

「憎しみは負の感情だ。そんなものを抱えて生きても幸せにはなれない。辛いだろうが、その感情を我慢して新しい幸せを探す方が苦

しみから解放されるだろう。亡くなった者達もそれを望んでいる――」

その言葉は納得出来なかった。

奪われるだけ奪われて、泣き寝入りしろと言っているようなものだ。だが、心の奥底でその言葉に納得してしまいそうな彼女達がいた。

自分達の種族は弱い。

立場の弱い者が強い者に生活を脅かされる。どの世界でも当たり前のように存在する自然の摂理。兎獣人達の悲劇など、この世界には石ころの如く、そこらじゅうに転がっているのだから。

納得したくはない、我慢しなくてはならない。相反する感情にエリーナ達は体を震わせた。

「――と、寝言吐いているヤツは目の前で大切な人を奪われてみればいい。それでも尚、相手を許すと言うならばそいつはもう――聖人と言う名の馬鹿だ」

いきなり言葉を覆したクーヤに震えていた体が一斉に静まった。皆の目が大きく開かれる。

「憎しみというのは簡単には断ち切れない。断ち切ったら、失った人の思いも失う。だから――忘れろ」

クーヤの言葉はエリーナ達がすぐに理解する事は出来なかった。忘れる事が、諦める事とどう違うのか分からない。

「許すんじゃなく、諦めるでもなく、忘れろ。憎しみを一時忘れて、

悲観に明け暮れていた時間を他の仲間の為に費やせ。お前達の仲間も笑う事が少ないんじゃないか？」

クーヤは彼女達にそうあって欲しいと伝える。

仇にもう一度出会えるかもわからない。分からないのにずっと憎しみ続け、仲間に悲しい顔を見せるよりも笑っていろと。

「そして仇を目の前にした時、もう一度思い出せ。自分達が何をされたかを、自分の大切な人を何故失ったかを」

それが許す事と忘れる事の違い。憎しみを許してしまえば、諦めてしまえばもうそれまで。

「無理……です」

人間に対する憎しみを忘れてしまえば、夫との思い出も忘れてしまいそうだ。エリーナはそれが怖い。

「確かに難しい事だ。無理に忘れる必要も無い、無理に笑おうとする必要も無い。ただ、隣に居る仲間の手を取るだけでいい。隣に居る仲間を抱きしめるだけでいい。沈んだ顔を笑顔に変えれるよう、些細な事でも一緒に居てやればいい」

そんな単純な事。

今までも隣に居て手を取り合った事があるだろう。だがその手を握るのは悲観に暮れた顔。悲しみを背負い続ける者同士が励ましあっても、傷はなかなか癒えない。

「残った仲間を、家族を……もう一度笑わせてみたくないか？」

「……したい、です。でも……私の中から夫が消えてしまう事が怖

い」

夫の思い出と人間に対する感情は、夫の最期で複雑に絡みついている。それは簡単には解けず、片方を思い出せば強制的にもう片方も着いてくる。

憎しみ、恐怖、悲しみによる感情の連鎖。彼女達がそれを解くにはまだまだ時間が足りない。

「記憶から失う事が怖いなら、俺が覚えていてやる。だから、今ここでお前達が溜め込んだモノを吐き出せばいい」

背負うなどという言葉は使わなかった。何も知らない者が他人の悲しみを背負うなど、クーヤは無責任な偽善としか思っていない。だから覚えておく。彼女達が本当に忘れてしまわぬよう。彼女達の憎しみを覚えておく、彼女達の大切な人が消えてしまわぬよう。

その言葉に彼女達は暗く沈んだ想いをクーヤにぶちまけた。涙に濡れる頬を拭いもせず、ただ必死に言葉を吐き出していく。

エリーナ達の悲しい訴えは長い間続いていた。

クーヤに不満を吐き出した次の日、エリーナはアリスと共に仲間を3人つれて森の中を進んでいた。エリーナ達が食べる事の出来る実を集め、アリスが使えそうな薬草を摘んでいく。

「アリス様に尋ねたい事があります」

自身の仕事をこなしながら、エリーナはアリスに尋ねた。それはここに居る誰もが思っていた疑問。クーヤと共に過ごす中で感じた想い。エリーナ達を奴隷だと言いながら、普通の生活を送らせようとしているその真意。

アリスは私にまで様を付ける必要は無いぞ、と笑った。そんな笑顔に微笑を返しつつ、尋ねる。

「何故クーヤ様は私達に気を使ってくれるのですか？」

「クーヤが聞いたら呆れた顔をしそうだな。気を使っている様子は私からも感じられないぞ」

憐れみという言葉を、気を使うという表現に変えて聞いてみたが、あっさりと否定された。伝わらなかったかな？と思い改めてもう一度尋ねる。

「そうですか……ですが私達は亜人の中ではとても弱い種族です。人間は元より、他の種族からも私達は蔑まれています。それなのにクーヤ様は私達を守ろうとしている様に感じます」

兎型の亜人は力が弱い。

他の亜人よりも優れた聴覚を有し、跳躍力も高い。獣人としての身体能力は確かに人間よりも上だが、戦う力はあまりにも弱かった。

そんな弱い自分達の種族をあえて傍に置くものなど居るとは考えられなかった。だが、クーヤは自分達を普通に扱おうとしている事は、今のエリーナにとってまったく信じていないわけではない。ただ純粋に疑問に感じた。

「私の力を知っているな？現在の魔術師どもの常識によって、この力を持つ私とラビは魔女と呼ばれている」

そしていきなり氷柱を放ち、近くの木に突き刺した。詠唱を必要としないその力を見るが、エリーナ達が怯む様子は無い。魔術の常識を彼女達も勿論知っているが、不思議とアリスの力を怖いとは思わなかった。

「魔女も人間に迫害されている。……本当に酷い扱いだった。ひもじい事もあった、凍える事もあった、辛い事も沢山あった。だがどうする事も出来なかった。この世界は人間に支配されている」

過去に受けた迫害を思い出すが、今のアリスにとってそれはもう忘れていた想いだ。思い出しかけたその過去を、アリスは頭を振って再び忘れる。

「そんな境遇だった頃に手を差し伸べてくれたのがクーヤだ。私達はクーヤに救われた。自分と同じと思った、その時はそんな些細な理由だったな」

それと友達を作りたいという幼いクーヤの願いでもあった。それは言葉にせず、アリスはくすりと笑うだけだった。

「クーヤ様に……」

「お前達を普通に扱うのは、別に弱いもの助けるとかそんな善意での行動じゃないぞ。今回も些細な理由だが、今のクーヤは結構打算的だ」

「えっと、つまり」

「クーヤは……まぁ、言い方が悪いがお前達を利用しているだけだ」

「利用……ですか」

「うん。ああ、変な意味で取るんじゃないぞ。私達にとってお前達の知識と労力が必要で、私達はお前達に安全を提供する。今の私達はそういう関係だと思っている」

異種族がいきなり仲良くなろうというのも無理な話だ。アリス達は兎獣人達を利用して、そちらはこちらを利用すればいい。最初はそんな関係でいいとアリスは考えている。

「そして共に過ごす時間が増えていったら、私達の性格にも目を向けて欲しい。私はお前達を仲間として向き合おうと思っているんだ」

アリスがエリーナ達の目を真っ直ぐ見て、訴えた。自分の言葉が如何に真実か伝わるよう、目を逸らさず、じっと視線を合わせた。

エリーナもその視線に向き合い続けたが、やがてアリスに負けて視線を地面へと下げる。

「すぐには出来ないかもしれません」

「そうだな」

「……ですが、目を向けられるように勤めて行きたいと感じました」

「ああ、ゆっくりでいい。そして感じたことを仲間にも伝えて欲しい。悪い評判が広まらないよう、私も努力する」

「はい」

そうして朗らかに微笑んだ。

アリスも力強く頷いて返した。中断していた探索を再び開始しようと木々の中に顔を向ける。その時後ろからエリーナの声がかかった。

話は終わったはずだが、と怪訝に思いながら振り返れば、エリーナ達が背筋を伸ばしこちらを向いて並んでいる。

「これからも私達の種族を、どうぞよろしくお願いします」

そしてエリーナが深々と頭を下げれば、他の者達も同じように頭を下げた。

気恥ずかしさがアリスの頬を染めるが、エリーナ達の想いに応えるよう彼女達の前に手を差し出した。

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

そうして人間と亜人は手を取り合った。

「おかえり」

「ああ、ただいま」

「只今戻りました」

アリス達に声をかけたクーヤはふと着いていった兎獣人達の表情を見た。

この前までのぎこちない雰囲気は削がれ、その表情はどこか晴れ渡っているように感じる。

アリスが上手く話をつけてくれたのだろうと察し、そろそろ次の行動に移るべきかと考えた。

「アリス、骨組みはほぼ完了した。後はまかせていいか？」

「うん、大丈夫だ。屋根と壁に板をつければいいんだろう？」

拠点の風景が変わってきた。

帰ってくるまでアリス達が住むログハウス一軒だけだったこの場所に、骨組みが整った家が何件も立ち並んでいる。畑もラビが耕していた所以外にも作られ始めている。段々と変わっていく風景に、アリスの心が躍った。

「さて、それじゃ明日にでも迎えに行くか。うちの腹ペコ姫が痺れを切らしてる頃だろう」

クーヤが出発してから五日が経った時の事。ラビは森の中で叫び声をあげていた。

「果物飽きたーーー。お肉が食べたい！」

いきなりの叫び声に周りにいる兎獣人達はビクリと身体を震わせるが、その者達とは対照的にナナはラビに近づいていった。

「ラビ様ごめんなさい。食べられる物が他にもあればよかったんですけど……」

「あ、いいのいいの。気にしないで。ちょっと心の不満が溢れただけだから」

パタパタと手を左右に払う。

最初に持ってきた食料はすぐに無くなり、この周囲で採れる果実などで飢えをしのいでいた。クーヤによってナナの知識は正しい物と証明されたため、ラビは安心してその実を口にした。

洞窟前に結界を張り、ナナと動ける者を連れて一緒に食べ物を探

しに行きもした。採れる物は果実や木の実ばかりで、ラビが求める食料は姿を見せなかったが。

魔素汚染は気になったが、長い間食料としてきたナナ達にこれといった症状も出ていないので、果実などの魔素汚染はクーヤが言った通りあまり濃いモノではないと考えた。

本当に魔素汚染といったモノがあるかどうかは、ラビには窺い知れない事でもあるが。

「で、でも」

「気にしない気にしない。ナナったら私にまで気を使っちゃって、可愛いんだから、もう」

がばっと抱きかかえたナナを膝の上に乗せ、その頭に頬をうずめる。肌に伝わる柔らかい毛並みを堪能するべく、頬を何度か擦り付けた。腕の中でうろたえるナナの反応を可愛く思いながら頬擦りを続けていく。

「あわ、あわわわわ」

「ん～、もふもふ。癒されるわぁ」

「何してんだ人間。ナナから離れろ！」

ナナが捕らえられている事に目くじらを立てたシモンが、ラビを睨んで怒気を荒げている。癒しの時間を妨げるその声に、ラビはシモンを半目で睨んだ。

「そんで、あんたは可愛くない」

「うるせぇ！人間に可愛いなんて思われたくねぇ」

シモンに向けていた視線をナナの目に合わせる。その視線の意味

がなんとなくわかっていた。ほんの数日という短い時間であったが、ナナはラビが考えている事を正確に感じ取っていく。

「ナナ、わかってるわね」
「は、はい」
「よし。それじゃＧＯ！」
「はい！」
「あ、こら！ナナ、なにすん――むぐっ」

シモンをナナが拘束していく。
じたばたともがくシモンを必死に押さえつけるナナの隣にゆっくりとラビは近づいていく。そしてシモンの首に指をあてがった。

「ナナ駄目よ。行動を抑えたいなら、気を失わせなくちゃ」

きゅっ、と指に力を入れる。
もがいていたシモンは急に大人しくなり、カクンと頭を降ろして気を失った。

「こうやって落とせばいいのよ。クーヤに教わった事だけどね。慣れない内はやるなって言われてるから慎重にやるのよ」
「は、はい。わかりました」

慣れればいいのか、と周囲から言葉に出さない声が聞こえる。その光景を見ていたクーヤは呆れた声を出していた。

「……なにやってんだお前は」
「クーヤお帰り。遅いわよ」
「クーヤ様こんにちは。あ！お母さん」

クーヤの隣にはエリーナもいる。
エリーナは他の仲間達を説得するために連れてきた。一番の障害と思われたシモンがラビによって気を失っているのは都合がいい。呆れた言葉とは裏腹に、クーヤはラビに親指を突きたてた。よくわからないが、ラビもクーヤに親指を立てて返す。

エリーナの説得は考えていたよりも早く終わり、まだ満足に動けない者は荷台に乗せてその場所を離れた。気を失ったシモンもその荷台に積まれている。

今まで住んでいた場所を離れ、新しく訪れた場所に兎獣人達はただ唖然としてその光景を見入っていた。そこには兎獣人達の住む場所が造られており、広い場所では家を造る過程で余った木材を火元に炊き出しが作られている。

目を丸くする兎獣人達に、クーヤは言葉を投げかけた。

「ようこそ、俺達の故郷へ」

その言葉は呆然とする兎獣人達にゆっくりと染み渡っていった。

第十九話　合わさる手のひら（後書き）

「この話って実は考えられていなかったのよね」
「そうだな。最初はどの様に感情が変わっていったかの説明文だけだったようだ」
「感想で指摘された事をちょっと深く考えてみたらしいな」
「指摘されて、考えを改めたみたいだな。ただの説明文だけでは希薄に感じると」
「ありがたい事だな」

第二十話　冒険者達

第二十話　冒険者達

その光景を前にクーヤは歓喜した。

彼が着くテーブルに次々と料理が運ばれてくる。
目の前には塩をたっぷりと効かせた焼き鳥、口の中で蕩けそうな脂の乗った刺身、程よく焦げ目のついた分厚い肉、茶碗の中には米の一粒一粒が輝くように存在感を誇示している。

テーブルの片隅には酒場で飲んだエールを初めとする、ワイン、ウィスキー、日本酒などの様々なアルコールがグラスに満たされていく。クーヤは開始の合図を今か今かと子供のように待ち構えていた。

所狭しと並べられた料理に、自然と涎が湧き出てくる。料理から立ち上る湯気で視界が覆われ、濃厚な香りを鼻で吸い込むと胃袋から急かすように音が鳴った。

そしてその音でクーヤは目を覚ます。

まだ暗い視界の中、最近見慣れてきた天井を暫くの間見つめ続けた。瞬きを数回行い、隣に眠るラビとアリスの安心しきった寝顔を眺める。家の外では虫達が競い合うように声を張り上げていた。

布団から身を起こし、先程まで見ていた光景を思い浮かべる。心ゆくまで存分に堪能した後、頭を掻いて深いため息を吐き出した。

夜明けはまだ、遠く感じる。

「……あんまり欲深い方じゃ無いと思ってたんだがなぁ」

途方も無い喪失感が彼を襲う。追い討ちをかけるようにもう一度腹から音が鳴った。

その日の目覚めは最悪だった。

「それは心の叫び声ね。私にはわかるわ」

しきりに頷きながらクーヤの肩に手を置いてくる。同類を見つけたかのような視線に、イラッときた彼はラビの額に手刀を打ちつけ

た。涙目で抗議をする彼女に誠意の篭っていない謝罪を繰り返すが、あまり効果は無い。
ラビが繰り出した手刀をクーヤは白刃取りで応戦していた。
そのじゃれ合いを見ながらアリスはミカンのような果実の皮を剥いている。実を口に放り込むと、甘い様なすっぱい様な果汁が口いっぱいに広がった。クーヤは好みじゃないと言っていたが、彼女はこの味が好きだった。
「だが確かに、果実や木の実ばかりでは飽きてしまうな」
互いに固まったままの姿勢から、ラビは諦めのため息を吐いて力を抜いた。引っ込めた手の行く先は床に並ぶ果実に伸ばされる。
「ナナ達はよくこればかり食べて飽きないわねぇ」
「他に食う物なけりゃ、食える物を食うしかないだろ」
不満を述べながらもラビは手に取った果実に齧り付いた。皮ごと頬張るラビを横目に、足元に置かれる果実を暗鬱な気分で眺めた。
クーヤの手は進んでいない。情報を確かめる為にこの前は果実を口にしたが、前に負った傷はまだ癒えていなかった。エリーナから附子の実について話を聞いてからは、苦手意識がさらに増していた。
空腹の原因はそこにある。
「私達が持ってきた食料も無くなっちゃったしね」
「そうだな……」
仕方なくちびちびと齧っていた手を止め、兎獣人達を連れてきた時の事を思い出す。

兎獣人をこの場所に迎え入れてから一週間ほど日が経った。

最初に此処を訪れた時の兎獣人達はただ驚くばかりだった。魔獣の住まう森の中に広い空間が作り上げられ、そこに建物が出来始めている。ログハウスを中心に横に長い骨組みが5軒、乱立していた。

作業中の家はまだ骨組みしか造られておらず、その家を造っている所にアリスと自分達の仲間が一緒になって作業している光景に目を見開いていた。

この場所についてはエリーナに説明させた。

この空間を囲う結界について。拠点を中心とした周囲の様子について。今建てられている家について。この場所に自分達が住んでいい事について。

話を聞いていた者達は信じがたい表情をしていたが、クーヤの手前声には出さなかった。

エリーナに説明を任せて連れて来た兎獣人達の顔を見るが、その表情には戸惑い、疑心、恐怖が色濃く残っている。治療を行い、ラビとも数日過ごしたがまだ硬い。

先に連れて来たエリーナ達によって、どのくらい変わるか密かな楽しみにしている。

迎え入れた当初は長屋もまだ一軒しか完成していなかったので、けが人達を優先して運び入れた。まとまって住むように広く作ったが、流石に数十人入る事は出来ないので初日は外で寝る者も多かった。

残りの家も日が過ぎていくごとに段々と完成して行き、外で寝る者も徐々に減っていった。つい先日兎獣人全てが住む家が建てられ、今は自分達が作った家で皆生活している。

定期的にエリーナを呼び出し他の兎獣人達の様子を聞いてみるが、むしろ本当に住んでいいのか？　という意見しか聞かなかった。ここで生活する事に対する不満は特に無いようだ。いや、最初に一件だけあった。

「人間と一緒に生活なんてできるか！」

当然反対したのはシモンだった。

仲間を思いやる気遣いもなく、これから先どうしたらいいかという想像もない身勝手な意見。現状を把握しない、ただ嫌悪という感情のみで反対する子供らしい台詞にクーヤは薄く笑った。

「素直に受け入れられないだろうと思ったお前に、特別に造った家があるぞ」

そう言って、クーヤは一つの小屋を指差した。洞窟へ行く前に即興で造りあげた物だ。

「あれだ、存分に堪能するといい」

「……お前が僕を馬鹿にしてるのはわかった」

屈辱による怒りで小刻みに身体が震える。シモンはその物体を指し示し、声を荒げて抗議した。

「どう見ても犬小屋じゃないか！」
「キャンキャン吼えるお前にぴったりだと思うが？」
その子供一人がぴったりと納まりそうな小屋は、丁寧にも入り口の近くに『ポチの家』という看板が掲げられていた。
「ポチってなんだ！？　僕の名前はシモンだ……おい何してんだ」
「ポチというのはありふれた犬の名前だが、名前があるならそっちを付けるべきだったと反省してる」
ポチの家改め、『シモンの家』という看板がそこに立てられた。
「馬鹿にするものいい加減にしろ！　こんな物こうしてやる！」
威勢の良い声とは裏腹に、子供が蹴る力では中々壊れてくれない。それでも何度か蹴り続けると少しずつ歪んでいき、やがてバキバキと犬小屋が壊されていった。
汗を拭いながら満足気に息を吐く。少し気分がスッとしたようだ。
「あ～あ、壊したな。それで、お前はどうしたい？　ここから洞窟前まで半日はかかる。帰る間に魔獣に喰われなければいいな」
「ぐっ……」
物を破壊する事で落ち着いてきたシモンはその言葉に何も返せないでいた。
その後エリーナやナナによる説得により、今ではシモンもここで生活を続けている。不満は多々あるようだが。

シモンを弄った記憶を思い出し、少し気分が晴れたので食事を再開する。

「今日の予定はなんだ？」

「そうだな……傷を負った者は昨日の内に全て治ったから、今日は色々と動いてみようと思う」

この一週間かけて傷の残った者を治療し、全員が動けるようになった。そろそろ本格的に動いてもいいと感じている。

「アリスは今まで通り木の実の確保だ。兎獣人を連れて果実以外にも食べれる物があったら探して欲しい」

「うん、実が生っているこの季節に出来るだけ確保しておきたいしな。連れて行く者にも他に食べられる物がないか聞いてみる」

「ラビは森の出口付近で食料になる獣が居ないか調べて欲しい。居たら即狩るように」

「ＹＨＡ！　ついに来たわね！　待ってなさい私のお肉達」

拳を握り締めまだ見ぬ獲物に心を躍らせている。対するアリスは心配した様子でクーヤに尋ねた。

「私達が森の出口付近に行っても大丈夫だろうか？」

「そうだな、見つかるのはいただけない。兎獣人達を主に動かして、ラビは木の陰に隠れながら得物を狩るように。もしかしたら冒険者達が腕試しに来るかもしれないから魔力は抑えておけよ」

「そうね。食料を得るためとは言え、見つかっちゃったら意味無いし」

此処で生活するにあたって、特に魔力を抑える気遣いはしていなかった。それは別に魔力を抑える事が疲れるからという理由ではない。ただ、魔獣達に対してこの場所には自分達が居る事を誇示し、牽制するため。

魔力が感知出来ない魔獣や、理解していても近寄ってくる魔獣は絶えないが。

「ふむ、それがエリーナ達を囮として使うという意味か？」

シャクリと実に歯を立てる。

何度か咀嚼を繰り返し、粉々に砕けたモノを喉の奥へと押し込める。大きめの実が喉を削るような嫌な感覚に、一つ咳払いをした。

「ある意味はそうだが、本質的なものは別にあるさ」

そしてニヤリと笑った。

ログハウスの前に回復した兎獣人達が集まる。

この一週間で大分表情に柔らかさが出てきたが、まだまだなとクーヤは感じていた。

「まず初めに言っておく、俺にとって奴隷は最初に連れて行った１０名だけだ」

ざわざわと、どよめきが漏れた。

てっきり此処に住むために自分達が奴隷になるのだろうと考えていた彼等には、その言葉は意外なものでしかなかった。

「だが、お前達には治療を施し、食料も分け与えた。それに対する礼の言葉などこちらは何の得にもならない。礼を伝えたいなら行動して欲しい。俺には命令をする権限は無いが、恩を返したいと思う気持ちがあるなら労力として返してくれ」

とりあえず他の兎獣人達は奴隷の家族として此処に迎え入れた。奴隷では無いので命令をする事は出来ない。強制は出来ないが、彼等が生きていくために行動してくれればいいとクーヤは考えている。

言葉を一旦止め周囲を見回してみるが、特に不満はなさそうなので話を続けた。ある一名は視界から消し去っている。

「それじゃまず、普通の獣を探すために１０人程動いて欲しい。その場合はラビが護衛として着く」

ラビが掌をヒラヒラと振って兎獣人達に笑顔を向けた。

「アリスは果実を初めとした他の食料を取ってきてもらう。果実に飽きた者はアリスに着いていって欲しい」

アリスが片手を挙げて兎獣人達に自分の存在を示した。

「残った者は畑の世話や、この場所に水路を引く作業を手伝ってもらいたい。その前にラビ――」

うん、と頷いてラビは空けた場所に魔術を使い、地面を爆発させた。砂埃が落ち着いたその場所には底が浅く広い穴が出来ている。

「この穴を露天風呂として使うつもりだ。水路が出来るまでアリスに水を集めて貰おうと思ったが……どうだ？」

流石に一つの家で何十人も風呂を使い回す事は出来なかったため、今までは身体を拭くだけにしてもらっていた。だが本当は此処に住む皆に風呂という娯楽を楽しんでもらいたい。

「むぅ、結構な水の量になりそうだな。出来ない事はないが、かなりの魔力を使う事になる」

巨大の魔力を保持するアリスではあるが、その穴の体積に水を満たすためには多量の魔力を消費する事が目に見えていた。他の作業に支障が出るのは賛成出来ない。

「というわけだ。いつまでもアリスの力に頼ってばかりというわけにはいかないからな。水路はこの風呂につなげる予定だ。そしてこの穴に流れるまでの水を生活用水として使う」

そして露店風呂として使った汚水は再び川の方へと流す予定である事も伝える。最初に穴へと向かう水路を作り、繋がった後で川へ流す水路を作る予定である事を話した。

「この肉体労働は大人である者にやってもらうつもりだ。俺も着いて行くが、エリーナに皆をまとめる役をしてもらいたい」

「はい、わかりました」

「クーヤ様、わたしは何かする事ありますか？」

集まる兎獣人達の中からナナが手を上げて質問をした。ナナの周囲には兎獣人の子供達が集まっている。

「ナナ達子供にはこいつである物を集めてもらう」

そうして袋から拳よりも一回り大きい鉱石を取り出した。

その鉱石は正八面体の形をしており、色は黒、金属光沢のある不透明な石であった。その石をナナ達の前に見せつける。

父親が集めた珍しい鉱石の一つだ。

「それはなんですか？」

「ロードストーンという。マグネシア鉱石とも呼ばれているが、俺は磁石と呼んでいるな」

「その、ロード……マグネ……えっと」

「磁石だ。お前達にもそう覚えて欲しい。この磁石は鉄を引き寄せる力があるんだ。その性質を利用して砂鉄を集めてもらう」

砂鉄は火成岩が風化に伴って分離して出来たものである。

この近くで昔火山が噴火したという話は知る事は出来ないが、他の場所から風で運ばれてくる事はあるだろう。どれくらい取れるか、子供達を使って試してみようと考えていた。

砂鉄集めというこの拠点の近くで行える労働をナナ達に伝えた。

磁石を布で被せ、地面に擦り付けて砂鉄を集める作業の説明を行う。ある程度砂鉄が集まったら布を開き、桶に集めておくようにと。

砂鉄は製鉄の主原料となる。

少しでも鉄を手に入れるための目的ではあるが、大量に集まれば日本刀の原料になる玉鋼を製作する事が出来るのだ。単純な作業ではあるが、クーヤにとっては重要な仕事と言えた。

「はい、わかりました！」

「反論がなければ今から作業に取り掛かるように」
「おい、あるに決まっ――むぐぐ」
「無いようだな。狩りをしてみたい者はラビの所へ、採集を行いたい者はアリスの所へ、どうしようか迷っている者は俺とエリーナの所へ。それじゃ作業を始めてくれ」

ナナに押さえつけられたシモンの抗議を無視し、その日の作業が始まった。クーヤとエリーナの元へ集まった者が多かったため、適度にラビとアリスの方へ振り分けていく。
本格的に村を築くための行動が始まった。

それぞれの作業は進められて行っていたが、全てが順調ではなかった。

クーヤが造る水路はそこそこ順調。
川から拠点までの詳細な地図を手にクーヤが指示を出していくが、掘る速度はあまり速くない。人手は多いが、鉄製の鍬は少なく殆どの者が木製の鍬で作業をしているので、深く掘る作業は難航していた。
道具の数が足りない事は最初から分かっていたので、作業が遅い事に対する苛立ちは無い。

アリスが行う採取は思いのほか成果があった。
茸は汚染された魔素により形を変えていた為、兎獣人達の知識でも食べられるかどうかわからなかった。だが、地中に埋まっていた芋類は汚染の影響が少ないようなのでその芋を蒸かし食料としてい

る。
勿論、拠点の場所で作れるよう畑に植えたりもした。

ラビの方は中々に深刻だった。
魔獣に襲われる事が日常であるためか、獣達の警戒心が異常に高い。何度かその姿を見つけもしたが、逃げられてばかりだった。
得物を逃がしたラビは悔しそうに地団駄を踏み、クーヤにその不満を漏らしていた。

ナナ達の砂鉄集めは普通。
大量に取れる事はなかったが、丸っきり無いわけでもなかった。
少量づつではあるが、根気よく集めていけば鉄を作るには十分な量が集まるだろう。ナナ達の働きにクーヤは期待を込めている。

そうして数日の時が過ぎていった。

「今日はついに水路の確保だな」
「はい……ところでクーヤ様は何をなさっているのですか？」
「そろそろ炭作りをラビだけに任せるのを止めたいからな。砂鉄も集まってきた事だし。窯を作るための材料集めだ」

掘り続けた水路が完成に近づいた。川の近くから拠点の穴までの路が出来上がり、後は川と水路の間を繋げれば完成する。
後はエリーナ達に任せる事にして、クーヤは川の近くにある粘土を集めていた。川沿いに拠点を築かなかった理由が、この粘土質の

土によるためだ。

畑としては使えそうにない土質であるが、この粘土の性質を調べれば窯を作る事も、陶器を作る事も可能であろう。

「そうですか――っ！！」

「どうした？」

長い耳をしきりに動かし、何かに警戒しているような雰囲気を出している。クーヤにはまだその音は聞こえないが、聴覚に優れた兎獣人達には何かの音を捉えたようだ。

「……蹄の音が、聞こえます」

「そうか、お前達木々に隠れろ。そいつらの正体は俺が確かめる」

クーヤの号令に、水路の完成を見ようと着いてきた兎獣人達が一斉に隠れていく。クーヤも木の上に身を隠し、息を潜めてこちらにやってくる者を待ち構えた。

やがてクーヤにも聞き取れるほど近くに馬の蹄の音が聞こえてくる。その者達は何か話しているようだが、蹄の音にまぎれてよく聞き取れなかった。

「お――、本――に、この辺で――か？」

「ええ、ち――に巨大――力を感――いま――」

木の葉で隠れたクーヤの視界ではその者達の姿ははっきり確認できない。視界を覆う木の葉をどければ見えるかもしれないが、相手に察知される恐れがある。耳を澄ませてみるが、やはりよく聞こえない。

その者達がクーヤの潜む木の下を通り過ぎようとしている。仕方なく彼はその場から飛び降りた。降りた先は先頭を走る馬に跨った者の後側。

「うぉ！　なんだ！」

クーヤの空からの奇襲。
いきなり後に誰かが乗っかってきた衝撃に、先頭を走っていた馬が鳴き声を上げてたたらを踏んだ。
先頭の者の首筋に短剣を当て、凄みを利かせて言葉を吐く。

「お前達、何者だ。どうして此処に来た」

後続の馬もその場に停止し、先頭を走っていた馬に降りた人物の姿を確認すると、慌てたように言葉を紡いだ。

「ちょっ！　クーヤ何してるんすか？！」
「……は？」

後を振り向くと、よく見知った顔ぶれがそこにいた。恐る恐る顔を前に向けると短剣を当てた人物はクーヤの手を押しのけ、ゆっくりと後を振り返った。

「なかなか手荒い歓迎の仕方だな」

ニカッを笑うその顔。
そこには相変わらずの男臭い笑みを浮かべたイースがそこにいた。

第二十話　冒険者達（後書き）

「この場所は俺達が乗っ取った！」
「乗っ取ったっす！」
「クーヤ君の所へ訪れてしまいましたねぇ」
「見たことの無い景色を見せてやると言われちゃ、冒険者として黙ってられないぜ」
「今からワクワク、ドキドキが止まらないっす」
「クーヤ君の目的は一体なんでしょうね」

第二十一話　村の名前

第二十一話　村の名前

「久しぶりだな」

馬から降りたイースはスッと拳を差し出した。剣タコまみれの掌は握り締められ、無骨で迫力のある拳がクーヤに向けられる。

同じように馬から降りたクーヤも拳を前に突き出した。イース程太くはないが鍛えられた腕を伸ばし、固く握った拳をイースへ返す。

「イースさん達こそ元気そうだな」

コツン。

互いの拳が一度だけ合わさる。挨拶はただそれだけだった。

イース達を別れて一月あまり、クーヤの方は本当に色々とあった。話したい事も沢山ある。そちらの状況はどうだったかと聞きたい気持ちもある。だが、ここで長々と苦労話を吐き出すのは無粋だろうと感じた。

今は拳を打ち合い、お互いが無事に会えた事だけで十分だった。

「いや～、クーヤがイースさんに刃物を向けたときはどうしようかと思ったっすよ」

「……本当に悪かった。イースさん達が本当に――いや、こんなに早く来るとは思ってなかったから……」

クーヤの心中は自分の失態に埋め尽くされていた。イース達に腰を直角に曲げて詫びるか、もしくは土下座で謝ってもいいような気がしている。地面に穴を掘り、うつ伏せの状態でその穴の中に頭を入れてもいいとさえ考えていた。

「そりゃあな。嬢ちゃん達には恩があるし、それに――面白い風景を見せてくれるんだろ？」

その言葉に、クーヤは僅かに微笑んだ。

クーヤ達が魔女の家を出る二日前にイース達に別れを告げた。家を出る事となった理由、今まで世話になった事に対するお礼。これからどうするかという予定は詳しく伝えなかった。

イース達が告げ口をするような性格とは思っていないが、初めて向かう場所なので詳しく話せる内容ではなかった理由による。この時のクーヤは故郷と言う名の隠れ家を作る事しか考えていなかった。

そんな彼等に不安を感じたのか、イースは自分達も着いて行こうかと言い出した。その提案をやんわりと断る事にする。これは自分達の問題であり、イース達の人生を変えてしまう事になる、と言って断った。

それでも尚、着いて来ると言う彼等に――。

「俺達と一緒に姿を消すと、イースさん達もお尋ね者になるだろう。魔女の逃亡を手助けしたという罪状でな」

「だからそれは――」

「構わない、と言ってくれるのは素直に嬉しい。だがそれなら、罪の無い普通の冒険者として来て欲しい」

これから自分達は町や村との繋がりが断たれるだろう。その場合、例えか細くともその繋がりとなる者が居た方が様々な面でありがたい。そうする為の案をイース達に託してみる事にした。

「……どういう事ですか？」

「一緒に逃げれば罪を背負う。だったら俺達だけで逃げて、イースさん達は後で合流する方がいいな。

俺達が出た後も此処に留まって、生活を続ける。ある程度過ごしたら冒険者として別の場所へ旅立つ振りを装い、合流するという具合だ」

あからさまにすぐ居なくなっては、疑いが掛けられるだろう。そうなっては何の意味もない。

だが、魔女と進んで関係を持っていたのは町の者もよく知っている事実だ。例え町に残ったとしても、疑いは避けられないかもしれない。騎士に疑われた場合に対する対応を彼等に提案しておく。

「なるほど。話は分かった。だが、問題はあるぞ。どうやって合流すればいいんだ？」

「川沿いに拠点を構えればいいが、なんらかの理由で出来ないかもしれない。その場合ラビやアリスの魔力を抑えないようにしておくから、ウィムさんが感知してくれれば場所が分かるだろう」

かなり運任せな所がある内容だが、イース達と合流出来なければ、クーヤの目的が変わるだけだ。故郷を作るというモノから、隠れ家としての場所を作るというモノに。クーヤはそれもいいと感じている。

全ては仮定の話。
その時の状態によって、限られた可能性、選べる選択肢という未来が決まってくる。状況は刻一刻と変わっていき、事情が複雑に絡まっていくものだ。

そして限られた可能性の中にあったものが今やってきた。

「悪い、ありゃ嘘だ」
「そうか、嘘か……って、なにーーー！！」
「ちょ、クーヤ、一体どういうことっすか！？」
「いや、騙して悪かったと思ってるんだがな。あの時言った、面白い景色ってのは俺にとっての面白いという意味だったんだ」

魔女の家を出る前から故郷を作るという目的はあった。
そしてそれは故郷を持たないクーヤにとって見たことの無い景色であり、その場所を作るというのは彼にとっては面白いと考えているモノだった。その光景をイース達が面白いと感じるかどうかは含まれていない。

イース達の冒険心をくすぐるための嘘だった。
彼等が訪れる確率を少しでも上げておきたかった、という言葉は口に出さず、喉の奥に控えておいた。

「でもまぁ、今は面白い事になってるけどな」
「あ？　どういうこった？」
「エリーナ、出てきて良いぞ」

ガサリと草を踏む音と共にエリーナが姿を現した。その姿を目前にしたイース達は言葉を詰まらせる。こんな場所で出会う事になるとは考えてもいなかった。

奴隷として売られている姿は見たことはある。しかし、それは薄汚れた雑巾のような風体で亜人と呼ぶよりも家畜。いや、ただの物だった。

この様に綺麗に整えられた姿の亜人を、こんなに間近で見る事になろうとは……。イース達は自分の目を疑った。

「兎獣人のエリーナだ。今は俺達の拠点で一緒に生活をしてる住民だぞ」

「……亜人……」

三人の奇異な視線がエリーナへと突き刺さる。

知らない人間の視線に耐え切れず、エリーナはカタカタと震えだしクーヤの後へと身を隠した。エリーナがクーヤの袖口を掴んでくる。

「ク、クーヤ様……」

「心配するな、こいつらは大丈夫だ」

クーヤ後ろで震える亜人の姿を見ようと、イースはずんずんと近寄りその隣に立った。視線を忙しく動かして、じろじろとその容姿を眺める。長く白い耳、人とも獣ともどちらとも言えない顔立ち。兎獣人特有のふくよかで愛らしい姿にイースは心を和ませていた。

値踏みするような視線にエリーナは身体をさらに縮めると、その傍らでイースが膝を付いて手を差し出してきた。

「亜人の譲ちゃん、一晩俺と過ごしてみないか？」

めこり、とクーヤの足がイースの顔を踏みつけた。グリグリと足を踏みにじるが、なかなか動こうとしない。その意思の強さにクーヤは辟易とした。

「人妻を口説くな……ああ、今は未亡人だったか」

「人妻！？　未亡人！？　なんだその言葉の凶器は！」

足の裏側でイースが叫び声を上げる。

「とりあえず落ち着……けっ！」

クーヤが与えた情報にイースの抵抗に力が入った。堪らずクーヤは力を込めて顔を蹴飛ばした。結構な力を込めたつもりだったが、イースはその場に尻餅を突くだけだった。本当に彼の意思の強さには嘆息する。

「とまぁ、変な人達だが害は……無い……多分。嫌なら嫌でこんな風に追っ払えばいいからな」

「は、はぁ」

「というかイースさん、村の住人を怖がらせないでくれ」

蹴られたイースは尻についた砂を払いながら立ち上がった。クーヤが顔に足跡が付いてるぞと指摘すると、顔を拭いながら気分を落ち着かせた。

「いや、怖がらせちまったら悪い。気が動転してな」

気が動転したからと言って、行き成りナンパするのはいかがなも

のかと思う。が、思いもよらぬイースの行動に折角来てくれた者を足蹴にしたクーヤが言える台詞ではなかった。

「詳しい話は拠点に戻ってからでいいか？　こちらは作業の途中だったし」

「お、おう」

クーヤが他の兎獣人達を呼ぶと、ぞろぞろと草むらから出てくる。姿を現した者達は一箇所に集まり、イース達を警戒した様子で見つめていた。対するイース達も次々と集まる兎獣人達に驚き、ただ口を開けるばかりだった。

お見合い状態を続ける意味など無い。

クーヤは全員集まった事を確認すると、すぐに指示を出して作業を行わせた。

今まで掘った水路と川は瞬く間に繋がり、水路に水が満たされていく。兎獣人達はこの場から逃げるように流れる水を追いかけて行った。

近くに魔獣の気配は無いが、クーヤも兎獣人達の後を追う。イース達もクーヤの行動に続いた。

「思ったよりも驚かないんだな」

「あ？　ああ、いや驚いてはいるぞ。でもな、譲ちゃん達で人外の者にもそのひとなりってのがあると分かったからな」

「それを言うなら、ひととなり、な」

もしくは人柄。

素で間違えたのか、混乱しているのかクーヤには判断が付かなかった。

拠点を訪れると、皆が歓声を上げていた。
畑の世話をしていた者や、周囲で砂鉄を集めていた子供達、木材を加工して道具を作っていた者も作業を一旦止めて、流れてくる水の様子を嬉しそうに眺めていた。
水路の前に並ぶ者達は手を取り合い、露天風呂に溜まる水を眺める子供達ははしゃいでいた。皆が喜んでいる。彼等の笑顔にクーヤの顔もどことなく嬉しそうだ。

「これが俺の見せたかった風景だ。なんの変哲もないだろ？」
「……そうだな。此処にお前達の家だけあったら感動はそんなに無い。だが――亜人と生活しているこの風景は今まで見たことが無い。これはすごい光景だ……最初からそのつもりだったのか？」
「いいや、他の種族と過ごすのは本当に考えていなかったな。最初は此処に故郷という名の隠れ家でも作ろうと思ってた」

喝采を上げる者達の中に、両手を上げて喜びを表すラビや安心したように顔を綻ばせるアリスの姿もあった。川へ行き水を汲んだりもしたが、生活用水の大部分をアリスに任せていたので肩の荷が下りた気持ちだろう。

「さて、こちらはもうちょっと作業があるから、詳しい話はラビとアリスに聞いてくれ」
「おう、わかった。それじゃショル、ウィム、行くぞ！」
「ういっす！」
「はいっ！」

たかが再会の挨拶をする為に何故そんなに気合を入れているのか。駆け出した彼等を怪訝に思っていると、ラビとアリスの所へは行かず一目散に兎獣人達の下へと向かって行った。

「さっきの奥さん、今晩一緒に過ごしてみないか！」
「そこの可愛い兎ちゃ～ん、俺っちと一緒におしゃべりしない？」
「お譲さんお願いがあります。その耳で僕の頬を叩いてくれませんか？」

呆れた顔で彼等を一瞥した後、クーヤは作業へと取り掛かった。これから露天風呂の周囲に温度調節用の魔方陣を書く事と、その周りを囲う柵を作るように指示しなければならない。さらには川へ戻す為の水路が出来るまで、露天風呂から溢れた水を何処へ流すかを決めるべきだろう。

やる事はまだ沢山ある。彼等の対処は彼女達に任せておく事にした。

「久々に会ったのに、何やってんのよあんた達はぁぁぁぁ！！」

逃げ惑う男達の足跡を残すように、村の中に火柱と氷柱が乱舞する。男達の悲鳴が村の中にいつまでも響き続けていた。

久々の挨拶は相変わらずで、クーヤは安心した。

氷の十字架で磔にされ、下から火で炙られていた彼等を助けだし

た後、クーヤは自分の家へとイース達を招いた。
六人が囲炉裏を囲うようにして座り、中央には鍋が火にかけられている。収穫量はまだ少ないが畑で取れた野菜や取ってきた芋と、イース達が持ってきた食料をごちゃ混ぜにした久しぶりの鍋であった。

再会の祝いとしてイース達から酒を渡され、ラビとアリスは嬉々として受け取り、勢いよく飲み進めていく。鍋の中身が空になる頃には、ラビはうつらうつらと船を漕いでいた。

「う～……眠い……」
「まったく、久々の酒だからと急いで飲みすぎだ。ほら、布団敷いてやる」
「ここで寝る～～」

言うが早いか、ラビはクーヤの膝を枕にして横になった。寝心地のいい所を探すように頬をすり寄せ続ける。気に入った所が見つかったのか、ピタリと動きを止め幸せそうに微笑んだ。
まるで猫のような仕草に、クーヤはラビの喉からごろごろと鳴る音を幻聴した。

「な、何をしてるんだ！　ほらっ、ここに布団を敷いてやるからとっとと起きろ！」
「や～～、ここで寝るぅ」

アリスが腕を引っ張っても動こうとせず、クーヤの膝にしがみついたまま彼女の言葉を全力で拒否した。まったく動こうとしないラビにアリスはふるふると体を震わせて怒りを顕にした。

「っ～～～。わ、私も眠くなったから寝る！」

アリスが反対側の膝で横になる。
イース達のニヤニヤとした邪悪な笑みに晒され、目を強く瞑ってその視線を無視する事にしたが、顔の温度が上がってくるのを止める術は存在しなかった。

「あははっ、アリス顔真っ赤〜」
「よ、酔ってるせいだ！」
「寝るなら静かにしろ、この酔っ払い共」

ぽこん、と両拳で彼女達の頭を軽く殴る。
拳を開き、頭を撫でるとラビは安心した表情で眠りについた。アリスはイース達に見られている羞恥心からか目をきつく結ぶだけだった。

「なんつーか、ラビっちもアリスっちも変わらずっつーか、安心したっつーか……」
「ちょっと甘やかしすぎじゃないですか？」
「こいつらは今まで誰かに甘えるような人生を送ってきてないからな。俺でよけりゃ、枕代わりにでもなるさ」
「まぁ、あれだ。クーヤはもげればいいと思うぞ」

何処を？　とは聞き返さなかった。
嘆息して残りが見えてきた葉巻に火をつける。なけなしの葉巻をイース達に差し出すが、受け取ったのはイースのみだった。クーヤが魔術でその葉巻の先端に火をつけた。

煙を吸い込み、その味を口の中で味わってから吐き出した。
二人の紫煙が部屋の空気を汚していく。その行為を何度か繰り返した後、クーヤは目の前の三人に頭を下げた。

「イースさん、ショルさん、ウィムさん。来てくれて本当にありがとう」
「よせよ、別に礼を言われたいが為に来たんじゃない」
「そうっすよ、俺っち達は自分がそうしたいから来たっすよ」
「……そうだな、でもありがとう」

自ら亜人達に言い聞かせたのに、その自分が行うとは。自分も酔っているんだろうとクーヤは思い込む事にした。

「それで、クーヤ君の目的は何ですか？」

それについて自分達のやる事は？　と聞いてくる。話が早くて助かる思いに、頷く行為の中に礼の感情を忍ばせた。

「最初は此処に故郷を作るのが目的だった……いや、今もそれは大元の目的だが――」

そこで一度口を噤んだ。
三人の目をそれぞれ眺め、彼等に問いかける。本当に自分の為に動いてくれるか、と。

実はイース達が裏切る可能性も考えなかったわけではない。様々な状況が絡み合い、親しい者を裏切る話は何処にでもある。イース達が絶対に裏切っていないという事は断言出来なかった。

クーヤは嘘つきだ。だからこそ、人の嘘を見破りやすい。
その人の目を見て、その表情の変化を見て、その挙動に注意を向ける。その中に違和感があればそれは嘘をついている証拠だ。

結局、その行動は杞憂に終わった。
三人とも力強い眼差しを返してくる。その目に嘘は感じない。だからこそ、クーヤは彼等に自分の目的を話した。
「今は――海を目指したい」
三人とも絶句する。膝に頭を乗せているアリスからも身体が強張ったのを感じた。
「俺は魔獣に占拠された海を、近くで眺める景色に変えてみたい」
ただ、海を近くで眺めたい。そんなちっぽけで、だけれども現実的には難しい願い。
「クーヤ分かってると思うが……」
「ああ、今のままじゃ無理だ。戦力が全然足りない。返り討ちに合うのが目に見えている。だからこそ、イースさん達に頼みたい事があったんだ」
「なるほどな。で？　俺達がやる事ってのは？」
「最初はイースさん達に奴隷を連れてきてもらいたかったんだが……今は他に当てが有る。イースさん達には此処と外との繋がりになって欲しい」
イース達が来なかった場合は、この森で隠れ住んで一生を終える事も考えていた。だが、イース達は来てくれた。ならば、その選択肢は十分に活用するべきだろう。
「色々やってもらうつもりだが、まずは噂を流して欲しい」
「……噂？」

「そう、噂だ」

クーヤが口から煙を吐き出した。

クーヤの話に、イース達は今日何度目かの驚きを感じていた。依頼についての詳細は彼等が眠りにつく直前まで話された。

翌日。

イース達は早速近くの町へと向かうための準備を始めていた。支度が整い、馬に跨ろうとした時、ふと思い浮かんだ疑問をクーヤへ向けた。

「ところで、この村は名前とかあるのか？」

見送りにクーヤ達を初めとし、兎獣人達も何人かその場所に居たが、皆が虚（きょ）を突かれたようにきょとん、と顔を見合わせる。

「そう言えば、この場所とか拠点とかしか呼んでなかったわね」

「そうだな。折角だ、この際決めてみたらどうだ？」

アリスがクーヤに視線を向ける。

その目線に誘われ皆の視線が一斉にクーヤに向けられた。注目が集まるクーヤはボーっとしていた表情をさらに緩め、空を見上げて目を細めた。

空から鳥の鳴き声が聞こえる気がするが、その姿を見つける事は出来なかった。雲が流れ、風が彼の髪をなびかせる。太陽は高い位置に掲げられ、この時期の空の高さを思わせた。服をはためかせる

風が吹く。

「――オワゾ」

強い風が2，3度流れた後、クーヤはぼそりと呟いた。

「オワゾ・ブルー。この村の名前だ」

第二十一話　村の名前（後書き）

「村の名前が決まったわ！」
「うん、いい名だ。青く澄み渡ったように感じる」
「雲一つ無い空みたいで良いわね！」
「それはただ単に、ブルーの単語だけで感じた事だろ」
「一体どういう意味が込められてるんだ？」
「理想の故郷を目指すという意味さ」

幕間2　ミリィセの刀

幕間2　ミリィセの刀

いつも通りの勤務が終わった後、私は自室へと戻った。
着けていた胸当てや脚甲を脱ぎ捨て、簡素な格好で私はベッドへと体を投げ出した。ベッドから抗議するような柔らかい反発を身に感じながら、目を瞑った。

「ふぅ……疲れたわ」

今日の疲れを吐き出すために、身体から力を抜く。ベッドに身体が沈みこむような感覚を感じながら、今の状況にため息を吐いた。

隊長格に就任してからというもの、書類仕事がかなり増えた。つまらない机の仕事よりも、私は腕を磨きたい。腕の立つ者と手合わせし、自分の業を高めたい。父上から厳命によって仕方なく頷いたけれど、役職が上がるというのは私にとって面白い事など一つも無かった。
力量の高い者との試合したいという私の気持ち。試合によって私が傷を負うかもしれないという心配をしているのかもと思う。ただ単に、誰彼構わず戦いを挑みたい私の衝動を自粛させようとしているのかもしれない。
だけどそれは……親心かもしれないけれど、私にとっては束縛以外のなにものでもなかった。

騎士同士の訓練は多いが私の力量に見合う者は少なく、訓練を行っても部下達に指導するばかりで私の力量は一向にあがらない。

たまに騎士以外の剣士との試合はあるが、見るからに格下の相手をするのは私としては全く面白みも無い。王族に見せる余興として使われている事に私のため息は増えるばかり。

隊長という役職ゆえに、負けは許されない。それは分かっているけれど、自分の力量が低いままではいざという時、力が足りなかったなんて馬鹿な事になってもいいのかと思う。

私は目に見える者全てを守りたい。それは家族であり、此処に住む国民であり、この国そのもの全て。今は他国との交流も順調そうだけれど、またいつか戦争になるかもしれない。

その時、自分の力が足りず悔しい思いをするなんて、私には我慢できない。

騎士の隊長という面子を保つため。というくだらない理由に、腕の立つ者との野試合にも中々ありつけない事に私は苛立ちを感じていた。

「ふぅ……」

私はもう一度ため息をついた。

目を開けて、顔を横に向けると壁に立て掛けられた刀がある。

身体を起こして刀が掛けられた壁の近くまで近寄り、腕を伸ばした。鞘を掴み、手の中でその感触を確かめる。

掌に伝わる鞘の感触。心地よい重量感。刀を手にするだけで彼と戦った夜をすぐに思い出させてくれた。

彼との戦いは本当に面白かった。あの時の事を思い出すと、今でも血潮が騒ぎ、高揚感で身体が震える。これは例え、父上と手合わせする時でさえも得られない充足感。

彼と真剣で語り合った時間は、私が今まで生きた中で一番充実した時間と今でも言えた。

鞘を握り締め、彼が出て行った日の事を思い出す。あの時の私は騎士達と魔女を庇うあの男を守ろうと動いていた。

「――よって我らエトワール騎士団・第1部隊に魔女狩りの勅命を承った。出来うる限り生け捕り、無理ならば殺してもかまわん。準備が整い次第発つ事とする。先程呼ばれた者は迅速に行動せよ！」

第1部隊隊長、オルゲイの言葉に整列された兵は敬礼を行った後にすぐさま準備にかかる。オルゲイによって選抜された兵士達が全員動くのを確認した後、自らの準備を行う為に移動し始めた。

私は彼の移動経路を先回りし、誰も居ない廊下でオルゲイを待つ事にした。

寄宿舎へと向かう廊下でオルゲイが来るのを感じた。私は壁に背を預けていた状態からゆっくりとした動作でオルゲイの道を塞ぐ。オルゲイは短く舌打ちするのを気づかないふりをして声を掛けてみる。

「御機嫌よう、オルゲイ隊長」

「……なんの用だ、ミリィセ隊長」

オルゲイの前に私が立ちはだかった。
あまり歓迎されていないその様子に、私は肩を竦めて用件だけを伝える。

「今から魔女狩りに行くそうね」
「ああそうだ。こんな所で時間を潰している暇など一刻も無い」
「……宜しければ私も見学しに行きたいのだけれど」
「何を馬鹿な。貴公にはこの城を守る重役があるのではないか？」

取り付く島も無い。本当について行けるとも思っていないけど。
私はただ、彼に忠告しに来ただけ。

「そうね。それなら油断しないように。私が得た情報では魔女達の力は上級魔術ぐらいの威力を持っているそうよ」
「ふん、貴公に心配されるまでも無い。では失礼する」

肩を怒らせてオルゲイはその場を後にした。
まるで聞き入れない様子に私は嘆息する。窮鼠猫を噛むというが、あの魔女達は鋭い牙を持った鼠だ。彼の驕りで、亡くなる騎士が多くならなければいいけれど……。

オルゲイへの忠告は済ませた。後はもう片方への忠告だけ。私はその場から離れた。

そしてそのまま城内を抜け、城下町へと足を運んだ。
見回りという建前で酒場などを歩き回ってみるが、目的の三人組みを探し出す事は出来なかった。

嘆息し、今度は教会へと歩みを進める。
教会の扉を開くと、訪れる者を歓迎するようにクルツ牧師が笑顔を向けてきた。
「おや、ミリィセ様。今日はどうされました？」
細目のクルツ牧師が私に声をかけてくるけど、その笑顔にただ用件だけを伝える。
「今から魔女狩りが行われるわ。あの子達に知らせた方が良いのじゃないからしら？」
クルツ牧師が吃驚する。けれど、その顔はすぐに笑顔に戻っていた。
「おやおや、何故私がそのような事を？」
「あら？　貴方は魔女達と深く関係しているのでしょう？」
すぐに行動しない牧師を私は不思議に思った。魔女達と、それに付き添うあの男に危機を報せるのを何故拒否するのか。
牧師と魔女達の関係は知っている。
私が情報屋から受け取った情報によると、クルツ牧師と魔女達は昔からそこそこの関係を築いている。情報屋の性格はともかく、情報の正確さは信頼していた。
「私は知っているわよ。貴方は何年も前からここに彼女達を迎えただけではなく、魔女の住処に足を運んでいた事もね。聖職者である貴方は親しい関係を築いた者を見捨てるというの？」

別に魔女と関係していた事について罪は無い。
今までの彼女達はただの嫌悪の対象であって罪人じゃない。今から報せに行くのは罪になるだろうけど、牧師が見つからず、私が告げ口をしなければその罪を知る者は居ない。

「それは心外ですね。私は彼女達を監視していただけですよ」
「……どういう事？」

思いもしない牧師の言葉に、私は聞き返してみる事にした。その牧師はさらに考えていなかった事を言う。

「いえいえ。その言葉通りの意味ですよ。境遇に耐え切れず人に害を与える存在になるか、住んでいる場所から逃げ出してしまうかもしれません」

確かにそうかもしれない。いや、私ならそうするだろう。
反乱を起こすのは確実に無理だけれど、逃げ出す事は出来る。だがそうなると、何故今まで逃げ出さなかったのか。
その答えは簡単に浮かんだ。魔女という者が他で生きていく術など無い。別の場所へ行くにしても自給自足には限界が有り、盗賊として人々に害を与える存在になればすぐに討伐命令が出る事だろう。

あの場所から逃げたとして生きていく事など出来ない。

「……魔女が一人で――いえ、あの子達は二人ね。二人で生きて行けるとでも思っているのかしら？」
「そうですね。残念ながら世界というモノはそれ程優しくないです。だからこそ、私は彼女達に反乱を起こさないように、逃げ出さないように話を聞いたり、教えを説いたりして監視していたのですよ。

勿論、全て有償で」

何をするにも全て代償は払わせたと言う。

牧師の閉じているのかと思わせるほど細められた目と、終始笑顔の表情からは彼の言葉が真実か虚実か判断する事が難しかった。

「ふぅん……監視ね」

「ええ。初めは不定期に食料を届ける奴隷でのみでしたしね。私は途中から冒険者の方々にも頼みましたので。最初の監視よりも厳重にしておりましたよ」

奴隷による監視の情報は聞いている。

監視というよりも、ただ生死確認しているだけに感じた。逃げ出すなんて考えてもいなかったようだ。言われるまで気づかなかった私も、人の事言えないけど。

「そもそも魔女を野放しにするという処遇に問題があると感じませんか？」

その言葉に私は初めの内は理解できず、理解した途端息を飲んだ。

そうだ、言われるまで気づかなかった。いや、考えてもいなかった。魔女が逃げ出すという事も、反乱を起こすかもしれないという事も。

だけれど、今思えば確かにそうだ。

魔女達が反乱など起こすはずが無い。逃げ出したとしても他で生活する術など無い。という酷い思い込み。その考えに至ると、私は自分の愚かさに舌打ちした。都合の良いものばかり見て、自分の目が曇っていたのをまた理解した。この前、彼との戦いで改めて思い

知ったというのに。

私は目をきつく閉じ、頭を軽く振って曇りきった眼を拭う。

目を開けると、今まで疑問にも感じてなかった事が次々と湧き出てくる。魔女の扱い方の矛盾。

その矛盾を指摘するようにクルツ牧師は問いかけてくる。

「何故野放しにしていたのでしょうか？」

これは先程気づいた事。魔女が逃げ出すはずが無いという思い込み。存在しない鎖で彼女達を縛っていると勘違いしていた。

「奴隷として売られなかったのは？」

魔女達親の些細な良心によるものかもしれない。もしかすると王族がそうしないように伝えてきたのかもしれない。

「例え幼かろうとすぐに処刑しなかったのは？」

人に害を与えていなかったから？　いえ、魔女であっても幼い子が処刑される場面はあまりにも残虐すぎる理由だろう。

「何故今まで生かしておいたのでしょう？」

ただの慈悲？　……違う、果実を切り取るには熟してから。青い果実はまだ切るべきじゃない。

「何故子供でも歩いていける距離にあの家はあるのでしょうか？」

多少人目に触れる事で魔女という境遇を……それはつまり――。

「見せしめ……」

「ええ、その通りだと思います。魔女達は見世物の道具として生かされてきたのです」

幼い子供が二人だけで生きていく事など出来ない。そして青かった果実はいま熟した果実となっている。成長するまで野放しにしていた理由。魔女の末路という見世物。魔女狩りという娯楽。そして今、町中を騎士達が騎馬に乗って行軍する。

牢屋に捕らえていなかったのもその理由。軍を率いて捕らえに行くという余興。町民への催し物。

くだらない。本当にくだらない。

反吐が出そうな思いに奥歯をかみ締めた。

「私は王族の決断を尊重し、今まで監視を行っていました。ですので、あの子達に知らせる必要が無いのです」

お分かり頂けましたか？　と手を差し出してくる。

つまり彼は王族の考えた穴だらけの策を埋めるために動いていたと言う。

クルツ牧師の話は理解した。それが本当かどうかは今の私にとって重要ではない。

例え建前であろうと、話を聞いた者はそうだったのかと納得してしまうだろう。最初の監視があまりにもお粗末なものなので、本当に監視していただけか？　と問いただした所で、ただの難癖にしかなりそうにない。

「そう……わかったわ」

自分でも分かるくらい抑揚の無い返事をした。

昨日得た情報でも魔女達はまだ此処を離れていないと言っていた。普段通りの生活を今でも続けているようだった。去り際の私の言葉に彼は神妙に頷いていたが、あの男には伝わらなかったのだろうか。これは本当に困った。どうすれば彼に伝えられるのだろう。

魔女と関わりのある者は他にも居るのだけれど、クルツ牧師と冒険者達がその中でも親しい関係にあると聞いている。その者達がただ監視していただけ、と言われては動かしようが無い。

一体どうしたものか。と思案に耽っている横で細目の牧師が僅かにまぶたを開いてこちらを見ていた。

なにか……自分の焦りを盗み見られているようで居心地が悪い。

「……なに？」

「いえいえ、ミリィセ様がやけに魔女達を気にかけていると思いましてね」

「別に……そんな事ないわ」

そう、別に魔女がどうなろうと気にはしていなかった、ただ彼を失うのはあまりにも惜しかっただけ。だけど、今の話を聞いた後では、あの魔女達も無事に逃げて欲しいと感じている。

「ただ、あの嘘吐き狼が気になっただけ」

「嘘吐き狼？　……ああ、クーヤ君の事ですか。それはそれは、彼のあだ名としてこれ以上無いものですね」

嘘を吐いてばかりだったあの男。だけれども彼だけは逃がしたかった。そしてまたいつか出会える事を想っていた。ああ、そう言えば異性に告白したのは初めてだった。断られたけど……ちょっと、いやかなり悔しい。

彼と戦った感触は今でもこの手に残っている。

この教会で初めて見た時は大した事の無い者だと感じた。顔に覇気も無く、たたずまいは隙だらけ。身体つきはそこそこだったけれど、剣士と呼べる体格でもない。

だけれど、リリカとのいざこざの最中に見せた彼の瞳。暗い、夜の空を思わせるようなその闇に私は飲み込まれた。私はその感覚に戸惑い、つい彼に戦いを申し出ていた。その時は手を抜かれてしまったけど。

木剣での手合わせが何処か違和感があったから再戦を申し込んでみたけれど、それは正解だったと本当に思う。刀での彼の動きはまるで別人だった。

刀の異常といえるその切れ味、戦いの最中でさえも私の心を魅了したその美しさ。注意しないと彼の姿をすぐに見失ってしまうその動き。彼の奇抜な軌道に何度も死線を潜らされた。

その焦け付くような緊張感の中、それでも私は楽しかった。同年代の者でここまで戦える人が居るという事に驚いた。そしてその彼はまだ手の内を隠して戦っていた事にも驚いた。

魔術を隠して戦った事にも、その後見た銃というものも。他にもまだ手の内を隠しているようにも感じた。それが何なのか見てみたい。

私は興奮する。
彼は私の知らない世界を知っている。
彼は今の私では手の届かない場所にいる。
彼の存在は私をさらに高みへと登らせてくれる。

彼の器は底が見えない。
器が深すぎて底が見えないというよりも、器が歪んでいて底を見せないと表現した方がしっくりときた。

「そうそう、狼と言えばこの近くにも狼が現れましてね」
「そうなの？」
「ええ、その狼は町で食料を漁っては住みかに持ち帰っていたそうなのですよ。嵐が来る前の準備でもしていたのでしょうかね？」
「……へぇ。そうかもしれないわね」
「その狼の傷を治した事がありましてね、そのお礼でしょうか……この様な物を咥えてきたのですよ」

クルツ牧師が持ってきた物に私は目を見開いた。
細身のその鞘。鞘に収まれていても伝わるその存在感。
牧師の手の中には刀がある。

「何処から盗んできた物かも分かりませんし、持ち主も分かりません。仕方なく私が預かっているのですが、神に仕える者がこの様な刃物を持っているのも何かと問題がありましてね――」

そしてその刀を両手で支えながら私の方へと差し出した。

「ミリィセ様にお預けしようと思っているのですが。よろしいでしょうか？」

ああ、まったく。
あの詐欺師はなんという嘘吐きだろう。私の言葉はちゃんと伝わっていた。情報屋にも気づかれないように、普段通りの行動をしながら準備を進めていた。
そして、私が此処に来る事を予想していたという。何もかも見通しているような行動に、私は苛立ちよりも呆れた感情しか沸いて来なかった。

「ええ、いいわよ。確かに預かったわ」
「ありがとうございます」
「……その狼は何か言っていた？」
「狼なので人の言葉は喋らないですよ」

くすくすと笑う牧師に肩を竦める。
この牧師もなかなか性格が悪い。人の事言えないけれど。

「ただ、その目を見て感じた事ですが――」

彼が何を思って刀を置いていったのか。嘘ばかり吐く彼だったけれど、別れの言葉は混じりけの無い真実だと信じたい。

「気にかけてくれてありがとう。手土産にこれを置いていく――と感じました」
「そう……」

私は刀を手にしたままその場を後にした。もう此処に用は無い。
双方に忠告しに行ったけれど、私の行動はまったく意味の無い行為だった事にため息が出る。ただの無駄骨だった。

「もう一度会う時、戦場でない事を祈るだけね」
その一言だけをその場に残して、その場を去った。

私はじっと手にしたままの刀を見つめる。
どうしてか私はこの刀というものに心を惹かれて止まない。隊長就任と同時に受け取った長剣を、今まで見たことの無い綺麗で力強い剣だと感じていたけれど、この刀はそれ以上の感動が心から湧き上がってくる。

その刀を存分に愛でたい衝動に、私は柄に手を添えた。

「おっ、ねぇっ、さまぁぁぁぁ！！」

バタンと乱暴に扉が開き、小柄な女性が飛び込んでくる。
ギョッとするけど、その強襲してきた者へ手にした刀を瞬時に向けた。
鞘の先端を額に押し付けてその突進を止めた。体重の乗っていた突撃はその女性の首をあらぬ方向へと曲げ、奇怪な悲鳴と共に体がくるりと回転する。

空中で回転する女性の服を掴み、先程まで横になっていたベッドの上に放り投げた。蛙が潰れたような短い悲鳴が聞こえる。

「ぐげぇ……ね、熱烈なベッドインですね……ミリィセお姉様。ささ、メルは心も体の準備もおっけぇですよ」
「煩いわよ。夜なのだから静かにしなさい」

彼女は私がよく使う情報屋だ。
メルと名乗っているが、本名かどうかは知らない。いつの間にか懐かれてしまったけれど、彼女の持ってくる情報は正確であるのでそこは信用している。性格は見ての通りだけど。

「つれない反応ですね……。でも、そんなクールな所もメルは好きですよ」
「御託はいいわ。それより情報は？」
「はぁ～～。メルの愛は何時になったら受け入れてくれるんでしょうか」

ぼやく彼女がポケットから取り出したメモ帳をぱらぱらとめくる。
「今の所新しいのは無いですね。そもそも西の森が丸焼けになってしまったので、魔女達の足取りを掴むのが難しいですよ」
「そう……」

オルゲイ達が魔女達を追ったが、途中で巻かれてしまった事は彼女から聞いている。逃げる途中、西側の森をかなりの範囲焼いて逃げたという事に驚いた。
そしてその死傷者の数にも驚いた。あまりに少ない死人の数に。あいつの事だから、手加減していたのはすぐに分かった。

とりあえず生きてはいるようだけれど、彼は騎士に手をかけた。今度会うときは罪人として命を賭して戦わなければならない。
「西側の方面を探してみましたが、それらしい隠れ家も見つかってませんね。もう国を超えちゃったんじゃないですか？」
「その可能性は低いわね。貴方にもわかるでしょ？」

「それは……まぁ」

山越えも、関所越えも難しい。山越えは言うまでも無く、関所にも彼と魔女の情報が渡っているのだから。

「他の町や村からも魔女達を見つけたという目撃情報は入って来てないですし、何処に隠れているんでしょう？」

「さぁ？　それを調べるのが貴方の仕事よ」

「ですよねぇ……」

「他に情報は？」

「そうですね……関係ないですが、国民の不満が溜まってますよ。結構どす黒い意見もありますね」

「そう」

見世物も失敗したみたいだしね。

「あ、あと。最近兎の亜人が姿を見せるようになりました」

「亜人が？」

「はい、昔亜人が住んでいた所があったんですけれど、狩りや奴隷の対象として数が減りましてねぇ。生き残ったのはハーグの森の奥へ逃げてしまったんですが、最近ハーグの森付近でまた見かけるようになりました」

ハーグの森……確かエトワールと魔獣がひしめく海の境にある深い森と記憶している。昔何度か海に向けて軍を出してみたい……悲惨な結果になったようだけど。私は参加していなかったので詳しい事は分からない。

「あの魔獣の森で生活するなんて無理だったのでしょう」

「でしょうねぇ。あの辺りに生る植物は毒ばかりですし。今は奴隷

商人達が躍起になって捕獲しようとしてます。そこの領主に許可を取ってる最中ですよ」
「そう……他には？」
「今の所これくらいです」
「そ、ご苦労様。料金はいくら？」
「ミリィセお姉様の御身体で――ぶっ」

硬貨の入った袋をメルの顔面に投げつける。鼻が潰れるような音がしたけれど、私は気にしない。

「報酬はそれよ。また新しい情報が入ったら言って頂戴」
「あいあい～、わっかりました。それではメルはこれで」

入ってきた時とは逆に、メルは静かに扉を閉めて出ていった。彼女の性格はどうにかならないかとため息を吐く。

静かになった部屋の中、私は手に持っていた刀を鞘から引き出した。

すらりと抜けたその刀身はとてつもなく綺麗で……嫌な事を全て忘れさせてくれる輝きがあった。私は両手で刀の柄を握り、振るう。
彼の動きを思い出し、その動きに乗せて刀を振るい続ける。剣とは違うその動かし方に少し戸惑っているけれど、でも妙にしっくりときた。

私は無心に刀を振るい続ける。
私に新しい世界を見せてくれたあいつにもう一度会いたい。でも、今度会う時は騎士と罪人という関係。互いの正義を賭して、命を賭して戦わなければならないだろう。

放った突きが空気を裂いた。肌に浮いた汗が急に動きを止めた体から離れ、宙に舞う。
突きを放った体制のまま、じっと刀の先端を見つめる。その先にあの男が居るのを想像して。
この前私は負けた。それでも今度は――。
「あいつに勝ってやる」

幕間2　ミリィセの刀（後書き）

「あら？　此処は？」
「ようこそ！　メルとお姉様の愛の巣へ！」
「おい、情報屋。貴様ミリィセ様に何を言っている？」
「あ～、お邪魔虫が来ましたねぇ」
「邪魔者だと……貴様、私を馬鹿にしてるのか？！」
「いえいえ～、でもあんまり煩いようでしたらリリカさんの裏情報も公開してしまうかも……」
「な……なに……」
「例えばミリィセお姉様の肖像画を毎晩――」
「わーわー、切る！　叩き切ってやる！」
「貴方達、煩いわよ」

第二十二話　玉鋼作り

第二十二話　玉鋼作り

皆が寝静まった夜更けに、クーヤは沈んでいた意識を覚醒させた。ボーっとした視線の中、欠伸を一つかみ締める。すっきりとした目覚めではない。眠気が未だに脳内の大部分を占める。霞の如く目の前を覆う睡魔に対して頭を振るい、身体が求める睡眠欲を忘れる事にした。

「あー、ねみぃ」

両隣にはいつも通り二人の寝顔があった。無邪気に眠るラビとアリスに向けて軽く笑みを浮かべ、二人の睡眠を邪魔せぬよう静かに身を起こす。部屋の隅にまとめておいた道具を手に取り、クーヤはログハウスの扉を開け外へと足を進めた。

外へ出ると肌寒い外気が彼を襲う。

身震いをし、息を一つ吐いて高い夜空を見上げる。日を追うごとに気温が下がってくるのを肌で感じた。そろそろ外で作業をするのはきついかもしれない。だが、ログハウスの中で作業するのは彼女達を起こしてしまうだろう。

日中は忙しい作業に追われる毎日だ。休む時は十分に身体を休めて欲しいと彼は思っている。

外気に晒され、夜空の星を眺めていると頭の中に残っていた眠気が掃われていった。再び歩みを進める。

彼が向かう先はつい最近作った窯の前。

川の付近から取ってきた粘土で作ったばかりのものだ。炭作りの作業をラビから他の兎獣人へと託すために、育成が進められている。

持ってきた道具をその場に置き、窯に火を灯した。

前までは月の光だけで作業を行っていたが、流石にここ最近の気温の低さには敵わず、光源と暖房を求めて今は窯の前で行っている。

袋の中から一つの鉱石を取り出した。

その鉱石は魔吸石。ラビの魔力が封じ込まれ、紅く染まった物だ。

魔方陣を地面に描き、紅い魔吸石を地面に置く。反応が無いと、次は詠唱を唱え始めるが、やはり反応が無い。さらに別の方法で試し始めた。

魔吸石が魔素を取り込むのを知ってからこの実験を始めていた。

魔女の家で住んでいた時もやっていた作業である。一時期止めていた作業を最近再び行い始めた。

この日課を始めてからクーヤの睡眠時間はかなり少なくなっている。それでもクーヤは「まぁ、いいか」と考えていた。睡眠時間よりも自分の知識欲を満たす事が先決だ。今は純粋にこの魔吸石の使い方を知りたいだけ。新しい知識を得る、それはクーヤの趣味と言ってもいいものだった。

身体を壊すのは本末転倒というのは分かってはいた。時間を見つけては眠るようにし、倒れないギリギリの睡眠時間でここ数日は過ごしている。たまに日中、立ったまま寝る事もあったが。

魔吸石から魔力を取り出す為の実験を進めていると、村の外からガンガンと硬い物を叩く音が聞こえてくる。

いつも通りの招かれざる客だろう。今日はアリスが結界の担当だったなと思い出し、クーヤは音のする方へと向かい始めた。

オワゾを囲む結界の境目に行くと、薄い水の膜に氷の壁が出来上がっていた。その氷の壁には案の定アリスが張った結界につかまった魔獣の姿があった。アリス用の結界は薄い水の膜を張り、獣が入ろうとするとその水は凍りつき捕らえるという術式となっている。
氷に捕らわれた魔獣は必死に抗おうとするが無駄な事だ。寝る前にアリスが魔力をありったけ注いで作った結界である。その程度で壊れる事は無い。

「うるせぇよ。仲間の安眠妨害だ」

もがく魔獣に対し、何の感情も無くその首を切り落とした。刀を腰に納める頃には、痙攣を繰り返す魔獣がその身体を仰向けにしながら地面に横たえていった。

朝目覚めた時に死体が転がっているのは精神衛生上あまり良くないだろうと、殺した魔獣を森の中へと運んでいく。
死体を放り投げながら、クーヤはその死体を前にある事を考えていた。

「……そういや、汚染された魔素って本当はどんな物質なんだろうな？」

この前は彼女達に魔素汚染とは毒と説明した。しかし、ただの毒としてでは説明できない事が多すぎる。

新たな知識欲がクーヤの中で湧き出した。事切れた魔獣の近くに寄り、魔獣の内臓をいじくり始める。

今夜から睡眠時間がさらに短くなるだろう。

「相変わらず眠そうね」
「……まぁな」

ラビと言葉を交わしながら親指と人差し指の間に挟んだ鉱石を眺め、クーヤは唇の端を微かに上げた。
手にした鉱石は蒼い色に染まった魔吸石。角度を変えると別の輝きを魅せるその石は見る者を楽しませていた。いじくっていた魔吸石を掌から頭上へ放り投げると、線状の軌跡を描き再び手の中へと帰ってくる。

「どうした？　えらく上機嫌じゃないか」
「こいつの使い方が分かったんだ」

端的に事実だけを伝える言葉。
それ以上の説明は特に無く、彼は手の中の魔吸石を転がしながら今にも鼻歌を歌いそうな表情で鉱石を眺め続けた。

魔女の家で行っていた実験の結果と、ここ数日の研究の成果がやっと出た。これから新しく得た知識をどのように活用していくかがクーヤの頭の中を占める。

そんなクーヤの姿にアリスは諦めのため息を吐き出す。だけれども、その顔は微かに笑顔を含んでいた。
クーヤは必要な説明はきちんとしてくれるのを彼女は知っている。魔素を取り込んだ魔吸石の使い方も、その時になれば教えてくれる

だろう。今はただ、新しい玩具を得た子供のようにはしゃぐ彼の姿を眺めるだけで嬉しくなる。ラビも同じように説明を求めようとはしなかった。

「さってと、私は焼き所の方で仕事するわ。まだ火加減が上手く出来ないしね」

クーヤが川沿いで集めた粘土は長方形に整えられ、焼入れされている。レンガとして造られたそれは積み上げられ、窯として機能していた。

各々の家には調理兼、暖房用としての囲炉裏が設置されてはいるが、燃料となる炭や、土鍋などの陶器を作る為に窯が使われている。今はまだ火加減の調整にラビが手伝っているが、炭作り、陶器作りを役割とする人材を育てている最中だ。ラビが感じたものとしては、自分が手伝う必要の無い日はそんなに遠くないだろうと思っている。

「畑を世話する者も大体決まってきているしな。私は数人連れて探索に行こうと思うが……クーヤはどうする？」

クーヤは手の中の魔吸石をもう一度宙へ高く投げた。

くるくると回る鉱石は窓から注がれる光によって幾重にも煌めき、光の乱反射は眺める者の心を躍らせる。

「新しい刀を作りたい」

クーヤが今まで使っていた刀はミリィセに贈った。

ミリィセとの戦闘により、耐久性に心配が出てきた為だ。刃こぼれは研磨して無くし、刃に歪みが無いと言ってもその刀身には剣の一撃を耐えた事による金属の疲労が彼には感じられた。

武器として心もとない物を処分するついでに、気にかけてくれたミリィセに対する感謝の印としてクルセに預けて置いたのだ。

日本刀を作成した時、何本か打った物の中で一番出来の良い真打を使い続け、他の物は影打ちとして荷台の中に積んでいた。耐久性に心配の有る真打よりも、まだ影打ちの方が安心出来るというクーヤの判断であった。

「玉鋼を作るか」

手を伸ばし、落ちてきた鉱石を頭上で掴む。

ナナ達が集めた砂鉄も十分な量が集まってきている。そろそろ鉄作りを始めてもいいと思っていた所だ。持ってきた荷物の中にも玉鋼はまだあるが、それでは心もとないと感じた。

何かを作る。これもクーヤにとって趣味の一つだ。

「そうか。睡眠時間が足りてないようだから、無理はするなよ」

「昨日も遅かったみたいだしね」

クーヤの身体が魔吸石を掴み取った体勢のままその場に佇んだ。

その様子に彼女達はクスリと軽く笑う。その場に微笑みを残し、彼女達はそれぞれの仕事を実施するため外へと向かった。

ログハウスから彼女達の姿が消えると、クーヤはギシリと固まった身体を動かし始め人差し指で頬を2，3度掻いた。

「まったく……俺もシモンの事言えないよな」

彼女達に気づかれないように行動していたはずだ。

心情を読む事に長け、相手に気づかれないように行動するクーヤであっても、女性の感というのは時としてその長所を軽々と上回る。
無理をする彼に言及するでもなく、ただ静かにクーヤを見守る彼女達。そんな彼女達に感謝をすればいいのか、女性の感を上回る事が出来なかった自分を責めればいいのか。彼には判断付かなかった。

「ほんと、出来た奴らだよ」

部屋の中で頭を掻きながらため息を吐く。悪戯がばれた子供のような仕草をする彼は将来の不安に苛まれながら、けれどもそれもいいかともう一度だけ嘆息するのだった。

クーヤがログハウスを出てから向かった先は、焼き所と名付けた窯を数個作った場所だ。焼き所はオワゾに張った結界の北西側にあり、村に引いた水路と付かず離れずという場所に設置した。
焼き所には雨よけ用の簡易的な屋根が備え付けられ、屋根の下では兎獣人達が窯の前で炭作りの作業に没頭している。その後ろでは、ラビが兎獣人達の様子を監督していた。その場を訪れたクーヤの姿を見つけた一人が、作業していた手を止めてこちらを振り向いた。

「クーヤ様おはようございま――」
「こら！　よそ見しない。また燃えカスにしたいの？」
「はっ、はぃ！　すいません」

叱られた者が申し訳無さそうにクーヤの顔色を伺ってくるのに対し、片手を挙げて返答を済ませる。再び作業を始めた兎獣人達の様子を後ろから眺めながらラビに近づいた。

「少し頼みたい事がある」
「なに？」
「此処の作業が終わってからでいいから、炉を作るのを手伝って欲しい」
「鉄作りの炉ね。分かったわ。ちょっと時間かかるかもしれないけど」
「ああ、準備は整えておくからよろしくな」

用件だけ伝え、クーヤは家から持ってきた道具や素材が入った袋を焼き所から少し離れた場所に置く。今日の天気は悪くない。屋根の下で行わなくても、特に支障となる天候にはならないだろう。
製鉄はかなり高温での作業となるため、同じように高熱を扱う窯の近くで作業をしたくないのが彼の本音ではあるが。

袋を置いた場所をたたら炉作成の場所と定め、焼き所の一角に積まれていたレンガを運び始めた。
現在は木炭や陶器を作るための窯場であるが、元よりたたら炉を作るためにあしらえた場所だ。炉を作るための素材は大抵ここにそろっている。持ってきた袋の中には、魔女の家を出る前に集めておいた貝殻粉と、魔術文字を描くための筆記用具だ。
ある程度素材を集めた所で、炉の土台を作るため地面に魔術を使い始める。

「土よ、土よ。我の声に従い形作れ」

クーヤには珍しく詠唱での魔術行使だ。だが実は、それほど珍しい光景でもない。戦闘中に使うには見劣りする詠唱だが、日常使うには使い勝手の良い方法だ。魔術文字を書くという事は、媒介が必要になる。それは黒鉛で物に描いたり、葉巻の火で宙に描いたり、

棒切れで地面に描いたり。描くための道具が必要となる。詠唱はそれが不要なのだ。
魔力で文字を描く事も可能ではあるが、余分な魔力を消費し、媒介を用いる場合とでは集中力が段違いにかかる。日頃から使うには彼にとって億劫でしかなかい。
そのような理由から、クーヤは日常で用いる魔術として主に詠唱を鍵としている。勿論、主というだけでまったく使わないという事ではない。

「それじゃ、たたら炉の製作といくか」

築き上げた下段の土台へ、土台の上段となるレンガを敷き詰める。
その上に炉底となるレンガを畳状に敷き、二段目から四段目には炉内となる中央を空洞とした囲いが積み上げられていく。
また、三段目には送風用に陶器で作った筒が差し込まれ、その左右の壁にはノロ出し用の口が開けられた。
五段目以降は今まで横に敷いていたレンガを縦にし、煙突状になるよう積み上げられている。

レンガ積みが一通り終えると、今度は隙間が出来ぬようレンガの間に粘土を塗りつけていく。ノロ出し用の出口も塞ぎ、目につく隙間を全て埋めていった。
隙間を埋める作業の後は、その炉の壁に黒鉛で魔術文字を描いていく。魔術の種類は「耐久強化」。送風用の筒にも魔方陣を書き込み、ふいごの代わりにクーヤは風系統の魔術を行使するものとした。
全ての作業が終わると、一歩離れてその全容を眺める。

「よし、とりあえずここまでか」

高さは約1メートル。幅や奥行きも1メートル未満と、小柄なたたら炉が完成した。

「たたら」というのは、本来の意味では「ふいご」の事を指すが、日本の製鉄方法を示す言葉でもある。

鞴(ふいご)は金属の加工時などで高温が必要となる場合に、空気を送り出し火力を促進するための器具だ。たたら場で足踏み式の踏鞴(たたら)を数人がかりで交互に踏み込む姿をどこかで見た事があるだろう。だがあれは、商業目的として大量の鉄を作り出すために使われる場合だ。

少量の鉄を作る時にはこの程度の小さい炉でも十分製鉄できる。

「こっちの作業は終わったわよ～、って！　もう出来てるじゃない！？」

組みあがった炉に対し満足そうに一つ頷くと、ラビの驚いた声が後ろから聞こえてくる。

「いや、これはまだ完成していない」

「そうなの？　それにしても……ちっちゃいわね」

「鉄を作るには十分だ」

「ふぅ～ん。で、私は何をすればいいの？」

「炉を乾燥させるのと、炉内の温度を上げたい。ラビの魔術でやってくれ」

本来は炉内に木炭を敷き詰め、数時間かけて炉を乾燥させ、内部の温度をあげる。その時間を惜しんだクーヤは、その作業をラビの力に任せる事にした。

炉の壁に描いた魔方陣に魔力を注いでおく事も伝えておく。

「ん、おっけー。それが終わったら――」

「ああ、鉄作りを始める」
二人は顔を見合わせ、ニヤリと笑った。

昼時を過ぎる頃には、焼き所は大勢の村民が集まる場所となっていた。
ラビが監督を終えた段階で、炭作りは火加減を見る者が一人付けば問題無い状態となっている。
窯の前で待機する者を除き、手の開いた者達がオワゾに居る全ての村人に報せに行ったのだ。大人から子供まで焼き所へ訪れた者全員が製鉄という行事を興味深そうに見つめている。兎獣人達には製鉄という技術は無かった。

亜人という種族により、物流など期待出来るものではない。
元より森の恵みにより生きてきた種族だ。生活に使う道具のほぼ全てが木を加工して作ったものばかりだ。森を徘徊していると、稀に息絶えた冒険者が所有していた剣や調理器具を得る事もあったが、数少ない物だった。
鉄は便利な物だと分かっていたが、鉄を作る為の知識や技術が乏しかった為にそれを作る方法を知らないまま今日に至る。
磁石で集めた砂のような物から鉄が出来上がるなど、彼等にとって信じられないものだった。

「木炭の量が減って来たわよ」
「そうか」

午前中の仕事を終えた野次馬がたたら炉を囲う。その中心には、

クーヤとラビが炉の前で製鉄を進めていた。
村人の期待に囲まれているが、クーヤの目にはたたら炉とラビしか見えていない。
滴り落ちる汗を拭う事もせず、ただただ真剣に送風口から魔術で風を送り炉内の火加減の調節を試みる。ラビに炉内を高温に保つために手伝ってもらってはいるが、微妙なさじ加減はクーヤ自らが行っていた。

「ラビ、次の砂鉄と木炭を」
「わかったわ」

煙突状の炉の上か木炭を投入し、貝殻粉を混ぜた砂鉄が炉内に足される。貝殻粉（炭酸カルシウム）を砂鉄の中に混ぜると砂鉄中の不純物を分離させるのを促進させる効果があるためだ。

小分けした砂鉄を入れ、木炭とラビの魔術による高温を保つ作業は続けられる。炉の中で行われる作業は、砂鉄に含まれる酸素を奪う行為だ。

鉄は酸化しやすい金属である。
鉄という金属は酸化した鉄……解り易くいえば錆の状態で世界に出回っている。砂鉄もその酸化鉄の一部だ。この錆びている鉄から酸素を還元――酸素を奪う事で鉄としての純度を上げていく。
炭を作る作業でも同じような事が行われている。炭では生木を空気が入らないように蒸し焼きにし、生木内の酸素や水蒸気を奪い続け炭素の塊となったものが炭となるのだ。

「また木炭の量が減って来たわ」
「よし、木炭と砂鉄を入れてくれ」

何度目かの行為が繰り返される。
炉の上部から手を広げた横幅の分だけ木炭が下がった時点で、貝殻粉を混ぜた砂鉄が挿入し、その後すぐに木炭が炉の天辺まで投入された。
木炭が継ぎ足されたのを確認すると、クーヤは炉の中に木炭が常に充填されるように炉の四隅を棒で突き始める。そしてまた、炉の温度の調整へと戻っていった。

１０センチほど木炭が下がれば、すかさず砂鉄と木炭が継ぎ足されていく。
砂鉄と木炭の投入が数十回と繰り返される。

やがてナナ達が集めた砂鉄は全て炉内に注がれて無くなった。

「砂鉄は全部投入したわよ」
「よし……火力の調整はこちらでやっておく。ラビは水を汲んでおいてくれ。出来るだけ大きな容器でな」
「了解！」

ピッと敬礼を済まし、言われた通りに大きな陶器製の籠に水を汲む行動へととりかかった。周りで見ていた者達もラビを手伝う為に動き始める。

ラビが行動を始めると、クーヤも新たな作業へを開始した。
ノロ出し用の口を破壊し、鉄の棒で炉内のノロを掻き出す。掻き出し始めると、炉の中からどろりとした赤色に発光した液体が外側へとあふれ出した。

ノロとは砂鉄に含まれた不純物の事を指す。鉱滓（こうさい）、スラグなどなどと呼ばれる炉で溶錬した際に生じる非金属性の不純物だ。この不

純物は製鉄の過程で鉄よりも先に溶けて流れ出す。たたら炉での製鉄では、この溶けた「ノロ」を掻き出すのが重要な仕事となるのだ。

十分にノロを掻き出した後、クーヤは送風用の筒に書かれた魔方陣に魔力を注ぐ。それに続き木炭のみを下がった分だけ投入し続けた。

数回繰り返すと木炭の投入を止め、炉内の木炭がその量を半分に減るまで待ち続ける。やがて、木炭が炉の半分まで落ちるのを確認すると、筒に描いた魔方陣を傷つけ、送風を停止した。

「……終わった？」

いつの間にかクーヤの隣では水を汲み終わったラビが佇んでいる。その姿を確認した後、神妙に頷き最後の作業へと取り掛かった。

「炉を壊すぞ」

午前中に積み上げられた炉が解体されていく。

折角作ったレンガが壊されるのを惜しいと感じている村人もいるが、破壊しない限り鉄を取り出す事が出来ない。ハンマー等で積み上げたレンガが壊されていき、炉底に溜まった鉄が姿を現した。

「これが――」

いまだ赤熱とした塊を目の前にし、周りの野次馬が息を飲む。この赤白の塊の中に鉄はあるのだろうかと、期待を胸にその光源を見つめながら心臓の音を高鳴らせていた。

その反応にクーヤは気づかず、そそくさと二本の棒でその塊を掴みあげた。塊の周囲に積もっていた炭の残骸が、ザラザラと零れ落

ちる。すかさず掴んだ塊を汲んだ水の中へと投入した。水の中から水蒸気が立ち上り、熱された鉄の塊は急速に冷やされていく。

立ち上る水蒸気が落ち着いた後、すぐさま冷却された塊を水の中から取り出し、金槌で塊を叩き続ける。

この塊は「ケラ」と呼ばれる鉄の塊だ。

このケラにはまだノロという不純物に覆われているため、ハンマーで叩きながらノロをそぎ落とす。

やがてクーヤは叩くのを止め、その塊を持ち上げた。

「できた……」

このケラ（鉄）をさらに分別し玉鋼を探し出す。

玉鋼は炭素量1～1．5％の鋼で、最も日本刀に適する鉄となる。それ以外の鉄は包丁や農具などの材料として使われる予定だ。

しかし今はそんな事はどうでもよかった。

出来上がった鉄はゴツゴツと無骨でありながら、その輝きは金属を思わせる光沢を放っていた。

鉄を作り出した。

満足な製鉄所でもない。

十分な道具もそろっていない。

それでも鉄は作る事が出来た。

「鉄の……完成だ」

クーヤの一言に、焼き所に集う村人達は歓声で彼を称えた。

第二十二話　玉鋼作り（後書き）

「再開したわね！」
「一時はどうなるものかと思ったがな」
「著者から一つ、今回思った事を伝えよう」
「なんだ？」
「あまり時間を置くと、今までの流れを忘れそうで怖いと言っていた」
「……記憶力が鳥頭だから仕方がないわね」
「続けていくしかないな」
「そうだな」

第二十三話　噂と囮

第二十三話　噂と囮

今宵もクーヤの研究は進められていた。
まだ知らぬ事象を解明し、知識欲を満たす。彼の知的好奇心は非常に高く、それは最早渇望と言っていい衝動であった。

「あー、くそ。わからん」

死体となった魔獣を切り刻み、その肉片を持ち上げて眺めてみる。肉片からは自分の中に巡る魔素とは少々異なる魔素が、びっしりと付着しているのを感じる。だが、似ているだけでやはり違う物質であるというのがクーヤの考えだ。

「魔素に似た物質って事はわかってるんだがな……」

世間の魔術師の中には新しい魔術を解明しようとする研究者もいる。しかし、魔力が魔素の塊であるという事を研究しようとする者はいなかった。その理由は感じることしか出来ない、目に見えない物質だからだろう。

この世は物質世界だ。
目に見えない物などこの世には沢山ある。それは太陽から降り注ぐ紫外線であったり、身体から発せられる熱であったり、ビルの間に行き交う電磁波であったり。匂いというのも目に見えない分子の集まりだ。
目に見えないから、理解できないからと言って、便利な不思議な

力と切り捨てるのはどうだろうかとクーヤは考えている。

「しかし……本当に魔素と似ている性質だよな」

殺した魔獣から汚染された魔素が段々と減っていくのを感じた。

人が死んだ後もその身体に魔素がいつまでも留まっているわけではなく、徐々に体内の魔力が減っていく。

魔術を使う魔獣との遭遇もあり、魔獣が魔術を使う様子を避けながら眺め続ける事も行った。結論としては、魔素と同じ様な性質であるとだけ。魔獣が汚染された魔素を使って魔術を行使したが、放たれた魔術は魔素に含まれたエネルギーが切れると世界に霧散してき、感知できなくなった。

人が使う魔術も同じような反応を起こす。

魔術として行使された魔力は、その集まりである魔素のエネルギーを食いつぶすと収束していき、やがて消え失せる。

物質としての性質は同じなのだろう。だが、似て異なる物である。

「普通の魔素と同じ性質なら、生きたままのが研究し易いか」

魔獣の死骸から汚染された魔素が加速度的に減っていくのを感じる。

もうこの魔獣では実験の続きが出来ないだろう。クーヤは新たな実験材料を求めて森の中をゆっくりと歩いていった。

疲れ果てたクーヤがオワゾに戻ったのは夜が明け始めた頃だ。

結局あの後魔獣を見つける事が出来なかった。死んだ魔獣ではなく、出来れば生きている魔獣で研究を進めたかった。
魔素は生命力のような物と考えている。死んだ者はその身体から段々と魔力が失われていき、やがて完全に消え失せる。生命力の溢れた、生きた魔素で魔素汚染の研究を進めたい。

全身に疲労が溜まったクーヤが布団に潜り込む。
ほんの数時間であるが、睡眠を取る事は重要だ。倒れてしまったらその数日分本来の仕事が遅れてしまう。家に帰る前に焼きいれ用の火床に火を入れておく事も忘れない。今日は焼き所で刃物の製作予定なのだ。

身体を揺すられる感覚にクーヤは目を覚ました。
明らかに睡眠時間が足りていない。その事を自覚しながら、寝ぼけたまま朝食を済ませる。そんな様子をラビとアリスが心配そうに彼を見るが、口を噤んで言及を控えた。自覚があるからこそ彼女達は口に出さない。もし自覚が無くなれば、直ぐにクーヤを寝床に縛り付けようとも考えていた。

そんな彼女達に心配をかけて本当に申し訳なく感じた。クーヤは頭を掻きながら今日の予定を思い起こすと、顔を洗って焼き所へと向かっていく。

今日は鉄を使っての刃物作りだ。
寝る前に暖気しておいた窯に、硼砂(ほうしゃ)を振りかけた包丁鉄を入れて高温で熱する。窯から取り出し加熱された鉄を金槌で叩くと、溶けた硼砂が酸化した鉄と共に花火のように飛び散った。

この前作った鉄塊(ケラ)はその日のうちにある程度の大きさに分解された。ケラの中には炭素量１～１．５％の玉鋼の他に、０．７％ほどの左下鉄、０．１～０．３％の包丁鉄などが混在している。炭素量が異なる鉄をそれぞれ別になるよう分解し、金槌で叩き選別した。

一例には１３トンの砂鉄、１３トンの木炭に対して出来る鉄の塊(ケラ)は２．８トン。そのケラからさらに選別され、炭素量の多い部分を玉鋼と呼ばれる。日本刀などの高級な刃物の原料にされるが、その量は２．８トンのケラから取れる玉鋼の割合は１トン以下という僅かなものである。

刀を作るには玉鋼が一番適しているのだ。熱処理により硬く、曲がらず、粘り強くでき、研磨しやすく、錆びにくい。

日本刀を作る時の材料とする玉鋼は保管し、その他の比較的炭素量が少ない鉄は農具や包丁を作る時に用いる事にした。農具は昨日作り終え、今では畑を世話する者へ渡している。

刃となる部分を金槌で懸命に叩き上げていく。白熱を放つ鉄を金槌で叩きながらおおよその形を作る。鉄がしっかりと締められたのを感じると、包丁の形になるように丁寧に切り落とし成形を行う。満足の行く物が出来上がるとその刃物を傍に置き、最後の仕上げは次回の仕事とした。

そして次の鉄片へと手を伸ばす。

「っ――！」

ぐらりとクーヤの視界が揺れる。

ここ数日の短い睡眠時間に身体が悲鳴をあげ始めた。流石に無理をしすぎたのだろう。特に昨夜、いや今日の睡眠時間はかなり少ない。身体が睡眠を欲している。

これ以上無理に作業を進める事無く、一時中断してクーヤは焼き所に作った長椅子へ向かった。その途中、近くで作業をしていた者に少ししたら起こすようにと頼み、彼は身体を横にした。

焼き所に壁は無い。

あるのは屋根を支える数本の柱のみ。長椅子に仰向けになったクーヤの身体を風が撫で、その場所を通り過ぎる。

離れた所にいるが、窯から放たれる熱を此処まで感じる。それがとても心地よく、彼は目蓋を閉じた。

目を瞑ると急激に睡魔が襲ってくる。抗う事無く、意識を闇の中へと手放した。

アリスと共にイース達が村の中を歩く。

イース達が再びオワゾへと訪れた。川で魚を獲っていたアリスと合流し、現在新しく作った場所へと案内している。イースが訪れた事を報告するため、焼き所へ向かう一行。クーヤとラビもそこに居るだろう。

「いや、なんつーか……この村の発展は凄まじいな」

「物流が途絶えている場所とは思えないっすよ」

道すがら、前回見た光景とは異なる風景に目を丸くさせていた。

イースが滞在していた時には未完であった露天風呂が完成している。ラビが地面に開けた穴は水を引き入れる前に浴槽として設備されており、穴の周囲には大きめの石が敷き詰められた。石同士の隙間には粘土が詰められ接着されている。

水路と繋がった後、露天風呂の外側には木の板が立てかけられ外

から見えないようにされている。クーヤによって浴槽の周りに温度調節用の魔方陣も描かれた。魔力を注ぐのはもっぱらラビの仕事であるが。

浴槽から溢れるお湯を川へと戻す水路も完成した。戻す水路が出来上がるまで水浸しになってしまった範囲が広くありもしたが、現在は良好である。

露天風呂は兎獣人達に好評だ。

あまりの心地よさに当初はのぼせる者も続出したものだ。風呂に入るときの注意点としてクーヤが説明したのだが、入浴という娯楽に抗える者が少なく一時は洞窟での治療行為の再来となるような事態となった。

入浴時間の制限なども提案してはみたが、のぼせる者は未だに居るとエリーナから聞いた。その事実にクーヤはため息が出るばかりであった。

「後であの露天風呂というのを堪能してみたいもんだ」

「構わないが……他の者が入っていない時だけだぞ。覗きも禁止だ」

「ちぃ」

畑の世話をしている者にも金属製の農具が使われている。

前回まで木製の農具を使っている者が多かったばかりに、イース達もこれには本当に衝撃的であった。物流が途絶えたこのオワズで金属が生成されているなど、誰も想像してはいなかった。

「まるで無から有を作り出しているようですね。実はクーヤ君って錬金術師とかですか？」

「錬金術の心得もあると言ってはいたぞ。扱いが難しく、魔力も大量に使うから出来ないらしいがな」

錬金術とはなんでもない鉄を金に変える、賢者の石を作るというのが広められている。だが、非金属を貴金属に変えるというものが根源付近にある。つまりはある元素から他の元素を作り変えるということ。

錬金術のやり方は諸説あるが、この世界では魔力の粒である魔素を操り元素に干渉する事で可能としている。

「しかし、錬金術でなくとも物を作り出す事は出来る。何も無いように見える場所であろうと、それを行うための道具とそれを成す為の情報があれば誰でも作り出せるんだ。それが――クーヤの知識というものだ」

誇らしげに胸を張ってイース達に言い聞かせる。

その姿は見惚れるほど活き活きとしており、クーヤに対するアリスの尊敬が伺えた。だが、まるで惚気に当てられたような気分になり、イース達はやれやれと頭(かぶり)を振る。

「クーヤって一体何者なんっすか？」

「世界を少しだけ詳しく知る者、だな」

会話をしながら足を進めていると目的の焼き所へと到着した。

焼き所を訪れると、長椅子に横たわるクーヤの姿と腰掛けるラビの姿が見えた。アリスとイース達の姿をラビが見つけると、ひらひらと手を振り歓迎する。

「……何をしているんだ？」

「作業してた子に少ししたら起こすように言われたみたいなんだけど、起こすのも悪いと思って寝かしておいてあげてるの」

「そうか、確かに最近睡眠時間が少ないからな。今日も朝方帰ってきたし……」

「おお！　朝帰りっすか！　やるなぁク――」

立ったまま寝言をほざくショルにアリスの力の篭った裏拳が鼻柱へと突き刺さる。盛大に鼻血を撒き散らしながらゴロゴロと地面を転がっていく。転がり続け、焼き所の近くを流れる水路へとぼちゃんと落ちる。狙って落ちているのだろうか。

「話をはぐらかすな。私が言っているのはそれの事だ」

びしりとラビの膝へと指を突きつける。

「この前のお返しよ……といっても私覚えてないけど」

その膝の上に眠りこけているクーヤの頭が乗っていた。すやすやと眠るその顔はいつもの無愛想な表情ではなく、無邪気な子供のような顔をしており、間近で見るその表情はラビの顔を綻ばせた。

「あの時は私も膝枕してくれたぞ。次は私の番だ。変わってくれ」

「ちょっと、引っ張らないでよ。起きちゃうじゃない。今度してあげたら？」

「やだ、今したいんだ」

「もう、しょうがないわね」

ラビがその場所を明け渡そうと緩やかに動く。場所を変わったアリスはニコニコと非常に嬉しそうな顔で迎えた。

「あー、悪いが。そういうのは三人の時やってくれ」

言うが早いかイースは怒りだか、嫉妬だか様々な感情を含めた拳

を握りクーヤの頭を殴りつける。ガツンという痛々しい音がした。
「……いてぇ」
「おう、クーヤ起きたか」
至福の時間を奪われたアリスは不満以外の何ものでもない表情を浮かべてイースを睨みつけるが、彼等も惚気を見にわざわざ来たわけではない。クーヤに頼まれた依頼についての報告をしにきたのだ。
「……寝起きに男の顔を拝むのは、なんか悲しくなるな」
「うっせぇ、むさいおっさんで悪かったな」
起き上がったクーヤにイースの報告が伝えられる。
「――と、いった感じで俺達が流した噂は奴隷商人の間に広まった。もうこちらへ向かっている頃だと思うぞ」
「そうか――頃合だな」
「ねぇ……本当にやるの？」
「ああ、やるぞ――奴隷商人狩りだ」
イース達だけでは外との繋がりがまだ細い。そこでクーヤの提案が奴隷商人を使うといったものだ。物流が確保出来る事に越した事は無いが、その条件を超える為には様々な問題が積み重なる。
クーヤがイース達に説明した夜、皆の意見も出し合って決めた事だ。その中には今の生活を続けた方がいいのではという意見もあった。だが、食料が川や森から取れる秋が過ぎ、冬が訪れた時にどうやって過ごすかという質問に皆は反論する事が出来なかった。
畑から取れる食料も冬を越せるほど大量には出来そうにない。自

給自足には限りがあり、イース達だけではオワゾに住む住民全員を賄える量を確保するのは難しい。

本当に成功する事が出来るのか、賭けに出る部分も存在する。それでも勝ち得た時の物は大きい。オワゾを掛け金に大博打を決行する事と決めた。それでも不安は付きまとう。

重苦しい雰囲気が漂う。

そしてその場に、びちゃりと音を立てる足音が聞こえた。

「いよーっすクーヤ。相変わらず眠そうっすね。朝帰りの相手は誰っすか～」

能天気な軽い声がその場を払拭する。びしょ濡れなショルの姿にクーヤは怪訝な顔を向けるが、何も聞かない事に勤めた。

「いやいや、嬢ちゃん達が朝まで寝かさなかったんだよな。な、そうだろう？」

「イースさん現実から目を逸らしちゃダメっす。相手はエリーナ姉さんかもしれないっすよ」

「くそっ！　クーヤてめぇ、手を出しやがったのか！」

「もしかしたらナナちゃんという可能性も」

「「それはない！！」」

はっはっはっ、と笑いあう三人。焼き所に男達の笑い声が響いていた。

そんな三人の様子から顔を背け、頬杖を突きながらやれやれと息を吐く。頬に置いた手で口元を隠しながらクーヤは笑った。イース達の気遣いに感謝するばかりであった。

「消えうせろ淫獣ども！」
炎と氷が錯綜する。
村の中に男達の悲鳴が響き渡った。

奴隷商人であるガブールは意気揚々とハーグの森へと向かっていた。
つい最近まで不景気な事この上なかった。亜人の中でも人気商品であった兎型が獲れなくなり、景気が良かった時期と比べて豪遊が出来なくなった事に彼の苛立ちは募るばかりだった。
亜人でなくとも奴隷は売れる。生活するには十分な稼ぎであったが、一度甘い蜜を知ってしまった彼の欲望は深かった。
最初は酒場で囁かれる噂程度のものでしかなかった。ある冒険者達がハーグの森へと腕試しに行き、兎亜人の姿を見たというものだった。その時はまだガブールもその話を鵜呑みにはしなかった。ハーグの森はこの国の騎士でさえも進行を諦めた危険区域だ。森の奥へと逃げた兎亜人が生きていける場所とはとても考えられなかったのだ。
最初は冒険者の虚言だと罵った。
だが、もし事実ならば再び夢のような生活が出来るかもしれない。その噂話はガブールの欲望にねっとりと絡み付いていた。
日が経つにつれその噂の虚実が気になりだした。情報を集め出すと、次々に出てくる目撃情報。

近隣の村からも、森の付近に兎亜人が出るという情報を聞いたとき、彼はいの一番に行動した。どの奴隷商人よりも早く行動を起こし、ハーグの森を管轄する領主に許可を申し出た。そして今、他の商人を出し抜いて目撃情報があった付近へと馬車を進めている。

早急に進めた計画は何もかもが不十分であった。

彼が御者席に座る馬車の荷台には大型の猛獣を閉じ込める為の檻が鎮座しているだけで、他には食料程度しか詰まれていない。

その馬車の周りを固める護衛として雇った者達も誰も彼もが名の知れぬ、三流の傭兵ばかりであった。

それでも高々兎亜人を捕まえる程度の仕事。この程度の装備でも十分であるとガブールは考えていた。

一行がハーグの森の手前へと辿り着く。

そしてすぐに林の間から亜人がガサリと姿を現した。長い耳、白い体毛。間違いない、兎型の亜人だ。

「逃がすな！　追え！　捕まえろ！」

ガブールが唾を飛ばしながら周りの傭兵へと指示を出す。

自分は運が良いと思った。

噂でしかなかった情報は確かであった。こんなに早く見つかるとは思わなかった。こいつらを捕まえれば再び夢のような生活を送ることが出来る。

万が一逃がしたとしても、この森で生活するなど出来はしない。此処は魔獣の巣、果実も食べられないものばかり。すぐさま森の付近へと逃げてくるだろう。

他の奴隷商人には探してみたけれど、見つからなかった、噂はデ

マだったと伝えれば独占する事が可能。自分の懐はさらに潤う。

ガブールの算段が次々と立てられる。

彼の指示に傭兵達が兎亜人を追いかける。彼の心がはやし立てる。逃がしたら支払いは無しだと、捕まえれば夢のような生活が再び訪れると。

傭兵の一人が兎亜人を捕まえようと腕を伸ばす。

そしてガブールは自分の目を疑った。

「……へ？」

追い詰めていた傭兵が焼き尽くされた。

彼の視界は炎の壁によって囲まれ、先頭に居た傭兵達を燃やしていく。

いやな臭いが漂う。油の焼ける臭い、肉の焼ける臭い――人が焼ける臭い。断末魔。

突然の事態に動きを止めた傭兵達の足元にも氷柱が突き出した。先端の尖った氷柱は彼等の身体を突きぬけ、叫び声がその口から漏れだす。破れた腹から、開けた口から大量の液体があふれ出た。不気味なオブジェとなった人形が、その場に乱立した。

それはまるで昆虫の標本のようで、だけれども現実味のない光景で、だからこそ認めたくなくて。彼の心はしだいに壊れていった。

ガブールは何がなんだかわからない。目の前の光景をただ愕然と眺め続けていた。

気を取り戻したのは自分を守る為の護衛が地面に倒れる音を聞いた後だった。

「いよう」

ガブールが気づかぬ間に青年が馬車の隣へと姿を現している。
近くには頭をどこかに置き忘れた護衛が倒れ、青年が持つ細長い刃物には赤い液体が滴っている。
その青年は何の感情も浮かべていないような瞳をしており、飄々とガブールに話しかけた。

「あんたに用があるんだ。ご同行を願おうか」

返事を待たず、青年が視界から消える。

そしてガブールの視界は反転した。一体何が起きているのか解らない。意識が途切れる間、これは夢なんだと逃避を行った。

夢の中ではその昔優雅に過ごしていた時期を思い出すばかりであった。

第二十三話　噂と囮（後書き）

「あ～、酷い目にあったな」
「イースさん、頭がすごい事になってますよ」
「ウィムだって天辺が焼け野原だぞ。ショルも今日は高く飛んだな」
「死ぬかと思ったっす……。空から落ちる感覚に慣れてきている自分が怖いっす」
「まぁ、彼女達が本気なら僕達なんてひとたまりもないですけれどね」
「まったく、せっかく場を和ませてやったのにこの扱いはねぇだろう」
「ラビっち達にエロ会話を振るのは危険っすね」
「僕達からエロを取ったら何が残りますか？」
「いや！　そこは何か残そうぜ！」

第二十四話　奴隷商人との交渉（前書き）

５／３０　話の内容を大幅に改善しました。

第二十四話　奴隷商人との交渉

二十四話　奴隷商人との交渉

ガブールが目覚めた時、自らの状況を理解しがたかった。

「よう、やっと起きたか」

「えっ……あ？」

飛び込んで来た視界には、不自然なほど瞳を大きく見開いた青年が自分を見つめていた。

その風貌は筋肉質というわけでもなく、痩せているという印象もない。中肉中背、特に特徴は無かった。ただ、額に巻いている布と、布に引っ張られるように開かれた目蓋が印象的である。

睨まれているわけではないが、心を覗かれそうなその眼光にガブールは居心地が悪くなった。

ガブールは視線から逃げるように辺りを見回す。

視界を巡らせると映るのは木々ばかり。茶色く太い幹が自分の逃げ場を遮る。地中から生えた無数の草がその先の風景を隠す。地面から立ち上る土の香り、周囲に漂う深く、濃い緑の匂い。

湿気を含んだ空気が彼の肺を満たす。

ガブールはいつの間にか森の中に自分が連れてこられた事に困惑した。

状況が上手く理解出来ない。

先程まで兎亜人達を捕まえようと躍起になっていたのだが、気づけば森の中に連れ去られた。

「此処は……ハーグの森……か？」
「ハーグ……ああ、そういえば此処はそんな名称だったな」
「おーい、生き残ったのはこいつらだけだぞ」
「そうか」

声がした方を向けば、手足を紐で縛られた傭兵達が3人の男達に囲まれているのが映った。
見知らぬ男達に自分が雇った傭兵達が猿轡を噛まされ、くぐもった声を発している。

「これは……なんなのだ？　なんなのだ一体！！」

傭兵達が縛られている姿を見て、ガブールは身体が動かない事に気づいた。両手と両足は縛られ、身動きが取れない状態とされている。

捕まった。何故？　どうして？
疑問だけがガブールの脳内を占める。何故捕まったのか、何故捕まらなければならなかったのか。自分はちゃんとここの領主に許可を取っている。法に反する事は何もしていない。悪い事など何もしていない。
状況が分からない。相手の理不尽さに恐怖と苛立ちが募ってくるばかりだ。

「何故こんな事になっている……き、貴様ら何者だ！　何故わしは此処にいる！　何故わしを捕らえた！　わしをどうするつもりだ！　貴様ら一体何をしているのかわかっているのか！？」

「まぁ、落ち着け」
「おちつけ？　お前は気でも狂っているのか？　此処がどんな所かわかっているのか！？　魔獣の森だぞ、凶悪な魔獣どもがそこらに居るんだぞ？　落ち着いてられるか！　わしを放せ！」
「あんたに頼みたい事があるんだ」
「お前は馬鹿か？　本当に気が狂っているのか？　これが頼み事をする態度と呼べるものか！　さっさとわしを放せ！」

ガブールの危機感が警鐘を響かせる。
早く逃げなければ。ここは人が居ていい場所じゃない。自分が居ていい場所じゃない。
森の中へ入るのは傭兵達だけの予定であった。此処はこの国の騎士達でさえ進行を諦めた場所、ただの商人であるガブールが生きていられる場所じゃない。今この時でさえ、木々の奥から異形な姿の魔獣が出てこないかと、めまぐるしく視界を揺らしていた。

「心配するな、此処はそれほど深い所じゃない。辺りに魔獣も居ない」
「うるさい、うるさい、うるさい、うるさい！　そんなもの信じられるか！　くそっ、森に来るまでは順調だったはずだ、兎亜人も見つけた、もう少しで捕まえる事が出来た、順調だったはずだ、上手くいっていたはずだ、それが何故森の中に……くそっ、くそっ、くそっ！」

不安を消すためにガブールは叫び続けた。
唾を吐き捨て、目の前の青年を睨みつける。青年は見開いた目でこちらをじっと眺めている。ガブールはその瞳の奥に見え隠れする苛立ちに気づかなかった。
「早くわしを解放しろ！」

「ちょっと黙れ」

一つため息をつくと、傭兵達のもとへと歩みを進めていく。
傭兵の前に立つと、青年の腰からとても細い刃物が引き出された。高々と掲げられたその刃物は、武器に詳しい知識が無いガブールが見ても、それはとても美しく、言い表せない恐ろしさが存在していた。

その綺麗な刃物が振り下ろされる。
それはとても自然な動作で、とても当たり前のような仕草で。ガブールは目の前で行われた行為について認識できずにいた。

「……へっ？」

丸い物体が転がる。
ボールのようなその物体は硬く、重量感のある鈍い音を立てながら転がっていく。
ごろりごろりと地面を転がり、やがてそれは止まった。その物体とガブールの目線が交差する。
恐怖に彩られたその暗い瞳がガブールを恨めしげに見ているように感じた。

「ひっ」

その視線から逃げれば、傭兵の首を跳ねた細い刃物が目前に突きつけられていた。森林から発する爽やかな芳香の中に、粘つく血の臭気が混じる。ガブールはその刃物の先端に視線を寄せる事しか出来なかった。

凛、と音が響く。

青年は切っ先をガブールに向けたまま言葉を発しない。
突拍子もない光景に彼は驚くばかりだった。ガブールは先程まで暴れていた怒りも忘れ、突きつけられた刃物の先端をじっと見つめつづける。

どれくらいそうしていただろうか、一分か数十秒かそれとも数十分か。静寂に耳が痛くなってきた頃、青年がガブールへと向けた刃物を下げて口を開いた。

「状況を説明してやる。今度無駄口を叩いたらそのたびに命が散っていく。後2つあるが、それが尽きたらお前の番だ」
「あ……あ、あ」
「わかったか？」

首が千切れんばかりにガブールは首を縦に振った。

「まずは、最初に謝っておこう。俺の所有物にお前達が手をかけようとしたから、つい排除してしまった」
「所有……ぶつ？」
「兎獣人達の事だ。あいつ等は俺の奴隷だ」

ガブールは先程の光景を思い出す。
確かに自分達は森の付近で見かけた兎亜人を捕まえようとしていた。そしてその直後、雇っていた男達のほとんどが殺された。自分の持ち物を奪われる所だったから仕方なく排除した。そう聞こえる。

あまりに乱暴すぎる方法だ。だが、嘘を言っているようには感じられない。それが事実かもわからない。
しかし事実なら奇妙な所がある。自分はどの商人よりも一番に動いたはずだ。

「馬鹿な……他に森へ入る許可を取った者など――」

そこで口を噤んだ。

無駄口を叩くなと言われたばかりである。恐る恐る青年の顔色を伺えば、大きな目でじっとこちらを眺めるだけだった。

「それが森の中に連れてきた理由だ。少し内密な話をしたい」

人目につきそうな森の外ではなく、木々に遮られた森の中での交渉。ガブールの愚鈍な頭でも段々と理解してくる。

「俺は奴隷を集めている。俺の名は、そうだな……コレクターとでも呼べ」

目の前の青年が何者かはわからない。

だがこれだけは確実だった。真っ当な人物ではない。法を犯し、邪魔だという理由で何人もの命を刈り取る。

「お前に頼みたい事がある」

この森の領主に許可を取らない違法な進入。奴隷である兎亜人達。内密な話。

正規の取引ではない黒い商談。先程まで恐怖に抑えられていたものが、腹の奥底にあった欲望が再び湧き上がる。

「奴隷の交換をしないか？」

その提案はガブールにとって、とても惹かれる内容だった。

その後の打ち合わせは綿密に進められた。
話の内容は兎獣人とガブールがこれから持ってくる奴隷と交換する支払い方法から始まり、食料も調達してくるとようにとも、違法な取引となるため受け取りは森の外では行いたくないというのも伝えておいた。

許可を取らずに森の中へと入った事。
森の奥で兎獣人達を見つけた事。
捕らえて今は自分達の奴隷としている事。
他にも亜人が居ないか探している最中という事。
食料が乏しくなってきたので持ってくるようにという事。

など、人目につきたくない経緯を細かく話していった。

「本当に奴隷で支払うのか？　金のために危険を冒したんじゃないのか？」
「言っただろ、俺は奴隷を集めていると。人間、亜人どれでもいい。それと交換だ」

兎獣人は高く売れる。
それと他の奴隷と物々交換となるとかなりの数になりそうだった。

「しかし……そんなに奴隷を集めてどうするつもりなのだ？」
「お前は客にいつもそんな事を聞いているのか？」
「これは失礼した。ではコレクター殿、これにて商談成立と言う事で」
「ああ。護衛はこいつら達に就かせる。無駄な行動はするなよ」

「わかっておる」

ガブール達が馬に乗って森を抜けていく。蹄の音が聞こえなくなるまで見送り続け、十分に離れたのを確認し踵を返した。

「……さて、後はこいつ等の処遇だな」

捕らえたままであった傭兵達の下へと歩んでいく。一歩近づくたびに、男達の顔色が悪くなっていくのがわかった。

この男達を返してしまうと情報漏洩の危険性が増すため残ってもらった。ガブールも傭兵達に金を支払わずに済んだので、快く承諾した。

「男手は欲しい所だが……」

頭に被っていた布を取り、今まで大きく見開いていた目蓋をいつも通り眠そうな瞳へと戻す。引き締めていた頬を緩め、興味のなさそうな顔へで男達を眺めた。

人の印象は顔に注目されがちだ。

もちろん身体的な印象もあるが、彼は中肉中背、これといった特徴は無い。

変装とは言いがたいが、念のため表情を変えておいた。所詮、この世界に出回る手配書など人相書きとその人物の特徴しか載らない。

頭に布を被せ、大きい目という特徴を作るだけで印象は変わるものだ。

「それでもリスクは犯せない。悪いな」

生き残った傭兵の前に立ち、無造作にその首を跳ねていった。

死体はこのまま此処に放置しておいても、魔獣達が喰らいに来るだろう。墓に埋める事はせず、彼等が持っていた武器や防具だけ回収した。

拳を握ったり開いたりしながら帰路を辿る。
掌についてもいない液体を拭うように服に擦り合わせるが、その嫌悪感が晴れる事はなかった。

先程男達を切った感触がじわり、と粘つく。
何時になっても人を殺す行為に慣れる事はない。いや、慣れてしまったらそれはどこか大事な物が壊れてしまった時だろう。

彼等の最期の表情は直ぐに思い浮かぶ。
今も目の前で恐怖に彩られた視線を彼へと向ける。今も隣で恨み言を延々とつぶやき続ける。ずっと、ずっと、殺した者の近くで殺された者が傍に付きまとう。
昼間でも、夜中でも、寝ている最中でも。この先ずっと。

人を殺すというのはそういう事だ。
彼は一生それらと向き合っていかなければならない。
そして、彼女達も。

「ただいま」
「おっかえりー」
「疲れただろ、少し休むか？」

クーヤがログハウスへの扉を開けると、ラビとアリスが明るい笑顔で出迎えてくれた。その表情に彼は面を喰らった。

「ああ……」

クーヤを労おうと茶の支度をし、軽い食事の準備を始める。せかせかと動くその様子は少しぎこちない。そんな彼女達に目を瞑り、茶で唇を濡らした。

一息ついた後、先程の交渉内容をつらつら話していく。

食料と衣類と奴隷を持ってくるようにした事について。

奴隷商人であるガブールが普段仕入れる商品を購入し、持ってこさせる。普段と異なる行動はしないように厳重な注意をしておいた。

本音を言うと、鉱石や他にも欲しいものは多々あった。そこをぐっと堪え、なるべく普段仕入れる物のみ持ってこさせるようにした。

通常と異なる行動というのは嫌でも目に付く。

どこで足がつくか分からない。今はまだどこの誰にもオワゾがあるという事、クーヤ達がそこに住んでいる事は知られたくない。神経質すぎるぐらいが今はまだ丁度いい。目下の目的は冬を越すのが最重要なのだ。

一つの荷台には交換用の奴隷、一つの荷台には出来る限りの食料と衣服となる反物を乗せてくるようにさせた。一箇所で大量に買わず、少量づつ購入するように注意した。

名目上としては、前回は失敗したがまだ諦めていない。ハーグの森の中で助けてくれたイース達を護衛に再び行く予定、という事に

した。

イース達を護衛と伝えたが、本当の所は監視役だ。
ガブールが下手な行動を取らないように監視する役目を頼んだが、それでも不安は拭えない。

これは一種の賭けだ。
どの道、商人による物流がない限りは今年の冬を越す事は難しい。だが、ガブールが裏切る可能性もまったく無いとは言えない。

（領主に報告する可能性――は無い。この国に忠誠を誓うような奴じゃなかった。あいつにとって利点のある交渉内容だ。
他の奴隷商人へと情報を漏らす可能性――も無い。あいつの性格からすると、一人で独占したいだろう。
この交渉の裏を勘ぐられる可能性――は絶対に無い。あいつはそんなに頭の回る奴ではなかった。
イースさん達を人質にさらに交渉を持ちかける可能性――は……有るな。気をつけるように言ったが、どこか抜けている人だしなぁ。
ガブールの行動に周囲が違和感が生じる可能性――は有る。というかこれが一番有り得る。イースさん達に注意事項を叩き込んだが、どこかで生じるかもしれない）

結局こちらが不利になる点はイース達が下手を打たないか、という点に尽きる。こちらの掛け金はオワゾでの生活という大金。リスクの高い賭けにクーヤの精神は磨耗していった。
イース達の働きに期待する他ない。

「ふむ、なるほどな。それで、あの商人がオワゾに訪れたら……」
「金品奪って、森に放り出すつもりだ」

奴隷交換を行うつもりなど毛頭ない。
それがオワゾにとって一番効率のいい方法だ。リスクも少ない。再び物品を村に入れたければ、もう一度噂を流す所から始めればいい。

「ほんっと、容赦無いわねぇ」
「俺は、悪だからな」

ふん、と鼻を鳴らして二人の表情を伺う。

「だったら私達も悪ね」
「いや、それは元からだろう」
「でも悪って、なんかかっこよくない？」
「歪んだ正義を掲げるよりはましだな。いっそ清々しい」
「でしょでしょ？」

二人とも陽気な顔をしていた。だが、どこか違和感のあるその表情。その違和感の正体をクーヤは理解している。理解していなければならない。その歪んだ笑顔を浮かべる原因を作ったのは、他ならない自分なのだから。
痛々しい笑顔を浮かべる彼女達にクーヤの心が痛んだ。

「……無理するな」
「ん？　何々、どうしたの？」
「クーヤ、大丈夫か？　疲れたならまた膝枕してやるぞ」
「そうそう。あ、でもちゃんと順番決めましょ」

陽気な、陽気すぎる彼女達の仕草にクーヤはさらに胸が苦しくなる。
これから口にする事は、ただの自己満足なのかもしれない。彼女

達が覚悟を決めた事に水を差す行為なのかもしれない。

「悪にも色々ある。無差別に暴力を振るう者、理由がある者――」

これはクーヤの弱さだ。

自分で強要しておきながら、彼女達の歪んだ笑顔に耐え切れなくなった。

「悪行をしておきながら、罪を感じない者、罪を感じる者――特に」

オワゾで生活し続けるにあたって、必ず訪れるであろうその場面を彼女達に経験させた。それが間違っていたとは思っていない、後悔しているという事でもない。彼女達も決意して挑んだのだ。

「人を殺すという罪は酷く、重く、圧し掛かる。だから、無理をするな」

それでも、彼女達を苛む罪の意識を少しでも軽くしてやりたかった。

「あ……あはは。大丈夫よ、今まで散々獲物とか狩って来たんだし」

人を殺すのはそんな単純なものではない。

クーヤは知っている。

奴隷商人を捕まえるその間際、森の中に潜んでいた時に彼女達が震えていた事を。

「そうだぞ、心配しすぎだ。騎士達に魔術を放った事だってあるんだぞ」

騎士達に追われた時でさえ、彼女達はその力を主に足止めとして使っていた。落馬して死んだ者もいただろうが、逃げていた彼等にそれを確認する余裕などない。

明確に殺意をもって人を殺したのはこれが初めてとなる。

食べるためでもない、生き残るためでもない。それはかなり遠回りに巡ってそう結論付ける事が出来るかもしれないが、直接的ではない。

ただ、情報を外へ漏らさないために行った事。それはオワゾに住む者達のためと言えるかもしれない。そんな理由を掲げてみても、それでも――その手を汚したのだ。

「そうそう、心配しすぎだって」

「そう……か」

彼女達が無理に微笑んでいる事とは重々承知している。

だけれどもそれ以上クーヤは何も言えなかった。彼女達は必死に我慢しようとしている。自分達の罪を受け入れて行こうとしている。そんな彼女達の覚悟を踏みにじった自分の愚かさに、頭を掻きながら出された食事を胃の中へと押し込めた。

静寂が耳に痛い。

空になった食器を片付けようと立ち上った時、服の裾を両側から摘まれる。

「ご、ごめん。やっぱり、ちょっと」

「すまない……クーヤだって辛いのに」

服を掴む手が震えている。
食器を床に置き、座りなおして彼女達の肩を抱きしめる。それでも、震えは一向に収まる気配を見せなかった。
「俺は、お前達のそんな顔を見るほうが辛いだけだ」
自分の弱さが心底嫌になる。
強くありたい。彼女達にも強くあって欲しい。だが、この弱さは本当に切り捨てていいものかクーヤには判断しかねた。
今はただ、互いの弱さを慰めながら震えが止まるその時まで抱き合い続けるのであった。

第二十四話　奴隷商人との交渉（後書き）

「前と比べて大分変わったわね」
「感想でも此処はおかしいのでは？　と貰ったし、著者が納得いっていない所もかなりあったしな」
「この話は大幅に改編されたが、大丈夫なのか？」
「心配するな、点と点はそのままだ。そこに繋がる線が変わっただけだ」
「物語の分岐はそのまま。そこに至る過程が変わったという事ね」
「そう言う事だ」

第二十五話　オーク村　（前書き）

前回の話を改善しました。今回の話にも少し話しに関わっていますので、そちらもごらん下さい。

第二十五話　オーク村

第二十五話　オーク村

オワゾから西の森を抜け、小高い丘を越えた場所にクーヤとアリスとエリーナの三人は来ていた。

「あそこがオークの村です」

「やっと着いたか」

丘の先には集落らしきものが姿を現す。

オークの村。

エリーナから聞いた他の亜人についての情報により、この集落へと訪れる事に決めた。集落は思っていたよりも広範であった。家はまばらに建設されているが、此処に住むオーク達の数は多いだろう。

これから行うのは言うなれば勧誘だ。

兎獣人達だけでなく、他の種族もオワゾへと招きたいというクーヤの考えだ。そこに至るまでに障害は多々あるだろう。それでも知能を持つ者達が話あえばなんらかの妥協点を探し合い、勧誘とまでは行かなくとも交流を深める事は可能であると信じている。

「さて、行くか――」

覚悟を決めていざ進もうとした時、エリーナの耳がピクピクと動いた。警戒した面持ちで辺りを見回している。

「ク、クーヤ様……」
「なんだ、あちらから出向いてくれたか」

相変わらずエリーナ達兎獣人の聴覚は優秀だ。
身構えていると、クーヤとアリスもオーク達の気配を感じる事が出来るまで近づいてくるのがわかった。

林の隙間から豚の頭を持ち、筋肉質な身体を持つオーク達が集まってくる。一、二、三……数えるのも面倒だ。数が増えるごとに肌で感じる殺気が密度を増していく。オーク達に囲まれ、エリーナの身体が震え始めた。

「いよう、初めまして」

他の種族をオワゾへと招く。
それはこれから先に待ち受ける障害を打破する力となるだろう。
なんとしてでも手に入れたい。

期待を胸に、クーヤは説得を開始した。

朝方、仕事を始める前にクーヤはエリーナ達を呼び出しログハウスでこれからの予定を話し合っていた。

「しかし、海を目指して本当に大丈夫でしょうか？」
「今のままじゃ、全然駄目だな」
「いえ。私が言ってるのは今ではなくて……海を奪還出来た後の事です。そしたら今度は貴族や騎士がオワゾを襲ってきませんか？」

「だろうな」

海を獲得出来た場合、多くの資源と食料が手に入る。

皆がそれを信じ、賛成してくれている。しかし、その理由は実は後付けだ。

海を目指す。その本来の目的は仲間を増やす事にある。

海を獲得出来た場合に限らず、此処に亜人の村を作っている時点で国という障害が待ち受けている。もしこの事が知られれば、侵略してくるのは目に見えているだろう。侵略というのも語弊がある。そもそも不法に此処で生活しているのはクーヤ達なのだから、正当性はあちら側にあるのだ。

「あ、でもでも。この国の騎士達が倒せなかった海の魔獣達を倒したら、今度は私達が魔獣の代わりになるんじゃない？」

「その通りだな。海の魔獣どもの代行となるのだから、下手に手出しはしてこないんじゃないか？」

「いや、手は出してくるだろう」

ラビとアリスの言葉をばっさりとクーヤが否定する。

二人とも不満げな顔で彼が否定した理由を訊ねようとするが、先にクーヤが口を開いた。

「そもそも、何故世界は人間に支配されていると思う？」

「何故って……強いからでしょ？」

「まぁ、そうなんだが。何故人間が強いという事になってると思う？」

その質問に、明確な答えが出せる者はいなかった。皆が押し黙っ

たまま、クーヤの言葉に耳を傾ける。

「人間は、全体から見れば強いが、個々の力は最弱と言ってもいい」

それは人間と亜人の身体的能力の違い。同じ年頃、同じ職業、同じ体格である場合、人間は魔獣どころかエリーナ達兎獣人にも勝てやしない

「平均的に見ても同じだ。はっきりと言おう。人間は弱い」

「しかし、腕の立つ魔術師や騎士等も居るのは確かだぞ」

「そうだな。稀に勇者や英雄なんて呼ばれる反則な者も出てくるが……戦いを主にしない者は弱い」

御伽噺では勇者は必ず魔王に勝つ。

最初はただ少し秀でているだけの弱い者だが、修行を積み、仲間を集めて旅をする。行く先々で問題を解決し、各地に散らばった魔族達を倒していく。勇者は無敵の存在。だが、本当にそう思っているのはその御伽噺を読んだ者だけだろう。

クーヤは語る。

勇者が無敵と感じるのは、御伽噺として語られた者が最後まで生きていたからだと思わないか？　と。

本当は何人も勇者と呼ばれる者が生まれて、その途中で死んだ者も沢山居るのだろう。魔王を倒さないまま息絶える話は、ただの駄作にしかならない。人々の心に残るのは最後まで目的を達した話だけ。

人間は、他の種族に劣るというのを認めたくない。だからこそ、勇者は負ける事の無い、無敵の存在として語り継がれていく。

いくつかの世界では勇者が現れず、そのまま魔王側に滅亡されてしまった世界もあるだろう。だが、そんな物語、大衆に受けない。
途中で息絶えた者は勇者などではなく、ただの冒険者。その存在が世間に広まる事は無い。一部の場所では救ってくれた存在として語られるかもしれないが。

「勇者という規格外の存在はここまでだ。それで、何故弱い人間が世界を支配しているかという話に戻ろう」

皆がクーヤの話に耳をそばだてる。
クーヤの話は最もだった。身体能力では獣人に劣り、魔術を取っても魔女達の力の方が強力だ。知識の豊富さではエルフ等の長寿種族の方が上だろう。
言われてみると確かに不思議であった。当たり前だと思っていた優劣の矛盾。常識に対する疑念。
誰もがこの世界の矛盾について興味を示していた。

「結論から言う。人間は臆病で、狡猾で、数が多い。ただそれだけで強者という立場に立っている」

たったそれだけの事。
周りの者達が驚愕している様子が手に取るようにわかった。

「臆病だからこそ、害を与えるかもしれない存在に対して敏感になり。狡猾だからこそ、自分達よりも強い存在を陥れる。そして、数が多いからこそ、物量で……数の暴力で他の種族を支配している」

人間と亜人は別の進化を辿った者として遥か昔はそれ程人数に差がなかっただろう。もしかしたら、昔は人間が亜人の奴隷とされていた時期があるかもしれない。

亜人の身体能力に恐れた人間は自らの危機に対して、亜人の数を減らし始めた。前面から衝突してしまったら人間の方が負けるのは確実だ。

その時は、魔女と呼ばれる存在も人間と一緒になって戦ったのだろう。ある時期では神の使いとして、ある時期では勇者として祀り上げられたかもしれない。だが今は、その力を恐れた人間によって迫害されている。

「数が多いからこそ、その中から生まれる優秀な奴も多い。その優秀なやつは本来優れた身体能力を持つ亜人よりも強いんだ」

そうでなければ、人間が他の種族を虐げる事なんて出来ない。

「一つ聞いていい？　クーヤって人間嫌い？」

「いいや。人間の中にも良い奴は居るだろう？　俺が嫌いなのは、上っ面な情報に踊らされ、深く考えもしないで吼える奴だな」

そう言って、イース達やクルツの事を思い浮かべる。

イース達は魔女や亜人を受け入れてくれた。しかし、そんな人間がどれ程いる事だろう。

「話を戻そう。海を取り返した後は、俺達がこの国の脅威になる」

和解出来ればいいがな。とクーヤは笑うが、その望みは薄い事を誰もが自覚していた。

「そして臆病な人間は俺達という脅威を排除しようと動くだろう。この国だけじゃなく他の国からも増援が来るかもしれない」

魔獣は自然の災害と同じように捉えられている。
海が魔獣に占拠されていようと、他国の事情に関しては自らの国は動かない。動けば侵略行為に繋がる可能性も有るのだから。だが、自国にも害を及ぼす危険性がある場合、周りの国はこのエトワールに手を貸す恐れがある。

「……海を目指さないで、静かに生きるという選択もあります」
「そうやって逃げる事も可能だな。数ヶ月、一年くらいは穏やかに過ごせるかもしれん」

探索中、たまに冒険者らしき屍骸を見つける事もある。森の出口付近には姿を見せないようにしたが、諦めない奴隷商人もいるだろう。この森を訪れる人物は後が絶えない。
此処の領主が何時までこの森を放って置くかもわからない。前回は失敗したらしいが、再び騎士による奪還作戦が決行されるかもわからない。

そしてそのどれかにオワゾが発見された時、なにも対策を講じてなければ直ぐにこの村は侵略されてしまうだろう。逃げ場などない。森の奥へ逃げようにも今の兵力ではすぐに力尽きてしまう。

「……クーヤは何が言いたい？」
「今までの話で亜人を海の魔獣に変えてみればいい」

それはこの世界を勝ち取った者がどのような過程を辿ったかという事。

「魔獣の身体能力は人間よりも亜人よりも上で、さらにあそこのは数が多い」

動物が人へと進化する過程で失った力、それ以上に獲得できた優れた力。

「鍛えはするが、身体能力には限界がある。それ以外の力を伸ばすべきだな」

それ以外の力として、クーヤはオワゾに住む者に知識を伝えていこうと思っている。技術と知識でこれから訪れる脅威に対抗しようとの考えだ。

「そして、数を集めるべきだ」

仲間を集める事。

それは森の中の魔獣から、この国という脅威から身を守る術となる。ただ、海を奪還するだけの目的ではない。

もちろん、この森の情報も手に入れたいという思いもある。特に他の亜人達は、冬を越すのにどうしていたかという事も知りたかった。

「他の亜人にも協力出来ないか、掛け合ってみよう」

今はまだ、交渉するための材料が乏しいけれども。

今後、交渉するための道具を色々とそろえていく事を考えている。

「まぁ、そんなわけで……手始めに、オークをこの村に呼んでみようと思うが――」

「危険です」

エリーナが即答で返す。

微塵も躊躇が無い返答にクーヤは苦笑が漏れた。

「あの者達はとても好戦的で、他の種族を敵としかみておりません」
エリーナからオークの住処について聞いていた。エリーナの話からアリスが西の丘向こうに多くの気配を感じた所がその場所だと知る。他の亜人も見かけた事があると言うが、住処までは把握していないと言っていた。

「そうか……だが、この村を守る兵士達は欲しいんだがな」
現在この村を守る者はクーヤ、ラビ、アリスの三人だ。日中仕事をするにしても誰かがオワゾに居る事が前提となっている。

結界を張ってはいるが、それも唯の足止めだ。
最終的に魔獣を狩る役目をオワゾに残った者が担っていた。
奴隷商人を捕まえる計画の時もラビとアリスを殲滅役とし、その後イース達と交代したのだ。

そのイース達は今、ガブールの監視役となっている。
現在は三人がオワゾの最大の戦力であり、ただそれだけの兵力しか無いとも言えた。

「それは……そうですが」
それでもエリーナには不安が残った。

「本当に他の種族をオワゾに連れてくる事が出来るのでしょうか？」
「そうだな……エリーナは人間が一緒に来いと言って、すぐに納得できるか？」
「……いえ」

「ならばどうしたら他種族と一緒に過ごす事が出来ると思う？」

エリーナ暫し考えるが、答えは出なかった。

「……わかりません。ただ、アリス様に教えていただきました。クーヤ様は私達に安全を提供し、私達はオワゾの労力として働く。最初はそんな関係でいいと言ってくださいました」

その言葉がどれだけエリーナ達の心を軽くしただろう。

奴隷として強制的に働かされると思っていた。やりたくない仕事もさせられると考えていた。だけれども、彼等は違った。考えていた状況との差に彼女達は困惑した時もあった。彼等にどんな思惑があるのか恐怖した時もあった。

だが、一緒に過ごす時間が増えるにしたがって、とんだ杞憂を思い浮かべていたと自分を馬鹿馬鹿しく思ったものだ。

「そう、きっかけと会話が無ければ交流を深める事は難しいだろう」

主人と奴隷という関係は、ただのきっかけでしかない。

本当に必要な事は、その後の会話。言葉を交わす事で、その人物の人柄、考え方を知る事ができる。

「会話のきっかけを作るために、手土産を持って顔を出してみようじゃないか」

そうしてクーヤ、アリス、エリーナの三人でオーク村へと行く事となった。

囲まれたクーヤ達がオークと交渉を始める。交渉材料として手土産に村で育てた食料を持っていった。

「いよう、初めまして」
「ニンゲン……」
「ああ、人間だ。兎獣人も居るぞ」

ざわざわと周囲にどよめく様子が伝わってくる。
人間だけでなく、兎獣人も一緒に住んでいるという事を伝えるためにエリーナに同行してもらったが、あまり歓迎されていないのを肌で感じた。最初はそんなものだろう、とクーヤは思っているのであまり気にしていない。

重要なのはこれからの取っ掛かりだ。
交渉によってきっかけを作る。それが和解の第一歩となるだろう。

「あんた達に話したい事があるんだ。そちらは食料で困っていないか？」
「ニンゲン……テキ」
「ほらここに瑞々しい野菜がある。村で取れたんだ。旨いぞ」
「ニンゲンコロス」
「いや、別にこれで取引しようとは思ってない。ちょっとばかり仲良くなりたいとだけ思っている」
「オスハコロス」
「まぁ、人間と亜人にも色々とあるが、これを期に交流を深めたいと思ってな」
「メスハオカス」
「あー、つまり言いたい事は……」
「シネ」

「豚じゃ話にならんな」
交渉は失敗だ。
会話しようとする気すらない。
「逃げるぞ！！」
ガタガタと震えるエリーナを肩に抱え、脱兎の如くその場を逃げ出した。殿はアリスに任せる事にする。
「くそ、あの豚ども理性の欠片も無い。欲望のままに生きていやがる。実は魔獣なんじゃないか？」
「だ、だから言ったじゃないですか。オーク達は好戦的だと」
「まったくその通りだな！」
肩に抱えたエリーナが非難の声をあげる。
アリスの氷壁を抜けた矢がクーヤの傍を通り過ぎ、地面へと突き刺さる。エリーナの短い悲鳴が聞こえた。
オーク達を撒くために、遠回りをしながらオワゾへと戻る。逃走劇はその日の夕暮れまで長引くのであった。

「おかえり～……あー、結果は聞くまでも無いわね」
「お母さん大丈夫だった！？」
「ええ、大丈夫よ。クーヤ様達が守ってくれたもの」
オワゾへ帰ってくるなり、クーヤは地面に大の字に寝転んだ。ア

リスもその傍らで膝を付いて荒い息を整えている。

「はぁはぁ、くそ、あの豚ども……今度会ったら、ふぅ、丸焼きにして……やる」

「はぁ、はぁ。わ、私はあんな醜い豚……はぁ、食べたくない、ぞ」

「お風呂は沸かしておいたから、ゆっくり休みなさいな」

「あ、ありがとう」

アリスがエリーナの肩を借りて立ち上がる。その隣ではナナが心配そうに見つめていたので、アリスは大丈夫だと頭を撫でた。ヨロヨロと不安げな足取りで露店風呂へと向かって行く。

クーヤはまだ動けそうにない。身体を地面に預けたまま空気を肺へと送り込む作業に没頭している。ラビはその隣に座り、クーヤの息が整うのを待っていた。息が整ってくると、改めて質問を投げる。

「全然話聞いてくれなかった？」

「あいつ等は……駄目だ。目を見てわかった。あいつ等は他種族を敵に……いや、物としか見てねぇ」

「そう、お疲れ様」

オーク達に歩み寄る事は不可能と感じた。

交渉が上手くいかないまでも、なにか取っ掛かりが出来るかもと考えていたが、本当に甘い考えでしかなかった。他の亜人達もオーク達と同じように好戦的でない事を祈るしかない。

状況は振り出しに戻る。

仲間を増やす事も叶わず、新しい情報を手に入れる事もできなかった。

「これからどうするの？」

「……奴隷商人が戻るまで待つしかないな」

懐から葉巻を取り出す。

オーク達との交渉が上手く出来た時に吸おうと思った最後の一本。踏んだり蹴ったりの一日だった。最後の贅沢くらい味わっておかないと泣きそうだ。

口に咥えると、すかさずラビが先端に火を灯してくれる。

肺一杯に紫煙を満たしていく。口の中に紫煙を留めて葉巻の香りを味わうのが普通だが、クーヤは肺に満たす方が好きだった。

ゆっくりと紫煙を吐き出すと、疲れも一緒に吐き出てくれる気がする。

もう一度葉巻を咥え、肺に満たそうとしていると、ナナがカップを両手に持ちながら走ってくるのが見えた。

「クーヤ様〜。お水持ってきまし――きゃっ」

ナナが石に躓いた。

木製のカップが宙を踊る。疲れ果て、地面に寝そべって居るクーヤは突然の事態に動く事が叶わなかった。

水が空を舞う。カップとクーヤの顔という点にアーチ状の橋が架かる。夕日の光にキラキラと光っていて綺麗だ。

カップを額で受け取り、クーヤはぼんやりと広い空を見上げる。夕暮れの空はどこか寂しさを覚える色をしていた。

「……ナナ、お前の属性は清純武道派だ。そこにどじっ子を加える

んじゃない」
「ご、ごめんなさい！」

散々な一日だった。
明日は良い事が起こる事を願おう。そうしなければ挫けてしまいそうになる。

最後の一本が水浸しになりクーヤは本気で泣きそうになるのであった。

第二十五話　オーク村　（後書き）

「少しくらい話を聞いてくれてもいいのにね。頭にくるわ」
「私も怒りを感じている。今度会ったら氷付け確定だ」
「俺の暗黒面が姿を現しそうだ」
「えっと……なんて言うか、落ち込んじゃ駄目よ」
「気をしっかり持つんだぞ。自棄になっては駄目だ」
「慰めるな、よけい惨めになる」

第二十六話　森の中の即視感

第二十六話　森の中の既視感

馬蹄が雑草に覆われた地面を踏みしめる。
数は四頭。
うち二頭はとても重々しい足取りだ。太い馬脚が筋肉を滾らせて一歩、一歩、力強く進んでいく。一歩進むたび、荷台の車輪がギシリと音を立てて回る。一つの荷台からは食欲をそそる香りが漂い、檻に囲われたもう一つの荷台からはひどい異臭がした。

「しかし、本当にこの森の中で生活しているのか。騎士達が諦めたというのに」

騎士達が進行を諦めた場所で生活していられる事が、ガブールには信じられなかった。だが、疑っているわけでは無い。三流とは言え、集めた傭兵達を一瞬で殲滅する力を見せ付けられたのだ。

「前提条件が違う、とあいつは言ってたなぁ」
「どういう事だ？」
「騎士達は海を目指し、あいつは森の中で生活する事を目標にしたって事さ」

何故、騎士達が手痛い目にあったハーグの森で住む事が可能なのか。その事についてイース達はクーヤに問いかけた事がある。
それに対するクーヤの回答は、前提条件がそれぞれ違う、と言っていた。

騎士達が弱いというわけではない。クーヤ達が強すぎるというわけでもない。
騎士達は海を取り返すために進行した。しかし、行軍による進行速度、多くの魔獣の妨害によりその速度はとても遅いだろう。
そして、日数がかかれば大勢の食料が必要になる。しかし、この森で取れるのは毒があるものばかり。それを食べ、動けなくなった者や、息絶える者がいただろう。そうして徐々に数を減らしていき、ついに進行を諦めた。

言うなれば山登りである。
山の頂上を目的としたか、山の中腹を目的の場所と定めたか。クーヤはハーグの森を先の尖った険しい山だ、と例えた。山頂へと近づけば近づくほど困難になって行き、十分な装備が無ければ斜面をそのまま転げ落ちてしまう。

オワゾの場所は森の出口に近いわけでもなく、また海側に近いわけでもない。

条件の違いとは、海を目指すために森を通過点と考えていたという事と、その通過点を目的の場所と定めたかの違いによる。

「と言って、この辺りも安全というわけじゃないっすけどね」
「ですね……ほら、早速きた」
「ガブール、下がってろよ」
「わかっておる。お前達の力は信用してる」

荷馬車を囲んで歩いていた二頭の馬が停止し、イースは荷台を引いた馬から降りて臨戦態勢をとった。イースとショルが前衛、ウィムが後衛。慣れ親しんだ陣形だ。だが、それぞれの戦法が今では少し異なっていた。

三人が顔を見合わせる。一度だけ頷いた後、それぞれの役割をこなすために散っていく。

クーヤに指導を受けた日の事を、今でも鮮明に覚えている。

「はぁ……俺に鍛えて欲しい、と」

クーヤとミリィセが手合わせをした次の日、イース達はクーヤに手ほどきして欲しいと頼み込んだ。

昨夜の一戦は凄まじいとしか言い表せない衝撃を感じた。戦いに身を置く彼等にとって、その立ち回りを演じた者に指導を請うのは至極当たり前の事であった。

「言っとくが、俺はそんなに強くないぞ。イースさん達のが強いんじゃないか？」

「それは嫌味か？　皮肉か？　ミリィセ隊長に勝ったお前が口にしていい言葉じゃないぞ」

「あれは単なるだまし討ちみたいなもんなんだが……」

クーヤの言っている事は事実であった。

ラビとアリスに助けられた事のある彼等だが、決して弱いというわけではない。あの時はショルが毒に犯されていた為、撤退している最中の出来事だった。

まともに戦えば自分よりも力量の高い者など、腐るほど居るだろうとクーヤは理解している。そう、まともに戦えば。

「あんまり時間は無いんだが……」
「そこを何とか。な、頼む！　ちょこっと教えてくれるだけでいいんだ」
世話になっているイース達の頼みに、無為に断る事が出来なかった。
彼等の力量は理解している。彼等の腕が立つ事も、そして欠点がある事も。少し指摘すれば彼等の力はさらに伸びるかもしれない。基本はすでに出来上がっているのだから。
そしてそれは、クーヤの利益へと繋がる可能性を秘めている。
「……わかった。ちょっとだけ、な」
「そうか、助かる」
「まずは組み手からだな――」

イースが馬車一行の前にゆっくりと歩み、腰から剣を抜いて構える。
草葉の影からワイルドウルフという狼型の魔獣が飛び出してきた。イースを翻弄させるように左へ、右へと飛び交い近づいてくる。イースは構えたまま、じっと魔獣の動きを観察した。
クーヤの言葉を思い出す。
『イースさんの欠点は戦況が不利になると、不用意に飛び掛って力で押し切ろうとする所だ』
『確かにそうなんだが……俺はどうも小手先の技術が苦手でな』
『細かい技術で戦況を乗り切ろうとしなくていい。そうだな、例えるなら大木か――』

じっと待つ。
長剣を肩に担ぐように構え、ただ相手が来るのを待つ。ワイルドウルフの数は４匹。それぞれがバラバラに動き回り、獲物の喉を食いちぎろうとやってくる。それぞれの動きを一つ一つ追わず、ただ視界に映る景色を広く見る。

『イースさんは腕力がある。そしてそれ以上の長所は、目が良い所だ』

クーヤは言った。
矢や魔術のような遠距離からの攻撃を除いて、多対一の場合の攻撃方法など限られる。力で押し切ろうとすれば必要の無い筋肉まで強張り逆に力が伝わらない、小手先の技術が苦手ならば相手が来るまで待てばいい、と。

ワイルドウルフ達がそれぞれ左右に身体を揺らし、イースへと向かってくる。飛び掛って先手を打とうと焦る自分の心を押さえ込み、ただじっくりと力を溜める。

イースから数歩離れた場所から、魔獣達が地を蹴って飛び掛った。
右斜めから一匹、左斜めから一匹、前方から2匹。前方の一匹は高く跳躍し、その牙はイースの首に狙いを定めた。

「うおりゃ！」

限界まで引き絞った弓の如く、肩に担いだ長剣が弾かれる。
横薙ぎに振るわれた剣が、両足と腹部を喰らいつこうとしたワイルドウルフの命を絶つ。
高く跳躍した分、他の3匹よりも遅れた魔獣が牙を剥いてやってくる。

剣を振り払ったまま上体を軽くのけ反らし、右足を前に突き出した。蹴りとも言えないその攻撃。だが、全速力で突進してきた魔獣は、大木（イース）との衝突に鼻から血を噴出しながら地に落ちた。

「手先は不器用だが、足は出るんだよ」

すかさず長剣の切っ先を魔獣の身体へ押し込める。短い鳴き声と共にワイルドウルフは事切れた。

まさに一閃。一振りで3匹の魔獣を仕留めるた。今までのイースなら跳躍した魔獣に気を取られ、他の3匹に傷を負わせられながらもその一匹を仕留めていただろう。

じっと待ち、相手の様子を伺う戦法はイースにこれ以上ない手応えを感じさせた。

「おっしゃぁ！　次来いや！」

イースが吼えたその頭上。

木々の枝にトロルモンキー達は居た。イースが前方に注意を向けている隙を突こうと、身を屈め頭上からの強襲を試みる。

「いよっす、お猿ちゃん達」

今にも飛び出そうとしていると、その隣で声をかけられた。

魔獣達が気づかぬ間に木を登り、ショルが隣へとやってきていた。

驚いた魔獣達が一斉にその場を離れると、ショルはその中の一匹を追いかける。

今までは機動力を生かして走り回り、手傷を負わせて弱らせていく戦法であった。間違った戦い方では無い、とクーヤは語った。だが敵が多数いる場合、一つの戦闘に時間をかけ過ぎると不利になるのは目に見えている。

『ショルさんの欠点は攻撃力に乏しい所だな』
『……それは分かってるっす。でもイースさんほど体格に恵まれてないっす』
『だが身軽という持ち味がある。自分の居る空間を平面ではなく、立体的に使った方がその力を伸ばせるだろう』
『立体的って、一体どうやるんすか？』
『そうだな、とりあえず空を飛んでみようか』
『へ？』
『アリス、ショルさんの足元に柱を出してくれ。出来るだけ高くな』
『わかった』
『えっ？　ちょ……まっ――』

枝から飛び降りたショルが手にした短剣を緩やかに、力強く握る。追いかけていたトロルモンキーが別の枝に着地した所に、体重と重力を乗せた一撃が魔獣の背中へと突き刺さった。深々と刺さる刃にトロルモンキーの身体は痙攣し、肉の塊となったモノが枝から落ちていく。

次の獲物に狙いを定め、着地した枝から飛び出す。一匹を追っていると、上方から魔獣がショルへと飛び掛っかってきた。標的を変更し、枝を利用して方向を変える。

「無理っすよ。だてに空へ飛ばされてないっす」

重心の把握、力の伝え方、姿勢の制御。腕のみで短剣を扱ってい

た頃とは違い、クーヤに力を乗せる方法を教わった。
滑空の最中、クーヤの言葉を思い出す。
『筋力が無いなら、別の力を使えばいい』
身を屈め、身体を丸くし回転を生み出した。
成人男性の体重は軽くとも５０ｋｇはある。その重量へ回転による遠心力が加われば破壊力は数倍に達する。
ラビとアリスには何度も空へと飛ばされた。
今ではもう慣れ親しんだ空間だ。体勢とタイミングを合わせ、手にした短剣を魔獣の胸へと狙いを定める。
ズドンと突き刺さる重々しい音が空中で響く。
「俺っちに空中戦じゃ勝てないっすよ」
トロルモンキーを足蹴にし、突き刺さった短剣を引き抜きながらショルはにやっと笑った。

イースとショルが前衛の役割を全うしている最中、ウィムは苛立ちを募らせていた。
イースに集(たか)ろうとする魔獣達に下級魔術で牽制したり、ショルが地面に着地しようとする時に風を上方へ吹かせ衝撃を緩和させたり、サポートに徹している。
だがその内情は、魔獣達を風術で切り刻みたくてしかたなかった。

『ウィムさんは風の魔術を得意としているが、それを攻撃魔術主体に使っている所が欠点だな。魔術師というのは本来補佐の役目だ』
『ですが、攻撃魔術が戦いの勝敗を決める事もありますよ』
『その通りだ。だが、中級以上の魔術というのは大味すぎる魔術でもある。タイミングが重要だ。最初は下級魔術で相手を翻弄し、此処はというタイミングで中級魔術を撃った方がいい』

今まではそれぞれがほぼ個別に敵と対峙していた。互いのサポートも忘れない悪くない連携だったが、彼等の長所がいまいち生かしきれていないようにクーヤは感じたのだ。

イースとショルが前衛、ウィムが後衛。今でもその陣形は変わりない。だが、その役割は微妙に変化していた。
突進するだけだったイースが、敵をじっと待ち囮の役目を行う。走り回るだけだったショルが、目的を持って敵を追いたてる。ただ獲物を切り刻んでいたウィムが、全体の様子を把握する。そのウィムが長い詠唱を始めた。

「風よ、風よ。我の言葉に従い、その身を研ぎ澄ませ。疾風の刃となりて、切り刻め！」

そしてイースに抱えきれない数が集まった時――。

「ウィム！　頼んだぞ！」

集まってきた魔獣の群れ。その場からイースは飛びのき、ショルも攻撃範囲から飛び去ったのを確認する。

『せっかくの中級だ。敵を集めて使わないと損だろ』

ウィムの手から研ぎ澄まされた刃のような風が生み出される。
荒れ狂う暴風のようなその魔術は、群がった魔獣の群れを飲み込んでいく。暴風に巻き込まれた魔獣達は幾千もの刃に切り刻まれるように、その身体に傷を負っていった。腕を切り落とされる者、首を切られる者、集めた魔獣のほとんどが地面に身を沈めている。

積もり積もった苛立ち。それを吐き出す開放感。
えも言われぬ快感に、ウィムはゾクゾクと身を震わせた。

「はっはっはぁ！　ざまぁ見ろくそどもが！」
「相変わらずウィムは戦闘だと人格変わるっすね」
「まったくだな」

魔獣達を一通り殲滅した後、一行は再びオワゾへと向かう。

「いやしかし、見事な腕前だな」
「まぁな。くー……コレクターの指導によるがな」

つい本名を呟きそうになってハッとする。
森の中に自分達以外の人影など見当たらないが、ここでガブールがクーヤの本名を知り逃げ出そうとするのは遠慮してもらいたい。

隣を見ればウィムが魔術を使ってクーヤ達に帰ってきた事を伝えていた。

「そうかそうか。そんなお前達を束ねるコレクター殿は、さぞかし強いのだろうな」
「あいつの強さは一言じゃ語れないな」

クーヤと手合わせして分かった事がある。実際それほど突出して強くはないという事が。
外見から剣士の体格では無い事はわかっていたが、対峙してみると強者に備わる覇気のようなものが何も伝わって来なかった。ミリィセに勝ったのは事実だったのかと、自分の記憶を疑いたくなる程だ。

自分でも勝てそうな相手に遅れを取った事は無い。それなりに経験を積んできた自負がイースにはある。何度かイースが勝てそうな場面もあった。慢心していたとか、クーヤが手を抜いているといった様子は感じられない。

だが結局――。

「あいつは言っていた――」

一度も勝てなかった。
それはショルやウィムも同じだ。

「もし俺が強いと感じるのなら、それだけ俺が弱い人間だという事だ。とな」
「よくわからんな」
「俺もだ」

クーヤの強さはよくわからなかった。

他愛無い会話をしながら目的地へと向かう。
川沿いの開かれた場所をひたすら進み、やがて川の横に広く切り開かれた道を見つける。その道を曲がりオワゾへと続く道を進んだ途中に、彼女達は居た。

視線の先に兎獣人達が集まっている。そしてその付近には紅い服の女性と蒼い服の女性の姿が伺える。その姿にガブールは見覚えがあった。

「な、まさか――お、お前達は……」

「いよう、久しぶり」

どこかやる気の無い眠そうな目をした青年がガブールの隣に姿を現す。音も無く。気配も無く。そこに居るのが当たり前のような仕草に、ガブールは何が起きたのかと頭の中は疑問符で埋め尽くされた。

「約束しちまったんだよな。仇を目の前にしたら思い出せと」

青年が何を言っているのかガブールには解らなかった。

ただ、その目をみて恐怖する。虫でも見るような割り切ったその瞳。目の前の命を切り捨てたその瞳。何の感情も無いその瞳。

「あんたには別の用があるんだ。ご同行願おうか」

森の中で一陣の風が吹く。

ざわざわと葉が擦れる音が鳴り止むと、そこは静寂に包まれた。

一旦立ち止まった馬が再び歩き出す。

アリスが人の居なくなった御者席へと乗り込んで馬車を走らせる。

兎獣人達の姿は無く、４頭の馬はオワゾへと向かって行った。

森の中から悲鳴が聞こえるような気がした。

エリーナ達が足を引きずるような重い足取りで新しく出来た自分の家へと帰っていく。
意気消沈した雰囲気が漂う。それはエリーナと共にオワゾへと続く道の途中で奴隷商人を待っていた者も同じだ。住み慣れてきた長屋の扉を開けて鉛のように重い身体を中に滑り込ませる。

「あ、お母さんお帰り」
「ナナ……」

自分の娘の姿を見つけ、エリーナは力強く抱きしめた。

「お母さん……どうしたの？」
「ナナ、ナナ……」
「泣いてるの？」
「……クーヤ様って、嘘吐きね」

そうかも、と頷きながらナナがはにかんだ。母の背中を摩りながら、でも――と言葉を紡ぐ。

「――優しいよ」
「そうね」

嗚咽が何時までも続く。
再び娘を抱きしめる事が出来た事に感謝して、自分の中の恨みが晴れたと思う事が出来た事に感謝して、クーヤの優しさに感謝して。
自分の娘を抱きながら、何時までも嗚咽は続いていた。

第二十六話　森の中の即視感（後書き）

「俺達の活躍がついに出たぞ！」
「まぁ、ただの魔獣退治ですけどね」
「俺っち達がちゃんとハーグを抜けられる事を説明したかったらしいっす」
「しかし……戦闘で攻撃魔術を抑えようとするのには苛立ちが募ります」
「昔は全員押せ押せの戦法だったなぁ」
「戦闘は血がたぎるっす。ウィムは変わりすぎっすけどね」
「ですが最近、焦らされる事にゾクゾクしている自分がいます」
「ウィム……お前はもう、手遅れだ」

第二十七話　邂逅

第二十七話　カイコウ

クーヤがログハウスへと戻ってくると、家の前には一台の馬車が止まっている。奴隷達を押し詰めた檻はその場に無く、傍にはアリスとイース達がクーヤの帰りを待っていた。

「イースさん、ショルさん、ウィムさんお疲れ」
「おう。どうだ？　お前の要望どおりの物を運んできたぜ」

食料と布で一杯になった荷台を掌で乱暴に叩く。
果物と野菜ばかりの生活だったラビとアリスの目が飢えた獣のようにギラギラと怪しく光っていた。

「肉は！？　お肉はあるの！？」
「小麦はあるのか？　わ、私はパンが食べたいのだが……」
「ああ、両方ともちゃんとあるぜ」
「やたーー！　にく～～～！」

両手を挙げて歓声を上げるラビの横でアリスが「……サンドイッチ」と嬉しそうにつぶやいている。そんな二人を眺めるクーヤの表情も何処と無く嬉しそうだ。

「そんで……奴隷達は？」

キョロキョロと辺りを伺うが、もう一つの目的である奴隷達が見当たらない。

「奴隷達の馬車は露天風呂の近くに止めておいたぞ。どうせ先に身体を流させるつもりだろ」
「さすがアリス、気が利くな」

ガブールから奪った枷の鍵をラビに投げ渡す。

「ラビは奴隷達を風呂に入れてくれ」
「はいよー……って、男女は分けさせるわよね？」
「あー、そうか。もう一つ風呂作らなくちゃ不味いな。いや、仕切りを作ればいいか……」

今まで女性と子供ばかりの兎獣人達のみであったが、これから男性も増えていくだろう。男女別にしなければ問題が出てくる。露店風呂の改造を考えながらラビへ指示を飛ばした。

「まずは女性優先で。男の方は俺がやるわ」
「わかった。やっとくわよ」
「湯船につかる前に身体洗うように言えよ」
「それもわかってるって」

ラビが露天風呂へと駆けていく。
濡れた布で垢や泥を落とし、湯船に浸かるだけでも汚れや臭いは消えるだろう。石鹸の数は少ないためあまり用いられていない。
材料を手に入れる事が出来れば在庫を増やしておきたい所だが、現在は余裕がない。

「アリス冷蔵庫の具合はどうだ？」
「それぞれの部屋の温度調節に手間取ったが、今は大丈夫だ。すぐ使えるぞ」

イース達が帰ってくる前に冷蔵庫と呼ばれる食料庫を建てた。構造は単純だ。食料庫としての倉を建て、その床に低温維持用の魔方陣を描いたものだ。倉の中は何部屋かに区切られており、それぞれの部屋で温度調節が異なっている。管理はアリスに任せた。

「魔力の残り残量は大丈夫か？」

「冷蔵庫の管理と結界を張るとなると結構消費する。派手な戦闘はあまり出来ないだろうな」

「そうか。そろそろ結界に頼らず、防壁を作って行きたい所だ」

奴隷の中に兵士か魔術師の素質を持つ者が居ればいいが。例え居なくとも村に防壁を建てるのは前から考えている。人が増えれば作業は順調に進むだろう。

「どうするかは奴隷を見てから決める事とする。アリスは食料を冷蔵庫へ保管しておいてくれ」

「了解した」

アリスが兎獣人達に声をかけ、荷台詰まれた品を下ろすよう指示し始める。新しく手に入った食料に、兎獣人達は嬉々として作業を進めていった。

「待たせて悪いな」

「気にすんな」

「さて、報酬の話だが……金じゃなくて本当にいいのか？」

「ああ。こいつも長年使ってきたが……そろそろ限界だ」

イースは腰に差した長剣の柄を愛おしげに撫でた。男臭い笑みを浮かべながら、長い間日々を共にした相棒を労わる。

長年使い続けた剣。愛着もある、命を助けてくれた事もある。それでも戦いに用いるには不安になってきた。別れの時だ。

「そうか。イースさん達に合った物を作れるよう、気合を入れる」
「どんな物が出来るか楽しみです」
「頼むっすよ」
「任せとけ」
「んじゃ、後は報告だな」

イース達から外の情報が伝えられる。
国の様子、近隣の村の様子。特にガブールについては詳しく聞くように頼んでおいた。彼自身というよりも、ガブールが所属する同業組合についてだ。
奴隷商人の組合に関する情報を頭の中に叩き込む。そんな事聞いてどうするつもりだとイースは疑問に思うが、クーヤは真剣な表情で話を聞き続けた。

「――とまぁ、報告は以上だ」
「ああ、大体理解出来た。イースさんありがとう」

思っていたよりも細かい内容にクーヤが感謝を述べる。
情報を伝え終えると、イースが何かを思い出したように手を叩いた。

「ああ、そうそう。クーヤには個人的な品があったんだ」

イースは荷物の中を漁り始める。
目的の物が見つかったのか、袋から布に包まれた物をクーヤへと手渡した。

「これは？」
「葉巻だ。おっと、こいつは金を貰うぞ。結構高かったからな」
受け取ったクーヤの手が震える。
布を開くと、そこには数こそ少ないものの葉巻は確かにあった。クーヤが今まで用いていた物よりも太い。市販されているものであろう。この程度の量ならば周りが違和感を生じるという可能性も無い。
「大量に買うと足が着くかもしれないから土産程度の量で悪いが……」
「……イースさん……」
「どうした？」
喜びに満ちた顔でイースを拝める。野暮ったい中年男の背に後光が輝いているような気がした。
「あんた、神か？」
「もっと崇めろ」
胸を反らしふんぞり返るイースに、クーヤは頭を低くして彼の偉業を称える。
クーヤが平伏するという珍しい光景に、周りの者は何事かと目を丸くするばかりであった。
ご満悦の表情でクーヤはイース達を連れて露天風呂の場所を訪れ

た。

そこには子供からイースと同年代と思わしき者達がひしめいている。

鉄の首輪をはめられ、手枷、足枷をされた男性の奴隷達だ。人間と亜人が混在しているが、それらは全て同じように感じた。皆が皆、同じ目をしている。

感情の無い人形のような瞳。無気力、無感情、恐怖、諦め。痛みと暴力と死の影が常時隣にいた者達の瞳。垢にまみれ傷を負った者も多かった。

そんな彼等に同情するでもなく、憐れむでもなく、クーヤは悪くない状態だと評価した。

クーヤが何よりも不安だったのは、人間と亜人の関係だ。

人間は亜人を一方的に嫌っている。そして亜人の方も人間に対して良い感情は持っていない。だがそれは、普通に生活している者達の感情だ。このように感情をそぎ落とされ、反抗の意思さえ取り払われた者達にはそんな気力すらない。

クーヤが奴隷を望んだのにはそれなりに理由がある。

仲間を集めようと探索してみたが、他の亜人を見つけられなかった事が一つ。亜人が大勢移動する時、奴隷という商品であれば気づかれ難いというのが一つ。奴隷という境遇から開放する事で好印象を与える事が一つ。主人という優位な関係に立つ事で、情報を引き出そうとするのが一つ。

なにより同じ扱いを受けてきた奴隷同士ならば、亜人、人間という苦手意識は一般的な者よりも少ないだろうというのが一番の理由だ。

「クーヤ様、ラビ様からこれを預かりましたよ」
「ん、ありがと」

兎獣人から奴隷の鍵を受け取ると、意気消沈した者達の前に立つ。女性陣はまだ入浴に時間がかかりそうだ。先に男性の奴隷に状況を軽く説明するのも悪くないだろうと考える。

「初めまして、同じ扱いを受けた奴隷達よ。俺はこの村の代表、名をクーヤと言う。お前達の主人であるガブールは俺が殺した」

ざわざわと周囲に動揺が走る。

「俺が、殺した。つまりお前達の所有権は今、俺にある。どう扱おうがこちらの自由という事だ」

主人が交代したという情報だけを伝える。お前達は自由になった、とは言わなかった。事実、自由になったとは言いがたい。今出来る事はいくつかの制約を外すだけだ。

人間の奴隷を此処から逃がす気などまったく無かった。例え此処から近い場所に家があろうとオワゾの情報が漏れる危険性が有る。彼等には此処で生活する事を強制させるつもりだ。

亜人の方は逃がしてあげたいと思うが、折角手に入れた奴隷を只で逃がす余裕などクーヤには無い。存分にオワゾの役に立った後は好きにさせる予定だ。

「此処はハーグの森に作ったオワゾという村だ」

そこで一旦言葉を区切り、奴隷達の目を一人一人伺っていった。

「ハーグ……」

この場所が何処であるかを聞いた奴隷達の一部が、その生気を失った目の色を変える。絶望色の中に僅かに生まれた希望の色。その変化を敏感に察知したクーヤは唇端を微かに上げた。その色は彼にとっても待ち望んだ希望なのだ。

「今からお前達の枷を外していくが、逃げないほうが身のためだ。死ぬ事になる」

一人一人枷を外していく。

クーヤの予想に反して、枷を解いた途端飛び掛って来る者や、逃げ出そうとする者は居なかった。長い間自分を繋いでいた鎖があっさりと外れた箇所を唖然と見つめている。

ガブールを殺したと伝えられたばかりで逃走という危険を冒す事に萎縮しているのか、此処から逃げ出すとして何処へ向かうえばいいのかが分からないのか、ただ単純に主人の命令に反する行動を取らないだけか。

だが一部には虎視眈々と逃走の機会をうかがっている者もいるだろう。胸の中に燻った恨みが再燃する場合も考えられる。しかしそれこそがクーヤの求めるモノだ。

感情の無い人形など必要ない、言う事を聞くだけの奴隷も意味が無い。例えそれが負の感情であろうと、相手が口を閉ざしたままでは関係は何も進まない。

クーヤの望む物は対話だ。

そしてそれは関係改善のきっかけとなる。彼が亜人の奴隷達に望む物は、情報、労力、そして手土産という役割だ。

「さて、次の指示だが。女性陣が入浴を終えたら次はお前達の番だ。それまでは好きにしろ」

目の前の男は何を言い出したのか。その言葉を奴隷達が理解する前に、クーヤは近くにあった大きめの石に腰をかけた。

「自由にしろと言っているんだ。だが、外に逃げ出そうとするなよ」

クーヤが早速イースから買った葉巻を取り出した。使っていたものよりも太いので半分に切断し、切り口の反対側に火をつける。イース達も自由にしろと言った途端、風呂場を覗こうと囲われた木の壁を必死に登ろうとしていた。本当に欲望に忠実な行動にクーヤは呆れるばかりである。

監視とは言えない彼等の態度。今まで行動を制限されてきた者達にとって、久々に訪れた自由。だがそれでも、ほとんどの者が立ち尽くしたままどうすればいいのか迷っていた。

反抗の意思が無いのは此処で生活するには悪くない状態だが、あまりに無気力すぎるのも考え物である。

「うわっち！　熱っ、あつ！」

動こうとしない奴隷達に紫煙を伴うため息を吐き出していると、囲いを登り上げたイースが火達磨になっていた。覗きがばれて、ラビに折檻されたのだろう。

悲鳴を聞いて一斉にそちらを向く。その中で一人、一団の中から飛び出した。

「なんだ、元気な奴もいるじゃないか」

男は一直線に外へと走る。

顔はイース達の方を向けたまま、奴隷達の様子を横目で観察していたクーヤは逃げ出した者に逸早く気づき追いかけた。

傷を負っているのか、長い奴隷生活で疲労しているのか走る速度は遅い。必死に逃げる男にクーヤは直ぐに追いついて立ちふさがった。立ち止まったその男がうろたえているのが分かる。

「逃げ出すなと忠告したよな？」

「ど、どいてくれ！」

「外に出れば死ぬと言っただろ」

「う、うう……がああああ！」

叫び声と共にその者は拳を握り締めた。

周りの者が目の前の光景に愕然とする。男の肉体が急激に膨れ上がってく。

筋肉が脈動する。

腕の筋肉が隆起し袖がはちきれんばかりに張り詰める。皮膚からは体毛が異常に伸びていき、逞しい筋肉を隠していった。その変化は全身に及んで行く。足が、腹が、胸が、顔が。膨れ上がり、体毛で覆われる。

元々犬のような外見を残していた亜人が二頭身の狼へと姿を変えていった。

「ほう、変化か」

驚愕に動けない奴隷達やイース達とは裏腹に、クーヤは落ち着いたまま男との距離をつめる。

「変形じゃないな。魔力も少ないから幻術でもない。膨張だな」
「邪魔するな！　殺すぞ」
「俺は弱いんだ。お手柔らかにな」

喉の奥を鳴らして威嚇する。
目は血走り、むき出しになった歯を軋ませる。太く尖った犬歯が震えた。

「どけぇ！！」
「やってみろ」

身を屈め、次の瞬間には地を蹴った。
野太い指に生える鋭い爪が獲物を狙う。狩人が駆ける。巨体が空気の壁を押し広げ、一直線にやってくる。数歩あった間が消える。鋭い爪がクーヤの胸元を狙った。クーヤは葉巻を口に咥えながらその様子をじっと見る。

「速い……が、直線じゃ駄目だ」

左手を前に突き出し、手の甲で迫り来る腕を軽く退かす。そのまま左手を捻り、男の手首を掴んで下に引き寄せる。身体を反転させ潜り込み、右手で男の二の腕を掴んだ。左手を押し出し、右手を引いて腕を固定する。

「歯ぁ食いしばれ」

男の腕を極めたまま、背中を男の腹へと押し付けて腰で持ち上げる。お辞儀をすると、クーヤの二周りは大きいその巨体が空中で倒立する。手首は掴んだまま、二の腕を掴んでいた右手を離した。

「雷が落ちるぞ」

落雷のような地響きが鳴る。

男の全身に今まで感じた事の無い衝撃が走った。肺が押しつぶされ、中に溜まっていた空気が吐き尽くされる。

「がっ――は」

視界が点滅した。

内臓が仰天し今にも吐き出しそうだ。背中から登ってくる痛みで脳が混乱する。体が痙攣し、膨れ上がった筋肉が萎んでいく。身体を覆っていた体毛が死滅するように抜け落ち消える。男は指一つ動かせそうになかった。

「暫く痛みは引かないだろう。逃げ出そうとした罰だ。治るまでそのままで居るんだな」

「ぐっ、が……お、俺を殺すの、か？」

喋る事もままならないと思っていたが、意外と頑丈なようだ。兵士の資質があると評価を下す。早くも兵士予定の人材が見つかり、無表情ながらもクーヤは歓喜した。

「殺すなら、殺せ。もう奴隷なぞ真っ平だ」

「殺す？　誰が？　何故？」

「言ったではないか……逃げ出そうとすれば死ぬ、と」

「そりゃそうだ。俺程度に足止めされる奴が森の魔獣達相手にどうして生きられる？」

「な、に」

手負いの獣は危険だが、衰弱した獣なら捕らえる事は難しくない。この者も万全の体勢ならば強いだろうと感じていた。だが、弱りきったその身体では自分の身を守る事すら出来ない。

「お前達にも言っておく。此処から逃げ出したいなら力を蓄えろ、腕を磨け。この村の中はある程度安全だが、外には魔獣がひしめいている。半端な腕じゃ生き残れない」

今の状態ではこのオワゾから出たとしても魔獣に食われるのがオチだ。

「――だが、この森の中に帰る場所があるのなら送ってやろう。まぁ、移動するための体力くらいは欲しいがな」

「な……か、帰れるの、か」

「……ほう」

ちらりと仰向けに横たわる男を見た。クーヤの唇の端があがり、にやりと笑う。

「お前の故郷はこのハーグの森か？」

男はまだ起き上がれず、身体を震わせながらこくりと頷いた。

「それは久しぶりに良い情報だな。お前の名は？」

「……シルバ」

「シルバ。お前を故郷に帰す事を約束しよう。お前達の中にもハーグに故郷があるやつは俺に言え、そこに戻そう」

立ち尽くす奴隷達へと視線を向け、ここに故郷へ帰す事を宣言する。限定的な帰郷の約束。それでも微かな希望を灯した者が幾人か

うかがえる。

「俺は、約束は守る方だ」

そう言って真剣な眼差しを奴隷達へと向けた。

それがクーヤにとって利となる事を彼等はまだわからない。

約束の取り付けが終わると、イース達はクーヤの元へと集まってくる。先程目の当たりにした光景に興奮気味に話しかけてきた。

「いやぁ、驚きましたね。亜人の中に変化する者が居ると聞いてはいましたが」

「吃驚したっすよ。こう、ぶわわ～っと変わっちゃって」

「膨張は変化の中で最も一般的だがな」

「膨張、とは？」

「変化の種類さ。膨張、幻術、変形がある」

変化には三種類に分類されるというのが彼の考えだ。

一つ目が筋肉の膨張と回復。

二つ目が自己暗示と周囲への幻覚。

そして変化の中でも珍しい三つ目が――。

「ちょ、ちょっとこらー！　待ちなさい！」

露天風呂の中から慌しいラビの声が聞こえてくる。
その扉から二人の女性が飛び出してきた。猫っぽい少女と、同じように猫顔の女性が走り難そうに外へと向かっていく。遅れて飛び出したラビは二人の女性に追いつき逃走を遮る。

「待ちなさいったら！」
「どいて、どいて下さい！」
「別に危害を加えるつもりは無いわよ」
「くっ、母さん下がって」

猫っぽい少女が手に力を込めると、筋肉の収縮により指の中に収めていた爪が飛び出してくる。伸びた爪と少女の鋭い目つきがラビを睨んだ。

「そう威嚇しないの。本当に悪いよう……に、は……」

その爪の先端がやがて交わり、溶け合う。
合わさった爪は次々と連鎖し、指までもが混ざり合う。溶け合い、交じり合い、体積も質感も周囲の想像も無視したまま、鋭い一本の刃物へと形を変える。
変化は留まる事を知らず、ついに腕までもが金属光沢が煌めく刃となっていった。

「なん――だ、ありゃ。あれも、変化……か？」
「あれは……変形だな。俺も見たのは一度だけだ――」

変形は変化の中でも特異なものである。それは類稀なる力で、とても有用で、世界の法則も捻じ曲げ、だけれども科学の範疇で、応用に限りがない錬金術の領域。
彼でも今まで一度しか見た事が無いその力。

腕を刃物へと変形させた少女がその先端をラビへと向けていた。
クーヤは歩き出し、諍いの場所へと向かっていく。

「どかないというのなら、排除します」
「えっ……ちょっ――まっ」
「いきます」
「はい、そこまで」

掌を打ち合う音がその場に満ちた空気を掃った。空気が破裂するような音に少女の耳がビクリと震える。音の響いた方向へと少女が腕を伸ばす。

正面から見る少女の顔はやはり猫っぽい。
猫亜人、いやエリーナの情報によるなら猫獣人と呼ばれる種族だろう。隣にいた猫顔の女性がクーヤの顔を見て驚きと懐かしさを合わせ持つ表情をしていた。

「いよう、久しぶりだなルーシィ」
「えっ……あ」

敵意を向けてきた鋭い目つきが大きく見開かれる。

昔の記憶を思い出す。
思い起こせば最初に会った時と同じだ。彼女との出会いも、逃げながら母親を守ろうとしていた。

「クーヤ――兄さん」

第二十七話　邂逅（後書き）

「しょっぱなから慌しいな」
「賑やかでいいじゃないか」
「僕としては変化について詳しく知りたいのですが」
「変化について文章書いたら増えるばかりだったもんでな。それほど重要な設定でもないし。切り取って、講座の方に置いておこうと思う」
「んで？　誰が弱いって？」
「さぁ？　どっかの嘘吐きの戯言じゃねぇか？」

第二十八話　常識、非常識

自分を馬鹿だと放言するのは自由だ。だが、それを理由にして思考を止めるのはよせ。
思考停止は楽だが、それに安住すると脳の発達を阻害する。

第二十八話　常識、非常識

「クーヤ――兄さん」

ルーシィと呼ばれた少女が戸惑いと嬉しさと驚きを含んだ表情でクーヤを見つめている。

時間が止まったような静寂。
その場の誰もが近寄り難い空気に呑まれ、言葉を発する事が出来なかった。

「久しぶり、大きくなったな」
「兄さんこそ、お元気そうで……」
「とりあえずそれ、引っ込めてくれるか？」
「え、あ……は、はい」

時間が巻き戻ったかのように剣が元の腕の形へと戻っていく。その様子に周囲の者は恐怖を含んだ目で見つめていた。

「で……なに捕まってんだよ。お前なら逃げ出せるだろ」

「えっと、そ、それは――」
「それは私のせいなんですよ」

アムと呼ばれた猫獣人の女性が足を引きずりながら近づいてくる。古い傷痕だ。とても痛々しく、まるで口の大きい獣に噛まれたかのような痕だった。

「アムさんも久しぶり。その足はどうしたんだ？」
「ちょっと罠にかかりまして……」
「ああ、なるほどな」

狩猟用の罠だろう。その後の展開も容易に想像がついた。
罠にかかったアムが人間に捕まり、母親が人質になったルーシィは大人しく捕まった。よくある話だ。

「お久しぶりですね、クーヤさん。お変わり無いようで」
「状況は色々と変わってるがな」

やれやれとため息をついていると、その袖を控えめに引っ張る者が居た。話に置いてけぼりになったラビが膨れっ面でクーヤを睨んでいる。

「ねぇ、知り合い？」
「手紙に書いただろ、猫獣人の親子と知り合ったって――」

そこではっとして周りの様子を伺った。自分達を中心に、周りの視線が集中している。話に取り残された者達がただ呆然とクーヤ達を眺めていた。
思い出話なら後でいくらでも出来る。そしてあまり公にして面白い話でもない。再会への喜びは後に回す事にし、今は優先する事項

がある。そちらを先に済ませるべきだ。

「――っと、その前に先に済ませる用事があるな。ラビ、アリスと共に食事の準備を始めてくれ。俺は男性陣を風呂に入れてくる」

「むぅぅ。後で絶対に聞くからね」

「んで、ルーシィ、アムさん。此処は安全だ。逃げる必要は無い」

「ですが……」

周りの奴隷達が異様なものを見たという目でルーシィに視線を向けている。

猫獣人が腕を刃物のように変化をするなど聞いた事が無い。いや、腕を刃物に変えるなど明らかに常軌を逸した変化だ。皆が怯えるのは理解出来る。だが、そんな当たり前な反応にクーヤの心中は苛立ちが募る。

「心配するな。迫害なんて事は起きない」

彼女の人生は迫害の日々だ。

人間からも、世界からも、同族からも。奇異な力のせいで数少ない仲間からも追い詰められ、軽蔑され、蔑まされてきた人生。

クーヤが彼女達を手助けし、親子二人だけで過ごせるようにした。

「――俺が、させない」

異常。非常識。奇異。化物。凝り固まった常識。そんな認識、くそ喰らえだ。

非常識を常識に変える。それは元からこの村で成そうと思っている事だ。

「だからお前は此処に居ていいんだ」
「……わかりました。兄さんがそう言うなら信じます」
「よし、それじゃラビと一緒に食事を――いや、すまん。今のは無しだ」

勢いに乗っていかに馬鹿な提案をしようとしたのか。折角手に入れた人材を危うく手放す危険性を持った指示だ。迂闊すぎる発言に激しく自分を責めた。

「アムさん、ラビと一緒に食事の準備を。ルーシィは水汲みでもやってくれ」
「ちょ、それは一体、どう言う事ですか！？」
「いや、だって。お前の料理、殺人的だから……」
「あの頃と比べないで下さい！　少しは上達したんですよ！」
「あの物体は少し腕が上達した所でどうこうなるモノじゃない。というわけで、水汲みよろしく」
「ちょっと兄さん！　話を聞きなさい！！」

そそくさとその場を逃げ出しながら、男性の奴隷達を風呂場の中へと誘導させる。ルーシィの訴えは聞き入れてもらえず、母親になだめられながら水汲みに取り掛かるのであった。

男性陣を風呂へと入れている間に、食事の準備は着々と進められた。
クーヤ達人間も、兎獣人も、新しくオワゾを訪れた奴隷達も、皆がそれぞれの土鍋を囲って食事の時を待ち構えている。食材に火が通った頃を見計らって、その蓋が開けられる。瞬間、様々な食材が

良く煮込まれた香りが辺り一体に広まった。
「お母さん早く早く」
「はいはい、今よそうからちょっと待ちなさい」
一つの土鍋に１０人ほど集まってお椀に食事が盛られていく。どうしたらいいか理解出来ていない奴隷達のために兎獣人達が給仕を行っていた。
クーヤ達が囲む鍋の前にはいつものメンバーに加え、ルーシィとアムの姿もあった。各自の手前には土鍋で煮込まれた野菜と肉がお椀に盛られ、その隣には窯で焼いたパンが添えられている。
「ああ、久しぶりに料理と呼べる食事だ……涙が出る。さて、喰うか」
「ちょっと待て。その二人とは初見だが、紹介も無しか？」
「……ああ、そうだったな」
目の前の食事に気をとられ、紹介も何も無いまま座らせていた事に今気づいた。ここ最近草食動物のような生活を強いられ、夢にまで見た人間的な食事に我を忘れていた。
「こちら猫獣人のルーシィ。俺の妹みたいなもんだ。その隣がルーシィの母親のアムさん。薬学に関しては俺よりも詳しいぞ」
「よろしくお願いします」
掌を猫獣人の親子の紹介を済ませると、ルーシィとアムは頭を下げて答えた。そしてその掌を今度はラビ達の方へと向ける。
「そんであちらがラビ、アリス。二人に関しては話した事あるな。

その右側から順にイースさん、ショルさん、ウィムさん冒険者達だ。以上、紹介終わり。さて、食べよう」
「ちょ、ちょっと待って！　それだけ？　流石に省略しすぎじゃない？」

あまりの簡単な内容に皆が唖然としていた。
聞きたい事は限りがない。クーヤとルーシィ達はどこで知り合ったのか。何故クーヤを兄と呼んでいるのか。その関係は。なにより、ルーシィの変化について詳しく知りたかった。

「とは言っても、これからやる事が山ほどあるだろ。詳しい話は夜にでもする。仕事の合間にでも質問の内容をまとめておいてくれ」

これからやらなければならない事が沢山ある。
奴隷達へこのオワゾの説明から始まり、家造りや主な仕事の説明。手の余った者にはオワゾの柵作りを行ってもらいたいとも考えている。兵士もしくは魔術師としての資質があるか調べる事も重要だ。

あまりの仕事の多さに、ラビとアリスもしぶしぶ頷いた。

「よし、全員に行き渡ったな。それじゃ、食うとするか――」
「クーヤ様……少し宜しいです？」

これで何度目になるだろうか。食事の開始を邪魔されるのは。
次第にクーヤにも苛立ちが募り、ついつい不機嫌な顔で給仕を行っていた兎獣人を睨んだ。

「お、お食事中申し訳ありません。連れてきた者達が食事を始めないので……」

報告を聞き、視界を左右に振る。
周りを見渡せば奴隷達全員が手をつけようとしていない。不可思議に思い、先程名前を知ったシルバの元へと向かった。
「どうしたシルバ？　せっかくの飯が冷めるぞ」
「にんげ……いや、ご主人。本当に食って、いや、頂いてよろしいのですか？」

長年染み付いた奴隷の性だろうか。
暖かい食事をもらえるはずが無い。許可無く手を出して鞭を打たれた。そんな折檻を受け、死んだ者の死体を始末させられた者も居るだろう。

「下手に畏まるな。聞いてて気持ちが悪い。お前達にはこれから働いてもらう。飯はしっかり食っとけ」
「し、しかし……」
「震えた鼠みたいだぜおっさん。狼ともあろう獣人が情けねぇ」

すでに食事を始めていたシモンが声を発した。
暖かい食事に頬を緩めながら、幼さの残る目がシルバを睨んでいる。シモンは不満だった。力の弱い兎獣人である彼にとって、狼獣人は力の象徴。憧れに近い感情を持っていた。
そんな狼獣人が誇りを忘れて犬に成り下がったのか、と激を飛ばす。

「そんな人間に下手になる必要なんて無いって。その人間すげー性格悪いぞ。いや最悪と言っていいね」
「こら！　シモン！　クーヤ様になんてこと言うの」

シモンがナナに殴られているのを横目で見たあと、再びシルバへ

と視線を戻す。お椀に顔を突っ込んで悲鳴をあげる声は耳から素通りさせた。

「まぁ、あんな態度はぶん殴りたくなるが……別に自分を偽る事も無い。力を取り戻すために飯はちゃんと食え。見返りとして此処で働いてもらう。言いたい事はそんな所だ」

立場は彼の方が上だが、それがその人物の人柄なら否定するつもりは無い。

「……わかった、クーヤ殿。食事を与えてくれた事、恩にきる」

「感謝なんて必要無い。働いて返せ。俺が望むのはそれだけだ」

そっけない返事を残してクーヤは元いた場所へと戻っていく。そんな態度にシルバは苦笑いを浮かべながらお椀の中身を啜っていく。その様子に他の奴隷達も食事を始める。

久しぶりの食事は本当に涙が出るほどに旨かった。

食後はそれぞれの仕事に慌しい時間を過ごした。

奴隷達へてきぱきと指示を飛ばす。木を切り倒して村の拡大、居住区の設備、家の建築。奴隷達にこの村の説明を行うのは各自にまかせた。

今日の空は雲が陰り、日の傾き具合はわからなかった。

空全体が薄暗い。白と灰色の絵の具を何度も塗りつけたかのよう。その色は雲の分厚さを物語っていた。

雨が降るかもしれない。
肌寒さを覚える最近の気候。身体の弱った奴隷達に野宿させるのは危険だ。
とはいえ、冷蔵庫を作ったのと同様に奴隷達を迎える為の長屋も建設済みだ。ただ、想定していた数よりも多いがために現在もう一件建設中である。

兎獣人はこんなにも高く売れるのかと、今後の奴隷商人との交渉に大いに役立つ情報だ。情報は多いに越した事は無い。情報の虚実、選別を誤らなければそれは大いなる財産となる。

家造りを急ピッチで進める最中、クーヤは先程のいざこざで目の色を変えた亜人に声をかけるのであった。

そしてその夜。
鍋を囲ったメンバーとエリーナ達兎獣人数名はログハウスへと集まり、保留となっていた質問会を開いた。
案の定外は雨が降り始めている。新設した長屋は大方完成した。支柱を建て、屋根を張り、扉や窓の設置まで至らなかったが壁も取り付け終えた。
今晩の雨を凌ぐには十分であろう。

「ルーシィは自分の身体限定の錬金術師だ」

クーヤは皆にそう言ってのけた。

初めにイースからの質問でルーシィとアムの親子との出会いを聞かれた。それに対するクーヤの返答は――
『ラビとアリスに送った手紙に書いてある。猫獣人の親子と知り合ったって内容で。それを読んでくれ』
と、簡潔に済まされた。その直後の言葉である。

「それって、さっき腕が剣に変わった事についてよね？」
「どういう事だ？」

先程の光景を見ていないアリスはラビに尋ねる。
質問に答えようと言葉を探すが、満足のいく説明が思い浮かばない。ラビが考えあぐねているとルーシィが立ち上がった。皆の視線がそこに集まる。

「実際に、見て頂いた方が分かり易いでしょう」

言葉を放った途端、ルーシィは右腕を掲げた。
その指が一本ずつ薄く尖り、銀色に光る。短いナイフのように変形した指を動かすと今度はそれぞれがねじり上げるように絡み合い、まるで木の枝が腕から生えたように形や色が変わる。
「変化（へんげ）。その中の分類として変形と俺は呼んでいる」

ルーシィの腕が様々な形に変わっていく様子に、口を開けながら見ている者達へクーヤによって補足が説明される。
「変形――分かり易く言えば錬金術だ」

錬金術。
魔術の高位に位置する術。

魔素という物は他の元素と結びつき易い。そして魔素を操り、結びついた原子を引っ張って魔術として放出する。魔力で魔術を発動する際、ミクロな範囲ではそのような現象が行われている。

錬金術も基本的な所としては同じ現象を辿る。
異なるのは魔素に内包するエネルギーの量を増やし、結合するための動力を得る。そしてある一つの原子と別の原子を魔素で引っ張り、繋ぎ合わせ、別の原子を作り出す。それが錬金術の基本工程である。

「こんな事も出来ますよ」

アリスの方をじっと見たかと思うと、今度は身体全体に変化が訪れた。
髪が伸び、体つきが変わり、顔立ちも亜人特有の顔から人の顔へと形を変える。アリスが息を飲んだ。

「――っ！」

目の前に鏡を置かれたような奇妙な錯覚。
部屋の中にアリスの形をした人物がもう一人現れる。アリスの目がアリスへと向けられた。

「気持ち悪いでしょう？　こんな力」

アリスの姿をした者がルーシィの声で語る。
アリスを始めとし、他の者も息を詰まらせていた。言葉が出ない。どちらが本当のアリスだったかと頭が混乱する。

「でも兄さんは……この呪われた力を『凄い』と褒めてくれたんですよ」

呪われた力。

その単語を聞いた瞬間、ラビとアリスは今まで釘付けだった視線をクーヤへ向けた。見開いた目で説明を求めようとしたが、言葉が出てくれない。

そんな二人の心情を察し、彼はそれが事実だと伝えた。

「ああ、ルーシィはお前達と同様――魔女だ」

奇妙な感覚は先程から感じていた。

目の前の変化を錬金術と説明されながら、その口から詠唱が紡がれる事も魔術文字を描く仕草も感じられない。

魔術においてありえない過程の削除。そしてそれは彼女達自身がもっとも良く知っている非常識。

「亜人であり、魔女でもある。そんな存在を俺は便宜上、魔人と呼んでいる」

クーヤがもういいぞ、と声をかけるとルーシィはアリスの容姿から元の姿へと戻っていった。

部屋の中が静寂に包まれる。今見た光景にイース達の頭の中が真っ白だ。質問はいくつも生まれるが、沸いて出た言葉は互いに絡みつき、かき消し、霧散していく。

その中で立ち直りが早かったのは、やはりラビとアリスだった。矢継ぎ早にクーヤへと質問を投げかける。

「錬金術で造られる物質はどんな物でも可能なの？」
「可能だ」
「彼女が傷を負ったとして、それを自分で治せるのか？」
「可能だ。だが力を使う際、魔力を多量に消費する。それが尽きたら無理だ」
「さっき、身体限定って言ったわよね。体外で錬金術は使えないの？」
「無理だった。理由はお前達がよく知っているだろう」
「だが錬金術は錬金術。彼女に色々と物を作ってもらう事は出来るか？」
「確かに可能だ。だが制約がある。あまり大量に、頻繁には出来ない」
「どういう事だ？」
「この力を使う際に注意する点として、ルーシィには教えてある。復習ついでに説明してくれ、質量保存の法則を」
「はい」

質量保存の法則――化学反応の前後で、それに関与する元素の種類と各々の物質量は変わらない。

つまり彼女が力を用いて鉄を作り出すと仮定した場合、その鉄の量だけ彼女の体内から同じ質量が失われる。だが、鉄を１ｋｇ生成するためにルーシィの体重が１ｋｇ減るという単純な話でもない。
必要な原子を引っ張るという事は、身体を構成する分子――たんぱく質などの高分子――の崩壊を意味する。作った物質を外に出すと言う事は、たんぱく質などの高分子体が崩壊したまま元に戻る事はない。人の身体を構成するのに必要な化合物が減っていくのだ。

物を作り続ければ彼女の中身はスカスカになる。そうならないために彼女が食料を摂取し、その栄養を取り入れ、身体を元に戻して

いかなければならない。

それがどれ程時間を要するのか。

通常の体重を１ｋｇ増やすために、１ｋｇの食料を食べるのはイコールで結ばれない。彼女が体外へ物を作るというのはそれに近い状態だ。

「なるほどな」

「だが、少しばかり物は作ってもらおうとは思っている。もちろんルーシィの身体の負担にならない程度にな」

「体外の物質を彼女に取り込む事は出来ない？　例えば私が物質に魔素を塗りつけるとかして」

「理論上は可能だ。だが想像で引っかかるだろうな」

「むぅぅ」

想像とは魔素に組み込まれるプログラムだ。

同じ結果になろうとも、それぞれの道筋が違えば上手く動かない。

想像の種類は無限大である。その無限の中からお互いの想像を完全に一致させなければプログラムは正常に働かない。

「ルーシィの力については大体理解した」

「私も」

「頭の良い方達ですね」

頭の回転の速さに目を丸くしていた。

納得を示している二人を除き、他の者は部屋の隅に集まって茶をすすっている。その手にはクーヤが送ったらしき手紙があった。

「おい、あいつ等何を話してるんだ？　というかあれは人の言葉なのか？」

「さぁ？　とりあえずルーシィちゃんは可愛いって事で良いんじゃないすか？」
「私もよくわかりません……」
「錬金術は僕の専門外ですし……あ、ここに錬金術師と出会ったという内容が書かれてますよ」
「どれどれ……って！　頭に自称がつく方じゃないっすか！　錬金術に詳しい内容はまったく書かれてないし……いや、書かれてても理解出来ないっすけど」
「お、こっちにはエルフと出会ったみたいな事が書かれているぞ。一度拝んでみたいものだぜ」
「僕はダークエルフと出会いたいですけどねぇ」
「新しいお茶が入りましたよ～」

手紙と茶を手にしながらわいわいと賑やかな一団が結成されていた。
質問会は実質五人で行われている。もう少し村が安定したら学校でも開こうかと、クーヤは心に決めた。

「……とりあえず質問は以上か？」
「最後に一つ、何故ルーシィはクーヤの事を兄と呼んでいるんだ？」
「え、あ、そ、それは……」
「ん、ふっふぅ。それは私から説明しましょう」

アムがうろたえる娘を後ろから抱きとめながら、悪戯を思いついた声で語りかける。今まで聞き手に回って一言も話していなかったが、彼女は本来喋る事が好きだ。それと同様に娘を弄る事もしかり。
「家族が私しか居なかったので、家族愛に飢えていたんですよ。しかも男の人、これはもう兄と呼ぶしかないと思ったんです。ね？　そうでしょ？　ルーシィ」

「か、母さん！」

ハッとしてラビ達の方を振り返ると、生暖かい目で見つめられている。違います、違いますと否定を繰り返していたが、赤くなった顔が雄弁に物語っていた。そのままじと目でクーヤの方を振り返れば、無表情でのん気に茶を飲んでいる。

何も感じていないと思いきや、手に持つ湯飲みが震えていた。笑いを抑えようと必死になっているのが伺える。

「こういう時なんて罵るんだっけ……ああ、そうそう、このシスコン」

「良かったじゃないか、可愛い妹が出来て。このシスコン」

「ちなみに母親のアムさんは薬剤師をやっていた。薬草に関する知識は俺よりも豊富だ。色々話を聞いてみるのも面白いぞ」

「ふっ、スルースキルが上がったじゃないか」

「そう褒めるな」

そしてルーシィ達へ現状を伝える。

此処に逃げてきた理由。オワゾを作った理由。海を目指す理由。これからどうするつもりなのか。何故奴隷達を集めたのか。事細かに説明していく。

全て話し終えた後には、ルーシィは呆れた表情をクーヤへと向けていた。

「……兄さんは損な性格をしています」

ルーシィからの感想はそれだけだった。

「んあ？　どういう事だ？」
「立場の弱いものであればあるほど手を差し伸べているという事です。弱い者を庇って、自分の立場を悪くしているようにしか感じられません」
「あほ、人をそんな聖人みたいに言うな。そんな大層な理由じゃない」

別に弱い者を救おうという崇高な考えが有る訳ではない。
ルーシィの時はその力に興味があったついで。ラビとアリスの時は自分と同じだと思ったから。エリーナ達兎獣人、そして今回連れてきた奴隷達は必要だと感じたから。主な理由はそんなところだ。

「それに損だとも思っていない。今まで押さえ込んでいた自分の考えを広める事が出来る。そして、人間と魔女と亜人、それぞれが手を取り合って生きていける場所を作れた、そんな新しい景色が見れた――後悔なんて無い」
「……まったく。相変わらずですね、兄さんは」

昔からそうだった。
同族からも恐れられたこの力を、彼はいともたやすく受け入れた。面白いと言っていた。クーヤの行動や極端だ。面白い物にはとことん興味を示し、有り触れた物には微塵も興味を示さない。

変わらぬクーヤの態度に彼女は安堵した。

「兄さんには力（知識）があります。その力は単純な暴力ではなく、けれどもそれ以上に恐ろしい力です。そしてそれは自分のためだけの力ではなく、他人に分け与える事の出来る力――」

能力はたとえどれ程大きいものであろうと個人が所有する力。
誰かを救う事はできる。誰かの利益になる事もある。しかし、誰かに譲るような事は出来ない。
分け与えるなど神や精霊といった規格外の存在でしか不可能な事だ。

「兄さんはその知識で何を成そうとしているのですか？」
「決まってる――」

クーヤには我慢なら無い事がある。

それが当たり前だから、それが常識だから。そんな言葉に流されて従って、それが本当に正しいかとも考えない人々、正しくないと解っていても治そうともしない人々。

常識というのは人が安心したいがために作った檻だ。
その中が安全である事は否定できない。その中に逃げ込みたくなる気持ちも理解出来る。だが、囚われ続ければ人の思考はそこで停止する。思考停止に安住してしまう。

あまりにかけ離れた知識は狂人の言葉でしかない。

あまりにかけ離れた技術は魔法の類いでしかない。

それらが人々に受け入れられる事はない。

クーヤが行いたいのは、その離れた距離を近づけたいだけ。
だからこそこのオワゾで、自分の知識を広めて行きたいと思っている。

「常識という名の檻をぶっ飛ばす」

クーヤの常識は世間にとっての非常識。

それが分かっていてなお、非常識が常識となったそんな場所を――故郷を造りたいと願っている。

彼の言葉にルーシィは満足した表情で頷いた。

第二十八話　常識、非常識（後書き）

「むぅ、妹キャラとは恐ろしい属性の持ち主ね」
「心配せずともこちらが勝手に兄と慕っているだけです。恋愛感情的なモノはありません。それに……私は、亜人ですし……」
「い、いや別に亜人だから人間を好きになっちゃいけないとかじゃなくて……そもそもそういうのは各自自由というか……なんと言うか」
「あら？　でしたら奪っちゃっても文句無いですね？」
「！！　クーヤ、この子性格悪い！」
「俺の妹らしいだろ？」

第二十九話　帰郷

第二十九話　帰郷

奴隷達がオワゾを訪れてから、半月程の時が過ぎた。

時の流れは留まる事を知らず。その時期特有の空気が色濃くなっていく。

まばらであった葉の色が一つの色に染まり、深く、渋いその色合いはどこか寂しさを思わせる。

そんな紅葉に色づいた木が、ゆっくりと傾いていった。

「よし、お前達これを運んでくれ」

外周の木が倒れる音がずしん、と響く。アリスについていった男達が枝を払い、威勢の良い掛け声と共に丸太となった材木が運ばれる。

村はさらに一回りその面積を広げていた。

土を耕す音が聞こえてくる。

開拓された土地に畑を作るため、エリーナ達兎獣人が新しく来た奴隷達に仕事を教えているようだ。亜人の、しかも力の弱い兎獣人から教わる事に人間も他の亜人も引け目を感じるかもしれない、という心配は杞憂に終わった。

奴隷という境遇により自尊心が磨り減ったのか、エリーナ達が自分達も奴隷であると話した事による仲間意識か。特にこれといった

争い事は起きていない。

村の広場からは気迫の満ちた声が聞こえる。
兵士の資質がありそうな者達にはイース達に訓練を頼んだ。木を削って造った木剣を手に、一心不乱にイースに与えられた素振りをこなしていく。ウィムによって魔術の指導も行われていた。

ラビはこの場に居ない。
兎獣人と数名の奴隷を引き連れて食料を採っている所だ。現在、探索は行われていない。無闇に探索をするよりも、この森の情報を持つ者は居るのだから。

人々が生活する音の中で、クーヤは男性達を率いて指示を飛ばしていた。男達が村の外付近に集い、作業を行っている。

「しっかり縛って固定しろよ。簡単に解けたら防壁の意味が無いからな」

丸太として運ばれた材木を用いて、村を囲う柵が作られている最中だ。男達の手によって丸太が立てかけられ、隣同士を紐できつく結ばれる。男手が増えた事により、着々と作業は進んでいた。順調に行けばあと数日で完成しそうだ。

「軽食をお持ちしました」
「よし、お前達作業は一時中断だ。休憩にするぞ」

短い返事と共に手を止め、鍋を持ってきた者の下へと集まってくる。

「今朝畑で取れた野菜のスープです。美味しいですよ」
給仕を行っている狼獣人が嬉しそうな声で話しかけた。
そうか、と呟き渡されたお椀を受け取る。一口飲みこむと、野菜と香辛料の香りが登ってくる。相変わらす塩味に乏しいが、前と比べお湯に浸したような野菜スープもどきよりも遥かにましだった。

「そういえば……」
ふと口元に近づけたお椀と止め、中の野菜をじっと見つめる。
「どうしました？」
「……いや、気にするな。単なる考え事だ」
「はぁ」

クーヤの頭の中に浮かぶ疑問。
何故、このオワゾ内の野菜は普通に育つのだろう。

ハーグの森に生育する植物等は性質や形が変わったものばかりだ。まともな物はほとんど無い。此処へ訪れた当初、魔素汚染による影響だろうという可能性は考えたが、明確な原因はわかっていない。
この土地の性質によるものかもしれないという可能性もあったが、こうして無事な野菜が収穫できている。
（やはり魔素汚染の影響か……だとしたら魔素汚染とは一体……）
この疑問も汚染された魔素が何かというのが解れば解明するのだろうか。
研究をさらに進める事を胸に秘め、再びお椀の中身を啜っていく。

食事の最中も奴隷達の観察は怠らない。
ちらりと周りの様子を伺うと、男達は暖かいスープを嬉しそうに味わっていた。こうして暖かい食事が出来る事に喜びを感じているようだ。

奴隷のほとんどは相変わらず黙々と仕事をしている。
いまだに自分達の境遇に慣れていないのか、言われた事をきっちりとこなそうと身体を動かしているだけだった。

それでも一部の者には自我を取り戻し始めた傾向がある。
特にハーグの森に故郷があると言っている亜人はその様子が顕著であった。しかし、生気が戻る事で面倒臭い対応を強いられる事となる。

「クーヤどのぉ！　お食事中申し訳ありません！　お手合わせを願いたい」
「お頼み申します」
「も、申します」

最近のクーヤの悩み事がやってきた。
帰郷を願う亜人達の間には、故郷に帰るにはクーヤに勝たなければならないというはた迷惑なルールが出来上がっていた。オワゾを訪れた初日。シルバとの諍いとクーヤの言葉をどう曲解したのか理解し難かった。

彼にとって迷惑以外の何物でもないが、なんの前触れも無く姿を消すよりはまだ許せるだろうと考えて特に否定はしていない。

「イチロー……またお前達か」

特にこの鳥獣人の3名は暇を見つけてはクーヤに戦いを挑んできた。

「自分の名前はイチローではありませぬ。インシルリクという親から貰った素晴らしい名前が！」
「私にはジャンルィジという名前が」
「サ、サドフニコフという名前が」
「長ったらしい、全部却下だ。お前達はイチロー、ジロー、サブローだ」
「クーヤどの、それはあまりにも横暴ですぞ！」
「ところでお前達、アリスの手伝いはどうした？」

確かこの鳥獣人の男達はアリスの伐採を手伝っていたはずだ。

「アリスどのから休憩を頂いたのでこちらへやってきました！」
「いや……休憩しろよお前ら」
「休んでなど居られません！　故郷へ帰るまでは！」

彼等も此処、ハーグの森出身だ。
そして、ハーグの森出身の中でも特に帰郷を強く望んでいる。いの一番に返してやりたい所だが、とある事情により先延ばしにしている。

「さぁ、お手合わせを願います！」
「はぁ……わかった。少しだけな……」
「感謝します！」

インシ――イチロー達が長い木の棒を回し、ピタリと止めて構えを取る。棍か、もしくは槍を模しているような構えだ。クーヤも特

別に作った木刀を握り、脱力した構えで迎え撃つ。

「――こい」

「あちょーー！」

間。

「よしお前達、作業に戻るぞ」

パンパンと手を叩きクーヤの指示を元に男達が再び作業を始める。男達の手によって、柵は次々と繋がっていく。広がったオワゾの外周をぐるりと囲う防壁も完成が見えてきた。

門は東、西、南側に作る予定だ。北に門を作る予定は無い。むしろ北側は柵を強固にしていた。これから訪れるかもしれない脅威に対する対策である。北上する場合は西側から川へと向かい、川沿いを登る方が何かと利点があるのも北に門を作らない理由の一つだ。

男達はこの村を、自分と仲間を守る為の仕事に取り掛かる。

その傍らで、泣き崩れる男達が居た。

「おおおぉぉぉぉぉ！　何故、何故クーヤどのに勝てんのだ！」

「これで３２敗……諦めた方が良いかもしれません」

「ジ、ジャンルィジ気を落とさずに。な、何度か勝てそうな所がありました」
「でも勝てんのだ！」
地面に顔を摩り下ろしたイチロー達がその隙間から嘆きの声を響かせていた。

「今日こそは勝ちますぞ！　きぃえええぇぇぇ！」
懲りずにイチロー達がクーヤへ挑んでいる。オワゾにとって日常の一部になりつつあるその光景を、真剣な眼差しでシルバが見つめていた。

「相変わらず人気者ねぇ。クーヤは」
「ラビ殿……」
観戦に夢中になっていたあまり、ラビが近づいていた事に気づかなかった。その傍らにはアリスの姿もある。

「シルバはクーヤに挑んでみたりしないのか？　お前の力なら一発で終わるぞ」
「いや……力任せに挑んでも勝てないと思っている」
「へぇ、思ってた以上に鋭いわね……クーヤって、力で押せばなんとかなりそうに見えるのに」
狼獣人の嗅覚か、戦士としての感覚か。
頼もしささえ覚えるその認識にラビは称賛の言葉を投げかける。

「もしこのオワゾに永住する事を決めるのなら、クーヤに対する戦い方を教えてやるぞ」
「アリス殿は意地悪だな……」

苦笑に顔を歪め、遠い目で空を見上げた。
思い出すのは自分の故郷。苦しい生活を強いられたその場所。

「正直な所、迷っている……此処の生活は考えていた以上に居心地がいい……だが……自分の生まれ故郷である場所も捨てられない」

あまり良い環境では無かった。
食料も此処より遥かに乏しく、子供達も気軽に外に出られはしない。大人達は昼夜問わず村に訪れる魔獣達との戦いに傷つき、皆が疲れ果てていた。年老いた者は幼い子供達に食料を譲っていたが、それでも息絶える子供は多い。

畑を作ろうにも何故か芽が出ない場合が多かった。
それでも畑を耕し、待ち望んだ芽が出たものの収穫しようとしたその実は変質してしまっていた。味が変わった物、形が変わった物、毒性を帯びた物。
その経過を辿り、シルバの故郷では畑を作るのを諦めた。

それでも彼にとっては慣れ親しんだ故郷である事には変わりない。
「私達は長年住んでいた所を追い出された。そしてクーヤは故郷を持っていない。故郷とは一体どんな場所なのだろうか」

あの場所は故郷と呼べるモノだったのか、アリスにはわからない。
長い間生活していた。苦い思い出も沢山あり、良い思い出も少なか

らずある。だが、帰りたいという感情は沸いてこなかった。
クーヤに訊ねた事がある。彼が思い浮かべる故郷とは一体どんな場所なのか――と。
「どれだけ離れていようとも、いつか帰りたいと思う場所」
自分にとって住み易い場所、子供の時に生活した場所、思い出がつまった場所、忘れる事が出来ない場所。故郷という定義は人それぞれだ。
その中でアリスが導き出した故郷というモノの条件。
「故郷とは心の拠り所であるべき場所だと、私は思う」
しん、と静かな空気が流れた。
イチロー達の嘆く声だけが聞こえる。彼等の決着はいつもと変わりないようだった。
「……引き止めているように思えませんな」
「私はクーヤほど嘘を吐くのが上手くないからな」
「ま、シルバが此処に居てくれれば心強いのは確かなんだけどね」
帰れる場所があるというのはそれだけで幸せな事だ。シルバの想いを無理に引き止める事は彼女達には出来なかった。
息を吐き、覚悟を腹にシルバはクーヤへと近づいていく。
「クーヤ殿、私も一戦頼みます」
「シルバお前まで……」
「これが武人としての礼儀ゆえ」

シルバが構える。変化は行わなかった。

彼等獣人の変化――膨張は筋力も増すが、血流量も増す。それはまるで酒に酔っているかのように心臓が拍動し、思考能力を落としてしまう。シルバは自分の想いを薄めさせたくは無かった。

故郷に戻りたい。家族に会いたい。仲間に会いたい。
ただそれだけを心に決め、シルバは構えをとった。

目の前の人間は何処にでも居そうな平凡な青年。
覇気も無く、だるそうに力が抜けている。力で押せば勝てる。腕を薙げば身体が吹っ飛ぶ。脆弱な人間。唯の人。頭の片隅に過ぎるそんな甘い考えを一切否定した。

勝てそうなのに勝てない。勝てそうという望みすらも切り捨て、クーヤを絶対的な強者として対峙する。

「ん、それ正解」

ラビが頷く。

「――参る」
「無理だ。勝てる気がしねぇ。俺の負けだ」
「……は？」

あっさりと負けを認めたクーヤに虚を突かれ、シルバは唖然と眺めていた。
クーヤが木刀を投げ捨てたのを見て、シルバも構えを解く。

「帰郷を許可する。ただ、一つ……いや二つだけ条件がある」
「それは、どういったもので？」

人差し指を一本立て、シルバにこちらの条件を伝える。
短い間であったが、彼なりにクーヤの性格を理解しているつもりだ。一体どんな思惑があるのかシルバは図りかねていた。

二本目の指が立てられるとシルバはさらに悩みだした。
彼等が言葉を交わし続ける。交渉は長い間続き、やがてシルバが折れて終わった。

「……わかった。自分の故郷を案内しよう」

そしてクーヤ達はシルバの故郷を訪れる事となった。

深い森の中を馬と狼獣人達が駆ける。
シルバを先頭に馬と狼獣人が追従する。馬に跨るのはクーヤ、ラビ、アリス。その後ろからシルバ以外の狼獣人達の走る姿があった。

「あそこだ、あれが俺の故郷――カマル村だ」

シルバが指差す場所は広い平野の場所に柵で囲った村があった。
良く言えば質素、悪く言えば廃屋かと思われるような村だ。柵が取り付けられているが、所々が折れ曲がり柵としての意味を成しているか理解し難い。

一行が村へと続く道を駆けようとした時――

「待て！　貴様ら何者だ！？」

周囲の林から狼獣人の姿が現れた。
彼等の手には鞘から抜いた刃物を携えていた。
まるでオーク村を訪れた時の再生を見るようで、クーヤとアリスは苦笑する。問題はこの後も同じかどうかであるが、今回は村の出身である人物が居る。

「俺だ、シルバだ！」
「シ、シルバ無事だったのか……何故人間と一緒にいる！？」
「この方達は――」
「再開に水を差すようで悪いが、とりあえず村に入っていいか？外だと安全とは言えないんでな」
「ならぬ！！　人間など弱い者が村に足を入れる事など断じてならぬ！」
「弱い者……ねぇ。そう敵意を向けるな……俺は、敵には容赦しない」
「そうだ、人間という惰弱な生き物が足を踏み入れて良い場所ではない！」
「なんだ……力を示せばいのか？」
「クーヤ殿、抑えてくれ。お前達も刃物を納めろ」

不穏な空気にシルバの心情は焦るばかりであった。シルバの願いにより抑えはするが、相手はそんなことに構わない様子である。ラビとアリスも想像を完了し、いつでも向かい撃てる状態を整えた。

「此処で引導を渡してやる！」
「静まれい！！」

一喝がその場の空気を揺るがした。

「ぞ、族長」

「シルバよくぞ帰ったな。そして人間よ、シルバと共に行動した状況を聞き願おう」

「話がわかる長でありがたい。とりあえず、此処は危険だ。村の中に入る許可を頂きたい」

「……ついてきなされ」

村の族長に促され、クーヤ達はカマル村へと訪れた。

村の中を歩き、そのまま長の家へと招かれる。平素ながらも、途中で見た家よりも大分広さがあった。ここで集会なども行われているようだ。

族長が中央の椅子へと座り、その周りには年老いた狼獣人の姿があった。

「わしはこの村の族長、名をチャフと呼ぶ。人間よ、先程の無礼深くお詫びいたす」

「こちらはオワゾの代表、クーヤと名乗る。この村へ足を踏み入れる事を承諾してくれた事に感謝する。狼獣人の長よ」

佇まいを直し、ピンと背筋を伸ばして返事を返す仕草に一同が感嘆の息を漏らした。

「してシルバ……何ゆえ人間と同行しておった？」

「奴隷として捕まっていた所をクーヤ殿に助けていただいた。暫く彼等の村に滞在していましたが、帰郷の願いを受け入れていただき、こちらへと戻ってまいりました」

周囲がざわめいた。

奴隷を、しかも亜人を助け出すなど聞いた事が無い。さらには帰郷の願いまで聞き入れるなど、絵物語の聖人のようだ。だが、そんな聖人居るはずがない。
チャフは疑いの眼差しを向け、クーヤに語りかける。
「不思議な事をする人間ですな。人間は亜人を奴隷として扱う最低の人種だと心得ているが？」
「醜い一面だけを捉え、それが種族全体の気性だと決め付けるのは浅はかな考えだ。それに習うのであれば、俺は狼獣人を出会い頭に刃物を向けるオークと同じような種族と捉えなければならない」
「貴様！　我らを侮辱する気か！」
「静まれ！　この馬鹿者が」
低脳、暴力的、礼儀知らずのオークと同列に例えられ、狼獣人達が色めき立つ。獣化までしようとした者に、チャフによる一喝が部屋の中に響いた。
ラビとアリスも行き成り挑発するような言葉に気が気でなかった。その中でクーヤは平然と話を続ける。
「亜人、人間に関わらず、まずは目の前の者を人として受け入れる。それが相手に対する最低限の礼儀だ」
声を荒げず、静かに語る。
それが自分にとって当たり前であるという事を、普通である事を彼等に言い聞かせる。語気も荒げず、淡々と語られたがその言葉には確かな強さがあった。
「そなたは今まで出会った人間とは何もかも違うようですな。クーヤ殿、度重なる無礼まことに申し訳ない」
「いや、こちらも試すような事をした。お互い様だ」

「試す事は悪いことではありますまい。相手を知ることが出来るゆえ」

からからとチャフが笑い、その場の険悪な空気が一掃されるとクーヤはオワゾの概要を説明した。最近作ったばかりである事から他の亜人と一緒に生活しているという要点だけを簡単に紹介する。

「驚きですな……亜人と人間と、そして魔女が共存した場所とは……して、そなたは我らに何を望んでおりますかな？」

「交流を」

「交流？」

「ああ、差当たって今回は挨拶と頼み事が一つ。まずは――ラビ」

「はいよ」

返事と共に抱えていた荷物を解くと、長老の前に差し出す。そこにはオワゾで育てた野菜とガブールから奪い取った食料が並べられる。思いもよらぬ品々に周りからどよめきが生まれた。

「これは……」

「村で取れた野菜と商人から貰った物だ。近づきの品として受け取ってもらいたい」

「申し訳ないが、これは受け取れぬ……こちらは返す品が無いのでな」

「心配無用、こちらも頼みたい事がある――レミィ」

「はい」

狼獣人の女性が他の狼獣人達と一緒に前へ出る。

これらの狼獣人は此処とは別の場所に故郷を持つ者達だ。

「奴隷として捕まっていた狼獣人達だ。オワゾに住む事を勧めてい

るんだが、同じ種族同士で生活したいと言ってる。食料を渡す代わりに、受け入れて欲しい」
「同族か……これは断るわけにはいきませぬな」
「レミィです、これからよろしくお願いします」

レミィ達が頭を下げてそれぞれの紹介をチャフ達に行う。同族に会えて嬉しいのか、彼等の顔は緊張を含みながらも柔らかかった。

「さて、そちらもこの村の紹介を願いたい」
「シルバから何も聞いていないのですかな？」
「ああ、族長の許可が下りるまで何も話せないの一点張りでな」
「さようか」

皺が刻まれた頬を一つ撫でると、チャフは悲しげな顔で語りだす。

「紹介も何も、見ての通り何も無い。食料も乏しく、生活するにも困難な場所」
「ならば何故、此処に村を作ったんだ？」
「先先代の族長が作ったので詳しい事はわかりませぬな」

瞳と声に嘘が少し混じっているのをクーヤは感じた。この年代になると表情を隠すのが上手くなるが、その僅かな機微を彼は捉えた。
よく知らぬ者には語れない事かと考え、質問を変える。族長の家に来るまでに村の中を歩いた様子を思い浮かべた。

「……子供が少ないようだが？」
「皆家に籠もっておる。柵を立てようとも乗り越える魔獣や、平気で壊す魔獣もおりますのでな」

今度は嘘では無い。柵だけではやはり不安か。

オワゾに戻ったら南側半分だけでも結界を敷いた方がよさそうだ。
「畑などは荒らされたままだったが、何故直さないんだ？」
「無駄なのだ。芽が出ない場合や、芽が出てもその実が変質している」
「本当か？」

チャフが頷く。嘘は言っていない。
クーヤは驚いた。ハーグの植物が変質するのは汚染された魔素によるものだと狙いをつけていたが、もしかしたら土地の性質によるものという可能性が再び上がった。オワゾの周辺はその性質とは違う場所だからかもしれない。

（いや……違う。村の中に魔獣が侵入すると言っていた。やはり魔素汚染によるものか……しかし、すぐ殲滅されるだろう。そんな短い時間で……）

ぐるぐると巡る思考を中断し、質問を再開した。

「最後に一つ聞きたい、此処ではどうやって冬を越しているんだ？」

クーヤがハーグに住む者に一番聞いておきたい質問だった。
物流も無く、畑も作れない。
だとしたらどうやって冬を越すための食料を確保しているか、と思うのは当然の疑問だった。

チャフは答えない。
上手く説明できないのか、言いよどんでいるのか。口をきつく結び、沈黙を保ったまま時間が過ぎていく。
クーヤは急かさなかった。長の口から語られるまで何時までも待

つ様子だ。

そのチャフの口が薄く開けられる。

「魔獣の――魔獣の肉を喰っておる」

「馬鹿な！！」

珍しくクーヤが怒鳴り声を上げた。その事を誰も咎めはしなかった。

「魔素汚染を理解していないのか！？　あれは強い毒を持っているんだぞ」

「さよう。だが、魔獣を殺し時が経てば無くなる事を知ってますかな？」

「ああ、俺も最初はそう思っていた。だが違う、魔素の量が減って観測出来なくなっているだけだ。完全に無くなるにはかなりの長期間要する」

それまでは生物の身体に巡る魔力は生物の死と共に失われていき、やがて完全に消え失せると考えていた。しかしよく観察してみると魔素に込められたエネルギーは極微量ながらも存在し続けている。魔術を放った時のように霧散せず、何時までも残っていた。

「ク、クーヤ殿それは本当ですか？」

うろたえるシルバに真実だ、とクーヤは頷いた。

最近の研究によって解った事だ。

完全に無くなるまでは数ヶ月はかかるという目算である。それだけの長期間、肉を保存する設備があるとは思えなかった。

「長よ、子供が少ないのはもしかして……」
「家に籠もっている」
「魔獣の肉を喰って何人亡くなった？」
「答えられぬ」
「俺はオワゾへの移住を勧めたい」
「承諾できませぬ」
「これからも同胞が死に逝くとしても？」
「この場所が、故郷であるがゆえ」

会話は平行線のままだった。
目線を横に向け、レミィ達の様子を伺った。本当に此処に託していいのかと考える。冬を迎えるにはあと少しだけ時間がある。今回食料も渡したのだ、数日経ってからまた様子を見に来るようにしようと考えた。

「わかった……無理には勧めない。また寄らせてもらう。レミィ達のことよろしく頼む」

立ち上がり、その日はそのままオワゾへと帰っていった。

第二十九話　帰郷（後書き）

「いいの彼等を渡しちゃって？　かなりの戦力低下になると思うけど……」
「ああ、あいつ等には肌が合わなければ何時でも戻って来いと伝えてある」
「居心地が良くてそのまま永住したらどうするんだ？」
「交流を続ければ人手を貸してくれる事もあるだろう……が、あの村の様子を見る限り長くは続かないだろうな」
「だが、一番の理由は情報収集だろう？」
「クーヤってほんと――」
「意地が悪いだろ？」

第三十話　波長

第三十話　波長

オワゾの広場に男達の慟哭が響いた。
日中の仕事を終え、仕事道具を片付けながら村人達が自分の帰る場所へと戻っていく。泣き崩れる男達の横を通り過ぎるが、日常と化した光景に特に声はかける者はいなかった。

「おおおおおお！　何故、何故クーヤどのに勝てないのだ！？」
「あんた達……まだ勝ててないの？」

素通りする村人の中、唯一おせっかい焼きなラビは男達に近づいていく。あまりに惨めなその姿に、呆れながら彼等に声をかけた。

「ラビどのーー！　助言を、助言をお願い致しまするぅ」
「何をやっても勝ない。ふふ、勝てそうなのに勝てない……うう」
「こ、このままでは、ち、鳥人族としての威厳が」

涙でぐしゃぐしゃな鳥顔が詰め寄ってきた。威厳の無くなった者はこんなにも情けない顔をするのかと、ずれた感想がラビの脳内を過ぎる。

「ちゃんと三人力を合わせてやってるの？」
「何を馬鹿な！？　正々堂々一対一で挑んでおります！」
「あ、それは無理ね」

馬鹿正直なイチロー達に額に手を当てて頭を振った。

この男達は自分を戦士と言いながら、強さというものを理解していないのだろうか。戦いにおいて、相手の力を理解するというのはとても重要な事だ。いや、力量を理解しているからこそ、今度は勝てるという甘い幻想を描いているのかもしれない。

ため息をつき、出来の悪い子供を諭すような眼差しで傍に座る鳥獣人達を見据える。

「確かに、クーヤとの力量はそれほど離れてるわけじゃないわね」

近くに落ちていた木の枝を取り、地面に突き刺し点を描く。クーヤの点のやや下にイチローの点を作る。これが平均的な互いの力量。

「いい、あんた達。強さっていうのは点じゃないの」

描いた点から上と下に直線を書く。強さの幅を記す線を書くが直ぐに消した。

「そして、上下に伸びる線でも無いわ」

枝の先端をイチローの点に挿し、そこから右へと波打つ線を描いた。横に描かず、やや右肩下がりの曲線を描いていく。

「強さはね、流動的なものよ。こんな風にね、グネグネとした曲線なの。クーヤは波長と言ってたわ」

振幅が大きい所、小さい所。上へと流れる線、下へと流れる線。戦況の流れを記し、イチロー達に理解させる。ここまでは戦闘を行う者ならば気づけるはずだ。

「その場の状況、身体的な状態、精神的な状態。様々な要因によってこの線は揺れているわ」
「むぅ……なんとなく解ります！」
彼等の反応に少々不安を覚えたが、ラビは話を続ける。
「でもね、クーヤはこの幅が少ないの」
次にクーヤの点を枝の先で挿し、線を描いた。一定の間隔で揺れる振幅が延々と続いていく。それは自分の身体を把握していると言う事。
自分に出来る事、出来ない事を知っている。
周囲の環境や、物事の状況によって揺れるが、身体的、精神的なものの揺れは少ない。それは戦いを熟知した者特有の波長である。
「見た所クーヤの方が強いけど、それでもあんた達が勝てると思った場所はここよ」
イチロー達の幅広い線とクーヤの揺れの少ない線が近づく場所をいくつか指し示した。
格下の者が格上の者に勝てる場面がある。それはつまり、波打つそれぞれの線が交差し、格下と上が逆転した事を示す。
「クーヤがあまり強く無さそうに見えるのはそう見せてるの。まぁ、筋力もそんなにあるわけじゃないし、魔力も少ないのは確かだけどね。馬鹿にしてたら勝てないわ」
戦士と呼べない身体つき、並の魔術師程度の少ないその魔力量、そして覇気の無さ。クーヤと対峙した者がまず抱く感情は、自分な

ら勝てるだろうという油断。

こいつになら勝てるだろう。勝てるかも知れない。今度は勝てる。そんな思考に我を忘れ、生じる隙を彼は見逃さない。彼はその油断さえも利用する

そこまで話して、ふとラビは思う所が出来た。

否。むしろクーヤはわざと追い込まれているのかも、と。わざと隙を作り相手に責めさせて体力を削る。相手が勝利を望んだ一撃を防ぐ事で生じた身体の硬直。心理的な隙を突く場面を彼女はその目で見ている。

彼ならまったく無いとは言えない戦法だ。

「なるほど。つまりこの交わった所を勝機とみなし、一気に叩き込めばいいのですかな？」

「違うわよ。クーヤは互いの線が混じろうとした時、全力で防御に回るわ。この線の最下点から上昇するまでね」

「う、うう。た、確かに勝てるかもと思ったときのクーヤ殿の防御は凄まじかったです……」

「クーヤは自分の弱さを理解してるのよ」

自分の弱さを理解しているかさこそ、そこを狙う敵に対して最適解を導き出せる。常に自分の領分に相手を引き込む事に長けている。

騎士などはどうしても正面からの戦いに拘り勝利を掴むものだが、暗殺者は相手を最高の状態で戦わせない事で勝利を掴む。クーヤの戦い方とは、そういうものだ。

「それでね、クーヤが一番やっかいな点は武器の扱いでも体術でもないの。観察力に優れてるって所なのよ」

先程描いたイチローの線を消し、今度はイチローの点から三つの波線を描いた。

「この線がその場の状況、こっちの線が身体の状態、3本目の線は精神の状態。さっきの線は私から見た強さなんだけど、クーヤが見たらこうなるわ。この3本の線が合わさると、曲線はさらに複雑になってくの」

三本の線を掛け合わせた複雑な線が描かれる。

干渉。

複数の波が重ね合わさる事によって、新しい波形が出来上がる。

干渉により先程の波線よりも振幅が複雑に乱れていく。最初に決めた点よりも上に延びる線や、下に延びる線が乱雑になる。重なり合う振幅の和によって出来上がる、観察力に優れた者にしか感知出来ない波形。

クーヤの一定の波形と、一定とはかけ離れているイチローのでたらめな線。最初こそ交わる所が多かった二つの曲線が段々と離れていく。ついには完全に交わらない二本の線が出来上がった。

「クーヤは格上の者なら相手が落ちてくるまで待つけれど、格下の者に負けるような戦い方はしないわ」

「ちょ、ちょっとお待ちくだされ！それでは、私達が勝てる見込みなど無いではありませぬか！」

「ええ、そうよ。でもね、クーヤの相手を観察する戦い方には致命的な弱点があるわ」

「それは……」

「相手が大勢だと、相手の力量を把握しにくくなるみたいね」

クーヤは多対一を苦手としている。
思い返せば、クーヤが多数の魔獣と戦闘している姿など見かけた事が無い。それはこの森で過ごすうちにラビが気づいた数少ないクーヤの弱点。
弱点と呼べるものでは無いかもしれない。不確定要素が多い場合の戦闘は避ける。死ぬ事が許されない現状こそ、当たり前の行動ではあった。

ただ、一対一では優れた力を発揮する観察力であるが、観察する対象が増えれば増えるほど流れを読みにくくなるのは確かである。だからこそ、三人力を合わせれば勝てる。そう彼等に教えるが、納得がいっていないような顔つきだった。

「シ、シルバ殿は一人でも勝ててました、よ」
「シルバは力量が高かったし、クーヤを強者とみなして隙を見せなかったもの。でもあんた達は格下。気力だけじゃ勝てないわ」
「しかし……それはあまりにも……」
「卑怯って言いたい？　ハーグに住んで居た者の言葉とは思えないわね」

何処まで甘い思想を持っているのか、本当に出来の悪い子供を叱るようにラビはイチロー達を睨んだ。

「此処で必要なモノは騎士道精神でも、神の慈悲でもないわ。例え泥水をすする事になろうとも生きるという強い意志」

例え地に伏せようとも、剣だけは掲げてなくてはならない。
精神力、気力。戦いにおいて曖昧なものと位置づけられるが、生き残るためには重要なステータスだ。
気力があれば身体が折れてもまだ動ける。気力が折れれば身体が

無事でも諦めてしまう。

這いずってでも生きるという覚悟をイチロー達に決意して欲しい。

「強く有りなさい。貴方達が戦士と自負するならば、負けちゃいけない」

相手への気遣いで攻撃を躊躇ってはいけない。今度は勝てるという甘い覚悟であってもいけない。守りたい相手、帰りたい場所があるなら相手を殺す覚悟で挑まなければいけない。

クーヤが模擬戦で求めるものは、何が何でも生き残るという強い覚悟。ただ、それだけを望んでいる、とラビは考えている。

しかし未だに納得していないような顔をしていた。もう一押し必要かと考え、ラビは彼等の背中を押す言葉をかけた。

「……近々、あんた達の里を訪れる予定よ」

「ほ、本当ですか？」

「ええ、だからあんた達真剣にやりなさい。でないと、ただの道案内で終わるわよ」

「……わかりましたラビ殿」

「今度は負けてはいけない覚悟で行きます！　三人で力を合わせて！」

「ん、よし」

涙に濡れていた顔に力が戻っているように思えた。自分のアドバイスで彼等がどれ程変わるかが見物だ。

「そして今度は自分の武器で挑みます！」

「ん……ん？」

「くふふ、クーヤ殿覚悟してくだされ、次は最も愛着のある武器で挑みます」
「ちょっと……あんた達、もしかして……」
「う、腕が鳴りますね」
「今まで本気じゃ……なかった？」
「本気でしたとも！　いつもの得物では殺傷力があるゆえ、棍を使っていましたが！」

あんぐりと口を開けて、目の前の馬鹿共に目を丸くする。
一体、クーヤはどれ程低く見られていたのだろう。いや、彼の戦い方がそう思わせた原因なのかもしれない。それこそ彼の術中にはまっていると言える。
だが、何度も模擬戦を行ったのだ。何故勝てないのか、勝つために何をするべきか、反省しなかったのだろうか。それすらも学習出来ない鳥頭とでも言うのだろうか。

彼等の頭の弱さに不安を覚えるラビであった。

冷蔵庫の前にアリスが立ち、周囲に集まる者へ講義を行っていた。
内容は魔術文字についてである。
視聴しているのは奴隷達の中から魔力が一定量ある者を集められた。オワゾの来た当初は自分の魔力を把握できない素人も多かったが、ウィムによる魔術指導により基礎的な知識は蓄えた者達だ。

「いいか、言葉とは力だ。言葉には意味がある。私達が使う日常の言葉にもそれらは含まれている」

講義を視聴する者の中にはウィムの姿もある。

魔術について元々心得が有った者。ウィムに教えを受けた者。知識の深さに差はあれど、これから話しをする事になんの支障も無い。これは今まで蓄えた常識を覆す内容だ。

魔術を知るという事は、世界を知るという事だ。

極小単位の魔素について語る。

魔素を知り、世界は小さな物質の集まりでしかない事を知る。

「魔素についてはそれぞれが理解してくれる他無い。何度も復習して自分に合う解釈を見つけてくれ」

第二の世界の鍵について語る。

詠唱と魔術文字。二つの方法で世界を知り、繋がるための鍵とする。

「言葉を表現するには二通りある。喋る、そして書く」

先生から教わった言葉を、アリスが伝える。理解し難かった所には自分なりの解釈を取り入れ、彼等の理解が及ぶように話を進めていった。

「ここでは書く方、つまり魔術文字について教える」

アリスは地面に魔方陣を描き、ほんの少し魔力を込めた。

瞬間。小さな氷の山が出来上がる。かざしていた手を離しても、

その場に持続する氷の塊を皆が驚き、不思議そうに眺めていた。

「はぁぁ」

「もはや驚きで言葉も出ませんね。まさか無詠唱魔術……いえ、詠唱以外に世界と繋がる鍵があるとは……」

「私は魔力が魔素という粒の集まりであるという事に驚きました」

「とまぁ、こんな感じだ。オワゾではこの冷蔵庫や風呂の温度管理、結界に使われている。早速やってみてくれ」

皆が皆、半信半疑ながらも教えられた文字を、陣を描き魔力を込めて実戦していく。此処に集まっている者達には魔術文字という物を理解してもらい、温度管理、結界を張る役目などを継いでもらいたいと考えている。

特に集まっている者の中で一際魔力量の高い狐獣人のニールには、その役目を担ってくれる事を期待している。

それぞれ失敗と成功を繰り返している中、アリスはニールの元へと向かった。

「順調か？　ニール」

「アリス先生」

頭に尖った耳を生やし、左右の頬に3本づつの髭が飛び出ている。年はまだ十台だと言っていたが、とても年相応とは思えない。落ち着いた雰囲気を持つ青年だ。

眼鏡が似合いそうなニールの丸みを帯びた尻尾がせわしなく振られる。尻尾の動きに合わせて耳と髭がピクピクと揺れる姿は、彼の興奮度合いを顕著に示していた。

「これは魔術至上類を見ない画期的な発見ですよ。魔術に理解の深い僕達狐獣人族でさえこんな事を知っている人は誰も居ませんでした。魔力を込めさえすれば発動する魔術文字。これは生活でも戦闘でもかなり有用性があります。特に魔方陣、込めた魔力が輪の中を巡り持続するこれは本当に信じられない。今までの常識が吹き飛んでしまう程の衝撃です」

相変わらずよく喋る奴だ、とアリスは呆れた。
普段はそんなに話をするような青年ではないが、魔術に関する事になると流暢に長々と語りだす。魔術に関する智的好奇心がとても高く、種族の性と彼は語っていた。

「アリス先生、質問があります」
「なんだ？」
「魔獣が放つ魔術は、詠唱を使っているのでしょうか？」

人が詠唱し魔術を使用する時、人の言葉で謡われている。人外の言葉では無い。人が理解出来る発音で語られる。だが、魔獣が魔術を使用する際に人語で話している事など有りはしない。

「ふむ、良い質問だ」

優秀な生徒を前にしてアリスは微笑んだ。
ニールが言いたい事は、つまり魔獣が使う魔術はアリス達と同じように魔術文字を使った物ではないかと聞いている。

「だが残念ながら魔獣が使う魔術は詠唱だ。そもそも詠唱で世界とどうやって繋がっていると思う？」
「詠唱とは、その語句、単語、言葉に意味が有りそれが世界の鍵と

なっていると考えます。先生も言ったように言葉には力が有ります。魔術という現象を表す単語、古来より語り継がれた語句。それに魔力を宿す事によって、世界に対する扉が開かれるという考えです」
「合ってはいる。だがその考えは魔術文字に対するモノだな」
「……そうなのですか？」
「ああ、詠唱というのは実は波長だ。いや、正確には周波数と呼ばれるか」

声の高い音域、低い音域。人が、魔獣が発する声の波。
理解し易いように、のたくる蛇のような跡が地面に描かれた。
「このようにグネグネとした線だな。世界という奴は様々な周波数を持っている。そして、世界の周波数と詠唱の周波数を合わせることにより鍵とする」

世界への干渉。
世界が持つ波長へ、詠唱という波長を同調させる。
魔術とは、世界を知るという事である。魔術の深遠に近づいた者は、世界と同化する。世界というの現象となる。そんな言葉を先生から聞いた事があった。

「つまり……魔獣は人と異なる、その、周波数を用いて詠唱を行っている、と――！！　ですがそれはつまり……」
「ああ、そうだ。まだ見つかっていない波形があるかもしれない。そして人の可聴域を超える周波数――詠唱を見つけた場合、周りの者が見たらそれは無詠唱魔術と見えるだろうな。それが人の声帯で出せればという話だが」

ニールの目が開かれた。
頭の耳はピンと尖り、引きちぎれんばかりに尻尾が左右に振られ

る。全身の毛が先立っている。興奮を押し留めているのがありありとわかる姿だった。

「……魔術にはまだまだ知らないことが、可能性が秘められているのですね。本当にオワゾに来てから驚く事ばかりです」

魔術をどう用いるか、どのように威力を上げるか。運用方法ばかり考えていたニールには思いもしない魔術の可能性。興奮を抑えきれるはずもない。

「私から一つ質問があるのだが」

「はい、何ですか」

「もう少ししたら、狐獣人の里を訪れる予定だ……同族と一緒に魔術の研究をしてみたいと思わないか？」

イチロー達から得た情報によると、鳥獣人の故郷の近くには狐獣人の里もあると聞いている。それぞれに交流は無く、不可侵を貫いているようだ。

亜人の中でも魔力保有量の高い狐獣人。

その種族全てが魔術の知識に長けており、魔力量が高いと聞いている。仲間に引き入れる事が出来ればオワゾにとって力となる。

ニールの故郷はもうすでに無いと言っていた。

家族とも仲間とも散り散りになり、今の所オワゾに狐獣人は彼しか居ない。同族が居れば安心出来るという思いもあった。

「私達はハーグに住む他の種族がどのように生活しているかを知りたいんだ」

「はぁ」

「私達がお前をちゃんとそこまで送る。オワゾと狐獣人達の架け橋

になってくれないか？」

ニールに一つ提案を持ちかける。

アリス達と一緒に狐獣人の里を訪れ、そこに住む者を説得。もしくはそこで生活する気があるのなら魔術文字の知識を持って、狐獣人の里に住めばいいという移住の選択肢も与えた。条件として、自分達が再び狐獣人の所を訪れた時、里の様子をこちらに話して欲しいという内容。

柔らかい言葉で濁しているが、つまりは内部の情報をこちらに伝えてくれないかとアリスは語る。

スパイ、間者、間諜。厳しい言い方をすればそんな所だ。

「確かに同族には会いたいですね」

ニールは難色を示した。

アリス達が見知らぬ同族に不利益を招くような事をするとは思っていない。そんな人物では無い事は知っている。それでも彼には荷が重かった。

「魔術について語りたいという気持ちも有ります……ですが、僕の性格からしてそれは難しい仕事に……いえ無理な仕事だと思います。僕は魔術の研究に日々を費やして来たので、説得や探るという行為は不可能かと」

別に同族を騙すという事ではないのは理解している。彼女達が戦力を増やしたいというのも知っている。だが罪の意識を感じる事がまったく無いとは言えない。上手く出来るとは微塵も思えない。

「……そうか、無理には勧められないな。すまない、変な事を言っ

た」
「いえ、それでは作業に戻らせてもらいますね」
アリスの勧誘は失敗に終わった。
クーヤにはこの事を報告するとして、今後どのように狐獣人達との接触を図るかを話し合わなければならない。
「あ、そうでした。一つだけ言いますと、僕達の種族は魔術の新しい知識に飢えている。そういう種族だとだけ伝えておきます」
そう一言だけ残し、ニールは魔方陣を描く作業へと戻っていった。

皆が寝静まった夜中、クーヤはいつも通りの日課を行っていた。
目の前には鋼鉄の檻。その中には外で捕まえた魔獣を捕らえられている。奴隷を連れてきた檻を捕獲用とし、汚染魔素研究に活用していた。
魔獣の腕を切り落とし、その肉を掲げて見つめる。眼鏡をかけた瞳がじっと、血が噴出す切り口に目を凝らした。その肉のさらに奥の、そのまたさらに奥を覗き込む。
「ふむ、なるほど。生きている内は魔素に含まれるエネルギーが多量に含まれているが、本来はこの程度のエネルギーでも魔素は消失しないのか」

常人では感知できないほどエネルギーが減った魔素であるが、確かに存在はしている。

新たに得た知識を文字に残そうとするが、暗闇にまぎれてよく見えない。目を凝らしてぼんやりとする視界を睨んでいると、ぽっと暗い空間に火が灯る。

「お疲れ。灯りが必要でしょ」
「ああ、丁度必要としてたんだ。助かる」
「精が出るな。やはり……気になるか？」
「ああ、これは危険な物質だというのは確かだな」
「所で何それ？」

ラビがクーヤの目元を指差した。
目が悪いわけではない彼が眼鏡をかけている姿は初めて見る。

「研究用の補助魔道具だ。機能は顕微鏡だがな」

眼鏡の形をしたつるを指先で軽く浮かすと、ガラスの部分が闇夜に怪しく光った。
良く見ると細い縁には小さい魔術文字が刻まれ、陣を成している。

「キュンキュンするか？」
「いや……別に」
「激しく似合ってないぞ」
「残念だ」
「それで？　これからどうするの？」

カルマ村から帰ってきて既に数日が経っていた。
あの日以来、カマル村へは訪れていない。魔獣の肉を喰らうとい

う狼獣人。汚染された魔素の危険性を伝えるために研究を進めていたが、結局まだ詳しい事はわからないままである。

だが、残された日数的に限界だ。

「もう一度、カルマ村へ訪れてみるか」

眼鏡を外し、懐に仕舞うと眉間を軽く揉んだ。きつく閉じた目蓋を開くと、見えるはずの無いカルマ村の方角を向き、そのまま黒い空間に煌々と浮かぶ月を眺める。

「そろそろ情報収集も終わってるだろう」

本格的な冬はもう目の前だ。

それまでに出来る事は全てやっておけるよう、彼は行動を開始した。

第三十話　波長（後書き）

「久々の更新と思ったら、何この説明回」
「これでも結構削除してまとめたつもりだがな」
「逆に説明不足になっていない事を祈るしかない」
「人が成長する姿とかも書きたい所だが……」
「成長？　誰の？」
「俺以外の全て」

第三十一話　間諜

第三十一話　間諜

カマル村はオワゾから西側へ向けて走り、やや南下した山の麓に建てられている。

エリーナ達兎獣人が居た洞窟の近くを通り過ぎ、ひたすら西南西へ馬頭を向ける。幹の太い森の木々を突き抜けると、先程まで平らだった地面がうって変わって起伏が存在する場所へと辿り着いた。小高い丘の風景が続く、穏やかな丘陵地帯へと足を踏み入れる。数万年前はこの辺りにも海が広がっていたかもしれない。

カマル村はその丘陵地帯の中にぽつんと広がった平地に集落を築いていた。

周囲の地形から守り易い場所に作ったとは言いがたい。村の周囲は切り開かれ視界が広く確保されているが、前回狼獣人に絡まれたように雑木林も近くに有る。魔獣が木に隠れて近づける場所はそこかしこに存在しているのだ。

狼獣人は驚異的な身体能力、優れた嗅覚がある。だがそれとは逆に魔力の量は乏しく、魔術の知識は皆無だと聞いている。

オワゾよりも海側に近く、魔術による結界も張れない。彼等が常日頃から魔獣の脅威に晒されている事は、村の惨状からよく知っている。だからこそ、クーヤには理解出来なかった。

全周囲から襲われる危険性の有るあの村の場所は、守りに適している所とは彼には考えられなかった。それならばまだ、エリーナ達

のように洞窟に住居を構えた方が脅威から身を守るのには都合がいいだろう。

一体何を守るためにあの場所に居座っているのか、彼の興味は尽きない。

「ちょっと待って！」

ラビが叫び声を上げ、馬がたたらを踏んだ。

「どうした？」

「……気づいてないの？」

隣を見ればアリスも怪訝な顔で遠くを睨んでいる。

思考に没頭していたクーヤは頭に疑問符を浮かべるが、すぐに理解した。一度だけ鼻をひくつかせると眉間に皺を寄せる。

「こりゃまずいか？」

怒声が聞こえる。奇声が聞こえる。悲鳴が聞こえる。叫び声が聞こえる。

血の臭いが、ここまで伝わってくる。

「急ぐぞ」

蹄が先ほどよりも荒々しく地面を踏む。

三頭の馬は戦場へと駆けて行った。

カマル村は凄惨な、しかしある意味有り触れた光景を迎えていた。

魔獣の襲撃。

それはこの村にとって日常の一場面であり、彼等にとって食料を調達する機会であった。女性や子供達は家の奥へと逃げ込み、部屋の片隅でじっと耐えている。男達は外へ出て家族を、仲間を守るべく獣化して応戦していた。

隠れていた爪を伸ばし、魔獣の腹へと突き刺す者。手に剣を握り、力任せに叩きつける者。顎を開き尖らせた牙を相手の喉元へ突き立てる者。

それぞれが必死に命を賭けて今日を生き抜こうとしている。

「ぐるるるるる」

老いた狼獣人は肩から血を流しながら喉を鳴らした。

穴の開いた箇所から先は上手く動かず、だらりと腕を下ろしている。普段の彼等ならばこの程度の傷、獣化の副次的な作用により回復する事は容易だ。しかし穴は開いたまま、血が止め処なく流れ続けている。

魔獣の襲撃は日常茶飯事だが、今日はこれで何度目だろうか。

流石に疲労が溜まり、動きが鈍くなっている。身体が鉛のように重い。それでも目だけは光を絶やさなかった。

秋が深まるにつれ、魔獣達の動きが活性化されるのは毎年の事で

ある。
獣型の魔獣も冬眠を行うのか、冬にその姿を見かける事は少なくなっていた。その分、秋にこういった襲撃は頻繁になる。
勿論、魔獣には獣型だけではなく、植物型や虫型、悪霊の様なものも出るが俊敏で力の強い獣型が少なくなるだけでもありがたい。
今の時期を乗り切れば少し穏やかな日々が過ごせるだろう。その希望を胸に、老獣人は目の前の敵を睨みつけた。額の中央に一つだけ目のある熊が、仁王立ちしてにらみ返してくる。
「――――――――――――――――!!」
空気が震えた。
目の前に対峙する者を恐怖に染める振動。聞く者の気力を凍りつかせるその轟音。魔獣の咆哮。
押しつぶされそうな重圧をかけられながらも、老獣人は地面をしかと踏みしめ歯を軋ませた。足にも疲労は溜まり、狼獣人本来の俊敏さは失われている。巨体を揺らしながら近づいて来る一つ目の熊。
魔獣が太い腕を振り下ろすと、老獣人はその腕に掴みかかりあらん限りの力で握った。魔獣が開いたもう片方の腕を振り上げるが、彼の右腕は少ししか持ち上がらない。舌打ちをすると、振り下ろされた腕に向けて肩を押し出す。
ずぶりと魔獣の爪が自分の肩肉を突き刺す感触、そして丸太で殴られたような激痛。後から来た衝撃は内臓を振るわせた。
「がああああ」

ガクガクと震える足に力を入れ、老獣人は鋭い牙を魔獣の首元へと突きたてた。短い悲鳴の後、魔獣がお返しとばかりに老獣人の肩へと牙を食い込ませる。ベキリと鎖骨が砕ける音がした。体に走る激痛。命が身体から抜け落ちていくような感覚。痛みを怒りに変え、老獣人はさらに顎へ力を込める。

負けるわけにはいかない。ここで膝をつける訳にはいかない。魔獣は自分達の食料でしかないのだ。この世界は弱肉強食。魔獣は狩られる対象で、自分だけ死んではならない。そう――

決して家族の脅威となってはいけない。例え自分が死ぬ事となろうとも。

「邪魔するぞ」

不意に肩の痛みが和らいだ。掴んでいる魔獣の腕が震えている。一体何が起こったのか。老獣人は噛み付いたまま目を丸くした。

何時から居たのか、いつの間に現れたのか。どこからやってきたのか。さも当たり前のように、魔獣の背中にその人物は居た。

（――人間が魔獣に刃物を刺している？）

何が起きたのか老獣人はよくわからなかった。ただ人間が自分の戦いの邪魔をしている。その事実に先程よりも強い怒りが込み上げてきた。

「さすがは戦士。だが、此処で死ぬ必要は無い」

何故人間が此処にいるのか。助けたとでも思っているのだろうか。

自分は仲間のために命を賭けて戦っている。それを何故人間が邪魔するのか。
眼力を込め、魔獣の背中に佇む人物を老獣人が睨みつける。魔獣の首元に噛み付きながら喉を唸らせた。

『人間の助けなどいらない』
「そうかい」

諦めた声色で呟くと、肉厚の短剣を魔獣の身体から引き抜いた。
刃を振るい、血糊で弧を描くとその人間は不敵に笑って目を細める。

「なら勝手にやらせてもらう」

引き抜いた短剣を横に寝かせ、今度は心臓付近へと狙いを定め押し込んだ。一度刺した感触で肋骨の位置は概ね理解しているのだろう。背中からの刃筋は間違いなく魔獣の心臓をえぐった。
耳障りな断末魔がすぐ隣から聞こえる。悲鳴が尻つぼみに弱まってくると、老獣人に爪を立てていた魔獣の腕がダラリと弛緩した。

「ラビは左側、アリスは右側。一匹残らず殲滅しろ。結界を張るのも忘れるな」
「「了解！」」

赤い髪の女性と青い髪の女性がそれぞれ散っていく。
残った男は一つ欠伸をかみ締めると、老獣人へと近づき穴の開いた肩へ手を伸ばし始めた。

「待て……何を、する」
「横入りさせてもらう。そしてあんたには治療が必要だ」

「……助けた、つもりか？」
「いいや、邪魔しただけだろうな」
「お前ら人間の助けなど――」
「要らない。その意思は伝わった。だからあいつ等も邪魔しに行っただけだ」

いったい目の前の人間は何を考えているのか、老獣人には理解出来なかった。
ただ、指先一つ動かせないほど疲弊したこの身体に、治癒魔術のほのかな光は暖かかった。

クーヤ達の介入により、カマル村を襲った魔獣の襲撃は思いのほか早く収束していった。現在、クーヤ達はチャフの家へと招かれている。

チャフの左右には老いた狼獣人達が並んでいる。その中には先程クーヤが治療を行った者も居た。
チャフの前に座るのはクーヤ、ラビ、アリスの三名だ。
今オワゾを守っているのはニールを初めとした結界班、イチロー達を交えた殲滅班で構成されているメンバーだ。イース達は現在、所要で出かけてもらっている。

「そなた達には仲間を助けてくれた事に礼を言わねばならんかの」
「その必要は無い。俺達は狼獣人の戦いを邪魔した」

湯気の立つ白湯で唇を湿らせた後、二度目の交流は開始された。
その一言目に交わされた言葉がそれである。
「喰うか喰われるか。生きるという神聖な場に水を差した。責められるのならわかるが、感謝されるような事はしていない」
「ちょ、ちょっとクーヤ」

行き成りの物言いに、ラビが焦る。口を出そうとするラビに手を向けて制した。

戦士の戦いに介入し、手助けをしたなど言えるはずも無い。武人が命を賭けた戦いに水を差すなど、相手にとっては殺されるよりも侮辱的な行為だ。

「それが解っていて何故手を出した？」
「俺達にとって邪魔だったから、かな。訪れたが、周りが阿鼻叫喚では落ち着いて話し合いも出来ないので」
「ふむ」

そう結局はクーヤの都合でしかない。結界を張ったのも自分達の話し合いを邪魔されたくないからだ。
チャフが伸びた髭をゆっくりと撫でた。
「……助けた等と申したら、その首を噛み千切ろうと思ったのだが」
「怖いな。それは命拾いした」
「さて……どうかの」

クーヤとチャフの目が合わさる。
二人が真剣な眼差しを向け続け、無言の時が流れた。殺気は孕んでいない。だが妙な空気が流れる。痛々しくないが、居心地が悪い。

慣れないその場の空気にアリスもそわそわと体を揺らし始めた。
長い時間が過ぎると、不意にチャフが表情を緩めた。それに同調し、クーヤも表情をいつもの抜けた物へと戻す。彼の背後でラビとアリスがほっと息を吐き出した。

「怪我人を治療してくれた事、感謝する」
「気にしなくていい……と言いたい所ですが、今は貸し一つとさせて頂く」
「人間に貸しを作るのは、恐ろしいですな」
「俺からしたら狼獣人の力の方が恐ろしいですがね」
「ふふっ、左様か」

それからは他愛の無い会話が続いた。
クーヤが今のような襲撃は頻発するのかと問えば、秋口には獣型の魔獣が活性化する、とチャフが答える。クーヤが自己治癒出来ぬほどに皆が疲弊していると感想を述べれば、チャフは気遣いに感謝すると返事した。オワゾの畑で作物が実ったと伝えれば、羨ましい限りだと返した。

「さて、そろそろ本題に入ってみてはいかがか？　まさか世間話しに来たわけではあるまい」
「いや、それも一つの理由ではある」
「ほお……と、言うと？」
「申し上げた通り、こちらの目的は交流だ。会話もまた、その一つの手段なので」
「ふむ。では他には？」
「こちらに移住した者達の様子を見に伺った。元気に過ごしていますか？」
「それがの……」

チャフが苦い顔をして言い淀んだ。
言いにくい事かとクーヤはチャフの言葉を待つ。いや、チャフが言いたい言葉は実の所解っている。しかし自らが切り出すのは違う。相手が口にするからこそ、意味のある言葉だ。
「実は、そちらから預かった者がオワゾへ帰りたいと申しておる」
「ふむ……そうですか」
今日だけで何度も襲撃が行われているのは、治療を回った様子で把握している。村人皆が顔に濃い疲労を浮かべていた。たった数日でこれほどまでに消耗するとは、一体どれだけ戦いを強いられたのだろうか。
奴隷生活の長かった狼獣人には少々過酷な日々だっただろう。
「こちらに迎えるのは構わない。しかし、仲間を手放す事に反対する者は――」
「確かに居たが、わしが許可した。元々、この故郷出身でない者に強要はできまい」
左右に並ぶ老狼獣人の顔が険しくなるのをクーヤは感じ取った。オワゾへ戻る者に「裏切り者」「仲間を捨てるというのか」という心の声が聞こえてきそうだ。聞こえる気がするだけなので、あまり深く指摘しないようクーヤは心がけた。
「わかった。移住した者達をこちらで再び引き取ろう」
「すまぬな」
「いや、また寄らせていただく」
話は終わり、クーヤ達はチャフの家を後にした。とりあえずの目

的はこれで果たしたと言えるだろう。

見送りにはシルバが着いてきた。

クーヤ達の近くにはレミィを初めとする数名の狼獣人が集まっている。辛辣な言葉をかけられたのだろうか、その者達は此処より安全な場所へと戻れるというのに浮かない顔をしている。

「さて、こちらは戻るが……シルバ、お前はどうする？」

「クーヤ殿……申し訳ない。やはり俺には故郷を捨てる事は……」

「何を言っているんだお前は。なんでオワゾに住む事が故郷を捨てる事になるんだ？」

「は？　いや……それは」

「故郷から離れて生活してる奴なんて何処にでもいるだろう。そいつらは故郷を捨てたと言うのか？」

「いや……しかし――」

今の時期、男手は必要だ。

村が大変なこの時期だからこそ、シルバは此処を離れる訳にはいかない。

戦力にならない者だけでもオワゾで預かってもらいたい。しかし、故郷を離れ、比較的安全な場所へと逃げる事は狼獣人のプライドが許さない。そんなジレンマを抱きながら、シルバは唇をかみ締めた。

「……落ち着いたら戻ってくればいい。その時は歓迎する」

「……クーヤ殿、恩に着る」

夜更けにクーヤはオワゾの外壁を歩き回っていた。
カマル村から帰ってきた後、オワゾでも魔獣の襲撃があったと報告を受けた。だがニール達結界班による防壁とイチロー達による反撃によって、特に被害も無く追い払えたようだ。

カマル村に行く前にオワゾを囲う防壁は完成している。建てた防壁には一定の間隔で魔術文字が彫られており、四方に刻むよりも魔力のロスが少ない仕様となっている。これならばラビやアリスほどの魔力が無くとも、運用していけるだろう。

「問題は無さそうだな」
「こんばんは」

報告は受けたが、ちゃんと機能しているか歩きながら調べている最中にその人物は姿を現した。

「よう、待ってたぞ」
「報告します――」

闇夜から女性が姿を現す。
カマル村へ移住していた狼獣人のレミィだ。

「カマル村の人々は長年あの場所を守ってきたため、あの場所への執着が強いですね。その自負があるため他の同族よりも自尊心が高いです」
「ああ、会話から俺もなんとなく理解している」

カマル村の戦力を彼女は語っていく。
日に何度も魔獣に襲われる所から、それを対処していく住人の底

力を。
実戦という戦闘経験の豊富さ、全てに対応する事の出来る持久力、素手でも魔獣に応戦出来る力強さ、戦闘で培われる強靭な精神力。どれをとっても戦士として申し分ない。

報告を聞く限り、オワゾにとって手に入れて起きたい戦力だ。ただ、移住を勧めたいが少々骨が折れそうな性格をしているのが問題だろう。

「そして、あの場所にはやはり子供の数が少ないです。そればかりか、ここ数年生まれてくる子供の数が少なくなっているそうです」
「ふむ……なるほど」
「あの場所に住んでからの話ですので、あそこは呪われているのかもしれません」
「移住する為の理由にはなる……な」

瘴気がオワゾよりも濃い場所だ。身体に不調が起きているためだろうか。いや、どれ程汚染された魔素を少なくしようとも魔獣の肉を食べている事が原因か。
兎にも角にも、魔素汚染の究明に尽力を注がなければならない。

「あと、驚くべき事実ですが」
「なんだ？」
「あの場所の近くに岩塩が取れる場所があります」
「なんだと……」

岩塩。
海水など塩分濃度が高い水が蒸発により濃縮され、結晶化した塩化ナトリウム。
地殻変動により大地が隆起し海水が閉じ込められて出来る岩塩の

層。その深い地層に堆積していた物が、再び地殻変動により押し出され地表へ姿を現す事がある。それが採掘出来る岩塩だ。

「おいおいおい、そいつはまた……思った以上の収穫だな」

「盗み聞きしただけですので実際の場所までは把握してません。新参の私に教えて貰えませんでしたし」

「いや、十分だ。そうなると、移住を勧めるよりも交流を保った方がやはり有益か」

塩が取れるという情報にクーヤの心臓は音を高くする。そして同時に納得する。これがカマル村の先人があの場所に住みかを作った理由か、と。

岩塩は精製された塩とは異なり、水に溶け難いという性質のため料理に直接使いづらい。

だが、岩塩を一度じっくりと水で溶かし、得た濃い塩水を釜で炊いて塩を得る方法がある。それならば見かけも性質も精製塩に近い。

とにかく塩が手に入る。その可能性は彼の心を歓喜させた。

塩というのは単なる味付けや、食品を腐りにくくするというだけではない。本当に様々な用途で用いる事が出来る。

「危険な仕事を任せて悪かったな」

間諜という難しい仕事をしっかりとこなしてくれた彼女に感謝する。

あの狼獣人達の性格からすると、普通の話し合いではその事実を知るまでにどれくらい時間を浪費しただろうか。最悪の場合、カマル村が魔獣の襲撃により壊滅し、その情報が得られなかった場合も

考えられる。
知っていると言う事は、力があるという単純なモノよりも遥かに強力だ。
これからカマル村への接し方も、その重要性も今までとは変わってくる。カマル村は武力として手に入れておきたいという程度の存在ではない。どうしても手に入れなければならない最重要の存在となった。
その認識を改める情報を手に入れてくれた女性。目の前に居る彼女へ、親しみを込めた微笑を向けた。
「ありがとう、ルーシィ」
「まったく、酷い人ですよね。兄さんは」
女性の雰囲気が一変する。
温和な表情から少しきつめな目元へ。ふさふさとした太い尻尾からほっそりとした尻尾へ。狼っぽい外見の女性が普段の猫っぽい亜人へと姿を戻す。
ずっと変化し続け、内部を探っていた緊張から解けてルーシィは疲労の息を吐き出した。
「仲間に引き入れようとする人達に探りを入れるなんて」
「仕方ないだろう。俺はこの前のオーク達で嫌という程味わったんだ。調べる事に越した事はない」
「そもそもスパイなんて私が居なければ成立しないじゃないですか。その時はどうするつもりだったのですか？」
「それはそん時考えるさ」
狐獣人であるニールの勧誘に失敗した事はアリスから聞いている。

元々無理な話ではあった。諜報というのはその行動に慣れた者でなければ上手くこなせるとは思えない。それはルーシィが一番自覚していた。

さらには少し前まで人間に恐怖を抱いていた亜人の奴隷達だ。

例え命を救い、束縛を緩め、人として尊重し接している彼等であってもまだわずかな付き合いでしかない。自分達を助けてくれた人間と、亜人達それぞれの同族とどちらを優先するかという事だ。

恐怖を用いて従わせる事は可能であろう。だがそれでは人の尊厳を踏みにじる行為だ。そんな事はオワゾの意思として反する。

「お前が居てくれて助かった。これからもよろしく頼む」

「あ……はい」

少し赤くなった頬。体温が上がり始めた事に羞恥を覚え、ルーシィは首を激しく振ってその感情を振り払った。

「そ、それで。これからどう動きます？」

「そうだな」

クーヤが葉巻に口をつけ、先端に火をつける。

ゆっくりと煙を肺へと送り、息と共に煙を吐き出す。唇を舌で湿らすと、かすかに甘い味がした。

狼獣人は人間への憎しみ、いや一族全体のプライドが高い。互いの関係を解きほぐすには時間がかかるだろう。彼等への対応は交流を保ちつつ、改善していくのがベストかとクーヤは考える。もしくは、仲間意識が芽生えるような大きなイベントを共同でこなすか。

とりあえず、カマル村への交流は少しの間見送りだ。

「今度はイチロー達の里へと顔を出してみようか」
「そうですか……ですが、あそこは――」
「ああ、わかってる」

今宵の月は高い。
薄い雲が丸い光を半分ほど隠している。陰るその月もまるで血が混じっているかのように赤く濁っている。今後の自分達を示しているかのような色合いに、クーヤは煙を吐き出した。

月に向けて煙を吐き続ける。

もう一度唇を舐めると、今度は苦い味がした。

第三十一話　間諜（後書き）

「鳥獣人達へも私が探るんですか？」
「あらあら、帰ってきたばかりなのに大変ね」
「いや、あいつ等には勝負を受ける毎に住処の情報を聞いていたからなぁ」
「ああ、必要が無くなるくらい勝ったんですね」
「今度筋力増強剤でも作ってみようかしら」
「……やめて下さい」

第三十二話　鷹の目

第三十二話　鷹の目

液体が皮膚をなぞり、地面に紅い華を咲かす。
赤い椿がその身を散らす如く、滴り続ける雫は留まる事を知らない。血華は次々と咲き乱れ、土の画布を汚していく。源泉を押し留めることも叶わず、粘ついた液体が肌を這いずる感触が不快であった。

額にはふつふつと脂汗が噴出してくる。拭う事もせず、珠になった液体は呼吸と共に小刻みに揺れていた。

「ったく、予測以上だ」

クーヤが荒い息を吐く。
これ程の深手を負ったのはいつ以来だろうか。記憶に新しい傷はミリィセとの模擬戦。しかしあれは、皮を裂くだけの軽いもの。本能が警鐘を鳴らすような傷ではなかった。

傷の痛みに顔を歪めながら頭を動かすが、熱にうなされ鈍くなった脳は明確な回答を返してはくれなかった。もしかしたらラビとアリスを説得した時以来かもしれない。

「本当に、見誤ったもんだな」

予想外もいい所だ。
これほどの力を秘めていたのかと、認識の甘さに反省せざるを得

ない。
クーヤの戦闘方法は観察から始まり、その流れを予測し、そして最適な解を得る。つまりは知る事を原点とする。
理解出来ない内は観察に徹底していた。不用意に飛び出して来た獣のような単純な相手以外はいつもそうだ。逃げる時も、守っている時も、攻めている時も。何時までも観察は怠らない。真の意味で反撃する時……いや、勝負を決める時は観察し終えたという意味である。

本来の彼にとって勝敗の行方など気にかけるものではない。
問題はその勝負に勝った後、負けた後に自らの利益になるかどうかだ。負けたとしても利となるならばクーヤは潔く負けを選ぶだろう。

ハーグの森を訪れてからは特に顕著だ。生きると言う事は、戦うという意味合いと同列となった現状。そんな日々の中でさえ、無益な争いは極力避けている。戦闘も最小限を心がけ、長引くようならば逃走、もしくはすぐに降参した。

そんな臆病とも言える繊細な思考を持つ彼がこうして傷を負っている。そして引こうという選択肢も考えていなかった。

息を深く吸い、歯を食いしばる。だが、顔の筋肉は歓喜の表情を形作っていた。

「ぜってぇ、お前達を手に入れてやる」

クーヤにしては珍しく、意気込みに満ちた声。玩具を目の前にした童子のように、意欲に溢れた感情を吐き出した。

それ程までに欲しい物が存在する。無理を押し通しても手に入れたい物がある。だからこそ彼は傷の痛みに呻きながら、歪んだ笑顔を向けるのであった。

「お前達の里へ訪れる事を決定した」

それは昨夜ルーシィからの報告を受けた次の日であった。
日光はまだ暖かさを感じる事が出来るが、吹き通る風には冷気が含まれている。オワゾの敷地にも落ち葉は日を追って増えてきた。ナナ達子供には砂鉄取りの他に落ち葉集めの仕事も与えている。
集めた枯れ葉は腐葉土として利用するつもりだ。燃料節約の為に焚き火を行うのもいいかもしれない。その熱源を用いて芋を焼いたりするのもいいと考えていた。

「という訳で、道案内を頼むぞ」

枯れ葉が舞う午後の日差しの中、仕事を終えたイチローを捕まえクーヤは端的に言葉を伝える。周囲には彼等二人以外誰も居ない。言葉を受け取ったイチローは目を丸く見開き、今にも去ろうとするクーヤの背へ声を大にして引き止めた。

「お待ちくだされ！　なにとぞ、なにとぞもう一戦願いまする！」
「悪いが、お前達と戦う理由がもう無くなった」

今回はルーシィに間者をしてもらう予定は無い。いや必要が無く

なったと言うのが正しいか。

模擬戦という暗黙のルールが出来上がってからというものの、クーヤに挑んだ回数はイチロー達が群を抜いている。日に何度も挑まれた事もある。その度、完膚なきまでに叩きのめしてきた。それでも諦めない彼等にほとほと嫌気が差したが、それほどまでに帰りたい場所がある事が少し羨ましかった。

だが、模擬戦の回数が二桁へと差し掛かると、クーヤも只で請け負うのは面倒になってきた。そして模擬戦のルールを改正する。

クーヤがイチロー達の勝負を受ける毎に、彼等の里の情報を喋らせた。もはや内情を探る必要が無くなる程に。逆に言うと、スパイを送る必要が無くなるほどイチロー達が負けたという事だ。

「男は鳥面人身の形態で物理的な攻撃を得意とする。逆に女は人面鳥身で魔術をそこそこ得意としている、と」

男性は人の身体を持ち、頭部は羽毛で覆われ口には嘴がある。鳥獣人という名称を体で表していた。

女性の方は聞く限り人間の頭と身体を持ち、四肢は鳥類そのものであると聞いている。鳥獣人の女性に会った事は無いが、まるでハーピーのようだろうとクーヤは考えていた。ハーピーは詠唱(うた)が上手いという知識は彼には無かったが。

「そして代々里を治めている人物は、人の体で背中に翼が生えてるんだったな」

そしてその容姿を持つ者は魔力量が高く、その歌声は聞き入る者を魅了し、その音色はこの世の楽器では奏でる事の出来ない音だと聞いている。

いの一番に思い浮かんだのが天使の容姿。次点ではセイレーンだ。
もしかしたら一番進化している者かもしれない。人間ですら猿が進化したモノと言われているのだから。

「住処は高台にあって、坂を登ってくる敵を追い払っているんだったな。そして冬には虫を食べて過ごしている」

春から秋にかけては活性化した昆虫を主に食していると聞いた。冬に備え、夏から秋にかけて採集した虫を囲っていると言う。昆虫は気温が下がると体温も下がり、そのほとんど動かないまま冬を過ごす。それは生体しかり、秋口に生んだ卵しかり、卵から孵った幼虫しかり。冬眠したそれらの昆虫を冬の間に食していたという。

とても優れた保存法だと感じた。冷蔵庫のような設備も必要とせず、保存するための維持費もかからない。自然と生物の行動を上手く利用した方法だ。

「といった感じだ。こちらはもう手に入れたい情報は特に無い」

鳥獣人の大まかな生態は今記した通りである。他にも細かい内容は数多く得ており、鳥獣人については知らない事は無いと言っても過言ではなかった。

それでも一つだけ、最後の最後までイチロー達の口から漏れなかった内容がある。だが、今からそれを体現してくれる。そんな期待を持っていた。

「でしたら……もしこれで負けたらオワゾに永住する事を誓います！！」

その提示する条件に無表情ながらもクーヤは驚きを隠せなかった。
これまでに散々故郷に戻るため、と自分に食って掛かってきた彼が自ら故郷へ戻る事を諦める条件を出すとは思っていなかった。それを自ら放棄する。つまり負ける事を許されない覚悟。それを自分に科したという事だろう。

「ほぉ。いいのか？　故郷に戻りたいと考えているなら、そのまま帰ればいいんだぞ」

いつの間にかクーヤに模擬戦で勝てば帰れるという迷惑なルールが出来上がっていたが、元よりハーグに故郷が有る者にはそのつもりだ。そして返した上で、里の長と交渉を行う予定だった。可能ならば移住を進め、動かなければ交流を持つという手段へと。

「鳥人族に二言はありませぬ！」
「いいだろう」

彼の目の色が、今までとは違う物を宿している。負けたままでは鳥獣人の威厳が損なわれるとでも言いたそうだ。クーヤは彼の要望に即答えた。

悪くない提案だ。カマル村ほど長い歴史を持つ場所では無いと聞いているが、イチロー達がこれ程までに帰りたい故郷。簡単には動かせないかもしれない。それならば、オワゾに置いたまま長と交渉を続けていくのもいいと考える。

魔獣も撃退出来たようだし、そこそこ戦力にはなるだろう。そんな甘い考えがクーヤに過ぎる。

「……では」

イチローが長い棒を頭上に掲げて振り回す。支点を中心に綺麗な円を描いたそれを腰元に引き寄せ、ピタリと止めた。クーヤから見るとまだまだ隙の多い構えであったが、中々に堂が入っている。

「ほぅ。長物の扱いには慣れている様子だったが、棒術の動きじゃなかったな。やはり槍か」

棒の先端には尖り磨かれた石の刃。

殺傷能力が高いため今まで取り付けなかった石の穂先。切っ先がクーヤへと向けられると、鞘に収まったままの刀を腰から取り外す。刃は抜かず、鞘がついたままの刀をイチローへと向けた。

刀と短剣は常に備えている。作業を行う時でさえ、手の届く位置に持ち歩いていた。模擬戦で何時も用いていた木刀を持ってきてもよかったが、イチローの本気にはそれ相応の武器で応えるのが筋であろう。

「いざ！」

気合の掛け声と共に、石突き付近で握った右手に力を込める。左手を固定し、射出台にして柄を滑らせた。

イチローから放たれる鋭い刺突。槍頭が空気を貫き、狙いは腹部へと定められた。

「いい突きだ」

直線だったその軌道は、途中であらぬ方向へと変化した。鞘に阻まれ、ベクトルをずらされた穂先がクーヤの横を通り過ぎる。

受け流された事に何も驚きはしないイチローは、すぐさま槍を引き左手を軽く開いた。柄への密着が緩んだ掌に再び柄が走る。

「っは！」

一つ、二つ、三つ――。

突きは一度ではなく、何度も往復を繰り返す。点の攻撃から面の攻撃へ。緩めた分だけ範囲は広がり、往復を繰り返すたびに柄がわずかにしなる。開いた左手から繰り出されるその刺突は、まるで散弾を放ったかのように乱雑だ。

「悪くない」

そしてクーヤはその全てを受け流す。一歩も引かず、繰り出される数々の突きを鞘と柄を交わらせる事で受けきった。防御に回っている間、じっとイチローの動きを観察する。

鳥獣人は目が良いという情報は得ていた。しかしそれは動体視力が良いというわけでなく、遠目が効くという特徴だ。決して、近接戦に有利な固有能力ではない。

攻め続けてイチローの息が荒くなりだした。

刀と槍とでは間合いが違い過ぎるために今まで防戦一方であったが、そろそろ飽きてきた。次の一撃を受け、反撃を試みようとつま先に力を込める。

イチローが短く息を吸い、腹に力を込めた一撃を放つ。

穂先の点から逆側の石突への点、そしてクーヤの目という点が一直線に合わさった。

視線へ真っ直ぐの刺突は距離感を狂わせる。放物線を描くボール

は取れるが、顔面へと迫る打球は止め難い。それと同様だ。

「だが、まだ甘い」

顔を傾け、一直線だった三つの点から目を外す。

斜めからの視線が柄を捉え、鞘をぶつけて反らした。

「それをやるなら布石が前提だ」

それまでの突きを加減した速度で相手に慣れさせ、最高速度の一撃でなければ避けるのは容易い。だが、イチローは最初から全て全力である。どうやらまだ接近戦での駆け引きを把握していないようだ。

「仕舞いだ」

鞘が柄を滑り、滑るような足捌きで間合いを積める。

イチローも急いで穂先を戻すが、クーヤが接近する速度の方がわずかに速い。体重の乗った打突がイチローの喉元へと伸びる。

何かがおかしい。

イチローの動きは前に棍で戦った時よりも精練されている。甘い突きではない。しかし、それでもまだ技量が低いと感じた。

クーヤの観察眼は、鍛錬を積んではいるが実戦経験はあまり多くないという結論を導き出す。おかしな話だ。戦う事が日常の、この

ハーグで実戦経験が足り無いというのは。

一歩踏み込む。ラビから今度は三人で向かうから覚悟しろと言われた。

重心が前へと傾く。視界に映るのはイチローのみ、他の二人は何処にいる。

クーヤの間合いにイチローを捉えた。頭の中で情報が構築される。

いつもならここで模擬戦は終わりを告げる。そこから予想出来る事はつまり――そして本能が警鐘を鳴らした。

ぴりっと皮膚を刺激する殺気。最後の踏み込みは地面を蹴飛ばし、回避行動へと移した。流れる風景の中、遠くから風を裂く甲高い音が聞こえる。

穂先を引き戻したイチローが、再び遠くの間合いから突きを放ってきた。何度も繰り返したように、それを鞘で受け止める。

「――ちっ」

タイミングはこれ以上文句が言えないほど完璧だ。短剣に手を伸ばすが間に合わないだろう。クーヤは痛みに備え、歯を食いしばった。

わずかに開いたイチローの隙間に、高速で飛翔する矢が通過する。もう一つの矢はクーヤの大腿を貫いた。

「ぐっ」

痛みに耐え、槍を弾きながらその場を離れた。
イチローから視線を微かにずらし、矢の出所を探る。二人の姿を探すが見当たらない。

「……おいおいおいおい。冗談だろ？」

オワゾの面積はかなり広くなっている。イース達には再び奴隷商人を連れてきて貰う仕事を頼んでおり、そのための住居もそこかしこに建てられていた。だが、近くの建物の屋根に二人の姿は無い。

まるで空から降ってきたかのような角度で刺さる地面に生えた矢と、自分の足を貫通した矢。矢の軌道を計算してみると、信じられない答えが返ってきた。

「鷹の目。クーヤ殿には教えたはずですぞ」

鷹の目。鳥獣人特有の優れた視力。
目が良いという程度の話では無い。これはまるで、千里眼の領域ではなかろうか。

視界の奥の奥。
防壁の完成と共に建設した物見矢倉。高い矢倉もクーヤの位置からでは指で簡単に覆い隠せてしまうほど離れた距離。その天辺に、米粒ほどの小さい影。人の視力ではそれを捕らえるのは限界であった。

そして場面は冒頭へ戻る。

傷口の熱が全身に回るような錯覚さえ感じる中、クーヤは歓喜に満ちていた。

そして自らの失態を恥じる。何が鳥獣人について知らない事は無いと高をくくっていたのだろうか。彼等はこれ程までに有能だ。常識に囚われるなと言っておきながら、常識に囚われていたのは他でもない彼自身だ。

そんな自分の常識を壊してくれた彼等に感謝しきれない。

「クーヤ殿、決着はつきました。我らの勝ちです！」

イチロー達が最後まで口にしなかったのは鳥獣人の戦い方である。高台から敵を追い払うと言っていたが、どんな方法で行うかはいつも曖昧にされていた。予想されたのは弓、魔術、丸太を落とすなど、高低差を利用した遠距離からの攻撃方法。その中で一番可能性が高いと踏んだのは、罠による撃退方法だ。

イチローの戦い方を見るに、接近戦は不慣れな印象を持っていた。逆を返すと接近されずに敵を倒してきたという事を意味する。森に住む強靭な敵に対し、そこそこの魔術では撃退する事などできはしない。それは弓も同様と考えていた。

「何言ってんだ？　まだ付き合ってもらうぞ」

クーヤは銃も扱う。だからこそ、遠距離攻撃の欠点を熟知している。

撃ち漏らせば、接近戦を強いられる点だ。例え矢の雨を降らせよ

うとも生命力の高い相手には接近を許してしまうだろう。人間の視力という常識に囚われた彼には、その短い距離では仕留めきれないと考えた。

それがどうだろう。彼等の超長距離からの狙撃。高精度の正確性。この腕前ならば、確かに接近は許さない。

「クーヤ殿……これ以上は命に関わります！」

「……お前達は、狼獣人が戦う姿を見た事があるか？」

食料を得るため、家族を脅威に晒さないため、自分の居場所を守るため、どんな敵に会おうとも一歩も引かないその強さ。狼獣人の精神力も尊敬に値する。しかしイチロー達ほどどうしても引き止めたいという気持ちは沸いてこない。

なぜならば、狼獣人の戦いは身体能力に任せる所が大きい。生まれ持った才能だ。運動能力に劣る人間が参考になるような戦い方ではない。

「目的の物を手に入れる為なら自分の命もいとわない」

それに比べ、彼等はどうだろう。彼等は輪郭もおぼろげな距離からの射撃を可能とした。それも広い胴体ではなく、範囲の狭い足を射抜く腕。まるで長距離銃を持った狙撃主だ。彼等の技量に舌を巻くしかなかった。

「どうしてそこまで……」

「決まっている。お前達が技量に優れた者だからさ」

そう、技量だ。

視力の良さにも確かに驚いたが、彼をこれ程までに興奮させたの

は他ならない彼等の腕だ。人間でも双眼鏡のような道具を用いれば遥か遠くを見渡せる。だが標的が見えるだけで、その後射るという技術はついてこない。

「自分達の業を卑下するつもりはありませんが……弓など魔術に比べて――」

「魔術に比べ……範囲が狭いと言いたいか？　軌道が放物線しか描けないと言いたいか？　応用が利かないと言いたいか？」

どれ程技術を、知識を手にしていようと、魔術戦ではラビとアリスには敵わない事を理解している。魔力量の乏しい自分では、ルーシィのように物を作り出すことさえ叶わないのを理解している。

魔術とは、魔力を用いて自分の願いを叶える術（すべ）。魔力を持たなければ、優れた運用方法があろうとも、叶う事の無い只の妄想。

魔術は生まれ持った魔力量に左右される事が大きい。その事をクーヤは誰よりも解っていた。

「そんなもの、お前達の業の前では些細な事だ」

そんな彼だからこそ、クーヤは彼等の業に魅入られた。

業というのは魔力が無い者でも扱える術（すべ）だ。そしてそれは魔力が乏しい者にこそ得るべき技術。高度な業であればあるほど、オワゾには変えがたい重要なモノとなる。

「インシルリク、ジャンルィジ、サドフニコフ」

初めて彼等の名を呼ぶ。クーヤの声色にインシルリクはギクリと身体を強張らせた。

「俺は、お前達を、手に入れる」

大腿から血を流しながら、不敵に笑う。

足からは多量の出血。本来の機動力は奪われ、長距離への対策も未だに無い。それでも彼は顔を歪めた。すでにもう模擬戦から逸脱している。状況は圧倒的に不利であるにも関わらず、引こうとはしなかった。

鞘を左手で握り直し、腰を捻る仕草を見せる。背を向けた体制から放たれる視線に、一歩後ずさった。

執念、狂気。諦めるという選択肢は見当たらない。

何時も飄々としていた。何処までも冷静だと思っていた。誰よりも気が抜けていると感じていた。冷たい部分が多くあり、でもどこか暖かい。関心が無い所が多く、とある分野では熱心だった。

良く解らない、曖昧な人物だと思っていた。勝てるようで勝てない存在だと考えていた。

だが今は違う。

本能が悟る。インシルリクの心は理解した。

身体が微塵も動かない。足場が崩落する錯覚を受けた。脳が考えることを拒否する。手が震えだし、心が萎縮した。石となった己自身の中から、はっきりとした感情が浮かぶ。

その感情は矢倉から見守るジャンルィジとサドフニコフも感じていた。二の矢を番えている手が震える。弦を引くが、腕の痙攣が治まらない。弓と矢が擦れる音が止む事は無かった。

クーヤを初めて怖いと思った。

彼には勝つ事が出来ない。

「――いくぞ」

「そこまでよ」「そこまでだ」

オワゾに火柱が立ち上る。

クーヤの足元から這い出てきた炎の渦は彼の周囲を囲い、高く天まで昇っていった。

頭上を見上げれば空にはぽつんと蒼い穴。雲一つない快晴の空は丸く切り取られ、彼の頬に水滴が降り注ぐ。

青い空が迫ってくる。逃げ場の無い彼はすぐに諦めた。クーヤは心の中で悪態をつく。久々に熱くなれたというのに残念だ。

そして蒼に押しつぶされた。

第三十二話　鷹の目（後書き）

「今日のオワゾの天気は快晴、所により土砂降り。深い霧に包まれるでしょう」
「局所的に火の竜巻が発生する恐れもある。気をつけるように」
「そりゃぁ、随分と正確な予報だな」
「イチロー達の名前を完全に忘れてて、過去の話からコピー＆ペーストしたみたいね」
「初めてちゃんと名前を呼ぶ場面で締まらないな」
「メタい発言は控えるように」

第三十三話　誰が為に想う

自己犠牲とはなんとも醜い行為である。
だが、子を護る母というものはとてつもなく強い。その強さに惹かれる者も少なく無いだろう。
醜いものにも美しさがある。

第三十三話　誰が為に想う

身体が冷たい。自分の体温が徐々に奪われ、命さえも失っていく感覚。この感覚に近いモノをクーヤは知っている。
過去のそれは例え自分の命が危機に晒されようと胸を張る事が出来た。自分の行動を誇る事が出来た。だが、今は違う。頭の中に占めるのは後悔。そして同程度の懺悔。生きた心地はしなかった。

生命という灯火がユラユラと揺れている。右に揺れ、左に揺れ、いつの間にかふっと消えてしまいそうな儚い灯り。
もしかしたら自分は死ぬのかもしれない。そんな弱気が彼の心を揺さぶる。

ラビとアリスの介入により模擬戦は強制的に幕を閉じた。

彼女達は放った魔術を消し去ると、慌ててクーヤの元へと駆け寄ると、その負傷度合いに口を覆った。彼の大腿から新たな血が止め処なく溢れている。太い血管を傷つけたのだろう。偶然で有ろうが、もし狙っていたのならば鳥獣人の弓術はもはや神業だ。

「残念ながら手遅れです」

その場に駆けつけたアムがそう宣告した。

残念そうに、何かを諦めた表情で彼女が首を振る。その言葉にクーヤは動揺しなかった。無茶をした事は理解している。無謀だった事も反省している。それでも尚、無理を押し通しても手に入れたい物があったのだ。

ただその事を、解って欲しくて……許して欲しくて……もう本当に許して欲しくて……彼は震える唇から言葉を零した。

「いや、傷ならすでに治癒魔術で治ってるから大丈――」

「手遅れです」

「いやだから……」

「お馬鹿さんに付ける薬はありません」

「……はい」

早く焚き火にでもあたりたい。温かい風呂にでも浸かりたい。ずぶ濡れの服のまま地面に正座させられるのは正直、勘弁願いたかった。

「クーヤは馬鹿なの？　死ぬの？」

「今回のはあまりに軽率だ。本当に馬鹿げた行動だったとしか言えない」

「馬鹿なんですか。アホですね。脳が腐ってるんじゃないですか？」

「……馬鹿ですいませんでした」

だが、周りがそれを許してくれそうに無い。クーヤを取り巻く者達の目には燃え盛る怒りを宿していた。言葉には棘どころか刃物が仕込まれている。先程足に刺さった矢よりもズキズキと響く。視線

が、物理的に痛い。生きた心地はしなかった。

世界が冷たい。

動くに動けない、凍りついた世界に彼は居た。膝を折り曲げ、背筋を伸ばし、掌を開いて腿の上へきちんと置いた完璧な反省の姿勢。謝罪を体で表した姿を周りの者へと向けるが、まだ許してくれそうに無い。

「もう勝負はついていたわ。クーヤの負けでね。あれ以上は単なる自殺よ。わかってる！？」

「いやいや、まだこれからだった。まずは手っ取り早くイチローを倒して――」

「だまらっしゃい！」

「はい」

地面が冷たい。

日照時間が短くなった近頃、地熱は日が傾くにつれて低くなる一方だ。冷えた土はまるで氷に座っているような錯覚を受ける。下腿の感覚が段々と鈍くなっていくのが知覚できた。

「勇気と無謀を履き違えるな。機動力が奪われた時点で引くべきだ」

「いやいや、こう……がおーって威嚇してだな。ジローとサブローが怯ん――」

「もういい。黙れ」

「がお……」

身体が冷たい。

指の一つでさえ満足に動いてくれず、禁断症状のように小刻みに震えるだけだった。秋口に水浴びは勘弁してもらいたいものだ、と

一人愚痴るが彼女達の有無を言わさぬ瞳に射すくめられ黙る。

「引き際もわからないんですか？　一体兄さんの頭の中はどうなってるんですか？　今度開けて調べてみていいですか？」

「いやいや、まだ引くべきじゃないと判断したまでだ。建物の影に隠れて治療して――」

「頭空っぽなんですか？　脳が飛び出して徘徊してるかもしれません。見かけたら脳の皺を増やしてあげますよ……物理的に」

「なにそれ怖い」

空気が冷たい。温厚なエリーナやナナ達兎獣人でさえ、言葉には出さないものの怒りに満ちた視線を向けている。圧力が凄い。周囲に味方は誰も居ないようだ。

いい加減にもう許して欲しい、と訴えずにはいられない。彼女達の説教が始まってどのくらい経つのだろうか。夕日が沈む光景をクーヤは遠い目で眺めていた。

「クーヤ！　ちゃんと聞いてるの！？」

「はい、聞いてます」

周りに映る風景全てが冷たい。世界が冷たい。

「……あれはもう模擬戦からかけ離れてるわ。それこそ死合いの域よ」

「確かにその通りだ……しかしな、どうしてもあの弓術は手に入れたくて」

「自分の命に代えて？　まだ頭が冷えてないようだな。もう一度水を被るか？」

「本気さ」

やりすぎた感じは確かに否めない。
脳内での勝率は1割未満。いつものクーヤならば真っ先に負けを認める割合だ。それでも尚、欲しいと思った彼等の業。模擬戦という範囲内で言えば、矢を受けた時点でクーヤの負けだ。引かなかったのは、ただのわがままである。

「兄さんは……自分の命が惜しく無いのですか？」
「惜しいさ。だが、それを天秤にかけても手に入れたかった」

しかしそれは、オワゾの長としてのわがままだ。彼個人の物では無い。

「想像して欲しい。今後……大規模な戦闘にオワゾが巻き込まれた時に弓兵が居るかどうか」

前衛は兵士として訓練を日々行っている。亜人の男性が主に、人間も体格の良い男達は兵士の訓練を受けさせた。
後衛は魔術師として知識を蓄えてもらっている。だが、ラビやアリスのような上級魔術を使えるような魔術師などめったに見つからない。

「今現在――兵士の訓練に弓の項目は入っていない。何故か？　それは弓を扱える者がいないからだ。教える事が出来る者が居ないからだ。もし、弓兵を育てる事が出来れば？」

剣士の素質が無い者、魔術の素質が無い者は労働者として働いているが、まだまだ戦力が低い現状。今後を考えると、新たな戦力として弓兵が欲しい所である。そしてそれを育てる事が出来る人材は、オワゾにとってどうしても確保しておきたい重要な人物だ。クーヤ

はイチロー達の業を高く評価していた。

「あいつらの技術はとてつもなく高度だ。剣士に必要な体格が無くとも、魔術師に必要な魔力が無くても、弓を扱える者が居るかもしれない。まだ可能性の域だが、弓を扱える者が居るだけで此処の戦力は上がる」

「戦力が上がるのは喜ばしい事だ。だが、クーヤが命を張る理由には乏しい」

「そう考えるのはアリス、お前達に強力な力があるからだ。もっと他の……力が無い者の事も気にかけてやれ」

彼女達には力が有る。使い方によっては一国を揺るがす程に強力な力だ。揺るがしかねないからこそ、忌み嫌われている力。だが、その使い方を誤らなければ多くの人を救う事が出来る可能性を秘めている。

「誰かを守る力が有るのはとても素晴らしい事だ。だが、力が有るからと言って、全てを守るというのは単なる傲慢だ。人は所詮、目の届く範囲でしか守る事は出来ない」

秀でているのは良い事だ。他人には出来ない事が可能となる。しかしどれほどの力が有ろうとも、どれほど特殊な力を持っていても、人は目に映る対象しか救えない。

「絶対に安全な場所なんてモノは無い。誰かの危機に駆けつける事が出来ない場合もあるだろう。そんな時、他の誰かに守る力が有れば――」

「もういいです……兄さんの言いたい事はわかります」

「そうか」

「私達が良いたいのは、クーヤは無理をしすぎているという事だ」

何かを得る為にはリスクを負わなければならない。そんな事誰だってわかっている。クーヤはそのリスクの限界ギリギリを渡ろうとした。彼にとっては行けると判断したが、彼女達はそのギリギリが許せないと言う。

周りを見る。皆の表情が怒りから悲しみへと移行している。いらぬ心配をかけてしまったようだ。

クーヤだけがオワゾを良くしたいと考えている訳ではない。彼だけが綱渡りをして犠牲になる必要も無い。皆が皆、自分の住む所を良くしたいと考えている。その事実が、嬉しかった。

「心配かけないでよ……このバカ」

「悪い……」

クーヤが一つ、身震いをする。

身体は冷え切っていたが、心だけ少し温かかった。

「クーヤ殿……」

今まで話に入ってこなかったイチロー達三人が、浮かない顔の中に意を決した瞳をクーヤへ向けていた。

「どうした、もっと喜べよ。模擬戦はお前達の勝ちだ。故郷に帰れるぞ」

「いいえ、我々は負けました」

周りの表情を見れば、誰もがクーヤを心配しているのが解る。オワゾにとって彼は失ってはならない人物だ。その命を懸けてまで自

分達を手に入れようとしてくれた事が嬉しくもあり、自分達の業をそこまで評価してくれた事が誇らしかった。

「……我らはオワゾに住む事を決めました」
「いいの？　勝負はあんた達の勝ちなのよ」
「いいえ、我々はクーヤ殿の執念に負けました！」
「自分達をここまで必要とされるのは悪い気はしませんので……」
「そ、それに。故郷に帰れないというわけでも、あ、ありませんし」
「……頻繁に帰る事が出来ないのはわかってるだろ？　なんせ――」

イチロー達の里はオワゾから西側の遠方にある高台。小高い丘を越え、深く広い森を抜け、再び傾斜の高い丘の上。かなり遠い距離にあるがそこへ向かうのに馬は使えない。蹄の音を響かせてはならない。見つかって、逃げ場を失ってはならない。捕まれば命が無い。

「オーク村を越えるんだから」

オワゾとイチロー達の村を隔てる広大な危険区域。オーク村の向こう側に鳥獣人の里はある。

薄暗い森の中でクーヤはイース達の帰還に対し、出迎えをしていた。

「ま、待て……」
「恨んでくれて構わない」

許しを請う男に詰め寄り、鞘から刀を引き抜く。
男の表情が恐怖に歪む。名前はすでに忘れた。知っていても意味が無い。覚えておいても意味が無い。要らない知識を、彼は必要としていない。

「頼む……やめてくれ」
「悪いな」

掲げられた刀身が、葉の隙間から零れる木漏れ日に反射する。
ゆらゆらと揺れている刃がピタリと止まり、葉を包むように優しく力を込める。やる気が無さそうに身体から力が抜けているが、眼光だけは厳しさを増していた。
その眼が長い瞬きをして男を見据える。

「やめろおおおおおおお――！」

絶叫は途中で途切れ、男の声は森の木々にすぐ吸い込まれた。鉄の臭いと血の臭い。ゴロゴロと重々しい肉塊が転がった。

残心を解き、深い呼吸を一度行う。死臭に満ちた空気が彼の肺を焼いた。

振り返ればイースとショルが食料を積んだ御者席へと乗り込んでいる。そしてクーヤの隣には体格の良い男が背筋を伸ばして控えていた。４０代後半と思われるその男の背は高く、目尻に深い皺が刻まれていた。

「片付けはこちらでやっておく。アッガー、奴隷達の世話と頼んだぞ」

「畏まりました。主様」

ガブールに捕らえられていた時に奴隷頭をしていた者だ。名をアッガー、種族は人間である。

アッガーは深い一礼をした後、顔を起こして感慨深げに檻に囚われた奴隷達を見つめた。檻の中には狭い空間にこれでもかと押し込まれた奴隷達の姿がある。

「この者達もこれで救われるでしょう」

「救われる……ねぇ」

ぽつりと呟いたアッガーの声にクーヤが反応する。

昔の自分を思い出しているのか。悲しそうな、安心したような、なんとも言えない表情は、観察力に優れるクーヤでさえ彼の心情を掴む事はできなかった。

「別に俺は奴隷を救うためにやってるわけじゃないけどな」

「それは心得ております。ただ、主様の行動はそのように写るのです」

真剣な眼差しを向けられ、クーヤは苦笑した。

奴隷達がどう評価しようとも、彼の行動は世間にとって悪だ。そして奴隷達の思いすらも利用しているクーヤには、苦い表情を浮かべるしか出来なかった。

「私達は皆、主様に感謝しております。人間も、亜人もです。例え奴隷という身分であろうと、家畜以下の生活から人の生活を与えてくださいました」

「此処もあまり快適と言える生活では無いと思うがな」

多少自由に過ごせるくらいにはしているつもりであるが、昔の生活の事を思い出すとクーヤにとってまだ不自由な環境でしかなかった。

もっと変えたい場所がある。もっと快適にしたい施設がある。だが今はまだ技術的にも物量的にも不可能。ジレンマを抱えながらも、彼は今出来る事をコツコツと進めていくだけだ。

「本当の奴隷の生活はむごいものですよ。カビの生えたパンに一つまみ塩を入れた水のようなスープ。目が気に食わないと腹を蹴られました。嫌な客に会ったと骨を折られた事もあります。売り上げが少なかったと鉄の棒で殴られました。食事と言われて便所に連れて行かれた事もあります」

淡々とアッガーは語った。

奴隷の生活がどのようなものかを。彼等が過ごしてきた日々がどんなもだったかをクーヤは他の奴隷達から聞いた事がある。

ある奴隷は、奴隷商人が香水を振りまいた女を隣にはべらせている最中、吐き気を催す檻の中に閉じ込められたと語る。水浴びすらままならない生活を強いられ、気温の高い夜は自分の臭いと隣の者の臭気に耐えながら浅い眠りについた。

またある奴隷は、食事だと言われて商人が食い残した残飯を地面にぶちまけられる事もあったと言う。

手を使うなと命令され、まるで犬のように地面に舌を伸ばした。地面に捨てられた物を貪っている姿に、商人は笑っていた。だが、顔は上げない。歯を軋ませて砂利と久々に口にした肉をすりつぶした。悔しさで涙が滲む。それでも顔は上げない。上げられない。

商人に反抗の意思を見せた者の末路を何度も見てきたから、とその者は語った。
顔を上げれば確実に鞭で叩かれる。皮膚が腫れ、肉がはがれ、血が流れ、そして腐る。傷口には蛆が沸き、腐肉には蝿が集う。そんな反抗した者の末路。

怒りと恐怖で身体が震えたという。彼にとって奴隷の主となるものは殺意と恐怖の対象でしかなかった。

そんな奴隷達の悲痛な叫びを、クーヤは静かに聞き入れ続けた。

「ほんと、奴隷商人はわからねぇな。どうして壊すような事をするんだか」
「……人としての尊厳を削り、反抗の意思を無くすためかと思われます」
「冷静に語るなよ。相手の商人をむごたらしく殺したくなる」
「商人の名はガブールですが」
「どんな奴だったか忘れたが、かなりむごい死に方をしたのは覚えてる」
「見れなかったのが残念でなりません」

アッガーがもう一度奴隷が押し込まれた荷台を眺めた。

中には人としての尊厳を忘れた――奪われた者達。
ただ恐怖と痛みだけが増える日々に、商人に対して憎しみが薄れ、抱いていた怒りが失せ、人としての感情が失われた者。
生きているのか、死んでいるのか判別できなくなった瞳を持つ奴隷。

人として生きる事を放棄したモノが集う檻。

「主様には本当に感謝しております」
「感謝は要らない。行動で返せ」
「そう、ですね……でしたらご命令を」
「は？」
「私達は常々考えています。主様に恩をお返しするにはどうしたらいいのかと。学の有る者が乏しいですが、無い頭を絞って皆で考えました。その答えは、主様の命にはこの身を賭して完遂しよう、と」
「……そうか」

まるで怪しい宗教団体の教主になった気分だ、とクーヤは思った。

別に神になろうなど思ってはいない。
尊敬されるのは別に嫌じゃない。だが、崇められるのは違うと感じている。

彼はただ、住み易い場所を作りたいだけ。故郷を造ってみたいだけなのだ。

「ならば主としての言葉を皆に伝えろ」

しかしクーヤは彼等の行動に嬉しさを覚えていた。
ただの奴隷には思考するという行動は起こせない。もし考える力があるのならば、それは奴隷の身分から脱出する事を真っ先に考え付くだろう。彼等は今までは自分の存在を否定してきた、だが今は人としての自分を受け入れてきている。その変化に、クーヤは唇の端をわずかに上げた。

「人として生きろ。人として考えろ。そして生きるために働け。俺

が求めるものは、ただそれだけだ」

命令とは言えないその言葉。彼等が集まって出した答えを否定するつもりもない。しかし肯定する気もなかった。

だから彼は主人としての命令を下す。自分にとって当たり前の事を。

それは奴隷にとって今まで過ごしてきた境遇と異なる事。今まで主人からかけられてきたどの言葉とも違う命令。その言葉をアッガーは深く腰を折り受け取った。

主人から受けた命を、彼は奴隷達に伝えるべく心に刻み付ける。

「主様のお言葉、しかと承りました」

「新しい奴隷達はお前に任せる。おっと、これはオワゾの長としての頼みだ」

「はい」

「俺は少し焼き所で仕事をしている。その間、奴隷達に仕事を教えておけよ」

「了解しました」

「それと、お前にはやってもらいたい仕事がある。しっかり計算の勉強をしておくように」

「うっ……か、畏まりました」

その場を後にし、焼き所へと向かって行った。

焼き所へ到着すると、そこには窯の前で炭を作っている者もいれば、木を細工して生活用具を作っている者もいる。ラビの姿はそこにはなかった。いや、今現在この村の中でラビ、アリス、ルーシィ、そしてイチロー達の姿は無い。

イチロー達がオワゾに住む事を決めてくれた後、すぐに鳥獣人の

里へと向かおうとするクーヤにアリスが静止をかけた。

『待て、それは私達が行く』
『……は？』
『そうですね。それが良いと思います』
『いやいや、待て待て』
『クーヤは謹慎。ちゃんと反省しなさい』
『そういうのは村の頭である俺が――』
『あーもー、ぐだぐだと煩いわね。クーヤにはやる事沢山あるんでしょ？』

別に彼女達を信用していないわけではない。交渉はその村の頭同士が行うのが筋だと思っていただけだ。だが結局、彼女達の一言でクーヤは折れた。

『私達では……頼りにならないか？』

思い返してもあれは反則だと思う。
いつも強気な彼女達が、顔を軽く俯かせ、上目遣いで自分の様子を伺ってきたのだ。
単なる演技だったなら鼻で笑って一蹴する所だが、その仕草を自然に行っているから手に負えない。めんどくさげに頭をかき、ため息をこぼしながらクーヤは彼女達に鳥獣人の、そして狐獣人への交渉を任せた。

「まったく、女の涙以上に卑怯だ」

勿論、彼女達ならば期待に応えてくれるという核心が根底にある。

彼女達が動いてくれれば、イース達を待つ間の時間が省け、新しく訪れる奴隷達に情報を直接聞く時間を多く取れるだろう。イース達への武器製作にも時間が取れ、汚染魔素の研究も進められる。

しおらしく、儚げなその姿に篭絡しただけが理由では無い。彼女達に任せた方が合理的だ。そう、自分に言い聞かせた。

「上手くいってるみたいだな」

窯の前では炭の作り方を兎獣人が人間へと教えていた。その傍らでは人間が猫獣人に木のかごの作り方を実践している。

彼等の間にはわがたまりのような物は見受けられなかった。似たような境遇を過ごしてきた者達の間に、仲間意識が芽生えているのかもしれない。

「それとも、俺の考えが浸透してるんだったら嬉しいがね」

クーヤの来訪に気づくと、その者達は手を止め立ち上がろうとする。整列しようとまでしたのを、彼は手で差し止め軽く挨拶を交わし鍛冶場へ向かった。その日は日が暮れるまでひたすら鉄を打ち続け、イース達へ渡す武器はもう完成間近だ。

物静かな夜をログハウスで過ごす。

久しぶりに一人で生活する空間は、そこそこ快適ではあった。簡単な食事を済まし、一日の汗を風呂で流した。

風呂上りに少し晩酌をしようと思い立つ。けれども密閉された部屋の中で一人飲んでも味気ない。酒が満ちた器と、陶器のお猪口を手に夜の村へと繰り出した。

辺り一面、闇の底。付近に火の灯火は無く、ただ闇だけが世界を

掌握している空間。草や木の葉を微かに音をたて、冷えた空気が揺れ動く。周囲から聞こえる虫のざわめきが耳に心地よい。近くにあった大き目の石に腰掛け、空を高く見上げた。

闇の中、ただ控えめに灯る月。自己主張しない、朧げな明かりを頼りに彼は器を傾けた。

お猪口に酒を注ぎ、唇に添えて天を仰ぐ。舌の上で液体を遊ばせ、喉に流し込むと、奥からふわりと香りが立ち上った。一つ、息を吐く。もう一度お猪口へ酒を注ぎ再び喉を鳴らすと、いつしか彼は目を閉じた。

騒がしいのは嫌いではない。だが、一人の時間というのも大切だと思っている。その日は汚染魔素の研究は進めず、ゆったりと流れる秋の夜空を楽しんだ。

朝の目覚めは決して清々しいものとは言えなかった。

夜明けを過ぎてから間もない、太陽もろくに昇りきっていない薄暗闇。皆が活動を開始するにはまだまだ早すぎる時間帯だ。

ログハウスの外から激しい怒号が聞こえる。オワゾの住人がざわめく声が聞こえる。睡魔がからみつく頭を振り、目を擦った。昨日、穏やかな時間を過ごし心身共に安らいだというのに、この目覚めはあんまりだ。

また何か問題が起きたのか。そう辟易としながら、気だるい体を騒ぎの現場へ動かしていった。

第三十三話　誰が為に想う（後書き）

「結局この話は何が言いたかったのでしょう？」
「クーヤさんが村の人々に愛されている、という事でしょう。著者さんの知り合いには『つなぎ回だね』と言われたみたいです」
「皆に心配させて、迷惑かけて、まるでわがままな子供ですね」
「もう勘弁してくれ」
「薬は多めに出しておきますね」
「アムさんその量はしゃれにならん……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8797o/

クニトリ物語

2011年11月2日01時03分発行